2020 年　トモニ発達支援所　勉強会資料

よりよい育児と教育を求めて

２０２０年　１月

トモニ療育センター

河島　　淳子

高橋知惠子

トモニ発達支援所

堀内宏美

目　　次

はじめに

第１部　自閉症の子どものための家庭療育

よりよき家庭療育をこころがけて……1

Ⅰ　自閉症児とともに　（私の子育て　総論）……3

１．　障害児（？）の誕生……3
２．　ちえおくれ（精神発達遅滞児）の示す障害（ヴィゴツキー　心理学者）……3
３．　どんな人に育って欲しいか（方針、目標をたてる）……3
４．　私が育てなければ、この子は生きられない！（療育者としての母親の重要性）……6
５．　実践のための親の条件……7
６．　父親の協力……8
７．　学校・地域の協力……8
８．　発達支援センター……8
９．　障害には３種類ある。……8
１０．好ましい姿に成長させるためには、目標を定め、見通しを持った育児をする。……9
１１．自閉症について……10
１２．自閉症児の理解のために　（私達との共通性に注目し、共感をもって）……11

Ⅱ　自閉症児の育児と教育　（私の子育て　各論）……13

Ａ　中学時代まで

１．　早期発見　早期治療……13
２．　生活の場(家庭環境)を整える……14
３．　母子関係を強いものにする。（できるだけ早期に、しっかりと）……14
４．　不親切になり、気をつかわせる。（不親切こそ、親切である！）自立に向けて……15
５．　生活習慣の確立　（自立・自律をめざして）……16
６．　生活習慣の確立　（思春期に向けて）……20
７．　日常生活の場を濃厚に体験させてやる。（社会性　しつけ）……22
８．　幼児期から、一般の子供集団に入れる。（集団適応）……23
９．　問題行動　こだわり、心身の病的状態……25
Ａ　問題行動……25
(1)　トモニ療育センター（1994 年開設）……26
(2)　問題行動への考察と対応……27
(3)　自閉症児の問題行動をどう考えるか。自閉症児にどう向き合うか。……29
(4)　★自閉症児はまるで朝顔のようである。……31
(5)　★「知識ある愛　行き届いて」母親が子育てのしっかりした指針をもつ　……32
(6)　★あいまいさが問題を大きくする。……33
(7)　早期からの取り組み「心を込めてその人格に向き合う」……35
(8)　行動障害を持つ年齢の大きくなった自閉症の人にどうかかわるか。……37
(9)　高機能自閉症の子どもにも、深刻な認知機能の障害がある……38
Ｂ　子どもの発達とこだわり行動……37
(1)　単純反復運動……38
(2)　興味対象の固定化と固執……39
(3)　配列の固執……39
(4)　繰り返し質問することを好む。(質問嗜好現象)……40
(5)　空想的な物語を作成するもの……40
(6)　こだわり行動への信頼と希望と愛……40
１０．パニックを克服させる。（自由な心で、しあわせに生きられるように）……41
１１．「よく学び、よく働き、よく遊び」（豊かに楽しく生きるために）……43
(1)　遊び……43
(2)　絵……44
(3)　★料理……44
1)　遊びが下手、遊びができない子どもも、料理ならできる。……44

2)　指示に従って作り上げる（❤心を育てる）……45
3)　手の機能を磨く。……45
4)　偏食がなくなる。何でも美味しく食べられるようになる。……46
5)　全行程をさせてあげ、一人で台所に立ち、一人で料理ができるようにする。……46
6)　もてなすことができる。感謝される存在にとなり、人のために働く喜びを知る。……46
7)　責任感を育てることができる。……46
8)　感謝の心が育つ……46
9)　机上の学習が生きたものとなる。料理には、算数・国語・理科の多くの課題が含まれている。……47
10)　親にとっても最適の課題時間となる。……48
11)　子どもの自立の方向を実感する……49
12)　家族の喜び……49
◆母親アンケートより……50
(4) 余暇活動（成人期を豊かに生きるために）……51
余暇活動の意味　余暇活動の支援の実際　個別課題学習の始まり　家庭での取り組み
余暇活動の内容　知識ある愛・行き届いた支援
１２．　マラソン、山歩き（療育の土台となる　身体をつくる）……53
1)　自閉症児の状態……53
2)　目的……53
3)　先ず歩く、そして登る、それから走る……53
★早朝マラソンの勧め　母親アンケートより……54
１３．　全身運動（粗大運動）　脳機能の統合訓練……58
１４．　手の機能をたかめる　（微細運動）　自立へ向けて……59
1)　自閉症児の手の状態は様々である……59
2)　積極的に手を使わせよう。……59
3)　取り組み（日常にできるだけ手を使わせ、上手にできるようにする）……60
4)　留意と工夫……60
１５．　ことばの指導……61
1)　日常生活の中での言葉かけの要領
2)　料理　近（密）→遠（離、疎）の働きかけ
3)　**日常生活のことは、言葉がわからなくても、判断できることが多い。**
4)　自閉症児の実態像
5)　出来る力を利用して、言葉を育てよう
6)　言語を育てる工夫
１６．　日々の取り組みについて……65

Ｂ　思春期　青年期
１．　思春期（中学時代　高校時代）……69
⑴　思春期危機　エネルギッシュに問題の多発する時期である。
⑵　子供の状態は家族を苦しめる。
⑶　対処方法
⑷　自立に向けて（適正をみつける、職業指導、子離れ）……68
⑸　わかば共同福祉作業所（重度の自閉症青年たちへの療育的挑戦）……70

Ⅲ　トモニ療育センター……73
Ａトモニ療育センターへの道筋
１．　私の子育て……73
1)　乳幼児期の状態像……73
2)　知的障害児の示す障害と方針……73
3)　どんな人に育ってほしいか……73
4)　実際の取り組み（自閉症児に対する育児・教育指導の基本）……74
5)　認知の機能の未熟さ・未発達・不全への挑戦……75
Ｂ　トモニ療育センター開設
１．　家庭療育と母親……76

２．　トモニ療育センターの内容……76
３．　自立をめざした具体的目標（できるだけの自立をめざして）……77
４．　子どもの把握のための検査……77
５．　自閉症児の学習困難の症状の背景……77
６．　それでも自閉症児は教育できる……78
７．　自閉症児は可能性をもっている――教育できる力を備えている……78
８．　見通しをもって育てる――　学童期までの育ちによって、思春期像が決まる……78
９．　トモニ療育センターを巣立った母と子……78
１０．　よりよい育児と教育をもとめて……79

第２部　資料

１．　青年期の取り組み……81
わかば共同福祉作業所「療育実践報告」より（1987年5月～1989年1月）

２．　コミュニケーション シーンの再現……118
◆　Ａ　テーマ：食器割、突き飛ばし（４歳９カ月）……118
◆　Ｂ　テーマ：数字１～１００マッチング（５歳１１カ月）……120
◆　Ｃ　テーマ：1～100タイルカードマッチング（10歳6カ月）……126
◆　Ｄ　テーマ：キャベツの位置を変えると怒る（6歳6カ月）……133

３．　掲載文
◆「余暇活動とは」　河島淳子　2006 年　自閉症ガイドブック シリーズ４ 成人期編……136
◆「自閉症の人の早期療育ー幼児期から学校教育への意見」　河島淳子
2004 年　自閉症教育実践ガイドブック第 3 章第 1 節……139
◆「自閉症児者の学習障害と行動障害に向き合い続けて」　河島淳子　2013 年「けやきの郷」巻頭言……142
◆「行き届いた家族支援と教育へのチャレンジ」　河島淳子　2014 年「いとしご」145 号……143
◆「白鳥になって大空に飛び立った娘」　山本忍　2016 年「いとしご」161 号……144
◆「共感しながら理解し、決してあきらめない教育とよりよい質の高い生活を求めて」堀内宏美
2020 年「いとしご」181 号……146

よりよき家庭療育をこころがけて

1992年８月　　河島　淳子

自閉症児といわれる息子Ｔを出産し、きわめて困難な子育ての旅を開始して２１年がすぎました。

障害児を持つということは、母親である女性の行き方を全く変えてしまう程大変な出来事です。深い苦しみからやがて、私はそれまでの希望に満ちた人生の設計図をすっぱりと破り捨て、援助しなければ生きていけない息子を生かす努力の中で、私自身の生き方を見つけていこうと考えたのでした。「すでに障害を負って生まれてきたのであるなら、残っている健康な脳の機能をフルに生かして発育を助け、彼ができるだけ自由に楽しく生きていけるように、精一杯の子育てをしよう」と決心しました。

「誤った育て方で、彼を歪めてしまってはいけない。無知から、誤ったやり方で療育することは罪なことである。彼の人格に対して許されることではない。」そうした思いから、先ず自分で出来る限りの勉強をこつこつと続けることにしました。

当時はまだ障害児関係の図書が少なく、何とか手に入れることが出来た本をむさぼるように読んだものです。そうして、私の書棚は、いつの間にか障害児関係の本で殆どが占められるようになりました。人間にとって重大な機能に障害を持つ自閉症児を育てていくことは、並大抵なことではありません。最近では療育に関して様々な情報があふれていますが、尊厳ある人間を育てるには、あまりに部分的であったり、また抽象的であったりして、すぐ子育てに役立つものばかりではありません。様々な情報の中から、私なりにじっくり考え、息子にふさわしいと思われるもの、納得のいくもの、必要なものを選択して、それらをミックスし、調和させ、家庭でとりくめる形に変えていかなければなりませんでした。母親の立場から振り返ってみますと、療育相談時の専門家のアドバイスは、短時間で部分的で、結局、もらった知恵や情報を自分の生活パターンに合うように消化吸収する作業を母親自らがしなければならなかったように思います。この作業にはかなりの専門性が要求されます。母親の誰にも出来るというものではありません。時には、好ましくない、むしろ害になる助言もあって、私自身かつて、いい加減なアドバイスしかできなかった小児科医だっただけに、複雑な哀しい気持ちになることもありました。

「何かしなければならないと思うのに、何をどうすべきかわからない」と、途方に暮れている若い母親達に出会いますと、かつての自分を思い出し、深い同情を覚えます。熱いものがこみあげてき、胸が痛みます。一年に数回の短時間の療育相談では、あまりにも不十分です。彼女たちのためのもっと一貫した専門的な学習の場が定期的に必要です。子育ての悩みは深刻ですし、何よりも理解ある話し相手を欲しています。彼女たちの多くは知識に飢えていますし、子どものためにはどんな努力をも惜しまないと考えている人も多かろうと思います。

家庭は社会生活の基礎を学ぶ場で、一番重要な療育の場だと考えています。最近では親を共同治療者とする考え方が広がってきており嬉しいことですが、私は、親がすぐれた療育者にならなければ、子どものよりよい成長は望めないだろうと考えています。自閉症児は、育ちにくいだけでなく、非常に歪みやすく、ついた歪みを取り除くのに、親も子もまた大変な苦労をしなければならないからです。

自閉症の息子を育ててきた年月は、長く孤独な歳月ではありましたが、私は決して不幸ではありませんでした。ただひたすら可能性を求めて困難に挑戦し、自閉症児に魅せられて子育てを楽しみ、私自身の人生を充実させることができたように思います。今彼は、洋裁の修行中ですが、人生に夢を持って楽しくやっています。「人間は一人では生きられず他者との関係の中で生きている。自分のことが出来ると共に、人のことも喜んでできる人間に、この人がいてくれて助かると思われる人間に、感謝できる人間に育てよう。仲間と一緒にいることを楽しめる子にしよう」と心掛けてきましたが、限界があるものの好ましく育ってくれ、ほっと嬉しく思っています。

人生において、私たちはあれこれと自分の意志で決定したものや、思い通りにいったことを最上のものだと思い喜びますが、通り過ぎて、幾年も生きて振り返ってみると、自分の思い通りの人生が必ずしも最上のものではなかったことに気がつくことが多いものです。私自身決して思い通りの人生を生きてきたわけではありません。自分では決してこんな人生コースを選ばなかったでしょう。ですけれど、今では、こんな濃厚な味わいある生き方が与えられたことに心から喜びを感じ感謝しております。

自閉症児、そしてご家族の幸せを心から願ってやみません。

Ⅰ　自閉症児とともに

私の子育て　総論

１．　障害児（？）の誕生

＜乳幼児期の状態像＞

①　おとなしくてりこうそうな子、端正でクール、目を合わせない　笑わない　呼んでも知らん顔、甘えない　ひとり遊び（哺乳が下手、反応が少ない、運動機能の発達の遅れる傾向、這わない）

②　喃語がない、言葉が出ない、言葉が遅れる、やりとりができない（コミュニケーションしない）

③　変化を嫌う、特定の物に固執、恐怖心が強い、偏食、睡眠障害　繊細

澄んだ知的なまなざし、歌を覚えられる（可能性）電車が好き、テレビ操作ができる

＜診断の困難性と大まかな診断名＞

- 明確な障害を思わせる症状がない。しかし、何かがある。言葉の遅れは不安感の増大。
- 「何かしなければならないが、何をどうすべきなのか」わからない。

２．　ちえおくれ（精神発達遅滞児）の示す障害（ヴィゴツキー　心理学者）

１次的障害･････････脳の損傷、代謝異常　染色体異常

２次的障害･････････ちえおくれ、ことばの遅れ、運動機能の遅れ

３次的障害･････････①　身辺の自立ができない　遊べない（社会性）

②　かんしゃく、甘え、わがまま（性格）

③　偏食、虚弱、虫歯、肥満、便秘（身体）

④　未学習

★２次的、３時的障害は適切な療育（とりくみ）によって変えることができる。

- 「障害児が持っている多くの問題は、本当にどうにもならないものなのか」
- 「好ましい環境を与えて育てた場合の、子ども本来の姿はどういうものなのか」
- 「すでに障害を負って生まれてきたのであるなら、わが子に母である私がしてやれるのは、残っている健康な脳の機能をフルに生かして、２次・３次的障害をつけない子育てをすることではないか。では、後悔しないように精一杯の子育てをしよう」

★やがて、多動、指示が通らす、返事をせず、やりとりできず、パニック、問題行動が増大した。

３．　どんな人に育って欲しいか（方針、目標をたてる）

- 社会（家庭・学校・就職先）に喜んで受け入れられる子（嫌われない子）にしよう。

- 一緒にいて楽しい、一緒に生活していたいと思われる子に
  迷惑をかけない　わがままや自分本位でない　邪魔をしない
  忍耐力や責任感がある　エチケットを守る　働くことが好き

- 自分のことだけでなく、他人のことも考えて行動できる子に
  気がつく子―――豊富な経験、困った経験

- 感謝できる子に
  感謝できる人は幸せである。幸せは考え方ひとつとも言える
  「足るを知る」

☆人間は一人では生きられず、他者との関係の中で生きている。自分のことができると共に、人のことも喜んでできる人間に、この人がいてくれて助かるという人間に、感謝できる人間に育てよう。仲間と一緒にいることを楽しめる子にしよう。人間に完全なる自立はない。

(1)　具体的目標（できるだけの、自立をめざして）

①　社会的に受け入れられる行動ができる

②　生活習慣の確立

③　言語力をつける

④　基礎学習と職業技術の獲得

⑤　余暇を楽しみ、うまく扱うことができる

(2)　内面的目標（精神の豊かさ、深さ）

①　愛すること（感謝する、思いやりを持つ、自己中心的でない、奉仕の心を持つ）ことができる。

②　働くことが好きである。

★内面的目標を常に意識しながら、具体的目標の達成をめざそう。（できることをふやす）

＜方法＞　「母が変われば、子は必ず変わる。母が育てば、子は必ず育つ。」

1)　「自分は大切にされている。愛されているんだ」と子どもが確信する親子関係をベースに、一貫した、徹底した療育をしていく。

＜合い言葉の利用＞

☆　わがままは、　→通らない
☆　怠けたら、　→損をする
☆　欲張ったら、　→損をする

2)　劣等感を植えつけないで、どんどん経験や練習をさせる。セルフ・エスティームを高める

☆「失敗は　→成功のもと」（また一つかしこくなったね。よかったね）
母親の口癖は「いい子ねぇ」
子どもの小さな変化、発達を喜べる親になる。本当に喜べば、子どもにその喜びは伝わる。心から褒める。

3)　少々難しい課題でも、工夫、（ステップ指導、構造化、分析後の弱点の重点指導）によって、混乱や劣等感などの苦痛を最小限にして指導できる。

★　課題に取り組む過程で、指示に従う力、相手にあわせる力、努力する心、忍耐力、集中力、判断力、やり遂げる力をつけ、わかる喜び、充実感、楽しみ、自信を得させることができる。積極性、自主性も育っていく。（抽象的目標は立てるべきではない。目標はあくまでも　具体的に立てる）

★「ゆとりを持って、マイペースで、子どもの能力を見極めながら、希望をもって。
子どもに敬意を抱きながら、おもしろがりながら、楽しみながら、時にあせり、苦しみながら、可能性を信じて、徹底的に。知識を広げ、思索し、人生観や宗教観を深めながら」（母親が不安や不幸せの中にあってはできない。）

4)　好ましく育つには様々は要素が必要である。
一つの療法に偏ったり、ある領域だけに偏らないで、全人的視野に立って、必要なものを出来るだけ満たす。ＴＥＡＣＣＨやＰＥＣＳ等、良いものは何でも取り入れる。
すぐ大人になってしまう。暦年齢（生活年齢）を念頭に置いて、その時その場にふさわしい指導をする。

5)　喜怒哀楽をはっきり表現して、子どもに人の気持ちを分からせる。
相手の気持ちがわからなければ、子どもに、相手の立場を経験させる。苦しみは経験しなければ、本当にはわからない。（迷惑行為の理解）―――どんなことをしたら、人は腹を立てるのか。どんなことをしたら、人はいやがるのか。
自分本位の親切行為（相手への無理強い）を見逃さない。

6)　つらい状況を経験させ、人を思いやることを促す。（やさしさ）
苦しい状況でも、感謝できるように導く。（けが、病気）

7)　気兼ねさせる（子ども中心に考えない）。
障害があっても、その子中心の家族関係をできるだけつくらない。兄弟を犠牲にしない。

8)　自然とのふれあい（散歩、山歩き）が、心の安定化と弾力性に必要。病的緊張の緩和。

9)　感性を大切にするために、すぐれた芸術作品にふれさせる。

10)　死別の準備としての、「天国」の話。母子関係が強くなると、死別のダメージは大きくなるだろう。
「死んだ」「天国へ行った」

★ただひたすら子どもの要求のままに、嫌がることは一切させず、過保護に可愛がる育て方をすると、未熟なまま、未発達のまま、否、大きな歪み（２次的、３次的障害）をつけて、手がかかり、指示に従えない、集団行動の取れない、情緒不安定な人間に育ってしまう。こうなってしまうと地域社会の中で生きていくのは極めて難しい。

４．　私が育てなければ、この子は生きられない！（療育者としての母親の重要性）

①　母親が一番近い人である。従って、影響力が大きい。

1) 自閉症児は、育てにくいが、全生活において母親の影響を大きく受ける。母子は非常によく似ている。諦めたことはできるようにならない。まあまあと、譲った問題行動は、増強してくる。

2) テーマを決めて、念じて、頑張ったことは身についてくる。（★何を課題・テーマとするか！！）

3) 対人関係の改善は、まず母子関係から始まる。

4) 自閉症は親が原因ではないが、不適切な育て方によって、知的障害や行動障害を増大させてしまう。

5) 歪みをつけないためには、早期から親（とくに母親）による適切な家庭療育（育児と教育）を必要とする。

②　両親が生きている限り、その子とつきあう。（将来の生きる場をさがさねばならぬ）

1) 子どもを守れるだけのしっかりした考えと意志・行動力を持たなければならない。

2) 療育の場（保育園、幼稚園、通園施設）

3) 就学時の学校選びと学級選び（普通、養護、特別支援、私立・・・）小学校、中学校、高校

4) 学校卒業後の行き場（就職、通所施設、作業所、居住施設）探しをしても、満足な場は稀少！

5) 親の死後のための、安全な生活の場の確保

6) 自閉症児が幸せに生きていける地域社会の実現をめざし、親たちも努力すること。
須田初枝氏（日本自閉症協会　元副会長）に続く者となりたい。

③　脳の障害は容易なものではない。障害児は育てにくいし歪みやすい。

1) 適切さと一貫性と継続性の全てが揃っている場合のみ、よりよい成長がある。

2) 又、徹底した療育を必要とする。２４時間の療育が必要。（肺炎と感冒の治療法は、同質のものである。しかし、肺炎には、細心の観察と検査と適切な処置（抗生物質、輸液等）の徹底的治療が必要である。

3) 徹底さに欠けた時、療育の効果はあがらない。

4) 母だからこそできる厳しさ（徹底さ）と丁寧さがある。

1. 薬びんのエピソード、（禁止の意味　小３　毒　勝手）

2. 待たせる

3. 学習（頻度、数年がかり、根気よく）　運動　マラソン

4. 赤信号で横断歩道を渡った時、

5. 徹夜の経験

6.

④　地域で生きるためには子どもが家庭の中の重荷であってはならない。いつまでも赤ちゃん扱いをしない。
正しい母子関係・家族関係をつくるのは母親である。

⑤　家庭は生きるための基本的な力を身につける場、社会生活の基礎の場である。早期療育の場である。母親が指導しなければならない。（学校は　特殊な場である）

⑥　親を共同治療者としなければ、自閉症児は育たない。親の役割はきわめて重要である。

※　ＴＥＡＣＣＨプログラムの考える親の役割

自閉症児の療育に関し、専門家の指導を受ける人、としての親
実際に療育を行なう人としての親
代弁者としての親
他の親や研究者、立法担当者を指導する人としての親
専門家を訓練する人としての親

５．　実践のための親の条件

困難な子育てを遂行するためには、様々な条件が満たされる必要がある。

私の場合

恵まれた環境（時間的経済的ゆとりがあった。健康であった。家族と友人に恵まれた。）

恵まれた能力　一人で何役もこなすことができた。（親、医師・教師・福祉施設職員として）
言語治療士、作業療法士、特殊教育（絵・音楽・数学・理科・国語などの指導）
精神的自立、宗教観・人生観などにより自分で自分をコントロール（カゥンセリング）できた。
読みとり、判断する力、（情報を集め、判断し、統合する力・応用する力）洞察力
一匹狼、マイペースで頑張り、楽しむ能力、一人遊び（手芸、読書、動物好き）
困難なことへの興味、挑戦し面白がる力　プラス思考　柔軟性

★小児科医としての要素

- その恩恵・利点は、測り知れない。身体的病気への対処に振り回されなかった。必要以上に気苦労しなくてすみ、過保護にならず、療育に一貫性をもてた。心理学的、精神科学的ものの考え方にそまらないで、自由に思考できた。

- 乳児検診の経験　心身の発達の知識　治療方針を立てるやり方　様々な障害児への診療経験　もの言わぬ患児（乳幼児）への観察力　健康管理ができた　予防医学　身体に基盤をおいた考え方

- 対処への決断（腸重積　毒物服用）は医師的である　生活年齢と性への考慮

- 肉体を基礎とした考え方　脳神経、伝達、言語中枢　扇子の要の機能 風邪と肺炎（細かい配慮、徹底した治療）

- 病気時の適切な対応　（過保護を防ぐ）過敏・・・

- 薬の有効な利用が出来、苦しみを和らげ、療育を容易にした。（チック、緊張、問題行動、多動、不適応、思春期危機）

-

★　「知識ある愛　行き届いて」

自閉症児の成長を共に見守り、母親のちょっとした不安や疑問にも答えてくれ、精神的にも支えてくれる医師や関係者の協力が望まれる。医師が自閉症スペクトラム児について、愛ある知識と理解を持ち共感することが、親の苦労を少なくする。（往々にして、小児科医は、わけの分からない、見通しのつかない障害児への対処は苦手である。その苦手さは、親に伝わり、病院通いを気兼ねなものにする。）

６．　父親の協力

- 障害児への理解・取り組みが一致していることが大切。
- 特に自閉症児の子育ては困難で、根気の要る、成果の上がらない、成果の見えにくい、孤独な仕事である。様々な問題に対処していかなければならない。母親一人きりではストレスが溜まり、孤独になり、疲れ果て燃え尽きる。せっかくの良い取り組みも長続きしない。子育ては父母の共同作業でなければならない。

７．　学校・地域の協力

- すぐれた教師との出会いは、最高の幸せである。
- しかし、すぐれた担任との幸せな時期は、子どもの人生のごく限られた期間であるので、教育の効果は上がらない。担任間の指導法の違いは、混乱をまねく。

８．　発達支援センター

- 成人期までを見通した、正しい方向性と指導力を持った発達支援センターなど療育機関が絶対に必要である。
- 家族の協力があって、教師の正しい協力があって、地域の人々の温かい理解と協力があって、初めて母親は楽しみながら子育てができる。

★「朝顔には、しっかりした支柱がいる」

９．　障害には３種類ある

①　障害そのもの・・・・・・・・・・・脳の損傷

②　その結果の能力障害・・・・・・・奇妙な話し方、動作、知的おくれ　運動障害

③　能力障害からくる社会的障害・・・差別、警戒、違和感、無理解、非協力　無知

親にとっては、この社会的障害が一番つらい。特に、学校の先生と呼ばれる人たちの言動によって、家族は大きく一喜一憂させられる。教師は、暴君にも神様にもなりうる。教師は、人格者であると共に、高度の指導技術を持っていることが望まれる。

社会的障害を少なくしていかなければ、弱い立場にあるこの人たちは、いかに努力しても決して、幸せにはなれない。

★保母・教師など療育に携わる人へ

①　療育におけるリーダーである。従って、影響力が大きい。

②　親の気持ちを察し、共感できるか否か。

その子の人生の一定期間に関係し、その間だけ療育の責任を持つ故に、他人事になってしまう。療育には、愛（共感）と強い信念とエネルギーが必要である。親の心情と置かれた状況を我が事とし、愛とかなしみを感取し、その立場になって子どもを慈しみ見つめる熱い思いがなければ、育てられない。

③　脳の障害は容易なものではない。育てる上で多くの困難がある。

自閉症児は分かりにくい、共感しにくい、歪んでいる、更に歪む。コミュニケーションがうまく取れない。子どもがつかめない。指示に従わない。多くの問題を、子どもの障害の故にし、諦めがちである。諦めからは、何も生まれない。情熱を必要とする。切実な思いから、工夫が生まれる。

④　適切さと一貫性と継続性の全てが揃っている場合のみ、よりよい成長がある。

一貫性と継続性を維持するためには療育関係者のチームワークが必要である。子どもの人生の流れ（生活年齢）に添って、一貫した適切な療育をリレーしていかなければ、さまよえる舟となって目的地へはたどりつけない。

⑤　謙虚に母親の思いと共に子どもに関する情報を得ることが、コミュニケーションの第一歩である。

⑥　無知は、罪である。
医師は、病気について熟知し、自分の決定した処置・処方に責任を持つことを当然とされる。直接、生命にかかわることだから、好意・善意だけでは、医療行為はできない。間違った医療は、命を奪う、命を損なう。家族は、治してもらって当然と思っている。困難な病気には、最高の医療が必要である。
教師も、人間の最も大切な魂・精神を扱う。しかし、子どもは、適切ではない取り扱いをしても、すぐに結果が出てこない。適切でない、教育の結果は、子どもが大人になる頃、だんだんと明らかになる。しかし、出てきた困った結果に対して、誰も責任を持たず、「障害児がもともと重度であった」とされ、家族も納得している。

★　適切な育児と教育が自閉症児を救う。自閉症児にこそ最高の療育・教育が必要である。

１０．　好ましい姿に成長させるためには、目標を定め、見通しを持った育児をする

①　正常といわれる子の発達経過を学び、子どものアンバランスな発達の状態を知る。
- 各種の発達診断をする。
- 自閉症について学び、自閉症児の発達の経過と予後を知る。
- 年長児の観察（問題行動、思春期像）、親達の経験談、専門家の講演、関係図書を手掛かりとする。

②　＊あきらめない。見捨てない。データーに失望しない。
- 「この子は出来ない、必要がない、取り組む時間がない」と考えた課題は、出来るようにならない。
- 育てる側の責任が大きい。

③　教師と母親と専門家が蜜に話し合いをし、一致協力して療育に取り組む。
個別の指導プログラムを作成する。　（最大限に情報を交換する）
全ての分野を見渡し、適切な課題を偏りなく与える。

④　※適切に指導するためには、子どもがよく見えるようになること、子どものことがよくわかるようになることが大切である。　★（コミュニケーションの第１歩）
- とにかく課題学習（１～１００並べ）に取り組むこと。取り組んでいると、子どものことが分かってくる。
- やたらと話しかけないで、（愛をこめて）子どもをよく観察する。
- 子どもを尊重する。子どもの理解に努め、共感する。待ってやる。

⑤　よいと思ったことや必要と思ったことは、根気よく、忍耐強く、一貫性をもって、工夫しながら、徹底して実行していくこと。
- 親が、継続力、やり抜く力を持つこと。
- 「今日を大切に」　操作できるのは今日だけ、今だけ。（★下りのエスカレーター！！）
- 自閉症児は、育てにくいが、育たないのではない。

⑥　よい「場」（保育園　学校　地域）を与えてやる。なければ、よい場に造り上げていく努力をする。
- 子どもの人格が尊重される場。当たり前に付き合ってくれる場。

⑦　記録（日記）、連絡帳、家庭生活記録をつける。

⑧　※母親の心の安定をはかる。
- 親の気分によってぐらぐら方針を変えないこと。（教え方　賞罰の与え方）

⑨　※突き当たった壁（問題行動・パニック・出来ない課題）、そこが発達のポイントであると考え、前向きに突破するための根本的な努力をし、工夫をし、あきらめないで働きかける。問題行動は、しばしば、Ｓ．Ｏ．Ｓである。現状を指導者側を含めて総点検し、配慮する必要がある。

悩みの多くは、「喜ぶべき可能性」である。

❤　教師など療育に携わる人は、母親をあたたかく支えること。
教師の言葉ひとつによって、幸せにも不幸にもなる。幸せな母親は子どもによい影響を与える。

❤　生まれた時からずっと育てている母親は、子どもに言語がなくても、表情・しぐさ・泣き声・発声（ピー、バー）・状況から、子どもの言いたいこと、したいことを気がつき過ぎるほど理解しており、家庭ではコミュニケーション力が自閉症児に無くても、困ることが少ない。生活に変化が少ないから。しかし、一方的であり、子は親を理解しようとしない。指示に従わせる（強力な働きかけ）ことから、対人関係もより強くなる。

１１．　自閉症の診断　　「自閉症スペクトラム」という考え方

現在使われている診断は、主にＤＳＭ－Ｖ（米国精神医学会の診断基準）か、ＩＣＤ－１１（WHOの国際疾病分類）によってなされているが、大きな違いはない。

自閉性障害の診断基準
①　社会的相互反応おける質的な障害（社会的相互関係の障害）
②　コミュニケーションの質的な障害
③　行動、興味及び活動が限局された反復的で情動的な様式（想像力の障害）
この三つの障害が３歳までに始まっている「発達障害」のひとつ、症候群である。
その他
感覚（聴覚　視覚　皮膚感覚　痛覚　味覚・嗅覚）の知覚反応面の異常（敏感、鈍感　偏り）が見られることがある。

運動面の異常　（ある運動を意識すると、その通りに実行することができにくい、ぎこちなくなる統合性の不全。麻痺はないのに、自分の身体を使いこなせない。コツがつかめない。縄跳び・自転車・水泳・ラジオ体操など獲得困難。）が見られる。

脳波異常・てんかん発作の合併が多い。
心因性の情緒障害ではない。（情緒に重きを置いて療育すべきではない）
自閉症の原因は大部分、未だ不明である。先天性の障害である。親の育て方が原因ではない！

トモニ療育センターには、すでに診断を受けた子どもが、療育指導を求めてやってくる。
以前は、知的障害の重い人（子ども）がほとんどだったが、今は知的障害のない高機能の自閉症の子どもやアスペルガー症候群の子どもの相談が増えてきている。
診断基準を満たしていない人もいる。成長とともに障害の程度も状態も変化してくる。「自閉症スペクトラム」（自閉症の連続体）という全てを含んだ幅広いとらえ方が合理的である。多かれ少なかれ自閉症の障害をもっており、教育方針は根本的には同じだから。

トモニ療育センターでは、診断名にこだわらない。診断名よりも、育児と教育を推進していくために、そのひとりの子どもを、「検査と課題学習」を通して把握して、即、机上学習を開始している。認知機能の障害は想像以上に深刻な場合が多く、脳機能障害の特徴をふまえて、認知の障害に焦点をあてて、早期から一貫性を持って継続して個別課題学習をやっている。学校教育だけでは不十分である。母親が家庭で個別指導に取り組むことが必要である。家庭は療育に適した宝庫である。

１２．　自閉症児の理解のために　（私達との共通性に注目し、共感をもって）

① **見知らぬ国に出かけてその国の言語が分からない状況**（自閉症児と同じ行動をとる私達）

A型　神経質なタイプ
聞こえても理解できない・・・・避ける、ちぐはぐ、じっとしている　にやにや
伝えたくても言葉がない・・・・避ける、しぐさ、物で示す（コップ）
共感がない・・・・・・・・・・・無表情、緊張
見通せない（予定、地理）・・・自由行動が苦痛、うろうろ、多動
慣れない場、街、レストラン・・同じ場所、同じ席、同じトイレ、同じやり方、慣れた場所が安心

B型　おおらかなタイプ
迷惑をかけながらも、自分の好きなことをする。恥のかき捨て。行動的！

★相手に、共感による理解を求める。（★真の受容とは？）
★言語を学ぶ。基本的知識を得、判断力をつける。
★表現方法を学ぶ。楽しい対人関係を経験し、自信をもち、人を信頼し懐く。繰り返し経験することで、見通せるようになる。日常生活を豊富に経験する。

② **見知らぬ国に出かけ、その国の習慣や初めての物の使い方が分からず、戸惑っている。**

A型　神経質なタイプ
理解できない物・嫌なこと・出来ないことへの恐怖、嫌悪、逃避、抵抗、自信のなさ！
じっとしている　緊張している　すみっこに隠れる、その場を離れる、言い訳する、抵抗
消極的　プライドが邪魔をする。顔を背ける、視線を外す
（高機能・アスペの子らも同じ！）
珍しい口にしたことのない変な食べ物、変な色の料理、虫・鳥の丸焼き・豚の頭姿煮・・は、
「けっこうです！！！」（　口にしない、気持ちが悪い、受け付けない。）

★幼児期から様々な食べ物を与え、偏食に積極的に取り組む。自分が料理すれば、偏食もなおる。
「母親に偏食があれば、子にも偏食がある」「牛乳嫌いな母と牛乳嫌いな子は　仲良し！」

B型　無頓着な、おおらかなタイプ
行動派で、周囲の人にも迷惑をかける。理解できない物でも　触って、動かしてみる　どんどんやる
珍しい食べ物でも、何でも食べる。他人の物まで手を出して食べる。何でも触る。

★　指示が通るようにする。その国の社会性（規則やエチケット）を教える。知識を与え、器具の扱い方を教え、コミュニケーション力をつける。待つこと。手を膝にする！

③ **身体を意図的に動かすのが不器用**で、身体図式もぼんやりしている。自分の手指を使いこなせていない。
慣れない運転（車庫入れ　バック）、運動神経が鈍い者のスポーツ嫌い。
思うように身体を動かせない、どのように動いているのか判断できない。緊張、不安、疲れ、したくない！

★　全身運動　手の機能　体力づくり　基本的生活習慣の確立　遊び

④ **興味のあるものは、見える。**くわしくなる。（興味のないものは見えない、認知できない）
バス、電車、自動車への興味と博識　歯磨き粉、スイッチ、テレビゲーム、パソコン、ビデオ、歌

⑤ **一度認識できたものは、目にはいりやすい。**
特定の星座　　わらび取り、

★ 手を使い、扱わせることで、認識できたものは、知覚しやすくなる。反応が、速くなる。身辺自立、手の機能への取り組みが、認知機能をも発達させる。

⑥ **得体の知れないものへの恐怖は大きい。**恐怖が知覚反応を鋭敏にする。
おばけ屋敷（こんにゃくが、想像を絶する恐怖の対象となる）日食（科学の知識によって多くの不安・恐怖から解放され、むしろ日食を楽しむ私たち）自閉症児（どうしたらよいのか理解に苦しむ子は、親を不安する）

⑦ 健常な乳幼児は少し判断（認識）ができる頃から、親をてこずらせる。認知力が中途半端な時、不安を増強する。見通せない恐怖（診察、歯の治療、目ぐすり、耳掃除、爪切り）の上に、全く聞き分けがない。（自閉症児と同じ状況の時期がある。）

⑧ 乳児期、おとなしく育てやすかった自閉症児は、２～３歳ごろから、自分なりに世界を認識しはじめるが、母親を頼ることを知らず、不安と恐怖のため、パニックを起こしはじめる。決まったやり方、儀式に安心をもとめる。

★ パニックの原因をさぐり、経験させ、理解を促す。信頼関係を増す。認知の発達を促し、世界を理解させる。

⑨ **野生動物のようである。**
自分のやり方を通そうとし、抵抗する。慣れにくい。折りあらば、自分流に生きようとする。純粋でプライドがある。美しい瞳。臆病で警戒心が強い。動物園の動物やペットは世話する人だけに懐く。特定の人への降伏とその後の従順さは　かわいい。しかし、大型の犬も、熊やライオンは、大きくなるとやがて危険視される。

★ 指示に従わせる関係を確立することが大切である。絶大な信頼関係を増す。大切にする。しかし、習性（特殊な趣味・こだわり・やり方・形式）を尊重しながらも、人間仲間と楽しく過ごせるようにしてあげる。
社会に受け入れられるように、社会のルールを守れるようにしてあげる。

⑩ **感情表現**は、質的にも量的にも　人によって、場所によって様々である。無表情の中にも、様々な思いや感情を読み取れる。無愛想に見える猫と、愛くるしい犬の愛情表現の違い。
無表情でも、内面は非常に繊細で、感受性豊かである。笑うのは、楽しい時や可笑しい時だけではない。おなかが痛くて困っている時、どうしていいかわからない時、叱られている時も笑うことがある。誤解される！！

⑪ **常同行動、自己刺激は自閉症児たちだけではない。**
暇、退屈、我慢、不安な時に貧乏ゆすり、指遊び、紙ちぎり、爪かみを我々もしている。

Ⅱ　自閉症児の育児と教育

私の子育て　各論

自閉症児は、最も質の高い教育を、必要とする子どもである。

1971 年　T誕生。当時、自閉症児を本格的な教育の対象として、相手にしてくれる所はほとんどなかった。専門家が、下記のような「自閉症は教育の対象ではない」と述べることを許されていた時代である。
「自閉症児は、教育というよりも、治療の方にウエイトをかけなければならぬ対象であり、それに対して普通児は治療よりも教育にウエイトをかけられるべき、もうひとつの他の極に位置づけられる対象である」（山松質文）

1975年　　「自閉症児の治療教育」音楽療法と箱庭療法　岩崎学術出版社

障害児を持つ母親は、ヒントを求めて祈るような気持ちで情報を集める。専門家は大きな影響力を持つ。それによって、教育を諦めてしまう人もいた。（そして、重きをおいた「治療」もほとんど効果がなかった）
そんな状況下で、「私が育ててやらなければ、この子は生きていけない」という思いをいよいよ強くした。
ひたすらに「可能性を求めて、幸せを願って」の子育てであった。

Ａ　中学時代まで

子どもは、やがて親から離れていく。子ども時代にできるだけのことをして、大きくなったら、密着を避けるべきである。子どもの時代はすぐ終わってしまう。子どもの身体の大きさが、親を追い越さない内に、出来るだけ育てておきたい。

自閉症児は、朝顔のようである。
方向を定めてやらないと、その蔓（つる）は、思うままにその性質のままに元気いっぱい曲がりくねって伸びていく。一度曲がったものを伸ばすのは苦労である。適切な時期に適切な治療教育を必要とする。好ましく伸ばし、きれいな花をつけるように絶えず心を配り、適切に援助していかなければならない。

自閉症の確実な治療法はまだ存在していない。自閉症の予後は厳しい。障害は見かけよりずっと深刻で、歪みやすく、非常に育てにくい子どもである。しかし、どの子も可能性を秘めている。適切な一貫性ある継続的な取り組みによって、その子なりに好ましい発達・成長を促すことができる。
重大な広汎な発達の困難性を持っていて、徹底した全人的な療育を必要とする。教育の果たす役割はきわめて大きい。

１．早期発見　早期治療

自閉症児は、症状が不確かで、以前は確定診断までに、時間がかかっていた。時には、極めて利口そうに見えるので、親は障害を認めがたい。しかし、自閉症児は、外見からは考えられない重大な広汎な発達の困難性を持っている。診断の項目を満たしていなくても、（自閉傾向であろうが、自閉的であろうが、言葉があり、喋っていても）早期から、適切な子育てを必要とする。２次的３次的障害をつけないために、将来を見通した取り組みをしよう。将来の状態（経過と予後）を考えて、早目に手を打っていくことが大切である。

★確定診断が遅れる高機能自閉症・アスペルガー症候群こそ早期から適切な子育てが必要である。

「脳の発育は、生後３歳までに急速に成長し、その後５～７歳、１０歳過ぎに急成長する。１２歳すぎてからは、もう目立つほどの成長は見られない。」と、当時言われていた。（だが、「彼らは４０歳過ぎてもまだまだ発達しているのですよ！これからです。」と須田氏は感嘆する。）

★適切な時期に適切な指導を十分にする。時期を逃さない。その時に必要な働きかけを精一杯しよう。

親子関係を強める時期、遊びの時期、身体機能の発達を促す時期
基本的生活習慣を身につける時期　　日常生活、絵本、絵、
基礎学習の時期　　職業訓練の時期

★乳幼児期の豊かな取り組みは、敷地面積を広げ整地する。その敷地に広く大きな快適な家を建てよう。

［早期教育の実施の困難性について］

① 自閉症児の早期発見は２歳で可能となったが、①言語発達の異常　②社会性・対人関係の発達の障害　③常同的・執着的行動性などの３つの全ての症状が明確に出揃うのは３歳頃である。

② 両親の障害の認知と、その療育への心準備がおくれる。
　りこうそうな我が子を前にして、親は自閉症（障害児）とは認めがたく、何かの間違いではないか、やがてよくなるだろうと期待する。大したことはないと感じる。正常に育っているものと思っていた親だけでなく、障害に気付いていた親も、診断名を告げられた時のショックは限りなく大きい。喜びと希望にあふれていた母親は、深い悲しみと絶望の中で、死を考える。うつ状態になる。前向きには考えられなくなる。どうすればいいのか。

1）早期に療育機関や母子通園をすすめ、母親が自閉症児のよき療育者となるように支援していくことが必要である。

２．生活の場（家庭環境）を整える

①　あふれている豊かさ、便利さ、おいしさなどを制限する。
- テレビ　番組　置き場所、おもちゃの選択、おやつのコントロール、快適過ぎる家への考慮
- 砂糖とおやつの氾濫は虫歯、偏食、肥満　骨折の原因となる。
- 年々便利になる電気器具は人間の様々な機能の発達を妨げる。（手の機能が磨かれない）

②　合理的な生活をする
- 掃除しやすい配置。家事は子どもが寝た後で。料理の工夫。ＣＤなど歌や音楽を流して。
- 子どもの自立に必要な専用の家具を利用する（整理ダンス　衣類の分類）
- 学習態勢を整えるために早々と、机を用意する。
- おもちゃや人形でカラフルに子ども部屋を飾らない。

③　自然を生活の中にいっぱい取り込む。野山、海、虫、ペット、畑など自然と触れ合える環境をつくる。

３．母子関係を強いものにする。（できるだけ早期に、しっかりと）

（子どもの変化）

言葉の遅れた、親になついてない子	親になつくようになる

甘え泣きをしない 眼（顔）をみない おとなしい　無表情　ぐずらない 母親をさがさない 呼んでも振り向かない 誘いにのってくれない 人見知りがみられない 指差しせず、人の手をつかむ 物に凝る　遊びが発展しない	よく泣く 顔をよくみる 表情ゆたかになる　ぐずる 母親にまとわりついて甘える 呼ぶと振り向く　ちらっと見る 相手をしてもらいたがる 人見知りをする 指差しして知らせる 困った癖がひとりでに消える

乳児期の自閉症児は、おとなしい、母を求めない、泣かない、反応が少ないなどのため、母親の子どもへの働きかけは自然に少なくなる。母親の方から積極的にかわいがる努力をしなければ、関係が希薄のままになる。

子どもをひたすら守り、安心させ、叱らないで喜ぶこと（添い寝、スキンシップ、だっこ、バギーで外出、入浴など）を探して相手をしてやる。母子のやりとり、遊びの中には、感覚統合訓練になるものやボディイメージを育てるものがいっぱいある。上手に、濃厚に遊べる母親でありたい。

すると、自閉症児にも、赤ちゃんがことばを覚える過程にみられるようないくつかの変化がみえてくる。非常に手がかかるようになる。しっかり母親を好きにさせることが大切である。（安心　信頼）

子どもの変化は、少しずつ、目はそらすが、母を意識して、母の所だけ来る。
子どもの脳波は、母の呼びかけには、反応する。

★いわゆる受容（叱らないで、ひたすら好きなことや喜ぶことをして可愛がる）は、ある時期には大変意義があるが、それをいつまでもいつまでも続けてはならない。いつまでも続けるところに害がある。

★「しっかり結びついていればこそ、思い切った指導が出来る。」と言われるが、いつまで経っても自閉症児は言葉も増えず、指示にも従えない。自分の好きなことばかり要求し、２次的３次的障害を増大してしまう。指示に従うようにはならない。暴君になっていくか、虚弱な甘えん坊に育つか、どちらかになる。しつけはできない。身辺自立もできない。

❤　しっかりした質の高い信頼関係はこのやり方では育たない。
食事は着席して出来るようにする。２歳過ぎたらおんぶや抱っこは止めて歩かせる。１～１００数字並べを食卓でさせる。そうすると母子信頼関係が強まっていく。集団参加を遅らせる必要はない。指示が通るようになる。

恐怖などのパニックの時も、「大丈夫よ」と子どもの心を励ましながら、突破することができる。
母親の怖がるものが怖く、母親の平気なものが平気になってくる傾向がある。

４．不親切になり、気をつかわせる。（不親切こそ、親切である！）自立に向けて

- 自閉症児は「親になついた子どもは、外界への興味が増し、母親との一心同体感も育ち、ゆとりができ、積極的になって、聞き分けもよくなってくる。」と言われるようには、決してならない。

★過保護は子どもの発達のチャンスを奪い取る

- 母子の絆は、家庭療育の課題として様々な取り組みをする中で、確かなものになっていく。本質的に母親はやさしく、よく気がつき子どもの気持ちが分かるので、つい母親が何でもやってあげてしまう。

- 子どもの心を育て少しでも自立させていくために、手をさしのべることを我慢する。様々な経験の機会を与えてあげる。

- 失敗させてあげる。待ってあげる。見守ってあげる。　信頼と尊重の関係。出来ない子だと思い込まない。

- 要求にすぐ応えないで、ちょっと待たせる。気づかないふりをする。
  おでかけ→「ちょっと待って」
  水が欲しそうにしている→「何がいるの？」
  トイレ→声掛けしなければ、行けない子には、気づかない振りをする。

- 不完全な手助け（衣類の着脱、ボタンかけ、食事、入浴、排泄）
  考えて、手を抜く。最後の動作は子どもにさせる。　わざと箸などを忘れ、用意させる。

- 簡単な手伝いをさせる。
  「新聞を取って」「帽子を持ってきて」（物と言葉を覚える機会となる。）

- 自分本位にどんどん歩いていく自閉症児は、自分の後から母親が当然ついて来るものと思っている。母親も、子は勝手にどんどん行ってしまう子だと思っている。夜の散歩の途中でちょっと隠れて心配させ、不安にさせ、母親をさがさせ、意識させる。振り返って確認して歩くようになっていく。（社会性）

  ★母子がたがいに影響し合って、歪んだ関係を作りだしていく。どこかで正常化をはかる必要がある。

- 障害児の育児では、親が生活年齢を考慮して、積極的に理性的に「子離れ」の努力をしていくこと。
  何時までも赤ちゃん扱いをしない。

  ★一貫性をもって育てる。泣きやパニックや問題行動にゆれない理性的行動が親に求められる。

  ★「厳しさ」とは、「行き届く」ことである。

５．生活習慣の確立　（自立・自律をめざして）

1)　生活習慣の自立があってはじめて心の自立が育っていく。
子どもが自由に生き生きと楽しく生きて行けるように、まず生活そのものを教える。

2)　食事、排泄、衣類の着脱、洗顔、歯磨き、入浴、睡眠といった生活の基本となるものは、早期から何百回、何千回繰り返しても出来るようにする。（特に排泄と入浴）

3)　自閉症児の遊びにつきあうより、目的をもって工夫し、愛情を持って指導する身辺自立の方が、対人関係は強くなる。出来ないことを叱らない、あせらない。

4)　自分の仕方（パターン）に固執する、自発性がない、指示されることに抵抗する。
やる気が無い、ことばが通じない、目が合わない、指示が届かない、模倣が下手である、自分の身体・手

足を充分に使えない子どもをしつけて、自立させていくのは非常な理知と忍耐と愛情が必要である。多くの母親は、「出来ない。しかたない。やってあげなければ」と赤ちゃん扱いをいつまでもしてしまう。

5) 重度の自閉症児の場合は課題の分析をし、出来ることと出来ないことを明確にしてみると、「どんなに未発達でも出来ることがある」ことが分かる。
課題分析表の作成をする。（排泄　食事の準備　着替えなど）

全介助→部分介助→物に触れて指示→指さし指示→言語指示→　一人で出来る

6) 出来ているようでも、実にいい加減なことが多い。
指先がうまく使えない。手首が回せない。自分の身体の後ろをイメージできない。

7) 重度自閉症児は様々な癖を持っており、また、水を恐がったり、手が巧く使えなかったり、自分の身体をぼんやりとしか認識しておらず、洗顔ひとつにしても、ただ濡らすだけで、完全ではない。親は出来ていると思っており、きちんとした指導のチャンスもなく、年長になってしまう。

8) 生活習慣の自立は、その子どもの生活年齢にあった課題がいつもある。
シャンプー　髪の手入れ　ひげそり　生理の始末　性のルール　買い物　料理　洗濯掃除　挨拶　きちんと座れる　静かに待つ　時間を守る　交通ルール　電話の使用　自分中心に生きられないことを知る　協力して生活することを覚える。

9) この取り組みの中で、自閉症児は身体を使い、手を使い、気を遣い、物の使い方を覚え、母の指示に従って我慢してやりとげ母と共感する。自分の周りのぼんやりした世界をはっきり把握し、認識するようになる。言葉かけによって、言語を獲得していく。親子の関係は確かなものになる。親は子どもの御機嫌を伺わなくなる。親は子どもをリードする自信を持つようになる。子どもはだんだんと自分の周りに関心を持つようになり、表情が生き生きとしてくる。

10) 適切な時期をはずさないこと。ことばがなくても、模倣しなくても、指導はできる。

11) 成人しても、基本的な事は忍耐力をもってきめ細かく、常識的なやり方を教えていく。

12) 年長になってから初めて始める生活指導、指示には当然大きな抵抗がある。母子でそれなりに親子関係（対人関係）のパターンが出来上がっているからである。

13) 年齢が大きくなると、自立に持っていくのが難しくなる。
① 自分のやり方（パターン）に固執する。
② 母にやってもらって（手伝って貰って）当然と思う
③ 自発性がない
④ 自分のすることが増えることに激しく抵抗する
⑤ 新しいパターンを身につけにくい
⑥ 身体が大きくて教えにくい
⑦ 大人の身体になってからでは、排泄・入浴・着替えなど指導に抵抗がある。

14) 「指示に従える」ことが社会性の第一歩である。（相手の気持ちに合わせること・コミュニケーション）

15) 親は子どもの召し使いになってはならない。甘やかして育てていると、子どもは親にして貰って当然と思い、できることもせず、無理にさせようとすると、大変抵抗する。大あばれしてもパニックを起こしても譲らないで、一度させると二度目はずっと抵抗が少なくなる。母子の関係はずっと密接なものになる。母親に信念と自信ができる。

16) 優しすぎる親、私には指導できないと消極的な親、一貫してやれない親、ふらふらしている親には、年長になってからの子どもの指導はなかなか困難である。
★「念ずれば、花開く」強い決意が子どもを動かす。

17) 重い障害があっても、既に青年期に達していても、適切さと一貫性と継続によって、発達していくのは確かなことであり、あきらめたり、見捨ててはいけない。

18) 工夫・留意

偏食、小食・・・十分な運動、おやつの制限、食物のバランス、生活リズム　料理をさせてあげる
一人前（自他の区別をつける）　総合ビタミン剤　水分

食　事・・・・・お盆の使用、一人分ずつ　自他の区別をはっきりと教える。食事のエチケットを教える。
「おいしかったです。ごちそうさまでした」　食事は社交の場
ミジン切りから徐々に大きな切り方へ。手づかみを止めさせる。お茶のがぶ飲み。

肥　満・・・・・適切な食事、おやつの制限　（母親の責任）　生活の充実、運動をさせる

睡　眠・・・・・早起きさせる。十分な運動　生活リズムをととのえる。早朝マラソンの取り組み。一人で寝る。ベッド　一部屋、カーテンなど自立への配慮（思春期を迎えるために）

排　泄・・・・・沢山のパンツを用意し、しからない。歩くことが神経の発達を促す。あせらない。
トイレの工夫（洋式では足が宙ぶらりんになり踏ん張れず、排泄できにくい。足場を置くと排泄しやすい。山歩きで踏ん張る力をつける。）
ムードづくり。
外ですることのないように、外出前に行かせる。
頻繁に声かけしない。長時間貯めておくことができないで、頻尿や夜尿の原因になる。
記録に取る。
ペーパーを切る、拭くことを手を添えて教える。確実にできるようにする。

洗顔　洗手・・・水道水は飛び散らぬように、使いよくする。洗顔・手洗いは確実にできるように。

シャンプー・・・やり方を決めて、毎回練習のつもりでする。（女子）
見えない箇所で、腕を上から回してする作業なので、かなり難しい。

入浴　・・・・・確実にできるようにする。一人で入り、次の人のために湯をおぎなって、蓋をして出る。
タオルをすすいで、しぼる。「いいお湯でした。お先に」と

虫歯　・・・・・就寝前の歯磨き　食後に水やお茶をのむ。甘いおやつの制限。

着脱　・・・・・衣類の型は簡単なものから複雑なものへ。
最終的には、青年らしいきちんとした服装ができるようにする。
ぼたんの沢山ある服の使用。
カーテンの中で着替える。水泳時のバスタオルはワンピース仕立てにする。
表裏、前後の区別ができるようにする。

19） 指導のポイント

近（密）→遠（離、疎）の働きかけ
身辺自立、料理などの指導で、一貫性を持ってする。
① 言葉をかけながら、手を添えていっしょにする。
② 言葉をかけながら、手を添えるのをだんだん減らしていく。
③ 言葉で指示する。
④ 「どうするの」「何がいるの」と言葉をかけて考える場を与え、自分で考えてするようにさせる。
⑤ 自主的に自分でするように、言葉かけをひかえる。

① ことばかけをして、じっと待って、させてあげる。
親は待てない。「はやく、はやくしなさい」と指示しながら、結局、してあげている。
忍耐すること。親は子どもの暴君になってはいけない。親の都合で、させたり、してあげたりしていると、子どもの心を乱し、不安にし、しつけも親子関係もうまくいかない。一貫性がないと、指示待ちになる。

② 失敗させてあげる。 （醤油をかける 包丁を使う）
失敗して初めて、物の性質が分かり自分で気を使って出来るようになる。（失敗させてよい事柄に限る）

③ 子どもが、無理なくやりやすいように、弱点を工夫する。
「どこに困難があるか」を見抜く。課題分析をする。実践する中で、どこで子どもが困っているかがわかる。

④ 根気よく励ましてさせる。・わがままは通させない。
上手に出来ないうちや慣れない間は、自分でやりたがらない、抵抗するがしっかり目標を決めて、ねばり強く相手をすること。できるようになるにつれて反抗、抵抗、遊びが減り、生き生きと明るくなり、関係も楽しいものになる。
しんどいのは、事始めである。

⑤ 出来たら、オーバーにしっかりほめてやる。毎回ほめる。
「いい子ねぇ すごいよ えらい うん、たいしたものだ」親は他児と比較しないで、本気で心から賞賛する力を持つことが大切。
★セルフエスティームを高める。

⑥ 一度できるようになったことは、ゆずらないでやらしていく。

⑦ ★一つのテーマの全過程を責任を持たせてさせる。＜料理＞
みそ汁とごはん カレーライス 肉じゃが、炒り煮、お好み焼き、おでん、餃子・フライ等。
自閉症児は興味に偏りがあり、能力にも偏りがあり、アンバランスである。できる箇所だけ、部分的に手伝わせていたのではいつまで経っても、能力的に弱い部分が強化されず自分一人で出来るようにはならない。自分で作ったという完成感もなく、「責任を持つ」ということも分からない。

★責任を持たされて、はじめて責任が持てるようになる。幼児性からの脱却。
★全過程を個人指導していくと、子どもの発達課題が自ずと見えてくる。援助しなければならぬ箇所が発達課題である。

⑧ ひとつのテーマを少しずつ発展させて自立へと持っていく。（様々な要素が必要となる）
i）「待つ」の発展
- ちょっと待つ。（玄関、家の中）
- しばらく待つ
- トイレの前で待つ。
- 待合室のベンチなど決められた場所で、長時間になっても待つ。
- 約束の時間までに約束の場所に出掛けて待つ。（時計、デート）

- 留守番　数時間から数日（メモ、電話、ガス、戸締り、電気など）（自分で食事、買い物、掃除、洗濯）

ii)「外出」　登校や下校　旅行

- 一緒に手をつないで歩く。
- 学校　スーパー　　散髪　映画　郵便局などから一人で帰る。一人で行く。
- 短距離から遠距離へ、交通信号を守る。
- バスにのって帰る。バスでいく。町を歩いて探検、バスに乗って遊ぶ。（マナー、時刻表、旅費、外食）
- 船、予讃線　新幹線（電話連絡、スリにご用心、切符、弁当、荷物の用意）

★「外出の際の挨拶「行ってきます」を徹底して指導する。
どこへいくのか。何時帰ってくるのか。許可を得て出掛ける。黙って出掛けた時は損な（おやつがなくなる。入れてもらえない。夕食がなくなる。）経験をさせる。
気持ちが育ってくると、心配をかけるから行く先を言うのだとわかるようになる。

❤　特に幼児期。子は出来ないことが多く、不安や恐怖を持ち、混沌として生きている時期。母親もわが子を障害児であると認めなければならぬ、つらい挫折の時期である。母親を励まし、励まし、幼児期からするべきことをしっかり取り組みたい。（体づくりと基本的生活習慣の確立）中でも、**排泄！**

６．生活習慣の確立　（思春期に向けて）

性を考慮し、生活年齢を考えた育て方をする。

1)　自閉症者の幼児性は、育てる側の責任が大きい。

赤ちゃんが裸で歩くスタイルは、かわいい。ところが、たった１０年もすると、思春期を迎え、大人の身体（時に１７０㎝、８０ｋｇ）になる。そうなると、我々の社会は、人前で裸体であることを拒否する。たった１０年の短い期間に、我々の住んでいる社会の性に関する約束事・エチケット・暗黙のルールを教えなければ、地域で生きていくことが難しくなる。性（セックス）というのは社会性・人格と深く関わっている。自閉症児は社会性がつきにくいから性の問題を起こしやすい。

2)　「恥ずかしい」という感情は、属するその社会の風俗習慣によって異なる。

自閉症児はプライドはあるが、他人に対して自分のやっている状態を「恥ずかしい」と思うことは稀である。（好きな人に会うのは、気恥ずかしい。）★環境的にも、はずかしいという感情が育ちにくい。自閉症、重度の知的障害など、いつも世話して貰う子どもは、恥ずかしいという気持ちが育たない。世話する側も恥ずかしい思いをもって接していない。

3)　性の具体的指導

★「させなければ」と親が考えたことは「させることができている」
幼児期から男は男として、女は女として育てる。将来の、性に関するトラブルを最小限にくい止める努力をする。

①　場所がらを教える。（幼児期から裸で歩かせない）

②　着替えはカーテンにかくれてする。更衣室でする。

③　部屋などへ入るとき「入ってもいいですか」と、ノックを教える。

④　入浴の練習を確実にする。（風呂場が水遊び場になっている。）
男性に比して女性の方が、一人で入浴したり、身体を洗ったり拭いたりすることができていないのは、母親が同姓でいつまでも共に入浴して世話ができるためであろう。男の子の場合は、母親に「やがて一

緒に入れなくなる」という意識があり、重点を置いて指導するため、一人でできる率が高い。

⑤ 女性はシャンプーや髪の手入れを自分でするように指導する。スカートの扱いも正座もできるようにしておく。

⑥ 着くずれは場所を決めて、そこまで行って直すようにさせる。人前でさせない。（どこでもやってしまう）

⑦ トイレを必ず使用する。戸外での排尿は禁止する。外出前に必ずトイレに行く。（排泄訓練）

⑧ 和式・洋式どちらも使えるようにする。重度児の場合は洋式トイレの方が体が安定して、始末が容易である。

⑨ 排泄・生理の始末はどんなに重度でもやり方を決めて指導する。
排泄のしつけを確実にする。排泄後きちんと局所が拭けるようにしておくこと。
ムーブメント教育をとりいれ、全体の発達をはかりながら、自分の体を自由に自分で扱えるようする。
手の機能を育てる。ペーパーホルダーの扱い。手洗い

★どんなに重度な自閉症児でも、何とか一人で食べられるようになっているが、排泄の始末は、できていない。
トイレでの指導は食事より機会（時間）が少ない。母親はいつまでも一緒に入り、世話することに抵抗がない。
指導がむずかしい→出来ないだろう→してあげる→いつまでもできない。
排泄が自立できていないと、一定時間、完全に支援者を独り占めすることになり、将来の運営の重荷となる。

⑩ 学校ではトレーニングウエアの着用が多いが、男子のトイレでの排尿指導には、不適切。全部下ろして排尿するやり方を覚えると、どこでもそうする。きちんとしたズボンをはかせ、丁寧に指導しておくべきである。
＊ ベルト　ボタン、ファスナー、ブリーフ
＊ 尿のしずくの始末を行き届いて教える。ズボンのシミとなる。

⑪ 寝室にカーテンをつけ、個室化する。マスターベーションを考慮する。

⑫ 自分の下着の洗濯をさせる。

⑬ 異性の下着など洗濯物への興味は、積極的に機会を与えて卒業させる。
家族の洗濯をさせる。姉妹の存在

⑭ 人前で性器にさわる、手をやることをその都度注意し、場所がらを教える。かぶれていることもあるので、入浴時に診てやる。局所をていねいに洗う指導を幼児期からしておく。

⑮ 「人間のからだ」図鑑や　絵本を利用して人体について、成長や性の知識を与える。

⑯ 握手（膝にだっこ）の功罪について
対人関係を強くするための握手（膝にだっこ）が、大きくなってからは、自分が好きになった人と積極的に握手（膝にだっこ）したがる結果を招く。

⑰ 日本の社会で通用するエチケットを幼児期から教えること。

⑱ 言葉が通じにくいからといって顔を近づけて話をしない。スキンシップの遊びをいつまでもしない。距離を保つ。

⑲ 生活年齢に合った、ふさわしい付き合いをしてやること。
精神年齢一歳のおじいさんは、決して赤ちゃんではない。矢張りおじいさんである。あかちゃん扱いをしない。

4) **課題分析表**

領域（身辺自立　排泄　）

評定日（　　年　　月　　日）

スキル	評価	コメント	変更
1　トイレルームの戸を開ける			
2　スリッパの確認			
3　スリッパをはく			
4　戸を閉める			
5　アコーディオンカーテンを開ける			
6　　〃　　を閉める			
7　パンツ・ズボンを膝下まで　　おろす			
8　便座に程よく腰掛ける			
9　排泄する			
10　トイレットペーパーをとる。適当な長さに切り取る			
11　拭き、捨てる			
12　パンツをあげる			
13　水を流す			
14 アコーディオンカーテンを閉める			
15　蛇口をひねって水を出す			
16　手を洗う			
17　蛇口を閉める			
18　手を拭く			
19　戸を開ける			
20　スリッパを脱ぐ			
21　戸を閉める			

評価

１全面介助　　２部分介助　　３ａその物に触れて指示　３ｂ指さし　３ｃ言語指示　　４ひとりで出来る

７．日常生活の場を濃厚に体験させてやる。（社会性　しつけ）

1) **自閉症児もこの社会の中で生きていく者として**、乳幼児期（ごく幼い時）から頻繁に外に連れ出し、いろいろな場に慣れさせ、ルールを守って外出・買い物・旅行などを自由に楽しめるようにしていく。

・うば車　徒歩　バス　電車　（自家用車は利用しない　　家庭の延長）

・散歩、山登り、買い物（近所　町の中　スーパー　デパート）　旅行

・　レストラン　郵便局　市役所　映画館等

2) **自閉症児は様々な問題行動をもつ故に、外出の機会が減る。**

	＜対処＞
①　動きまわって、眼がはなせない	（子どもに付き合う）
②　商品に触る、こわす　スイッチにさわる　人に触る	（用事は別の時に）
③　返事をしない　迷子になる	（名札）
④　自分の興味本位に行動するので、用事ができない	（ひも）
⑤　奇声、パニック、妙なしぐさ等が恥ずかしい	（気にしない）
⑥　決まったもの、決まった道順のこだわりがある	（子どもに合わせない）

⑦　レストランに入れない　バスに乗れない　　（慣れさせる）

3)　**大きくなってからでは、なお一層連れて歩くことが難しくなる。**

①　行動がめだつ　ダイナミックになる
②　周囲の眼がつめたい。（社会性を厳しく要求される）
③　体力的に親は子どもについていけなくなる
④　子どもは親と一緒に行動することを嫌う
⑤　外に出たがらない

4)　偏見を持たないで、皆で協力して指導する。「障害があるから」と言って、反社会的な非社会的な行動を見逃すのは、障害児の人格を尊重していない。

5)　社会のルール（常識）を教えられず、我慢することを学ばせて貰えなかった自閉症児は、思春期頃から周りの人の手に負えなくなり、結局、地域の中で生きていけなくなる。高機能自閉症児ほど無断外出をして大変になる。

6)　そうなる前に、共に外出を重ねて、子どもの興味ある物や場所につきあい、興味を満足させてやったり、問題となる行動（玄関のベルを押す、人の足に触る、他人の家に上がる、覗き込む）につきあい、興味を卒業させたり禁止したりする。
また、用事が済むまで静かに待たせたり、交通ルールを教えたり、レストラン・駅・バス・汽車などをやがて一人で利用できるまでに、一貫性を持って指導していく。

7)　子どもを分かってあげ、許される範囲でとことん付き合い、共に楽しみながら、反社会的な常識を外れた行動が起こる度に、日本の社会で通用する「しつけ」をしていく。
★　自他の区別をはっきりさせる。

8)　見えない首輪をつける。（まるで誇り高き野生動物と付き合っているようである）
社会から排斥されないためのしつけを、かわいい子どものうちにすること。

9)　外に出て、問題を起こさないかぎり、学ぶチャンスはない。勇気を出して積極的に外に出よう。自家用車でなく、バスや電車を利用しよう。

８．幼児期から、一般の子ども集団に入れる。（集団適応）

当たり前の集団の中で、自閉症児の問題点を意識して解決していく。地域の中で生きていける力をつけていこう。

1)　**利点**

①生活のリズムが整う。②　運動不足にならない。③　模倣すべき刺激がいっぱいある④　集団の中での子どもの状態を観察することによって、集団適応への具体的対策をねり、対人関係を改善できる。⑤　良い先生は母親の重荷を軽くし、孤独な母親を支えてくれる。⑥　友達を通して、地域の中で親子の生活が広がる。

2)　**自閉症児の幼児期・学童期の状態像**

多動、椅子にじっと座れない、教室から出ていく、話を聞かない、課題をやらない、泣く、パニックを起こす、手がかかる、高所へ上がる、声を出す、唾をかける、かみつく、ルールを守らない、食べない、いつもと仕方が違うと抵抗する　邪魔になる　窓ガラスをわる　情緒が不安定　ことばの遅れ、言葉が通じない　指示が通らない

★これらの、問題となる行動や状態故に、集団適応が難しく、教育にのせにくい。
「指示に従わない、集団を乱す、勉強の出来ない、手に負えない自閉症児」は教育界から嫌われる。

3)　**しかし、自閉症児も、集団の中に入ってはじめて、集団の生活の仕方を学ぶ。**

遠足、運動会、給食、掃除、当番など同年令の地域の一般の友達の中で学ぶものが、いっぱいある。

親は、子ども集団を用意できない。（親は、個人的に学習指導をすることはできる。個人指導をしなければ、自閉症児は、のびない。集団に入れただけでは、何もよくならない。集団に入れながら、発達を促がし支える努力をしなければ、子どもを苦しめ、不適応状態が増す）

4)　細かい配慮によって、長い時間をかけて徐々に徐々に集団に適応できるようになっていくが、集団に適応できるか否かは、教師(保母)の質に依るところが大きい。

①自閉症児を中心にした集団づくりをする。
②毎日、連絡帳に一日の様子を親の目を通して記録し、報告する。
③問題となる行動の除去のために、話し合いを密にし、早めに解決する。
④山登りを度々し、心の安定をはかりながら、前向きに努力の日々。
⑤国語と算数の徹底した個人指導。
⑥友達を巻き込んでの遊び

（特に集団への導入期の保育所時代に、学校生活の初め小学低学年時代に、よき保母、よき校長、よき担任に出会えたのは、大変幸せなことであった。）

☆　健常児が大勢いる保育園・幼稚園や学校で育てられることは、自閉症児の発達によい影響を与える。長い年月をかけて、失敗や問題行動を繰り返しながら、常識や人との付き合い方を学ぶ。また、健常児にとっても、その性格形成によい影響を与える。子どもにはいろいろな友達が必要であり、友達といっしょに遊んだり、食べたり、学んだり、けんかをしたりなどする中で成長していく。

９．問題行動　こだわり、心身の病的状態

共感をもって、詳細に具体的に理解し、心を育てる

「遠き所を近く見、近き所を遠く見よ」（宮本武蔵）
将来を見つめて、方針を持って今を適切に生きることが大事である。

Ａ　問題行動

自閉症の子どもには、他傷、暴力、器物破壊など危険な行動・激しい自傷行動、迷惑な行動・非社会的行動・指導の妨げとなる行動・発達を妨げる行動・こだわり行動・集団生活を妨げる行動・異常な行動・不潔な行動・奇妙な行動・理解に苦しむ行動・癇癪・怖がられ警戒される行動など行動障害がしばしば見られる。
関わる側は、親として、施設職員として何とか幸せに生きてほしいと好意をもっていても、とっさの他傷行為や破壊行動や物を投げつける行為に、恐怖心を抱き、警戒心を抱いてしまい、距離を置き、安全を確保するために、その人への支援の思いとは裏腹に、時には物理的にその人の個室に鍵をかけ、拘束してしまうことになっていく。強度行動障害を出す人に、尊厳ある人間として向き合う感性も鈍っていく施設職員も少なくない。
発達障害のある方に、強度行動障害があると、家庭でも施設でも病院でも、誠実な人ほど、その対応に苦しみ続けることになる。どんなに強度行動障害を出していても親にとってはかけがえのない「いとしご」である。

問題行動を見つめていると、家族や支援者達を悩ましているその人の生活態度と問題行動には、自閉症の人たちの強い欲求、拘束への抵抗、自由への要求、反抗、拒否、恐怖、混乱、怒り、失望、悔しさ、嫉妬、強い興味、愛されたい思い、望郷、プライド、淋しさなど、様々な感情・思い・心からの叫びが汲みとれる。どこまでも、この方達の代弁者でありたい。

暴力や自傷行為や破壊行動により、思いや要求や拒否を伝えるのではなく、文字カードで、絵カードで要求や拒否等の思いを伝えることができるようにと、コミュニケーションのための用具や方法が広まり、ＴＥＡＣＣＨや行動分析学などによって、適切な対応がなされてきている。しかし、一方で子ども達への薬物療法は増加している。行動障害に対して、安易に薬物投与がなされているが、副作用を考え、できるだけ療育（育児と教育）によって心を育てていくべきである。

言葉を使いこなし、自由にコミュニケーションできる力のある私達でさえ、内面の多くの複雑な感情と思い

は、時に言葉にならない。彼らは、純粋で、感情豊かで要求も拒否もはっきりしている。大暴れしている時、その彼らが思いを全て文字カードや絵カードで表現することは不可能である。

問題行動やパニック、その解決が大きな療育テーマになってしまっていて、自閉症の子どもには、子どもが課題学習を嫌がれば、問題行動を出さないように、それ以上は子どもに求めず、生きるための力をつける学習ができていない。将来を見通して、「知識ある愛」をもって、行き届いて、育児と教育をしていく。問題行動を最小限にとどめるためにも、生きるための教育を強力に推進していく必要がある。

自閉症の子どもは、社会性・対人関係の発達が遅れ、愛着行動の形成が遅れ、なつかず、指示は通らず、子育てに支障をきたす。その上にコミュニケーションの障害があり、子どもの表出言語も僅かで、理解言語も僅かで、母親の話しかけも通じず、大泣きや大暴れし、その子育ては困難を極めてくる。

さらに、生活年齢が上がるにつれて、自閉症の子どももその子どもなりに認知機能が発達してくる。すると、周囲の世界に、今まで気づかなかった物が見えてき、興味あるものを発見し、大好きな大切な宝物に思えてくる。そうして、こだわる物やこだわり行動が増しくる一方で、中途半端な（生半可な）認知状態から、周囲の変化や新しいことに不安や恐怖が増してき、一層このこだわり行動が安心の拠り所となっていく。変化を嫌い、歯科や耳鼻科は大パニックとなり、指示は頑固に通らず、生活が自分の思うようにならないと、泣き叫び、聞き分けがなく、全くしつけもできない状態となる。育児は大変になっていく。親は疲れ果て、途方に暮れる。親が情緒障害を起こし、うつ状態になって行くことも少なくない。親の育て方が悪くて発達障害を起こしてくるのではない。

その親に対して、不適切な、間違った育児をしていると非難はできない。強度の行動障害の傾向が幼児期から見られる場合は、その子育ては困難を極めるが、それでも豊かに自由に幸せに生きていけるように、心を育て、生きていく力を育てていく道は存在する。一人の子どもを救う教育は、大きな意義ある働きである。本人だけでなく、家族も、周りの人達をも幸せにしていく。

しかし、無知な、不適切な、間違った、あるいは、子どもに振り回された育児と教育の結果、諸問題行動は大人になるに連れてダイナミックに深刻化し、強度行動障害へと発展し、家庭生活や地域社会での生活を極めて困難にし、両親も本人も不幸になっていく現状がある。そうなっていく経過と予後をしっかり見つめ、学び、何としても、早期から適切な療育指導ができるように、支援していきたい。

（1） **トモニ療育センター**（1994 年開設）

自閉症児の育児と教育、および強度行動障害への取り組み

純粋な自閉症の人達に、出会ったその時から、詳細に具体的に知る努力（検査）をし、共感をもって理解し、歯車をあわせて、希望をもって個別に課題学習に取り組み、共に歩んでいく。幸せに生きていけるように少しでも自立していきていけるように、羽ばたいて生きていけるように、祈りを込めて育てていく時、必ず好ましく育っていく。

幼い子どものうちから、しっかり指示がきけるようにし、社会に受け入れられる人に育てていく。

適切な家庭療育が自閉症児を救う。母親が“知識ある愛をもって行き届いて”自閉症児を理解して適切に導いていくとき、4～5 歳の強度行動障害予備軍も軌道修正して好ましく育っている。

適切に向き合うためには、実態を把握のための検査と課題学習（アセスメント）は欠かせない。詳細な問診票によって過去と現在を知った上で、自閉症児を詳細に深く観察することからトモニの療育が始まる。

しっかりと母親が自閉症の子どもをリードして適切に育てていけるように、トモニでは月 3 回の自閉症関係の勉強会（現在は適時）と、ＦＡＸやメールによる家庭生活記録やレポートから療育の状況を読みとり、個別課題学習を中心において、具体的に総合的に全体的に発達を促しながら、問題行動やパニック・こだわりなどの解決を図っている。

問題行動やパニックを解決していくためには、心を育てることが重要である。指示に従ってやり遂げる力をつけ、セルフエスティームを高め、幸せに生き抜く心を育てている。トモニ療育センターを開設して 19 年目、子どもたちは全員好ましく育ってきている。

（★トモニ療育センター開設前、9 年間　毎月　母親のために「わかば学習会」（療育相談と勉強会）を実施していたが、子どもも家庭生活も見えず、効果はなかった。）

（２）問題行動への考察と対応

★　発達過程のアンバランスの改善につとめているが、療育して発達を促して行くと、その凸凹状態はますます差が大きくなっていく。発達しにくい分野でも、徐々に変化し、改善していくが、生きていく力は、他の分野で見事に開花していき、輝いて生きられるように育てられる。

自然な発達に任せていると、運動能力・自我・自信・探究心・興味などの発達に比し、認知機能の発達が遅れ、言語機能の発達の遅れ、対人関係の改善が遅れ、社会性が未熟で、指示に従えず、聞きわけが無く、危険が分からす、集団行動がとれず、一層手がかかるようになる。

言葉で表現できない故に、いつまでも大泣きや大暴れをしていることも多い。

問題行動には、子どもの様々な思い（要求　興味　拒否　催促　相手をしてほしい　怒り　反抗　助けてほしい　苦痛　我慢　混乱など）が表現されている。その意味を理解することは大切であるが、その行動に不適切な反応し、増強してはならない。しかし、疲れている母親は、絶望的にも、ヒステリックにもなって当然である。我が子ゆえにおろかになってしまい、情けない思いをすることが度々である。母親を精神的にしっかり支援していく療育機関が必要である。

適切な対処をするとともに、子どもの全体的発達を図ろう。

① 手振り　身体ゆすり　とびとび　まいまい　鼻いじり
　1）未熟な感覚遊び、病的ではない。
　2）100 並べなど課題学習を通して、発達をうながしていく。

② のぞき　水遊び　物叩き　（物を使った遊びをしている）
　1）感覚異常と考えない。未発達未熟なための単純な遊びである。金のかからない、害のない、時には運動にもなる、愛すべき、とっておきの遊びである。
　2）100 並べなど種々の課題を手を添えて取り組み、基本的生活習慣に取り組み、発達させ、日常生活が充実してくると、減少したり消滅する。（自由時間に場所を限定して、感覚遊びを思い切りさせてよい。楽しみなのだから。）
　3）両手を使って、手を磨きながら作品を作り上げていく。座位で畳の上でする。
　4）子どもの強い興味・関心事（こだわり）に共感して大切につきあう。

③ コマーシャル　歌　会話でないおしゃべり
　1）言葉を真似てその通り言える力がある。内容の理解できていなくても大切な力である。発達である。正しく再現する力、綺麗に発音できる力　覚えて再現する力がある。（足し算引き算九九を簡単に暗記し、唱える力となる。教育ができる。朗読ができる。　コミュニケーション力をつけることができる。国語の力をつけられる。）
　2）手の機能を磨き、基本的生活習慣や料理などやはり課題学習を通して育てる。
　3）発達の途上にあると考え、系統的指導をする。
　4）視覚的に物や形を認知する力が弱いこともある。補強していく。

④ 耳ふさぎ　臭いかぎ
　1）生半可な認知により、不安感や恐怖心が強い幼児期に多い。
　2）特定の物を嫌ったり、好きになっている。特別に強い関心事がある。強烈に印象的に覚えている。
　a）耳ふさぎ
　　ⅰ　興味ある物の音や音楽を耳ふさぎで変化を付けて楽しんでいる場合もある。
　　ⅱ　嫌がって耳をふさぐ。目で見てする課題でもしたくなければ、耳ふさぎで拒否する。
　　ⅲ　小さな音に耳をふさぎ、大きな音では耳をふさがない。運動会、祭り、カラオケは大好き。
　　ⅳ　風船の破裂音やピストルの音には耳ふさぎ。これはびっくりする！恐怖！

v　生活が充実し広がりをもって発達してくると、耳ふさぎはなくなる。
vi　「聴覚が鋭敏だから」と自閉症の子どもを安易にみなして特別な配慮をしていると、適応が難しく自由度が制限される。逞しく育てたい。感覚過敏ばかりではないので、観察して見分ける必要がある。

⑤ 偏食　特定の衣服・色（こだわり行動）
1）家庭生活や学校生活に差し支えあるものは変容させていく。制限していく。
2）自他の区別をさせ、他者に迷惑とならないように導く。
3）偏食（料理をするようになると改善する）
4）特定の気に入った服しか着ない。（こだわり）
i　洗濯する。乾くまで待たせる。
ii　隠してしまう。出されたのを着るようになる。思い切って着せる。
iii　次々と新しいものが抵抗なくくれるようになる。
iv　課題学習その他を通して、生活が充実し発達してくると、消えていく。

⑥ 特定のものへの恐怖・拒否
1）思い込みは言い聞かせられない。説得できない。
2）生半可な認知は恐怖と不安を増す。「掃除機が怖い！時計が怖い！こんにゃくが怖い！鳩が怖い！虫が怖い！」全て、得体のしれない物である。生半可な認知能力による。
3）信頼関係のうちに、経験させ、学ばせ、物事の正しい認識をさせていく。
4）その信頼関係は100並べから始まる課題学習の関わり・学ぶ喜び・達成感から育ってくる。

⑦ 突然の大泣き
1）原因はあるはず。原因不明は自閉症児の問題ではない。
2）コミュニケーション・シーンの再現をして、自閉症児の立場に立って共感して思いやるとき、「そうか！」と納得行くこともある。これができるようになりたい！

⑧ 儀式行動
1）生活に差し支えない性質のものは共感する。我々にも、その種のものはあるが、共通理解があるので変だと感じない。
2）食前の放屁儀式は不都合なので無視し、反応しないで消していく。
3）あいさつ代わりの同じ質問。

⑨ 性に関するトラブル
1）「恥ずかしい」という言葉は通じない。「エチケットです」と教える。
2）思春期を見通したしつけが必要である。
3）抱きつく、髪に触る、首にふれる、ストッキングにさわる、裸になる、人前でズボンを直す
4）じっと見つめる、握手する、他者の服のボタンをはめる。

⑩ 指示されるのを拒否する行動。「できない！！」と腹立ちをあらわす。

1）奇声　物投げ　物倒し　大暴れ・混乱

2）他傷行為　人を突き倒す　唾かけ　叩く
i　大声で叱っても罰を与えても謝らしても、本人にとって、損な約束事（唾をかけたらマラソンする、物を投げたら正座する、作業を怠けたらおやつを抜く、ひとりにし相手にしない）を決めて試みても効果は少ない。
ii　根本的にはできることを課題学習として取り組み、全体の発達を促すことである。早期からの適

切な家庭療育をする。心を育てていく。

ⅲ　ＴＥＡＣＣＨの構造化により、指示や干渉を最小限にするため、スケジュール・手順をカードで示し、分かりやすく構造化して生活を整える。おしまコロニー星ヶ丘寮の取り組みは多くの強度行動障害を持っていた自閉症青年を救っている。

3)　自傷行為　（頭突き　手噛み　髪抜き）

ⅰ　基本的に他傷行為と同じ意味を持つが、自分に暴力が向かう行動。

ⅱ　親や保育士・教師は心痛め、自傷行為の効果によって、結局させるべきことも実行できない。振り回され、３次的障害を増す。

ⅲ　相手への訴えるコミュニケーションの手段になっているので、その思いをくみ取りながらも、冷静に見通しをもって向き合っていく。感情的に療育者が振り回されないで、するべきことをさせ、山歩きをさせ、導いていく。折り紙・ビーズなど手作業を取り組む。

⑪ 頭痛、腹痛、失禁、頻尿、反芻

1)　様々な事の、不安・怖れ・緊張から無意識に身体症状として出てくる。

ⅰ　就学前

ⅱ　学校の教諭とうまくかみ合わない時

ⅲ　卒業式その他気になる行事の前

ⅳ　学科がついていけぬ時

2)　基本的には、逞しく育てる。学校や友達に合わせることに親が重点を置きすぎない。親自身が不安で緊張してしまっている。

3)　皆に合わせて、問題も起こさず過ごしてほしいと、汲々とゆとりなく心配しながら母親が向き合っていると、子どもはどうなるか？！

4)　安心させる。親が大らかに対応する。（親の支援が要ることになる。）

5)　児童精神科・小児科で一時的に薬を使用する。しかし、メインは療育である。病的にしてしまわないように。

6)　山を歩く。生活療法。細かい課題学習の支え。自信を持たせていく。

7)　「アスペルガー症候群だから」、「高機能自閉症児だから」、「思春期だから」、「ストレスだから」、「親が勉強させ過ぎだから」と容易に原因をきめるが、そこには何の根拠も建設的方向付けも無い。往々にして母親は非難の対象となる。

8)　病的と判断されていた頑固な反芻さえ、適切な療育を推進する中で軽快していった。

（３）自閉症児の問題行動をどう考えるか。自閉症児にどう向き合うか。

①　見通しをもって、就労できるように育てる。地域社会で人間らしく尊厳をもって少しでも自由に豊かに生きてほしい。

②　自閉症児は、その生涯にわたって重篤な発達の障害を残すが、特にその行動上の問題は激しく家族を悩ませることになる。二次的障害・三次的障害をつけまいと努力しても、気がついた時には多くの歪みをつけてしまっている。）　生活年齢によって、その状態像・問題は変化してくるので、自閉症児の育ちの経過を予め学習し、予期して適切な対処をしていくことが自閉症児とその家族を救うことになる。予め知っておれば、がっかりしないで対応できる。

③　親を悩ませる行動の多くは健常児にも出現するが、一過性で、すぐ次のステップに発達していくので問題にならないし、言い聞かせれば言うことを聞くし、しつけができる。また、健常児は家庭内よりも外出した時の方が行儀よく振る舞うことができるので、社会に対して親の苦悩・気兼ねなどがない。自閉症児の場合は外出先で派手に問題行動を出す。

④　世間の人々には、自閉症への理解と共感は広がって行きにくい。未だに「親のしつけが悪い」と非難される。親はひとりで悩みを背負い込むことになる。様々な悩みに対して、行き届いてフォローしてくれる機関は、未だに少ない。悩みと孤独と行動障害と子育ての重みのますます増大する中で、知識の無い親が自閉症児を上手に育てていくことができようか。

⑤　乳児期、子どもは空腹・不快・眠い・興奮・体調が悪いなど全てのことを「泣き」で表現するが、母親はその泣き声にゆり動かされて子どもの世話をしている。子どもの泣き声には、周りの人たちをゆり動かし不穏にする強い影響力がある。母親そして祖母はほとんど反射的に子どもを抱き上げ、あやし、泣きやむまであれこれと働きかける。こうして赤ん坊は世話をされて保護されて育つ。これが普通の状態である。

ところが、自閉症児は、乳児期にはあまり泣かず、おとなしくて育てやすいことが多い。言葉も遅れ、要求もすくない。また、普通に発達をしていて、途中から言葉がだんだん消える場合もある。母親を求めない。母子関係は強まらない。気がついてみると、ひとり遊びが増え、呼んでも反応せず自分の思いのまま気に入ったことを繰り返しやっている。やがて、いろいろこだわりや恐怖心が出てきて、パニック、奇声、大泣き、夜泣き、大暴れなどで日常生活がスムーズにいかなくなってくる。

⑥　自閉症児は言語の発達の重篤な遅れのために、幼児期になっても「大泣き」や「大暴れ」によって拒否・要求・主張・恐怖・癇癪を表現し続ける。その拒否・要求・主張・恐怖心・失望・癇癪・甘えのやり方は、子どもの発達につれて増大し、どんどんダイナミックになり、家族を悩ませる。

⑦　母親は言葉の遅れた我が子をいつまでも赤ん坊のように思い、子どもが泣きやむようにひたすら子どもの気に入ることを探して世話をすることになる。自閉症児はどんどんわがままになる、自分本位になる、癇癪持ちになる、自分の好きなことしかしなくなる。教育ができない。早々と３次的障害を増大させていく。

⑧　泣き声を理性的に聞き分け、泣き声に心を揺さぶられないようにしよう。自閉症児の泣き声を日本語「いや、怖い、したくない、〇〇がほしい、行きたくない、おんぶして」に訳し、適切に対処しよう。わがままなのか、甘えなのか、どこか痛いのか、何か気に入らないのか、怖いのか考えて一貫性を持って対処しよう。泣き声に本能的に情緒的に「よしよし」と反応してはならない。

⑨　親が理性的に対処できるように、親に正しい知識を与えることが第一にするべきことである。親は子どものことを一番に思ってはいるが、一番よく理解しているとは言えない

⑩　自閉症児は生半可な認知の期間が非常に長いので、育てにくい。
認知能力が増してくると、不安・恐怖・要求・興味・好みもはっきりしてくる、問題行動も増し、親を悩ますようになる。

⑪　発達すればするほど、扱いにくくなる。こだわりが出てくる。特定の場所や物を激しく嫌がるようになる。特定の場所が気に入ったり、気に入った物を手放さなかったり、行動がパターン化してくるようになる。ますます大泣き・パニックが増す。その上に自分の興味のままに動くので、目が離せなくなる。多動と言われる。

⑫　歯科など痛い目にあったり、怖い思いをした場所には絶対行こうとしなくなる。中途半端な認識は、不安を極度に増強させる。一度経験した恐怖・不快・痛みは決して忘れず、それらから逃れようと極度に警戒しながら生きている。そして、一度経験した安心・快の状態を保持しようと必死になる。まるで、人間を信用しない用心深く繊細なプライド高き野生動物のようである。

⑬　思いこむと説得ができない。言ってもわからない。何でもないと思うようなことにも、恐怖の塊となり死にもの狂いで抵抗するので治療ができない。全身麻酔をすることになる。親は余程のことがない

限り治療をしないので、手遅れや重症化させてしまうことになる。親の意のままには行動してくれなくなるので、親は途方にくれる。自閉症児も辛い思いをしている。

⑭　自閉症の子どもには、身体の小さい幼児期から少々泣いても、生きていく上で必要なこと・するべきことを手をとってさせてあげ、褒め、好きにさせ、得意にしていく。

課題学習の折、机につき椅子に座っている大泣きしている子どもの両足を観察すると、じっと静止しておちついていることがほとんどである。上半身だけで、やりたくないとアピールしながら、理性的に冷静に、課題をこなしているのが分かる。数概念・数えるなどをできるようにし、パニックを克服させ、認知力をつけ、問題行動・扱いにくさを減少させていく。やがて、真に親になつき、親を慕い、信頼して安心してついき、努力するようになる。泣いている子に「大丈夫よ。もうすぐ終わるよ。」など声かけしない。あやさない。

⑮　自閉症児の育てにくさは、生半可な認知による恐怖・思い込み・不安が、すぐれた記憶力によって増大されていることによる事が多い。

⑯　ＴＥＡＣＣＨの構造化は、多くの自閉症児を救う適切なやり方である。生活を判りやすく安心できるものにし、自閉症児を安定させ、家族にゆとりをもたらす。親の指示の減少は、家庭に平安をもたらす。行動障害が減少する。→　距離を保つ。“トムとジェリー”

ＴＥＡＣＣＨのコミュニケーション・カードは自閉症児を救う。
自閉症児が泣きや大暴れによってコミュニケーションをしなくてもよいように、実物・写真・絵・文字などの要求カードを利用できるように指導していく。また、こちらの指示も　カードによって指示する。難聴児に似ている。
お互いにカードによって、スケジュールやスケジュール変更など共通理解に立つことが出来る。失望、思い違い、我慢、不安等の状態が減り、従ってトラブルが減る。

⑰　自閉症児に幼い時から適切なコミュニケーションの方法を教えることによって、大暴れ、大泣き等の問題行動は減っていく。カードによって「下さい」と要求することを教える。カードによって「トイレに行きなさい」と指示しよう。

⑱　幼児期、困る行動（だっこ、おんぶ、ひっくりかえり、地べたや床に座り込み、頭たたき、頭打ち、手かみ等）が定着しやすい。一度覚えると拒否や要求の手段として利用するようになる。自己主張でもある。

⑲　特に頭打ち、頭たたきは、見るに耐えない痛ましい自傷行為なので訴える効果的手段になる。家族は振り回されてしまう。つい甘やかし、腫れ物に触るように扱ってしまう。途方に暮れる。

⑳　自閉症の子どもにとって、自傷行為は自己主張の大いなる手段となる。するべきことはさせながらも、母親の心の余裕のなさを振り返ってみる必要がある。母親の不安定さは、子どもに反映する。山歩きなどをして生物としての基本を維持したい。

21　一貫性のある指導がいる。計画的な子育てをし、駆け引きを覚えさせない。なだめない。母親がリードし、社会に受け入れられる行動にしていくよう指示に従わせる。指示したことは対決してでもさせる。
但し、適切な指示でなければならない。下手をすれば、親は暴君になって自閉症児を苦しめてしまう。
そして、次には子どもに気を遣い、甘やかしてしまう。

（４）★自閉症児はまるで朝顔のようである。

朝顔のつるは、気がつくとあちこちに巻きついて離れない。一度巻きつくと、早くほどかないと外せなくなってしまう。苗の時から、つる状に育つ性質を知って、ふさわしい支柱を立ててやり、方向づけてやれば見事に花の咲く株になる。朝顔の意のままにしていたら、地面を這って蔓はもつれにもつれていく。育って

からでは形を整えることも困難である。

① 自閉症児にも早期から適切な療育をする必要がある。自閉症の子育てには、見通しを持った適切な対処が必要である。親にはその為の知識が必要である。教師達には知識と縦横につながったチームワークが必要である。教師の個人プレーが一貫性を崩す。支柱はいつも安定していて欲しい。

② 自閉症児はまるで野生の動物のようである。手のつけられない猛獣にしてしまうか、賢くてやさしい盲導犬に育てるか。それは療育次第である。
乳児期おとなしく利口そうでかわいかった自閉症児は、やがて様々な超一流の育てにくさやこだわりを見せてくる。そして年々、子どもが体力を増すにつれてその状態と行動は深刻さを増し、母親の手に負えなくなる。一度つけた癖や習慣を変更することは容易ではなく、大きくなるにつれてその問題行動はダイナミックになり、家族の生活を脅かすようになる。不本意ながら、地域で生活することができなくなってしまうこともある。

③ 自閉症の子どもの子育てが大変なのは、彼らがエネルギッシュに問題となる行動を出し、それに親も教師も振り回されるようになるからである。普通の子どもと同じようにはとても躾ができない。対処が極めて難しい。しかし、そのエネルギーは発達の可能性を持ったエネルギーである。

④ 困った行動の中には、喜ぶべき発達と考えられるものも多々ある。発達の途上ゆえに、いたずらや困った状態に感じられてしまう。
正しい知識を判断する力を持つことによって、行動が理解できると苦悩は軽減する。苦悩が、コミュニケーション・シーンの再現のよる自閉症児に寄り添った共感的見方によって喜びに変わることもしばしばである

⑤ あらかじめ母親に知識を与えることで、その対処を適切にすることができる。自閉症の子どもに振り回されて、問題を大きくしてはならない。子どもが発達するにつれて困った行動に振り回されるようになるが、悲観しない。やがて落ち着いてくるものが多い。しかし、「まあまあ」と見過ごした行動が、後で大変なことになるのも事実である。見通して思慮深く育てたい。

⑥ 問題の起こらなかった日は、成長の少ない日である。問題行動を肯定的にとらえ、子どもの発達のチャンスとして生かそう。

（５）★「知識ある愛　行き届いて」母親が子育てのしっかりした指針をもつ

① 母親の育て方によって重くも軽くもなる。

② 母親は理性的には行動できない。
ひどく疲れている時、機嫌の悪い時、困り果てた時、絶望的な時に、「こんなにもお前のことを思ってやっているのに、分からないのか」と、情けない顔で、否定的表情で、つい叩いてしまう。
「一体どうすれば、分からせることができるのだろう。」泣き叫んだり、しつこく繰り返される困った行動に対して、親達は、健常児対して叱った同じ方法で叱ってみるが、ほとんど効果はなく、むしろエスカレートさせてしまう。
その母親の表情・態度から子どもは何やら不安を感じて、ますます過激に反応していく。事態はどんどん悪くなっていく。→ 子どもと距離を保ちにくい母親は、子どものことを思い、愛情を持って叱っているつもりだが、子どもには効果がなく、距離が保てず、逆上してしまい虐待の悲劇を生むこともある。（トムとジェリーにならない。）

③ 母親が、その自閉症の子どもの行動にこだわると、ますます状況は悪くなっていく。子どもは母親を何とも思わない。母親をからかうようになる。母親が怒るとおもしろがる。母親はどうしようもなくますます惨めになってしまう。どちらかと言えば、知的に高い自閉症児ほど母親はもて余すようになる。母親は自己否定するようになり、我が子をも否定するようになる。そこに悲劇がある。不幸な家庭である。

④ 「母子の信頼関係こそ大切である。」と力説する専門家の指導の弊害は大きい。それに伴う母親の心

の揺れは問題行動をさらに増強させている。

⑤　ある発達障害児の母親は「子どもの障害がはっきりし、社会から取り残され、自信のない時、『子どものいやがることは身辺自立のためであっても遊びの発展のためであっても強要せず、強力な母子関係を作るために先ずは子どもを受容してあげなさい。嫌がることをさせれば親の値打ちも下がる。とにかく母子関係を作らなければならないのだから、楽しい中で信頼させなければ。母子関係ができれば、うまくいくようになるから』と教えられた。

親が温かく受けとめ母子関係ができれば、ゆっくりペースであっても健常児と同じように発達していくものだろうと安易に考えていたが、その気配は一向に感じられずこのままでいいのかと不安が募り、あせった」と述懐している。

「当たり前の躾がしたい。生活習慣を身につけさせたいと思いながらも、大泣きや癇癪を恐れ、嫌がることはさせられず、子どもの要求することは全てしてあげてしまっていた。そして、時にはこれではいけないと焦り、まるで鬼のようにギューギューやってみて疲れ果て、また元に戻ってしまうことで一層歪みを大きくしてしまい、子どもにふりまわされる毎日だった」

「ところが、するべきことはさせ、一貫して譲らないことで、指示に従わせることができ、子どもは指示に従え、身辺自立・基礎学習・遊びや運動に取り組む姿勢ができた。親子共に安定し、親子の信頼関係は密になり、今では子どもが本当に可愛く、かけがえのない宝に思えるようになった。」と、ある発達障害児の母親は言う。

⑥　問題行動の多くは、赤ん坊の時には無い。知恵がつき始めた頃からだんだん扱いにくくなり、自閉症児の特徴的症状が出てくる。だから、そうなる前に早期から、母親がそういう自閉症の幼児との付き合い方をしっかり学んで、初めから適切な扱い方をしていけば、後々多動やパニック・問題行動に振り回されることはかなり防げる。自閉症児の多くの問題行動とか、育ちにくさというものは母親の育て方によって軽くも重くもなる。

（６）★あいまいさが問題を大きくする

ささいなことでも、母親が迷って揺れている内にしだいに問題行動になっていく。

①　散歩させている途中で、今日は暑いからと、アイスクリームを一度でも買うと、次の時、覚えていて必ずその店に寄って同じアイスクリームを買うよう子どもは要求する。子どもは大暴れして収拾がつかなくなる。そこで母親は根負けして「仕方がない」と買い与える。でも、母親は反省して「次回はやっぱり買うのはやめよう」と決意して散歩に出掛けるけれども、その時は、暴れ方も最初の大暴れから一段とダイナミックになっている。「あの時、大暴れしたら買ってくれたんだから、もうひとふんばり頑張らなくちゃあ」と、子どもは要求の手段として暴れ、なかなか諦めようとしない。

その場合には、親が本当に決意して、買わないことが大事である。散歩の時、財布を持っていかなければ心は迷わない。そういうふうにして、対決して閉じていかなければならない。子どもの要求のままになってはならない。

②　泣いて暴れて自分の要求を通す。

散歩の途中、店でアイスクリームを買うと、散歩の度にアイスクリームを要求するようになる。ききわけがない。大泣きし暴れて要求を通そうとする。（母親を困らせるために大暴れしているのではない。）「アイスクリームを下さい」という要求手段として大泣き・大暴れしている。大抵母親は負けてしまって買う。母親は自閉症児の思い通りに行動してしまう。子どもは暴れたら買ってもらえると思うようになる。

この要求手段はやがてエスカレートして、「窓ガラスをわったら、お母さんは○○を買ってくれる」と、自分の要求を通すために要求が通るまで、家中のガラスを割るようになりかねない。問題行動は大きくなって強度行動障害になってしまう。小さな事がやがて大きな問題になっていく。

③　困る行動をした場合に、「自閉症児だから、しかたがない。」と寛容さ・諦め・受容から許しておくと、自閉症児は「許された」と思うのではなく、「こうすればいいのだな！」と勘違いして、エチケットや社会のルールを不適切に定着させて育ってしまう。一旦入ってしまった習慣や癖はなかなか直

らない。直そうとすれば激しく抵抗する。

④　駄目なことは、初めから断固として譲らない。
そのためには、幼い頃には何でもないように思えることが将来どんなことになるのかを考慮して育てなければならない。

健常児は社会性を身につけて、人と折り合いをつけて、自ら生きていけるようになるが、自閉症児は一度身につけた生活ルール・手段を用い続けていきていく。だから、健常者以上に幼児期から、一貫性をもって母親が社会性をもって、生活年齢を考えながら育てていく。気持ちの整理をさせてすっきりした生活をさせる。

⑤　「ごめんなさい」で無罪放免にしない。「ごめんなさい。」と言いながら何度でも繰り返す。だから、感情的に叱らないでもしつける方法をとる。

汚したら掃除をさせるなど、やったことに自分で始末させる。わがままは通らない。損な経験をさせる。（ただし、問題行動がどうしておきたか、その原因を正しく詳しくつかみ、自閉症児の思いをくみとらねばならない。青年期を迎えている場合、その心を読み取ることが困難になっていることも多い。行動改善に何年もかかる。）

⑥　親の気紛れと計画性のなさは問題を増大させる。
一つの事柄に関して、譲ったり譲らなかったり、叱ったり叱らなかったり、叱ったり見逃したり、叱ったり機嫌をとったり、家庭では厳しく外では寛大であったり、褒めたり知らん顔だったり、寛容だったり愚痴ったり、買ってやったり買ってやらなかったり、かわいそうに思ったりわずらわしく思ったり、課題を少しさせたり沢山させたり、させたりさせなかったり、怒ったり泣いたり、無視していたり金切り声を上げて叱ったり等の、親の態度の、一貫性の無さが問題を大きくしている。母親は、自分自身の言動が将来の自閉症児の在り方にどれほど大きな影響を与えるか、自覚していない。生半可な認知力の自閉症児は自己主張のはっきりした純粋な子どもである。２次的障害３次的障害を増してしまう。

⑦　自閉症の疑いがある時は、親に日々の取り組み方を、具体的に細かく指導すべきである。初めから適切な育て方をしていけば、後々大変になっていくことは少ない。明らかに言語は遅れ、対人関係の難しさがあるのだから、様子を見ていてはならない。

⑧　スケジュール表は、多くの行動障害を解決する。

1)　スケジュールを与え、見通しのある安定した日常が自閉症児を救う。大人の気紛れや予期せぬことで不安・不穏、苦しみ・失望・憎しみを与えない。自閉症児にも生活の中に「つもり」がある。子どもの意志を大切にし、自律して生活させたい。

2)　スケジュールを立てることで親も意志を持って、スケジュールを守り、子どもと歯車をかみ合わせて一定の療育に取り組める。不一致がいざこざを招く。不承知がいざこざを招く。

3)　スケジュールが壁に貼ってあることで、親も子も一貫性のある生活ができる。子どもへの声掛けが減る。声かけが自閉症児をいらいらさせる。母親はうるさい声かけを減らす努力をしよう。

4)　スケジュール表は、見通し・余裕・計画性・自主性・安定性・習慣性を増す。

5)　不安解消のためにはスケジュールを自閉症児にわかるようにしめす。予定がわかれば、子どもは子どもなりに計画性と自主性を持って、ゆとりを持って自分の一日を楽しみながら生きることが出来る。

6)　スケジュール表によって、家族の共通の理解が増し、自閉症児が家族の一員として真に尊重され、家族関係が確かなものになるだけでなく、親の気紛れもへり、一貫した整った家庭生活が送れるようになるだろう。

（7）**早期からの取り組み**「心を込めてその人格に向き合う」

① 早期から個別課題学習に取り組むことが、最小限の努力で、対人関係を改善し、社会性を育て、認知力を育て、学力を増し、情緒を安定させ、問題となる行動の発生を減少させる。子どもが幼ければ、祖父母も元気で孫の療育に協力してくれる。少なくとも祖父母が元気な若いうちに療育を頑張れ！ライフ・サイクルの視点をもつこと。

② 「できることを増やしていく」ために、濃厚にほめながら、励ましながら、親が関われば、自ずと親子の歯車はかみ合ってくる。適切な教育的働きかけが自閉症児を救う。→できて当たり前と思うこともしっかり誉めよう。障害がありながら、努力してできるようになったこと、分かるようになったことはすごいことだ！子どもたちの小さな成長を喜び誉めることができる母親になろう。子どもは誉められる喜びを知り、ますます母親が好きになる。

③ 学習する時もどなりちらしたり、叩いたりする必要はない。座らないと教えられない。だから、嫌がっても泣いても座らせる。叩かないし叱らない。しかし、譲らないで教える。やりぬいた後では、むしろ機嫌がよく、ある種の充実感を味わっているようである。すごく嫌がっていても、自閉症児たちは学びたがっている。本気で相手をしてもらいたがっているように感じられる。

④ 自閉症の子どもの機嫌をとって教えてはならない。むしろ心を込めてその人格に向き合うこと。心からの共感と称賛こそ必要。課題学習時にごほうびは要らない。達成感と、後の解放感が幸せ感を与える。強力な指示関係は、対人関係や社会性を学ぶ機会となる。リードする。

★M. K. ディマイヤーは「自閉症と家族　児童編」（久保紘章・入谷好樹　訳）（岩崎学術出版社）の中で、自閉症児への、個別課題学習の取り組みが、結局自閉症児の情緒的・社会的反応を改善したと、既に40年近く前に述べている。

「子どもの知的年齢や適応能力からすればやれるはずであると確信できるような時にはどんなに子どもが怒り、長時間泣き叫ぼうとも、私たちは（課題学習を）続けた。部分的にうまくできた場合にも強化子を与えることで、行動は徐々に正確なものになり、やがて完全に課題が成し遂げられるようになっていった。そして、それが成し遂げられたときには、ほほえみと情緒の安定が常にみられたのである」 p. 190

⑤ 生活習慣の確立に関しては、指示なしで、自分で行動できるようにしていく。

⑥ 母親は朝から晩まで指示を出し、叱り、言うことをきかないので、始終ぶつぶつ言って世話をしている。言葉かけの効果は全くない。

1) 「〇〇ちゃん、起きなさい」「トイレに行きなさい」「パンツをおろして」「手を洗って」「きちんと手を拭いて。〇〇ちゃん、きれいに洗うの」「さあ、歯を磨いて」「歯磨き粉をつけてください」「コップを取りなさい」「コップ」「水を汲んで」「みず」「水を汲んで」「水遊びをしないの」「ゴシゴシちゃんと磨けたかな。口をあけてごらん」「もう少し」「さあ、うがいをしなさい。口を閉じてプクプクしてごらん」「もういちど」「今度は顔を洗って」「もっときちんと顔を洗いなさい」「何やってるの」「目もぬらして」「さあ、タオルで拭いて」「タオルをきちんとかけてください」「よくできました。〇〇ちゃん」「さあ、ご飯よ」

2) 母親は、子どもを起こした時から、上記のような指示を何度も何度も繰り返し声かけしながら、手とり足とり世話をしている。子どもがなかなか自分でしないので、母親はいらいらとして、その声はしだいにかん高く大声になる。子どもはその声を聞き流している。うるさいが、毎日のことなので慣れてつきあっている。「はやくしなさい」と言いながら、結局母親は全部やってくれるのだから。母親は口うるさい召し使いである。怖くなんかちっともない。

3) 基本的生活習慣などは、一々指示されないで誰でも生活している。誰でも指示が多ければうるさくて、頭に来る。プライドが傷つく。いらいらする。母親は、うるさい声かけをやめる努力をしよう。効果の無いやたら多い声かけは騒音公害である。

4) 幼児言葉を使わない。言葉の発達に遅れのある子どもに対し、母親はつい生活年齢より幼児扱いしがちである。言葉の理解や表出に問題があるからこそ、最初から正しい何処でも青年になっても遣える言葉かけをしよう。また必要以上にゆっくりすぎる話し方はかえって分かりにくい。「くっく履いて（靴を履いて）」「おっちんして（座って）」「ねんねしよう（寝よう）」

⑦ 指示しないでも自分で戸惑わないで行動できるように、手順をカードで示す。少しでも自分で考えて行動できるように判断する力をつける。歯磨きの仕方、入浴の仕方など、自閉症児に理解できるように場を構造化することは必要な親切である。ＴＥＡＣＣＨの心配りから学び、自閉症児に良いと思われることはあらゆる療育機関・療育実践者・先輩の親達から学ぶ姿勢をもちたい。全ては自閉症児のためである。

⑧ 幼い時から、どこでも通用する正しい適切な生活習慣をつけておこう。不適切な習慣を大きくなってから変えることは不可能に近い。思春期の親離れ子離れの時期にいちいち細かく指示されるのは、誰でもうるさくてわずらわしいものである。プライドのある青年は、いらいらして反抗したくもなるだろう。思春期を迎える前に、出来るだけの自立と自律を目指したい。

⑨ 問題行動の多くは、子育ての不適切さから増強されている。対応の仕方に先を見通した配慮が必要である。なぜそうなったか、原因を考える。原因の多くは、育てる側にある。

⑩ 問題行動の多くは適切な取り組みにより、全体的な発達をはかることによって、消えたり、軽くなったりする。問題行動にまどわされないで、身につけてやりたいことをがんばる。けれど、簡単には身に付かない。原点にかえって、生きてくれていること自体に感謝しよろこび、存在そのものを肯定する親の深い愛情を誉め言葉と称賛と敬意で表すことが必要である。自閉症児には褒めることは必要でないと主張する専門家も在る。とんでもないことである。障害を見つめながらも、一人の掛け替えのない人に向き合うべきである。

⑪ 問題行動の多くは不適切な対応から起こってくる。問題行動は彼らの積極的コミュニケーション手段であり、思いの表現である。“コミュニケーション・シーンの再現”などをし、自閉症児の側に立って、現状をできるだけ共感して理解し、解決していくことがポイントとなる。
密着しすぎない。声掛けや指示を減らす。子どもを観察する。やたら追いかけない。

⑫ 問題行動を依然として『ストレスによって起こった』と解釈され、自立に向けての必要な個別課題学習の実施を批判されることが多い。
叱ることの多い不適切な課題学習のやり方は自閉症児を台無しにする。
変化の無い規則正しい毎日が続くことがストレスとなることもある。（今日もコロッケ！明日もコロッケ）

⑬ 殴る、蹴るなどの体罰は他傷行為を増長する。叱る時、体罰を与えてはならない。
1) 叱り方には工夫がいる。子どもが悪いことをした時に、叩くのはやめよう。効果が全くないだけでなく、他人を叩くようになる。一番強烈に覚えた手段を使うようになる。つねられてつねることを覚える。体罰は決して精神を豊かにはしない。何のために叱られたのかを理解できない時はその後の問題行動を増加させるだけである。
2) また、その時訴えることのできなかった自閉症児が、大きくなって過去の体罰の出来事を表現するようになることもある。叱られたことは強烈に記憶している。

⑭ 体罰は強烈であるが、何故叩かれるのか理解できない。恐怖からは、心は豊かに育たない。腕力でしつけをしてはならない。やがて、子ども方が親より体力が強くなった時、暴力を振るう危険性がある。大声で叱っても、謝らしても効果はない。

⑮ 本人にとって、損な約束事を決めて取り組む。
1) 唾はきにはマラソン、物投げには正座、おやつ抜きなど味けない約束事だが感情的に、逆上して叩いて叱るよりはましである。冷静に対処すること。（Ａコース、Ｂコース）

⑯　自傷行為をやめさせようと躍起になって反応しない。頭叩きには「手はひざ」。するべきことはさせるが、一日の生活を顧みて、山歩きなどを入れ、生活にゆとりを持とう。親の心が安定すれば、子どもの状態も改善される。子どもの訴えをよく吟味する。何を伝えようとしているのか。セルフエスティームを高めるよう心を配る。

⑰　自傷行為・他傷行為ともに母子間の距離が保てていない。親は密着しており、母子で感情を増幅し、過剰に反応している。距離を保つために、音声指示より、ＴＥＡＣＣＨのいう構造化をはかり、コミュニケーションの指導・工夫をする。

（８）　行動障害を持つ年齢の大きくなった自閉症の人にどうかかわるか。

生活年齢があがると体力があり、指導が極めて難しくなっている

その人のこれまでの成育歴を家族や施設の支援員から出来るだけ詳細に得た上で、検査と課題学習によって、その人を把握し、共感しながら誠実に向き合っていく。

①　定期的に100並べをはじめとする課題学習は、着席して二人が歯車を合わせて向きう機会となる。100並べは、並べるだけで判断力を要しない。100まで並べるには時間がかかる。規則性もある。100まで並べてしまうと完成感・達成感が二人にうまれる。やり方をいろいろ変えて遊べる。まるで二人で楽しむ囲碁のように信頼関係を深めていく。
②　早朝マラソンや、早朝ウオーキングに取り組み、体力づくりをし、生活リズムを整える。
③　料理に取り組む。料理は療育のあらゆる要素をみたしている。
④　基本的生活習慣の確立をはかる。
⑤　生きるに必要なことをできるだけ身につける。特に入浴と排泄指導が要る。

（９）高機能自閉症の子どもにも、深刻な認知機能の障害がある

①　個別課題学習に取り組んでみると、想像力が弱く、常識的な当然わかっていると思う事柄も実は分かっていないことが多い現実を知ることになる。子どもは、多くのことに気づいていない。適切に判断していない。トラブルが起きて当然と言える。

②　高機能自閉症の子どもには多かれ少なかれ共通した育てにくさが見受けられる。

③　朝顔の蔓のように、周囲の関心事にひきつけられて巻きついていく。自他の区別がつきにくい。強烈な関心事にひきつけられていく。派手に、奇抜に、積極的に　反社会的な行動することさえある。ダイナミックにトラブルを起こす。禁止が守れない。私物と公共の物の区別や取り扱いも分かっていない。「わがまま」とは、どういうことを意味しているのかも分かっていないことがある。プライド高く、自己主張は強く、母親への独占欲も強い。

④　よくしゃべり、積極的で、教科学習もでき、暗記力もすぐれ、賢いのに、しつけができない。親にしつこく要求する。親のいうことは聞かない。家では大声をあげて親に暴力をふるう。人の気持ちが分からない。自分のことばかり主張する。心は育たない。その事の重大性にも気づいていない。子どもは判断できていない。叱っても効果はない。叱れば縮こまり、自信をなくし、抵抗する。

⑤　親は、「何でいうことが聞けないの？どうして分からないの！何度言ったら分かるの！」と激して叱る。親と子どもの喧嘩となる。喚く。叩く、暴れる。ガラスは割れる。親も子どももセルフエスティームはさらに低くなる。劣等感、さらには絶望感。不幸のかたまり。

⑥　叱っていると、許容力が小さくなって、問題行動が増えてしまう。自閉症の子どもは褒められることが少ない。極力誉めて育てる。

⑦　トモニ療育センターでは、高機能自閉症の子どもの認知の障害の様子や状態を、検査と課題学習から把握している。たとえ、脳の機能障害が微細であっても、その影響は、全人格に及ぶ。検査と課題学習の場に臨席して午前と午後にわたって詳細に観察できた両親は、子どもを詳細に知り、歯車を合わせた適切な育児と教育を家庭で展開していくことができる。
「できないから、分かりづらいから」こそ、その分かりづらさ（認知の障害）に向き合い、大切に寄り添って育てていく。
失敗しながら、問題を出しながら、迷惑をかけながら、人間社会で生きていくための細かい暗黙のルールやエチケット、自他の区別が分かっていないので、ひとつひとつ寄り添って丁寧に教え、学ばせていく。

⑧　少し姿勢が悪いときも「おっ、かっこよく手を膝にして待ってるね。」と言うと、子どもは良い姿勢になる。指示に応えてカードや物を渡してくれた時「ありがとう」と礼を言う。

⑨　「苦手なことでもよく頑張ってるよ。努力できるのは素晴らしい！」と誉める。できて当たり前ではなく、努力していることを誉める。小さな成長を誉める。「分かりませんって言えたね。凄いことだよ。」プライドを傷つけないで、からかいも加えながら、心から愛おしく思いながら、心を込めて、課題学習に取り組むとき、子どもは整って行く。元気になる。

⑩　子どもが何を考え、どのように理解しているのか、その言動の奥にある、認知機能の障害、働きのずれに気がつくと、親は余裕をもって、面白がりながら前向きに育児と教育をしていける。
⑪　高機能自閉症の子どもにも、深刻な認知機能の障害があることを親は気づきにくいことがあり、日々の子育てを困難なものにし、ますます周りの理解は得られにくい。
⑫　母親自身が、人間として深く広く高く成長して発達していけるように、関係者が支援していくことが求められる。
⑬　「親が変われば子は変わる」知識ある愛をもって、心や魂に届くように、ひとつひとつ教え導いていく。「失敗は家族で幸せになっていく成功の元」と、励ましながら深く理解し共感しながら、育てていく時、よい子に育って行く。

Ｂ　子どもの発達とこだわり行動

一般に低機能・中機能自閉症の子どもは「認知機能のゆっくりした発達　認知機能の不全」により、パニック状態やこだわり行動の状態が長く続く、また、自分からは展開し、解決していくことが難しい。変化させにくい。
自閉症の子どもは決まったやり方、儀式に安心をもとめる。これら（こだわり行動）の傾向は、私達にも多かれ少なかれある。発達の過程と考え、肯定的に向き合いたい。心の発達を促して行く。

（1）<u>単純反復運動</u>

①　操作対象として、自分の身体部分を利用するもの
　耳を指先でペラペラはじく。髪を振る。前後に身体を揺する。
　歯をカチカチ鳴らす。

②　操作対象として、器物を利用するもの
　本などの紙のめくれたところを指先ではじく。
　鍋蓋をくるくる回す。

★感覚遊びをしている。
①　未熟で、未発達で遊びが広がっていない場合に多くみられる。
②　病的にとらえないで共感して向き合うことが大切である。
③　癖になっていて、そうすることで感覚を楽しんでいる。
④　向かい合わねばならないことを避けたい、嫌だという場合。
⑤　母親が気にしていることを知っていて、母親と関わる手段としている場合。

⑥　挑発行為として！
⑦　不安な時。
⑧　音楽を楽しみ、曲にのっている時。

対策：積極的に課題学習を通して関り、歯車を合わせて、生きるに必要な力をつけていく。

（２）興味対象の固定化と固執

自閉症の子どものへとこだわり行動は、認知機能のゆっくりした発達とも言える。感覚遊びをしながらも、自分の周りに美しいもの、素敵なもの　などお気に入りのものを見いだしていく。自閉症児にとっては、見つけた僅かの楽しみは　宝物です。どんなに母親に言われても、手放すもんか！！！
自閉症児は「やりたいことをやめる理性」を育てていく必要がある。帰ったら、それで遊んでもいい時間をしっかり約束する。

①　空きカンをいつも持ち歩く。気に入った汽車のおもちゃを持ち歩く。
②　ぬいぐるみを離さない。
③　特定の数字、文字、マークに注目する。

★だんだん世の中が見えてきた。好きな物ができた。美しいものを見つけた。気に入った。同じ形のマークをまた、みつけちゃった！「２」が好き！

①　不安：ハンドバッグがなければ不安な私。毎日もって通っても使わないのにいっぱい鞄に詰めて運ぶ貴方。
②　不安だけではない。外に出かけるときは両手にもって歩くと決めているんだ！。
③　文字の形の区別がつくことは、書き言葉による課題学習が十分にできるということである。言葉・コミュニケーションを確実にするために、読み書き算数の指導を積極的にする。そのうちに特定の数字・マークへのこだわりが消え、学びが広がる。カレンダーも日々の生活、１年の行事と結びつけて理解させていく。意味あるものにしていく。
④　ぬいぐるみやおもちゃなど、場所と時間を限定していく。外出のとき、保育園に行くときは、家の所定の場所に置いて出かける習慣をつけていく。場所柄をわきまえる基本になる。
⑤　気に入った服だけをいつも着たい。

（３）配列の固執

①　対象の空間的配列の固執
　　玩具の自動車や箱を部屋の隅から隅まで一列に並べる。
　　器物の配列の乱れをなおし復元する。

②　行為の時間的配列の固執（順序固執）
　　一定の道順を乱すと怒る。
　　一定の時間にならないとトイレに行かない。
　　一定の時間にならないと食べない。

★規則正しい法則が好きな子どもは、数字並べやタイル並べが好きになる。足し算九九表や引きさん九九の表など暗記し、そこからより高度な数学の世界へと導いていける。
しかし、生半可ではあり、融通が利かないので、周囲に迷惑をかけることがある。

①　迷惑をおかけしますが、整理整頓が好きです。
　　暑くなっても教室の窓は閉めなければ気が済まない。
　　家族の入浴順番を決め、そのように運ばないと気が済まない。
　　シャンプーや石鹸の位置が違うときにいらない。定位置にもどす。

② 他者の事情に合わせること、自他の区別を教える。協調性を育てる。
③ 予め変更をスケジュールで教える。途中での変化もスケジュール表で教える。
④ 様々な道を通り、出歩き、街を楽しむ。
⑤ １から１００数字ならべ、五十音積木など規則性があり、マトリックスになっており、定位置が決まっている普遍性の高いものに喜びを感じることができる。算数を通して、信頼関係も深まるし、生活も整ってくる。
⑥ 規則正しい基本的生活習慣を身につけることができる。一度つけた習慣を守って行くことができる。

（４）繰り返し質問することを好む。（質問嗜好現象）

自閉症児は知っていることを毎日何度も何度もしつこく質問し、同じ答えを要求する。決まった答えを要求する。期待した答えでないと、落ち着かない。その答えをしつこく要求する。

★「あなたが好きで話しかけたいが、話題も興味も少ししかない。自分が興味ある事柄は何度も聞いて欲しい。話がしたい。嬉しい。人が好き。共感してほしい。不安だから、聞いて確実性を増したい。念を押しておきたい。」

① カレンダーに気になる予定を書き込む。
② 気になる会話を書きとめて、一緒に読み、冷蔵庫の見える位置にメモとして貼っておく。
③ 表現したい思いはいっぱいあるが、会話が難しい。そのような時は、文章を助けながら、その話を一緒にワープロで打ち込むのを手伝い、話したい内容を膨らませて満足させてやる。書くことによって、しつこい固定した話しを広げて行くことができる。本当の会話に誘導していく。付き合うのを面倒に思えば、余計にしつこくくっついてくる。時間を決めて、正面から付き合ってやる。同じ会話は回数を決める。
④ しつこい要求語は、「お母さん大好き！お母さんにやってほしい」という愛情表現であることがある。「お母さんは僕の恋人。お母さんを支配したい！」病的に解釈をすると、歪みは増大する。母親は、要求の多い自閉症児好みの恋人になってはならない。

（５）空想的な物語を作成するもの

架空の人物と対話する。登校前、食事前、寝る前に。
この空想のなかに、第三者が入り込むのを極端にきらう。

★ 私達もそれなりにしています。でも、神様と、恋人と。

（６）こだわり行動への信頼と希望と愛

① 自閉症の子どもは決まったやり方、儀式に安心をもとめる。これら（こだわり行動）の傾向は、私達にも多かれ少なかれある。

② 自閉症の子どもは「認知機能のゆっくりした発達　認知機能の不全」により、パニック状態やこだわり行動の状態が長く続く、また、自分からは展開し、解決していくことが難しい。変化させにくい。

③ 自閉症児に積極的に関わり、適切な育児と教育によって認知の発達を促し、世界を理解させる。障害の特性のように思われた行動は、変わっていく。未熟な、未発達な遊びから、興味対象の固定化と固執へと発達するにつれてこだわりの質も高度化していく。本質は私たちと同じである。病的にとらえないで共感して向き合うことが大切である。

④ 外界環境の変化に対する強い不安と抵抗の状況を示すものもある。同じ状況は安心できる。理解不能の環境に適応できず、消極的に逃避し、自己の内的世界に閉じこもる行動的表現であることもある。愛、共感、思いやり、いとおしみの姿勢を基本において、こだわりの意味を理解し、共感するとき、子どもは信頼してついてきてくれるようになる。

⑤　こだわり行動に親も関係者も困らされている。問題となるこだわりもあるが、親が自閉症の子どもに理解と共感をもちながら、指示関係を確立しリードして工夫して適切に付き合えば、素敵な趣味・余暇活動へと発展していくものもある。こだわり行動には、興味や関心ごとへの集中と反復練習の要素がある。それは、熟練工、職人、芸術家へと育つ可能性でもある。

⑥　親子が歯車を合わせた育児と教育ができない状態では、こだわり行動や激しいしつこい要求によって、家族の生活は崩壊しかねない。

⑦　親が子どもを理解し、リードし、しっかり褒めながら子どもを評価しながら導いていける時、反社会性のある困ったこだわりは消えていく。集団行動の妨げるこだわり、家庭生活がスムーズに運べないこだわり行動は、スケジュール表を示し、課題学習に取り組み、豊かに自立への具体的取り組みを進める過程で弱まってくる、解決されていく。好ましく育って行く。

１０．パニックを克服させる。（自由な心で、しあわせに生きられるように）

我々は、得体の知れない物に対して、知識をもって不安をなくし、恐怖に対して、信頼する人に「大丈夫、何でもないよ」と声をかけられて安心する。我々は、仲間と共に、なぜか安心して生きている。

1)　パニックは、防衛本能的行動である。

2)　自閉症児には認知の障害があり、コミュニケーションも下手であるために、外界に対して（我々がなんでもないと思うものに対しても）多くの不安感や恐怖心を持ち、判断できない。情緒不安定に見える！

3)　乳児期にはパニックはない。中途半端に外界を認知し始めた幼児期から様々な恐怖や不安をしめす。

4)　自閉症児は、親に全面的に安心して頼ることを知らず不安の中にいる。「怖くない」と説明されても、思い込み（恐怖）から抜け出すことができない。

5)　自分のまわりに壁を築いて、自分からはその壁を出ようとしない。同一性保持などの強度にパターン化した行動がみられる。（物や手順へのこだわり、儀式）

6)　**パニックを起こさせない方法には、2 種類がある。**

A方式：原因となるものを積極的に克服させる方法
原因となるものがあっても、平気でいられるようになる。時には、楽しむことができるようになる。
周囲の人にあわせる柔軟な心が育つ。忍耐力がつく。
外界に対して、正しい、好ましい認知ができるようになる。

B方式：原因となるものを避ける方法
原因となるものがなければ、パニックは起きない。原因となるものがあれば、必ずパニックが起きる。
根本的解決にならないだけでなく、身体が大きくなるにつれて、扱いにくくなる。
周囲の人が彼に合わせて生活しなければ、平安が保てない。障害を増大させる。

7)　パニックを起こさないようにと、子どもの要求のままに受け入れる過保護におちいった療育（Bのやり方）は、子どもの 2 次的、3 次的障害をますます増大させる結果になる。子どもの生きる世界を狭めてしまう。扱いにくい者は社会に受け入れられない。

8)　パニックの原因に積極的に立ち向かわせることにより、子どもは諦め、慣れ、こだわりを捨て、自由な心を持って、生活していけるようになっていく。

9)　パニックの原因をみつけ、積極的にのりこえさすことで、生活を広げよう。

10)　パニックの種類を見極めて、適切な対処をすることが必要である。

11)　パニックの種類と対処

①　恐れ、不安、嫌悪などは慣れさせる。楽しさを教える。
（思い切って　徐々に　時間を掛けて、瀬回に）

清潔（爪きり　耳そうじ　シャンプー）時計　掃除機　こんにゃく　うきわ　　風呂場　まど　暗闇
特定の場所（レストラン、トイレ、商店）　乗り物（バス、汽車）
音（オートバイ、大きな音、犬）
水（プール、顔をぬらすこと、どろんこ）
集団　遠足　色　　特定のコマーシャル

★得体の知れないもの　受けつけられないものは　中途半端な理解（生半可な認知）による。
理解力が増し、信頼関係が増してくると、減少する。

②　自分の思い通りに事が運ばない場合…慣れさせる、諦めさせる　機嫌をとらない　落ち着くまで待つ。

（同一性保持、固執、思い違い、期待はずれ）
遠足、旅行、運動会の変更　スケジュールの変更　訪問先の留守　欲しいもの
同じ電車　同じ場所　同じ道　同じ服　同じ席　同じ日
特定のおもちゃ・布切れを持って外出　（小さくする　見守る）
★「世の中は、そうしたものだよ」と、経験させる。（母親がリーダー）
わざわざ、変更の機会を設定する。決断して、変更する。

③　学習や手伝いをしたくない時…ゆずらないでさせきる　分かるように教え、褒める。
料理に取り組む。手順を入れて指導をする。分かりやすい一貫した教材の工夫！
★ミクロの構造化！

④「いやです」が言えない時…「いやです」「けっこうです」の言葉を教える

⑤ コミュニケーションがうまくいかない場合…言葉を育てる　文字指導　理解に努める
身振り、カードを使わせる

12)　パニックは、あかちゃんの大泣きに似ている。いろんな経験をしたり、言語能力が増すことによって、認知力が育ち、心が育つと消えていく。

13)　「わがまま」「ききわけの無さ」のパニックは無視すればよい。むやみに手をさしのべたり、なだめすかすことはパニックを増大させる。しつけや学習などは、一貫性をもって、ゆずらない。徹底する。

14)　指示したことは、必ずさせる。決意して指示する。

15)　かけひきを覚えさせない。「させたり、させなかったり・あげたり、あげなかったり」すると、“わがまま犬”になる。ご用心！

16)　悪いことは、悪いこととして　はっきりと禁止する。（理由はわからなくてもよい）
「まぁまぁ」「しかたがない」と許すと、問題を大きくする。

17)　<u>言葉の重みを教え、母親（教師）の指導権を確立する</u>。　　＊くすり

18)　合い言葉は、一貫したしつけ、経験からでてくる。叱り方を統一する。

母「わがままは」　→　子「通らない」　（やっぱり通らない経験）
「欲張ったら」　→　「損をする」　（やっぱり損をする経験）
「なまけたら」　→　「損をする」　（やっぱり損をする経験）

★息子には、現在はパニックはない。かけひきもない。自閉症者の特質を充分にもっているが、やわらかい、思いやりある、勤勉で素直な、自主性のある青年になっている。

１１．「よく学び、よく働き、よく遊び」（豊かに楽しく生きるために）

(1) 遊び

① 子どもの遊びは人間形成の基礎を養う。子どもは遊びながら、生きていく上で大切な知恵、ボディイメージ、言葉、社会ルールなどを自然に身につけ、豊かに柔らかくふくらんでいく。子どもの成長、発達が正常に推進されるため、遊びは欠かせない。ところが、自閉症児の遊びには、人間形成の基礎を養う要素が少ない。

② 自閉症児の遊び（未熟な感覚遊び　ひとり遊び　同一性保持　収集癖）
ページのぺらぺらめくり、水まき、砂のぱらぱら落下、くるくる回る物をながめる特定のテレビコマーシャルに凝る、輪ゴム、紙切れ、紐振り、同じ写真を見続ける、カタログを集める、おもちゃやはみがきを並べる、車輪を回して楽しむ　天気図に凝る、マークに凝る、洗剤集め、マンホール、トイレの構造、アンテナ、音楽を聞く、跳ねる、電車・バス・船を好む。

③ 自閉症児には、先ず１～１００数字並べなど課題学習に取り組んで学習態勢を整えること。
「先ずよく学ばせ、次によく働かせ、最後によく遊ばせる。」
「よく学び、よく働き、よく遊び」この順に取り組んでいくとき、遊びも広がっていく。

④ 遊べない子、遊ばない子と　幼少時に一緒に、出来るだけ遊ぼう。遊びにのってこなくても、仕方なく遊んでいても、見ているだけでも、うるさがっても、何もしないよりずっとよい。出来るだけ多種類の遊びを経験させよう。

レコード	クラシック　童謡　童話）
テレビ	コマーシャル　ひらけポンキッキ　おかあさんといっしょ
おもちゃ	つみき　ミニカー　汽車　ぬいぐるみ　電話　笛　人形
水遊び	じょうろ　ストロー　ビン　ふね　はっぱ　笹ぶね　絵の具　インキ　金魚　水でっぽう 氷
火・砂・風	ローソク　マッチ　むしめがね　懐中電灯　風かざぐるま　しゃぼんだま　すなあそび トンネル
紙	きりがみ　折り紙　くれよん　マジックインキ
雨降り	川や池　レールつくり　みみず　ねこ（ペット）　たんぽぽ
絵本	ストーリーのあるもの　（数十冊～） おおかみと七匹のこやぎ　たろうのおでかけ　ぐりとぐら ※絵本は、寝る前に、おとなしくなった時に、添い寝して読み聞かせる。

くすぐりっこ　おうまさん　蜂が刺した、おばけごっこ　おみせやさん　おいしゃさんごっこ
ねんど　ボールあそび　ゆびあそび　じゃんけん　トランプ　ブロックあそび
パズルボックス　ピクチュアパズル
プラレール（電車のくみたて）　魚釣りゲーム　ボーリング　もぐらたたき
玉入れゲーム　電車のケース作り　　マイク
おにごっこ ドッジボール　　山登り、すべりだい　ブランコ
バスや船への関心を満たしてやる　→バスのマナー、地図、時刻表　絵　写真　旅行

(2) 絵

障害児の療育は、本気になればなる程、ゆとりの無い訓練的なものになりやすい。好ましい、バランスのとれた生き生きとした豊かな、幸せな人に育って欲しい。

① 子どもの心の状態が、絵画の中に色や形を通じて如実に現れる

② 心と絵は、指導の仕方、応じ方、扱い方で変化していく

③ 家庭における接し方がどのような問題を起こすかがはっきりと絵に現れる

④ 絵を描かせる時、子どもの描くものに決して手を出さない。

⑤ 創造性を育てる第一歩は、子どもの心を開いてあげることから始まる。

⑥ 消極的な子は、親に描いて貰いたがる。子どもの描くものを大切にする。

⑦ やさしく語りかけ、思い出させ、促し、褒めてほめて、楽しく自由に描かせる。

⑧ 励まして子どもの自由に描かせる。褒める。感心する。

⑨ テーマは日常生活から自分で見たこと、聞いたこと、経験したことなどもある。

⑩ 日常的な出来事は毎日の生活の流れに押されて、子どもも新鮮な感動を忘れがちになりやすいので、話しかけながら、感動を呼び起こしたりするよう努力する。

⑪ 感動する心を育てるような生活をする。虫、花、噴水、花火、祭

※参考　「子どもの心と絵」吉田きみ子（文化書房博文社）　1978 年

(3) 料理

料理は優れた療育内容の詰まった宝庫である。是非取り組んでいただきたい。学校ではできないが、家庭では毎日取り組むことが出来るすぐれた家庭科の課題学習である。
料理は、多くの療育的課題が含まれ、生きる力を育み、親子の関係を深め、自己肯定感を高め、責任感や感謝の心を育て、今を豊かな充実した生き方へと導く。子どもの存在感が自ずとにじみでて、料理で自ずと磨かれた手指の機能とじは就労への大きな力になる。

障害があれば、親は子どもに何とか美味しく食べさせ、元気に育ってほしいと願う。子どもに作って食べさせてもらうなど夢にも思わない。子どもに作れるなどとは夢にも思わない。「とてもさせられない」「何もしなくていいから、せめて邪魔せず待っていて欲しい」と思う。高機能自閉症の子どもなら、寸時を惜しんで勉強させ、何とかクラスの友達についていかせたいと思う。
学力こそが大切！よい点を取れていれば、生きていけると思ってしまう。しかし、その学力に土台はなく、生きる力には程遠い。何をどう教育していけば、生きる力がつくのか！

幼児も、成人も、老人も、男も女も、障害ある子どもも、料理ならできる。楽しめ、役立つ。
その素晴らしい「料理」について、考察する。

1) 遊びが下手、遊びができない子どもも、料理ならできる。

① 幼児期、子どもはどんどん活発になり、自己主張し、言い聞かせても指示に従えない。特に認知の障害がある自閉症の子どもは、指示が通らず、わがまま！親は手こずる。夕食準備の多忙な時間帯

に、子どもは相手をしてもらいたがる。多忙で親の目が届かない時間帯に、いたずらとも思える行動をする。親は子どもを叱り、いたずらの後始末に追われることになる。だからそのような時間帯にこそ、手を添えて一緒に野菜を洗ったり、皮をむいたり、切ったり、煮たり、焼いたりして、子どもを料理へと誘い、楽しみたい。料理は、自閉症の子どもにとって最高の遊び。自分で作って食べられる。母親にしっかり関わってもらえ、充足感が持てる。料理を通して、発達できる。子どもに料理してもらって、親は喜びを味わう。（❤心を育てる）

② 手を添えて、料理を始めることができる。「料理」を通して発達を促せる。最初は興味がなくても、嫌がっても、一緒に切っているうちに、好きになる。興味・関心が芽生えてくる。包丁の手元を見るようになる。何もできないと思っていた子と、料理を一緒に楽しめるようになる。
具体的内容は、理解し易い。想像力が弱くても分かる。（❤心を育てる）

2） 指示に従って作り上げる（❤心を育てる）

「指示に従う」ことは、集団行動をするうえで欠かせない要素である。社会性の第一歩である。
自閉症の子どもは、「指示に従う」という事自体に気付いていないことがある。指示の内容が理解できずに指示に従えていないこともある。また、プライドや意思が出てくると、頑として指示に従おうとせず、親の方が振り回されてしまうことが少なくない。身体の小さな幼児期であれば、それでも親の強いリードによって学ばせることができる。しかし、行動障害がみられ、力の強い青年になった時点から親子関係を修正して、指示が通るように、変えていくことは至難となる。

しかし、一緒に作り上げる料理には喜びがうまれ、和みが与えられ、褒められる機会が増える。中でも一番人間として大切な学ぶ姿勢、「指示に従う」ことができるようになる。
レシピの指示に従う、親の指示に従う、基本的な単位・社会に従う。料理を通して、大切な生きる力をつけていける。

① ジグや絵や文字や写真を利用したレシピ（料理の手順書）を作り、最初は手を添えて、全介助で教える。
② 手を添えられるのが苦手な子どもも、添えられることに慣れ、初めてのことも学びやすくなっていく。将来、就労して、新しい技術を習得する時にも、上司の指導を受け学んでいける。
③ レシピに添って、また、指導者の指示に添って、作り上げて行く料理、当然ながら、作り上げなくては食べられない。その、「指示に従って学ぶ」という明確なルールを子ども達に教えやすい。
④ 自分勝手なことをしたら、失敗も経験させる。
⑤ 「お米を炊く時に水を沢山入れたら、べしゃべしゃのご飯で美味しくなかった！」「塩を入れ過ぎたら、食べられなかった！」という失敗経験をさせて、指示通りにする意味を知らせる。

3） 手の機能を磨く。

身体の使い方もコツをつかみにくく、不器用な子どもも料理をすることによって、道具の使い方に熟練し、料理上手になり、働く手をもった働く人になれる。
手が不器用だからこそ、手を積極的に使い、動きを意識して、手を磨く。手が使えることは、子どもの確かな自信となり、また、就労への大きな力となる。自活する時も、グループホームやケアホームで生活する時も役立つ。

① 左手で野菜を固定しながら、右手で包丁を持ち皮をむいたり切ったりする。
② 両手が協調して使えるように熟練させる。
③ 素材にとって切り方が違う。包丁など道具を使いこなすこと。
④ 大根は押し切りができるが、肉は前後に刃を引かなければ切れない。
⑤ みじん切り、乱切り、削ぎ切り、リンゴの皮むき、多くの手の使い方を、台所で身につけることができる。ピーラー、おろし金、すりこぎ、泡だて器…、調理器具を使いこなそう。
⑥ 鍋の底が焦げないようにするには、底から丸くかき混ぜる。
⑦ 手首の返しや、手首を丸く動かし、鍋全体をまんべんなくかき混ぜるこつ。これらも料理を通して、次第にできるようになる。まんべんなくかき混ぜなかったら焦げた、という経験から、焦げ

ないようにしようという意識もでてきて上手になっていく。
⑧　お皿を洗う、ボウルを洗う、鍋から具をよそう、汁物をよそう。
⑨　集団で食事をするような機会(キャンプ、職場の昼食)のためにも、家庭で十分練習をしておこう。活躍することができれば、集団参加が楽しくなる。（❤参加して喜ばれる）

4)　偏食がなくなる。何でも美味しく食べられるようになる。

①　自分で料理すればその料理が、どんな材料で、どのようにして作られるか理解できる。
②　出された料理に警戒し、妙に味や匂いに敏感になったり、最初から食べることを拒否したりする自閉症の子どもが、その料理を好きになり、食べられるようになる。
③　自分で苦労して作った料理は「食べてみようかな」と思え、食べてみたら美味しかった！そんな体験から、偏食が減っていく。また、自分で作った料理を他の人が食べている様子も気になる。（❤心が育つ。）

5)　全行程をさせてあげ、一人で台所に立ち、一人で料理ができるようにする。

①　皮むき、包丁で切るなどの一部分しか料理を手伝わせていない子どもは、何年経っても一人では料理できない！
②　スケジュールとレシピを用意し、買い物、準備から、下ごしらえ、料理、食器洗いをさせ、食器戸棚にしまう後片付けまで、全行程をさせていくと、認知障害の重いある子どもも何年か後には、作り方を覚え、一人で食事の用意ができるようになる。全行程を理解でき、作れるようになれば、ちょっとした一部分の手伝いもできる。
③　親が病気で寝込んでいる時、家族の一人が入院した時、子どもが料理し、食事の準備を担当してくれるようになっていたら、非常に助かる。心から教えてきてよかったと思う。「有難う」と子どもに感謝する。心からの称賛は子どもに伝わり、自分の価値を高め、存在感が増す。
④　指摘や注意を受ける身辺自立の取り組みとは違い、料理は、褒められ、感謝され、共に幸せになる機会となる。子どもは、自分の存在価値を高め、生き生きと輝きはじめる。
⑤　家庭で、充実して、母と過ごせる。問題行動が減る。
⑥　コミュニケーション力が弱くても、認知の機能が弱くても、存在感のある大人になっていける。

6)　もてなすことができる。感謝される存在にとなり、人のために働く喜びを知る。

自分からは集団の中に入って行くことが難しくても、料理を作り、もてなすことができる。誕生日に兄のためにカレーをつくり、もてなす役ができる料理を作ってもてなすと、きょうだいも、その友人も喜ぶ。調理実習やキャンプなどにも参加しやすくなり、認められる機会となる。会話ができなくても、料理を一緒に作れば、親しい仲間関係を作ることができる。

7)　責任感を育てることができる。

①　仕事を任せて、初めて責任が持てるようになる。
②　料理の途中で子どもが台所から離れてしまったら、そこで料理をストップし、未完成のものを食べるか、食事をやめる。もったいないが、潔く途中まで作った料理を捨ててしまう。台所から離れなくなる。損をする経験をから、責任をもってやり遂げられるように変わっていく。
③　一方、子どもが途中で台所を離れた後に、親が続きをし、料理を完成させてしまったら、子どもは「離れても、食事は出来上がり、食べられる。」ことを学び、後を親に任せることが当たり前になる。責任もってやり遂げる力は育たず、就労はむずかしい。いつまでも子どもっぽく、役立たない。いつまでも手のかかる人となる。

8)　感謝の心が育つ

① 自分が料理を作ることで、作る人の苦労や思いにも気付くことができる。食卓にならんだ料理の過程を知り、「ありがたい、嬉しい」と感謝の心が育ってくる。
② 他者の気持ちが分かるようになる。「いただきます」に感謝の思いが入るようになる。感謝できる人は、幸せに生きていける。
③ 料理を与えてもらう生き方でなく、料理を作り、喜ばれる生き方へと導いていきたい。

9) 机上の学習が生きたものとなる。料理には、算数・国語・理科の多くの課題が含まれている。

① 数量を実感する

a) 数字の意味を、量として実感するようになる。…1本、2杯、500cc、200ｇ、170℃

ｉ）数を具体的に扱うチャンスが料理である。自閉症の子どもは、数字を教え、数が数えられるようになっても、「３個取って」「２個取って」がなかなか分からない。料理で実際に、「じゃがいも３個」「ニンジン２本」と数を取り扱っていると、分かるようになっていく。

ii）高度な数学を解いている高機能自閉症の子どもでも、秤を使っていないと、秤で100ｇや200ｇが量れない。塩を使って、秤が使えるようにしていく。秤の目盛りを読み取る力をつける。目盛りを読み取りながら、スプーンをもって、粉を入れていく。多すぎた時に減らす、少なすぎた時に足すという判断力がいる。当然できるだろうと思われてことが、できないことがしばしばある。その子どもの分かり辛さを理解し、共感し、教えることによって、一つ一つ生きる力をつけていく。

b) 感覚を磨く

ｉ）牛肉200ｇを必要とする時、スーパーで１パック何グラム入りの肉を買えばいいのか、150ｇのパックか、220ｇのパックか、350ｇのパックか。実際に子どもに選ばせ、作っていく中で、どの量が適量かが認識できるように、常に認知機能の弱さを知りながら、気づかせていく。

ii）高機能自閉症の子どもでも、「肉 500ｇ」「だし 500 cc」と言われても、その実際の数量を想像できない。生活力は極めて弱い。300、500 など数量を、机上でも料理の中でも扱わせ、「量」を実感させ、感覚を磨いていく必要がある。材料をみて、おおよその量や重さを推測できるようになっていく。

iii）目盛りを読みとる力をつける　（計量カップで量る、秤で量る、温度を測る）。
デジタルでしか重さを量ったことのない子どもは、アナログの秤が読み取れないことがある。経験のないことや、学んだことのないことは、分からない。様々な道具を実際に使わせ、読ませ、読み取れるようにしていく。

iv）目盛りは、計量カップ、温度計、時計、定規、分度器などにも共通し、自在に読み取れることが、生活を便利にし、自由にし、生きる力となる。

c) 分数（1/2カップ、1/3カップ）を、実際に料理で使い、実感を伴って理解し、生きる力としていける。ml、l、g、kg などの単位も、同様に実感をもって理解し、使えるようになっていく。

② 食材がよく分かる。

a) 材料を揃えるので物の名前と言葉が一致する。

b) 材料を扱うことでその物の性質や扱い方が分かる。

ｉ）切ったらどんな固さ　色　手触り　匂い　皮の厚さ　ジャガイモの皮　人参の皮
ii）生で食べられるものと加熱して食べるもの
iii）あさりは熱を加えると開く、卵は固まる。
iv）野菜は上から押すと切れるが、肉は前後に引かなければ切れない。
ｖ）生卵はそっと置かなければ割れる。ゆで卵は？

c) 食材と保存場所
肉は？　野菜は？　牛乳は？　冷凍食品は？　味噌は？　醤油は？　わかめは？　豆腐は？

③　道具を使う。

a)　道具の名前を知る。
b)　道具の大きさ、材質を知る。
c)　包丁や泡だて器など、全て手を使う。目を使う。
d)　包丁は使い方を間違えれば危険。だからこそ、教えておきたい。
e)　怪我をしにくいように、よく切れる包丁を使う。よく切れる包丁の方が、例え手を切ったとしても傷口の治りは早い。包丁を研ぐことも、いずれ教えていきたい。
f)　道具の使い方を熟練させていく。出来るようになるのか･･･とさえ思われた包丁での皮むきも、出来るようになっていく。
g)　切り方によってどう形が変わるか、幾何学的とも結びつく。例えば、おでんのこんにゃくを二等分するにも、色々な形に切れる。
h)　道具の色々な使い方を知ることで、工夫することを学ぶ。（包丁、しゃもじ、お玉、箸、ピーラー、竹串、ボウル、ざる、鍋、フライパン・・・）

④　加減を知る

a)　湯や油には材料をそっと入れなければ火傷をする。
b)　湯をこぼす。湯を移す。器に移す。器に盛る。
c)　いつまでも煮ていると焦げる。

⑤　絵カードや手順カードの意味が分かる

a) 絵カードの意味が分かるようになる。（材料を揃える、買い物）
b) 手順カードの意味が分かるようになる。見通しを持つということが分かる。

⑥　レシピで、国語力をつけることができる

a)　レシピを、読み取り易いように短文に作り直し、読ませる。目の前で現象が広がっているので、文章が理解しやすい。読み取れるようになっていく。
b)　レシピを交互読みする。
c)　レシピを元に質問文を作り、答える練習をするなど、国語の教科書として使える。

⑦　火や包丁を存分に使うことで、危険性を知り、興味も満たされ、火遊びをすることがなくなる。正しい使い方が身に付く。

⑧　料理は科学

a)　科学的でおもしろい。変化する現象が面白い！
b)　水は湯になり、100℃で沸騰し（温度計）ブクブクと泡が出て、蒸気になり、水は減っていく。
c)　揚げ物の変化が面白い。熱さ、色、音、泡。
d)　野菜を煮ると柔らかくなる。煮すぎると崩れる。
e)　肉を煮ると硬くなり、更に煮ると柔らかくなる。

⑨　清潔・不潔　エチケット

清潔を保つ。手を鼻や顔に持っていき易い子どもには、ポケットのあるエプロンをさせ、「手はポケット！」と教える。マスクにも慣れさせる。

清潔、エチケットを守ることは、就労での大きな条件でもある。

10) 親にとっても最適の課題時間となる。

①　夕食時は、親にとってとても忙しく、子どもに目が届かず、問題が起きやすい時間帯。子どもと料

理をすることは、最初は大変時間も手間もかかるが、深く関わることになり、その間の問題行動が減る。また、料理ができるようになってくると、むしろ子どもが助かる存在になる。親子ともに充実する。

② 子どもの分かっていない事柄が具体的によく分かる。（数字の意味、文字・言葉の意味、手首の使い方など）

③ それを課題として、課題学習のときに取り組むことが出来る。

④ 具体的に出来るようになったこと（手の使い方、文字の理解、数字の理解、道具の使い方など）が見えて、嬉しくなる。

11）子どもの自立の方向を実感する

① 子どもの作ったものを食べられる幸せは、何ものにも代えがたい喜び。

② 子どもをあてにすることが出来る大切さ（責任を持たせる大切さ）を実感する。

③ でも失敗させないでおこうとばかりすると、子どもの判断すべき機会を奪い、また子どもを言葉で叱ってしまうことが起きてくる。

④ 気付くように工夫する（焦げている物と、丁度いいもの、ナマのものを並べ、見させ、串で刺して固さを教え、食べさせて、「煮える」「焦げる」「生」ということを教えていく）気付く力が判断力を育てる。

⑤ 出来なければ手を添えてさせていく。少しずつ手を離していく。

⑥ 子どもが料理できることは、大きな安心になる。自分で食べていけるだろう、また人の役に立つことが出来るという見通しが立つ。療育の大きな励み、支柱となる。

⑦ 料理というテーマがはっきりしているものは、どんな時でも（落ち込んだり、行き詰った時でも）取り組むことが出来る。また、それにより、新たに希望が持てたり、喜びを見つけ、課題を見つけることで頑張れることが出来る。マンネリ化しない。

⑧ 興味のある遊びが少なく、暇を持て余し、急に泣き始めたり暴れたりよくしていた子どもが、料理にしっかり取り組むようになり、色々な家事にも取り組むようになると、余暇の時間をリラックスして楽しめるようになった。私たちも仕事の後の休みは楽しい。いつも休みでは飽きてしまう。

12）家族の喜び

① 家族に子どもの作ったものを食べてもらうことで、ともに成長を喜ぶことが出来る。普段子どもと接することが少ない父親に、子どもの成長を実感してもらえる。

② 何を褒めていいか分からなかった父親も、子どもを大いに褒める事が見つかり、褒めることが出来る。

③ 父親も、子どもの成長が実感でき、将来を少しずつ見つめられるようになり、子どもが可愛くなる。

④ 兄弟も料理の出来るその子どもを誇りに思うようになる。自分の誕生日に友達に障害を持つ弟が作った物を振る舞う。

⑤ 親が老いた後、きょうだい同士が、料理をして、余暇を楽しむことができる。

⑥　成人になってしまってからでも、世話をするという関係だけでなく、一緒に料理をするという幼稚さのない質の高い付き合い方へと変えていくことができる。

母親アンケートより

◆Aさん 男子　小５

料理は、米研ぎからスタートし現在はカレー、玉子焼き、味噌汁、に取り組んできました。完全に一人でまかせっきりに出来るのは以上の数品しかありませんが、一緒にはお好み焼き、たこ焼き、餃子なども作っています。一緒に作っていると言うことは、一人では作れない、任せてもらえない・・・ひいては作れないということだと思います。「みじん切り」に対して私が腰が引けているのかもしれません。ついつい、後ろからべったり張り付いて見ているうちに少し口を挟み、手が出て・・・最後には手伝って共同作品になってしまいます。一人で最初から最後までまかせきれるレパートリーを増やしていくためにも、私が距離を置いて離れていこうと思います。５年生になり、「豚汁」に取り組み始めました。手順は大分覚えてきましたが、ごぼうの扱いに戸惑っているようです。家族の評判もよく、息子の自信につながっています。

◆Bさん　男子　中２

料理は毎日楽しみにして作ります。食に興味が出て来ているので、積極的に取り組み、切るとき、混ぜる時、よくみています。お米洗い、いり卵は一人で出来るようになり助かります。食器洗いも、自分の仕事のように思っていて毎回してくれ助かります。一人で出来る事がこんなにも、家族の役にたつのだと嬉しく実感しています。

◆Cさん　女子　中１

毎日、朝食作りから始まり、洗濯機を回して、洗濯物を干してから学校へ行きます。帰宅してからお風呂掃除、お米研ぎ、夕食作りをしています。

朝食作りは、一人で作ってくれます。味噌汁、玉子焼き、サラダ、焼き魚を手際良く作り、用意してくれます。味噌汁、サラダはすぐに作れるようになりましたが、玉子焼きは中々上手に巻くことが出来ませんでした。卵を流し入れてから巻くタイミングが分からず、流したらすぐに巻こうとフライ返しで触るので、卵を流してから巻いていい状態までを数を数えて待たせました。最近は、数を数えなくても玉子の状態を見て巻くことが出来るようになりました。新しいことを教えて、出来るようになると娘は、満足そうに微笑んでいます。お米研ぎ、お風呂掃除、洗濯物を干す、たたむ等沢山のことを覚えて、やり遂げる力をつけることが出来ました。そして、家族から認められ頼りにされる娘になりました。

娘が、料理を作ってくれるお陰で私は、任せて外出出来るようになりました。本当にこんな日がくるとは思いませんでした。私達家族は、娘の作る料理に美味しいと笑みをうかべ感謝して食べています。料理を教えて本当に良かったと思っています。

(4) 余暇活動（成人期を豊かに生きるために）

1) 余暇活動の意味

私たち人間の覚醒している時の活動・生活は「遊び・学び・働き」で成り立っている。
そして、幼児期・学童期・思春期青年期・成人期を通して見るとき、その「遊び・学び・働き」の内容の順位や割合は、次のように変化していることに気づく。

幼児期は　先ずよく遊び　次によく学び　それからよく働く（お手伝い）生活である。
学童期は　先ずよく学び　次によく遊び　それからよく働く（お手伝いする）
成人期は　先ず①よく働き　次に②よく学び　それから③よく遊ぶ（余暇）

成人期を豊かに生きていくためには、どの要素もおろそかにはできない。
特に、生きることの無器用な自閉症の人にとって、余暇をどう充実して過ごすかを幼児期から考えていくことは、人生を心豊かに生きるために欠かすことができない。
そこで、解放され、リフレッシュし、人と心を通わせる。
感動や希望や喜びを感じ、新たな働きへの意欲を増し、心豊かに大きく広がり、成長していく。

2) 余暇活動の支援の実際

「幼児は遊びによって育つ」と昔から言われる。しかし、信頼関係ができにくく、しかも言葉の遅れた自閉症児の場合は、余りにも遊ばせにくい。
感覚遊びや同じ事の繰り返し・・。広げていけない。押しつけると泣いて嫌がる。自分が気に入った遊びしか受け入れてくれない。どんなに可愛がっても、「よく遊び・よく学び・よくお手伝い」とはならない。

3) 個別課題学習の始まり

だんだん遅れの目立ってくる子に、「このままではこの子は生きていけない」と、危機感を持って取り組んだのが、文字と数字の指導であった。見ようとしない、やろうとしない子の背後から両手を添えてあげて、数字盤に同じ数字カードを１から１００まで順番に置かせた。こうして、全介助で並べさせ続けていると、数字を覚えただけでなく、「座る、待つ、手を膝にする、模倣をする、やり遂げる、指示に従って学ぶ」等の姿勢も身についてきた。

自閉症児の場合は、積極的に個別課題学習を通して、「よく学ばせ、よく遊ばせ、よく手伝わせる」ことで、しっかり歯車をかみ合わせてあげると、やがて自分から「よく学び、よく働き、よく遊ぶ」ように変身していく。そして、心の育ちに思いを向けながら、生きる上で必要な基本的なこと（基礎概念・数の概念・タイル算・国語・金銭・時間・重さ・長さ・空間位置・料理・買い物・理科・折り紙・手芸・工作）を課題学習として、学童期・思春期を通して継続していく時、少しずつ自立していき、家族は共に生活を楽しめるようになっていく。

4) 家庭での取り組み

① 街へ出かける。パニックや問題行動をおそれないで、幼児期から頻繁に外に連れ出し、バスや電車を利用し、買い物をし、レストランで食事をし、外でのエチケットやルールを教えていく。食事のマナーは重要な課題である。

② わがままであっては、人と幸せにはやっていけない。

③ 基本的生活習慣の確立は特に重要である。成人してからは簡単には取り組めない。排泄・生理の始末ができなければ、豊かな余暇活動は望めない。どんなに重度でも幼児期から諦めないで指導し、性に関することも、恥辱心が育ちにくいので、時と場所に合った過ごし方を教えていく。

④ 偏食がなければ、どこの店にでも入れる。何でもおいしい。大いに皆と食事を楽しめる。

⑤ 体を鍛える。幼児期から始めた山歩きやマラソンは、どんな人にも、健康な余暇の過ごし方となっていく。

⑥ 手芸や工作、そして多くの習い事は、すぐれた指導者によって継続して熟練していくとき、趣味や特技となって楽しめる。習い事を通して、よき理解者に出会い、一生の強い信頼関係を築くこともある。

⑦ 料理・洗濯・掃除に取り組む。幼児にとって料理は本物の遊び！！　料理は一生の趣味・特技となり、御馳走は人を集め、幸せにする。自閉症の人が主役になれる。

⑧ 適した仕事を選ぶ。息子の洋裁は「学び」であり、音楽を聴きながらできる「働き」であり、他者に役立つことが喜びとプライドになっている。楽しんでできる働きに、すでに趣味の要素が入っている。好きな仕事は安定した充実した成人期を送るのに大切である。

⑨ 地域の人達との交流を大切にし、理解者の輪を広げることも大切である。ボランティアの方々やヘルパーさんと親しく共に行動する機会も作り、親を離れて行動できるようにしたい。

⑩ 行事に積極的に参加し、公園の掃除など奉仕作業も一緒にしていきます。

5)　余暇活動の内容

- 音楽（　ピアノ等楽器の演奏　合唱　コンサート　カラオケ）　書道　　美術（切り絵　版画　絵画　漫画）
- 読書（雑誌　絵本　料理の本）　かるた会　百人一首
- リトミック　水泳　スケート　ボーリング　バスケットボール　テニス　バトミントン　スキー　モダンダンス、
- **マラソン**　山歩き　登山　ハイキング　キャンプ　釣り　サイクリング　少林寺拳法
- 洋裁　手芸（パッチワーク　編み物　刺し子　クロスステッチ　刺繍　ビーズのれん）
- 折り紙　切り紙細工　工作（木工　箱作り）
- 陶芸　　焼き物
- 料理　料理教室　パン焼き　クッキー作り　家庭菜園
- ペット（犬　猫　小鳥　ハムスター）
- 地域の行事（祭り　マラソン大会、運動会、和太鼓、　サークル活動）
- 温泉巡り　旅　映画館　ホテル　図書館　レストラン　デパート
- テレビ　テレビゲーム　パソコン　鉄道模型　収集　写真撮影

6)　知識ある愛・行き届いた支援

このようにできるだけの自立を願って、幼児期からこつこつと、知識ある愛をもって取り組んできた全てのことが、成人期の余暇活動を豊かなものにしていく。自閉症の人達が孤立しないで、社会に貢献しながら、安心して幸せに生きていけるようになることは、行き届いた支援によって可能となる。

余暇の豊かさは、生活そのものの豊かさである。

１２．　マラソン、山歩き（療育の土台となる　身体をつくる）

1)　**自閉症児の状態**　　虚弱　便秘　睡眠障害　疲れやすい　風邪をよくひく　歩行のバランスが悪い
偏食　少食
情緒不安定　運動不足　多動　集中力がない　持久力がない

2)　**目的**

① 身体を丈夫にし、耐久力をつける。（病気がちでは、しつけができない）

② 生活リズムを整える（食欲が出、睡眠が整う）。

③ 情緒の安定をもたらす。

④ 脳の発達を促す。

⑤ 動作や反応を敏捷にし、課題にのりやすくする。

3)　**先ず歩く、そして登る、それから走る**

① バギーでの外出（歩けない乳幼児期　）日光浴　外気欲　刺激がいっぱい

② 毎日しっかり歩く（不安定な歩行期）　　手をつなぐ→手をつながないで歩かせる（ひも＝愛の絆）

③ 山登り　（不安定な歩行期　母子関係薄く、上記の状態がある時期）

1　食欲が出る。よく眠れる。生活リズムが整う。（★幼児期の最大の目的）
2　坂道は心肺を鍛え、「走る」と同じ効果がある。
3　山道は注意力と巧みさを必要とするので歩行が確実になる。
4　母子関係を強いものにする。多動が減少する。
5　目的地がはっきりしており、満足感がある。さわやか。
6　店、物品、人がなく、問題となる行動が出にくい。
7　四季を、自然を、いっぱいに浴びる。遊ぶ。叫ぶ。
鳥　虫　木　花　石　水　風雨　寒暑　　しゃぼんだま
8　母子ともに心がなごみ、情緒が安定する。ストレス解消
9　下界の展望は、実物の地図である。（船　バス　電車　ビル）
10 思索時間（心の豊かさを増す）

★　親と子と二人だけで歩く。グループの場合は親同士のおしゃべりが主流になり、子への心配り、話しかけ、遊び、共感ができず、療育の内容が極めて貧しいものになる。

★　山歩きは、私の子育ての底辺である。

④ 早朝マラソン（山を楽しんで歩けるようになってから取り組む）

- コースを決める。毎日頑張る。家族と。
- 取り組みが多くなると、短時間で強力なマラソンが実施しやすい。
- 精神力をつける。
- 思春期・青年期のエネルギー発散に、情緒安定に役立つ。山歩きと組み合わせる。

★　早朝マラソンの勧め　　母親アンケートより

◆Aさん　　男子　４歳

昨年の６月から早朝マラソンを続けています。最初はできる限りの抵抗（泣く、奇声、不動）をしていました。最近曜日が分かりだし、土日の保育園が休みの日は寝起きもよくマラソンも自分からすすんで行くようになってきました。しかし平日、特に週明け月曜日は寝起きも悪く抵抗することもありますが、一旦走り出すとペース良く完走できるようになってきました。マラソンを始めて一年ですが、以前に比べて指示が通りやすくなり、こだわりも少なくなってきたように感じます。また、よく見えるようになってきたのか景色や虫（かたつむり、かえる）に対する興味も持つようになってきました。さらに以前は風邪をひくと喘息が出ていましたが、マラソンを始めてから一回も喘息になっていないのはとても助かっています。

山歩きは平日はなかなか行けませんが休日は主人が率先して連れて行ってくれています。まだまだ体の使い方はぎこちないところはありますが、以前に比べて転ぶ回数が減ってきたように思います。

◆Bさん　　男子　小６

マラソンを子どもにさせることができるようになるまでに、時間がかかりました。１年生の３月に入会してすぐの頃は、嫌がり泣き叫び、下の子たちを起こしてしまい行けなかったり、父親が忙しい仕事なので、下の子どもたちを任せて二人で出ることができませんでした。

実家は瀬戸内海の島ですが、２年生の夏休みに、下の子どもたちを両親に預け、二人で走りました。その頃は、「走らなければ」という思いだけでした。私もまだ、彼より早く、ペースを私が作りながら一緒に走りました。彼は少し走ればすぐ海へ出るような、この島が好きで、お年寄り方にたくさん褒めて頂きながら、好きな道を選んで走っていました。自然の中で、しっかり体を動かす事が、とても嬉しそうでした。

それから、何とか走りたいという思いで、できる時にやっていき、下の子たちも育ってきて、何とか早朝に続けていけるようになりました。

３年生には引っ越しをし、川沿いを走りました。４年生ごろには、私はもう自転車で伴走しました。渡り鳥、跳びはねる魚、凍りつくような寒さ、満月と日の出、様々な自然を感じながら走っていました。汗をかく頃にはシャワーをし、寒くなれば上着を着たり、自分で季節を実感しながら掴んでいけた事がありました。

６年生になり、祖母が手術を受けた後一時退院の時には、祖母に声をかけ、祖母のペースに合わせ、一緒に散歩をしたりしました。マラソンだけでない、学習だけでない、「心を育てる」という事がどういう事なのか、教わる事ができた私は幸せだと思いました。

山歩きも、マラソンを始めた頃と同じく、休日も仕事がある父親に、その合間をぬって下の二人を見ていてもらい、近くの公園の里山を歩きました。そのうちに、昆虫や花、生き物が好きな次男が、「僕、山の宝物を探す！」と、色々寄り道しながら楽しそうにしているのを見て、彼も同じように長い木の枝を持ってつついたり、石を持ち上げてみたり、色んな葉っぱを探したり、どんぐりを探したりしていました。

三男が幼稚園に入り、私たち夫婦の趣味でもあるので、大山や寒風山、色々な里山に登りました。彼はいつも最後の私を気遣い、「お母さん大丈夫ですか？飴いりますか？これどうぞ。」と言ってくれたり、待っていてくれたりしました。家族５人でこうして山に登れるなんて、こんな楽しみを家族で味わえるなんて、入会する前の１年生の頃には考えもしませんでした。

「心を育てる」という子育てが、自然を感じ、子どもらしく体を使って大いに遊び、楽しめる心を育ててくれました。豊かに生きるという事がどういう事なのか、この先人と人の間でしか考えられない子たちが多い中、彼にはここがある、自然を感じ、自分を解放できる山がある、自然がある、と思って取り組んでいます。

◆Cさん　　女子　小６

マラソンは月～金は毎朝５時に起きて３キロ弱、土日は６時に起きて５キロほど走っています。小学

校１年から取り組み４年生でやっと止まらず走れるようになりました。５年生で一人で起きられるようになり、今は時間になると一人起きて着替えて、玄関で待っています。

１，２年生の時は朝起きるのも、着替えもなかなかできず３０分ぐらいかかっていました。やっと着替え行こうとすると、大声で泣いたり、廊下で座り込んだりしました。準備体操のラジオ体操もできず、介助してさせていました。走りだすとすぐ座りこんだり、仰向けになって寝転がったりして、走ろうとしなかったので、引っ張って走っていました。散歩の人に合うのが恥ずかしかったです。

３年生は起こしたら起き、着替えの時間がかかりましたが、なんとか走っていました。

４年生はやっと起こしたら起き、着替えラジオ体操に３０分かかりゆっくり走っていました。４年生の時初めて運動会のリレーで追い立てられずに、一人で走れ、ほめられて嬉しかったのか持久走も早く走れるようになりました。

５年生は持久走で学年６位になり、クロスカントリーに参加させてもらいました。駅伝に出場順位は遅かったのですが、６人ごぼう抜きしていました。同級生から声をかけられたり、たくさんの人に褒められ自分に自身がついたようです。

山歩きは　幼稚園の頃は河川敷、近くの小さな山を歩いていました。小学校から父親と３人で市内中心の山を歩きました。途中で何度も座り込み、行きは手で引っ張り無理やり歩かせ、頂上まで歩きました。３年生まではいろいろな登り口からその山の頂上目指して歩きました。４年生で初めて県内最高峰の山を歩きました。市内の山は私と２人で歩けるようになりました。マラソンも山歩きで足腰を鍛えたので走れる体力がついたと思います。

◆Dさん　　女子　中学２年生

マラソン

マラソンは、トモニを始めてから取り組んで７年目になりました。全く走らない歩きたがらない娘を「走らせる」ということは、大変でした。初めから「走るよ！」と言っても（娘が私の後を）付いてくる訳がなく、背中を押しながら手を繋ぎながらなど色々試しました。

走るコースを決めるときもあまり周りに迷惑がかからないように走れる道を選び、走っている人を見ることができるようにと考えました。

年長児から始めて３年位は、午後から走っていました。最初は、走る距離より歩く距離のほうが長かったです。少し走るとすぐ止まって動かなくなり、黙って待っていると道路に大の字になって寝転がり大泣きをしてみたり、色々な行動で「嫌だ！走りたくない」とアピールしていました。何とか違うことをしたくて道の脇に立っている工事の看板の文字をなぞったり、普通２０分で終わるような２・５キロのコースを１時間から２時間かけていました。

この状態が小学３年生の時に一気に改善することになりました。夏休み中から大変な自傷行為をするようになり、外へは連れ出したくない顔をした娘とマラソンをすることは、精神的に辛い日々でした。周りの方々は娘の顔を見て虐待しているように思われて、警察がマラソンコースを何度も見回りにきました。顔中痣だらけの娘が、道の真中に大の字になって泣き喚く姿を見て、普通の人から見れば異常だと思うのが当然だと思いました。でもここで引き下がる訳にはいかないと強く思い、自分で泣き止み起き上がるまで何時間でも待ちました。通りかかった際に「どうしたんだ！」と強い口調で聴かれることは度々でした。娘は色々な行動を起こしても、こちらの気持ちを見抜くように笑いながら起き上がりました。少しずつ走りました。

自傷行為がひどくなった時期から朝晩走るようにしました。早朝５時から走ったときに、突然寝転がり大泣きをし、近所の家から「うるさい！！」と怒鳴られたこともありました。ウォーキングしている方々も沢山いて、「穴があったら入りたい」と思いました。段々この状況にも周りの人が慣れて気にしなくなり、「あ～やってるなぁ～」という目で通り過ぎるようになりました。何があっても、どんなに暴れてもゴールまで走ることを譲らず続けました。本当に色んな事をしていた娘も徐々に問題を起こさなくなり、走れる距離が長くなっていきました。河島先生が「走れるようになると、全てが整っていく」と言われていた言葉が本当だと実感できるようになりました。

転校してマラソンコースが変わっても、今までと同じように走る娘に成長を感じています。あんなに大変だったマラソンが、今は楽しく気持ちの良い時間となっています。体も心も強くなった娘・・・。この７年間頑張って良かったと思います。

周りからは、「そんなに頑張らなくても・・・。ストレス溜まっていない？」などと言われますが、娘は何もしないほうがストレスになるくらい今は、楽しんでいます。最近では、私が娘のスピードについていくのがやっとになりました。

マラソンを始めた頃は、全く想像できませんでした。必死だったあの頃、乗り越える力を河島先生からいただき今日があると思っています。「継続は力」という言葉が好きになりました。力になるまで何年かかるだろうか？と思いながらのマラソンでしたが、今走るようになった娘を見て感動し走ることの素晴らしさを味わっています。

この７年間で学んだことは、決して怒らないことでした。私は、娘が走るようになってから気持ちが楽になって笑顔で走っていることに気づきました。走らなかったときは、私も必死だったので笑顔もなく、怖い顔で早く走るように声を出していました。でも、これでは全く走る気がない娘に逆効果だということを長男との会話で気づきました。「褒めて励ましていけば！」と思い、「がんばろう！もう少しでゴール、お母さんも頑張るよ」と前向きに「走る」ことを考えてから、娘の抵抗も減りスピードも早くなりました。

山歩き

娘は、「歩きたくない！！」と草むらの中に寝転がったりしゃがみ込んだりと「嫌だ嫌だ」と訴えていました。そんな娘の手を引っ張り、背中を押しながら主人と三人で歩きました。娘は、主人と一緒だと甘えてばかりで、わざと寝てみたり止まったりと様子を窺うことが多くなりました。

二人で歩かなければ娘にとって意味が無いと思い、二人だけで歩くようにしました。往復１・５キロ位の距離を二時間から二時間半かけて歩きました。私自身、山歩きなどしたこともなく好きではありませんでした。でも、毎回歩いていくうちに自然の中が心地良くなり気持ちが安らぐのを感じました。

山歩きを始めて３年経った頃、学校での大泣き、自傷問題で本格的な山歩きを経験しました。片道３・３キロの山道を７時間かけて歩きました。サポートしてくださる先生と一緒だったので、とても心強く安心して歩くことができました。自傷している娘の事を考える余裕など無いくらい大変な山歩きでした。娘も、とにかく今までとは全く違うスケールの大きい山だということを感じていたのか思っていたほど自傷行為も少なく諦めずに最後まで歩くことができました。

この達成感が私たち親子に山歩きの素晴らしさを教えてくれました。私は、今までの散歩のような山歩きよりこの険しい山歩きが好きになり、娘と早起きをしてお弁当を持って再度歩きました。娘が障害をもって生まれなかったら山歩きやマラソンなどには全く取り組むことはなかったと思います。

また、河島先生に出会ってからマラソンや山歩きの意味を知ることができました。今では、無くてはならないマラソンとまた行きたい山歩きになりました。

マラソンも山歩きも決して得意ではなく、むしろ嫌いといったほうが言い私でした。河島先生が、「誰も好きでマラソンや山歩きを始めた人はいない」とおっしゃっていた言葉を忘れずに取り組んできました。

本当に走れる、歩けるようになって生活のリズムが変わってきました。出来なかったときは、悩み苦しみ、止めたいと思ったこともありましたが、ここで止めたらどうなるんだろう？と少しだけ冷静に考える自分がいました。やっぱり続けられたのは、河島先生のお陰だと思います。

マラソンや山歩きは、私達親子の療育原点だったと思います。決して諦めずに頑張ることで、必ず道が開けていき、希望を持って療育していく力になると思います。

◆Eさん　　男子　中２

小学校１年でトモニに入会し、マラソン、山歩きを教えていただきました。山歩きは、小学校の時は、家の近くの標高２００メートルほどの山にほぼ毎日、登りました。初めは、登るのを嫌がり、石のあるごつごつしたところで頭打ちをし、おでこに血がにじんだこともありました。マラソンは夕方走ることから始め、朝に変えていきました。朝走っている時、怒り、泣いていた息子に声をかけてくれた人に噛みついたこともありました。小学校１年からマラソンに取り組み始め、４年生位から朝に走ることの重要性が分かってきましたが、山あり谷ありでしっかり毎日継続して取り組めたとは言えない状態でしたが、中２になった今、朝のマラソンが日課になっています。排泄を整え、生活リズムを整え、心を安定させるためにマラソン、山歩きは効果があると思います。

◆Fさん　男子　中２

マラソンは、タイムを計って行っています。普段は家を出発してのコースを走っていますが、土日は公園の池の周りを２周（６ｋｍ）走っています。

マラソンは小学校１年生になる春休みから行いました。息子は体を動かす事は好きな方であったので私に付いて来て走りました。だから走らないからといって手を引張ったり、引きずりながら走らなくてはいけない事はありませんでしたが、走っていてもずっと喋っていました。だから私の横で一緒に並んで走ると話しかけてくるので、私が先に走りその後を付いてくるようにしました。それでも、いろいろ話しかけてきますが、「今は、マラソン中だから黙って走る」と言って、いつも喋るのでなく、黙る事でけじめを付けさせていく方に苦労しました。後から「お母さん」と言って話しかけてきても、私はそれに反応せず走り、時には息子が先に走り私が後から走ることも行いました。半年もすればそれが習慣化し生活の一部になり、マラソン中にも喋ることも少なくなっていました。

山歩きは、以前は近くの山をよく歩いていましたが、今は、たま歩いています。毎年夏休みには石鎚山に登っています。

マラソンや山歩きをする事で、体力が付き持久力や忍耐力、集中力が付いたと思います。小学校も歩いての登下校でしたが、中学校も歩いての登下校ですが距離はかなりあり、帰りは登り坂になっていますが、しんどいとも言わず雨の日も夏の暑い日も歩いて登下校しています。

参観日に「車で一緒に帰る？」と言うと「僕、歩いて帰るからお母さん先に帰って」と言います。歩く事は苦にならず好きなようです。これも小さい時からマラソンや山歩きに取り組んでいたお陰だと思います。

今は、かなり体力も付き忍耐力もあると思います。就労では体力、忍耐力などが必要とされているので、それが付いてきていることでもずっと取り組んできて良かったと思います。

マラソンはＳＯの練習に参加したりマラソン大会に参加することで、次への目標もでき楽しく行えています。

◆Gさん　　女子　高３

マラソン

「トモニ療育センター＝マラソン・山歩き」という公式は知っていましたが、実際に取り組んでみて、これらが療育・成長にとても重要な影響を与えることに気付かされました。

マラソンを続ける事で子どもの日常生活が明らかに整っていきました。子どもに落ち着きがない、指示に従えない、物事が分かりづらいなどの解決は、まず、マラソンをきちんとやることから始めると言っても間違いではないかと思います。

マラソンは初めから 3ｋｍという距離を走らせました。だんだん延ばしていくというやり方ではなく、初めは 3ｋｍ走り終えるのに時間がかかっても、最初から目標の 3ｋｍ走るように教えていただき、私たちは自宅から出発して片道 1.5ｋｍ、折り返して自宅へ帰りました。一旦家を出ると最後まで走らなければ家にたどり着く事ができません。こうすればどれだけ時間がかかろうとやりきることができました。初めはなかなか走れなくて途中で弱音を吐いて、泣いたり道で座り込んだりしたこともありましたが、しっかりと最後まで走らせました。走る子どもにも走らせる母親にもマラソンは根気が要ります。

マラソンをしていると日常生活の上で子どもの姿勢が整ってきました。子どもの走りがそこそこ整い始めた頃、タオルを首にかけて両端を持たせて走らせるという方法を河島先生に教えていただきました。走りながら自分の両腕をどうしたらいいのか分からなかった娘が、タオルを持つ事で正しく腕が振れるようになりました。マラソンを始めた頃は殆ど走ることができなかった娘も、１年も続けていると、タオルを外しても正しいフォームでしっかりと走れるようになり、タイムもどんどん縮んでゆきました。そのうちストップウォッチでタイムを記録し、それを見ることも楽しみの一つとなりました。

マラソンを始めた頃、夕方でした。しかし、中学１年生になった頃、問題行動を起こし始め、河島先生に早朝マラソンにするよう指導していただきました。そこで、マラソンを午前５時２０分ころから始めました。マラソンを朝に変えることで一日の生活がどんどん整っていきました。朝から走ると、精神的にも気持ちが引き締められ、いい一日のスタートが切れるようになりました。午前５時過ぎというと冬場はまだ真っ暗です。娘と私が毎朝真っ暗の中を頑張っている姿を見て、当時小学校４年生だった弟が自分も一緒に走りたいと言ってきました。今、振り返ると小学生の弟にも何か感じるものがあったのでしょう。マラソンを始めた姉の様子が見る見るうちにいい方向に変わっていったのに気付いたのだと思います。弟が走ると言い出したので父親が弟に並走する役目になりました。家族４人で５時過ぎに起

きてマラソンを続けました。その弟も今年中学３年生になりました。あの頃のマラソンのお陰なのかどうかは分かりませんが、今ではしっかり走れて、根気強くて、元気な中学生になりました。野球をやりながら今でも時々一人で走りに行っています。

山歩き

山歩きはマラソンほど毎日できませんが、今では趣味の一つとして楽しく続けられています。こちらも中学１年生のころ、子どもが問題行動を起こしていた時には毎日取り組んでいました。朝は３ｋｍマラソンをして、朝の家事を終えると、午前中、山に向かいました。家から歩いて近所の山に登ったり、市の中心部の山（標高約 200m）の頂上まで行ったりするコースを交互に行っていました。

山歩きにも“頂上まで歩く”という目標がしっかりとしています。子どもには非常に分かりやすい課題でした。殆ど会話をすることなく黙々と歩きました。頂上で水筒のお茶を飲むと黙々と下りてくるその繰り返しでした。それでも気分は爽やかで、心地よい達成感を味わう事ができました。現在では県内の最高峰の山（標高約 1900m）をはじめ多くの山を楽しめるようになりました。

マラソンと山歩きに出合えたことは私たち家族に幸せを運んでくれたと思っています。

１３．　全身運動（粗大運動）　　脳機能の統合訓練

1)　自閉症児の状態像

自分の身体を意図的にうまく使えない　模倣が下手　模倣しない
麻痺していないのに、未発達でつかえない。
ある運動を意識すると、その通りに実行できなくなる。
ぎこちなさ　かたさ　力の入れ方や抜き方に不自然さがある　不器用である
じっとしていることができない　姿勢を保てない

2)　目的

① 様々な運動を取り込むことで、自分の身体を自分のものにしていく。
② ボディイメージ・身体図式を正確なものにしていくことは、不安を少なくし、自発性を増す。
③ バランスのとれた身体づくり

一般に子ども達は、多種類の遊びを積極的にやる中で自分の身体の使い方を覚えていく。
自閉症児には運動機能のよく発達した者もいるが、バランスよく、正確になめらかに行うことは難しい。

3)　種類

① 身体を意図的に動かすトレーニング
よつばい　階段の上り下り　うさぎとび　しゃくとり虫　歩行　行進
すべりだい　トンネル　ジャングルジム　のぼり棒　ボール投げ　まりつき
なわとび　水泳　ブランコ　自転車　竹馬　ローラースケート　トランポリン
リズム体操　ラジオ体操　ダンス　てつぼう　平均台　険しい山道　マラソン

② 身体を意図的に静止させるトレーニング
一定の姿勢をとり続けることが難しい。
正座　うつぶせ　腕立て　着席　小鳥の死んだ振り

4)　上半身を鍛える

エキスパンダー　腕立て　腹筋
働ける身体を作る。腕を鍛える。筋肉をつける。
ひにゃひにゃした猫背の姿勢がなおって　紳士服の良く似合う魅力的な男性になる！

１４．　手の機能をたかめる　（微細運動）　自立へ向けて

1)　自閉症児の手の状態は様々である

① 手の機能が非常に未分化　両手利かず　聞き手が決まらない　左利き
② 右利きだが、雑で細かい作業が苦手　不器用である
③ 器用である

- 自閉症児の中には、よく特殊なこと（紐振り　リボン振り　本のページめくり　リズム感のある机叩き　機械操作　　紙きり　切り絵）への器用さが見受けられる。

- 自閉症児の非常に限定された興味、それへの執着と長い年月にわたる働きかけは、昔の職人修行に通じるものがある。驚嘆するほど、彼らはひとつの特殊なことに熟練している。

- このことは、様々な障害にもかかわらず、彼らは職人になる能力を充分に持っているということにはならないか。妙な手指の使い方を会得して、流れるようにハーモニーを保って、紙テープを巻いては、流れる水のようにはらはらとテープをほどく所作に没頭していた自閉症青年の美しい顔。あれは熟練したことをやる快さではなかったか。

- 興味の範囲が非常に狭い、指示に従わない、自発性がない、固執性がある、不器用である、なかなか会得しない、パニックを起こすなどの理由で教育困難な自閉症児は、手の機能を多方面にわたって熟練させるチャンスがない。

- 生活に関係ない特殊なことにのみ手の機能が発達していて、全体としてはアンバランスで未発達である。

★左手（障害児）は右手（健常児）に比し、練習の機会がきわめて少ない。

2)　積極的に手を使わせよう！

① 世界をより正確に、しっかりと認知するために。　　＊ヘレン・ケラー

- 手でしっかり触れて使って、はじめて物の性質をはっきり知ることができる。
- 「やってみませんか」「作ってみませんか」「使ってみませんか」
- いろんな見方がある。→（持ってみる、触ってみる、使ってみる、作ってみる、書いてみる切ってみる
- 熱い　ぬるい　冷たい　痛い（針　とげ）　硬い　軟らかい　きつい　ゆるい）
- 積極的に生活の中で、自分の手を使い、道具をつかわせよう。

★　目で見るだけのテレビの料理番組が、極めて分かりにくいものであるように、何もかもして貰っている自閉症児は、認知障害の上に、一層不確かな世界に住んでいることになる。

② 脳の発達を促すために。

ペンフィールド「大脳皮質の機能の模式図」によると、人間の大脳の感覚領野・運動領野の広大な領域を「手」が占めている。それ故、手の機能の発達を促すことが必要である。
手を使う時には、目や耳や気も使う。身体全体の姿勢も関係してくる。結局脳の全ての機能を調和させて使うことになる。（目と手の供応　両の手の供応など）

③ 自立のために。

手の機能の発達は、将来の職業につながる。

手がしっかり使えるようになると、多動が減り、落ち着きがでる。

3)　取り組み（日常にできるだけ手を使わせ、上手にできるようにする）

- スプーン、ナイフ、フォーク、はしの使用、ボタン、スナップ、ファスナー　クレヨン、鉛筆、マジック、えのぐ、はさみ、セロテープ、のり、ホッチキス、コンパス、おりがみ（おりづる大→小）　大工道具　ねんど
- すべての遊び、基本的生活習慣の動作　爪きり　缶きり　栓抜き
- そうじ、洗濯、料理（カレーライス　サラダ）と後かたづけ、
- 刺しゅう　クロスステッチ、刺し子、編み物　ひもむすび　包帯　ピアノ　笛　太鼓

4)　留意と工夫

5)

① 手の動きには、身体全体の姿勢が関係するので、手元ばかりにとらわれない。
② 腕、手首、手のバランスを見る（混ぜる　しぼる　縫う　書く）

③ 手を添えて教える。

④ 使いやすく教具・道具の工夫をする。

⑤ 多種類の作業をさせ、未熟な機能を見つけ、できないことを特訓する。

⑥ できることだけをさせていては、療育にならない。

⑦ 実際の生活に役立つことを教える。

⑧ 毎日短時間でもよいから練習させる。　繰り返し練習する。

⑨ 技術の高度化をはかる。

★　ピアノ・・・小さい頃から長い期間をかけて練習すれば、上達する。
そろばん・・これも毎日の繰り返しによって身につく技である。
なわとび・・練習に練習を積み重ねて上手になる。
おりづる・・大きな鶴から極小さい鶴へと沢山折り、非常に細かい作業が可能となる。

※ 技術には一度でできるようになると終生忘れないものＡと、練習しなかったり使わなかったりすると月日の経過と共に忘れていくものＢがある。
たとえば、
Ａ　泳ぎ　自転車乗り　なわとび　はしの使い方　ほうちょう　はさみ　ひも結び　書き方　折り紙　絞り方　ぎょうざの包み方　手編み
Ｂ　ピアノ、多くの高度な技術

１５．　ことばの指導

前記の種々の取り組みをしていると、必然的に親の言葉による働きかけは強力なものになる。生活面を含む相対的な発達を促す中で、適切な言葉かけをしていても、ことばは自然には育っていかない。

「子どもが総合的に発達し、生活面がふくらんでくると、言葉がでてくる」というが、自閉症児の発達には非常にアンバランスがある。生活習慣の確立や運動機能の向上などに比して、言語能力の発達はきわめて困難である。積極的にトレーニングしよう。

1)　日常生活の中での言葉かけの要領

① 簡潔でわかりやすく、ゆっくり（聞き取りやすく、まねやすい）
② 程よいボリューム
③ ほめことばをふんだんに　　「いい子ね」「すごい」「よくがんばった」
④ 感謝の言葉をふんだんに　　「ありがとう」「たすかったよ」
⑤ 指示から選択へ

- 「〇〇をしなさい」「〇〇をとってちょうだい」「〇〇を持ってきてください」
  →「どっちにする？」「どちらをたべる？」

- 子どもが指示に従うようになり、理性的に判断できるようになると、命令形から少しずつ離れて、子どもの気持ちを尊重して、自主的に自由にするべきことを選べるようにしていくとよい。

- 最終的には、すべてのことを周りの状況を判断しながら（思いやりながら）自分の意志で（社会人にふさわしく）決定して自主的に行動できるように。
  「お風呂に入りなさい。」→「お風呂に入る？それとも、片付けてくれる？」
  （しかたなく）　　（いそいそと入る）

2)　料理　近（密）→遠（離、疎）の働きかけ

ⅰ 料理、身辺自立などの指導で
① 言葉をかけながら、手を添えていっしょにする
② 言葉をかけながら、手を添えるのをだんだん減らしていく
③ 言葉で指示する　（言葉かけをして、待つ）
④ 「どうするの」「何がいるの」と言葉をかけて考える場を与え、自分で考えるようにさせる
⑤ 自主的に自分でするように、言葉かけをひかえる　（待つ）

ⅱ 指さし、言葉かけも、近くから遠くへ
① 「ここにすわって」（椅子の座面をたたきながら）
② 「椅子にすわって」（椅子のすぐそばで、椅子を指さしながら）
③ 「椅子にすわって」（離れたところから、椅子を指さしながら）
④ 「椅子にすわって」（離れたところから、言葉だけで）

ⅲ 手伝い
① すぐ近くの新聞、みかん、帽子など「新聞を、とって」
② 少し離れている新聞を指さしながら「新聞を、取ってきてちょうだい」
③ となりの部屋にある新聞を　　「新聞を取ってきてちょうだい」

3)　**日常生活のことは、言葉がわからなくても、判断できることが多い。**

① 言葉とジェスチャー（目で、顔で、方向で、雰囲気で、身振り手振り）から「言葉だけ」でもわかるように、ヒントを減らしていく。
② 本当にわかっている言葉が、どれだけあるか。
③ まだ、はっきりとは理解できていない、必要な言葉を強化する。

4)　**自閉症児の実態像**

① 意図的に発声できない。（泣いたり笑ったりするときは声がでている）
② ※発語しようとしない。目をそらして、誘いにのってこない。
③ 発音（構音）が未熟。
④ 発声が不自然。（イントネーション　甲高い　単調）
⑤ 声の大きさの調節ができない。（やたらと大きな声で話す　無声音が使えない）
⑥ 相手に話しかける時、やたらと不自然に力が入る。

⑦ ※オウム返し。
⑧ コマーシャルなどその場に関係ない言葉をしゃべる。
⑨ 同じ言葉を繰り返し、しつこく言う。

⑩ 人称を間違える。
- 「あげる」と「ちょうだい」　　「ただいま」と「おかえり」
- 「ちょうだい」とか「ありがとう」といいながら、相手に物を渡す

⑪ 「いや！」が使えない　（言葉の便利さを知らない）
⑫ 「だめ」「ストップ！」などの効果がない　（言語の重みが伝わらない）
⑬ ※「わかりません」が使えない。

⑭ 助詞が使えない　　機能語が使えない
⑮ 言葉の意味するところをなかなか察する（悟る）ことができない
- 数の概念が分からない（数の操作はしているのに）
- 位置　大小　多少　長短　軽重などが分かりにくい
- 形・色の概念
- 昨日・今日・明日

⑯ 疑問詞が分からない（何をたずねられているのかわからない）
- 「どっちが大きい？」「大きいのはどちら？」

⑰ 疑問詞を使えない、使おうとしない
何　だれ　どこ　いつ　いくら　いくつ　どんな　どのように　どうしたの
どちら（どっち）　どうして（なぜ）

⑱ 聞き取る力が、見る力よりも弱い。
⑲ ※部分を聞いて判断する。注意して聞かない。　　個人と集団への話しかけ
⑳ 質問に、考えないでうわの空で答える。

5)　**出来る力を利用して、言葉を育てよう**

①形やマークを見分ける。
文字を読めるようになる可能性がある。
声を出さなくても、マッチング指導ができる。

②小さいものに注意を向けることができる。
あり、虫に興味がある→教材は小さくてよい→全体がわかりやすい。

③コマーシャルや歌を覚える。
聞いて、その通りに発音する力がある→正確に聞き取る力がある。
聞いて、その通りに覚える力がある。
興味あるものは、しっかり記憶する力がある。

④オーム返しがある。（正確に聞いて、そして正確に発音できる）
日本語を話せる。
問われていることが分からなくて、戸惑っている。
応答しようとする意思が感じられる。

⑤理解言語の方が表出言語より多い。（ことばを取り入れる力がある）
「取って」でとれるものがあり、日常生活ではかなり分かっている。
声に出していなくても、言葉を注ぎ込めば、豊かになる。

⑥目をそらして、発語しようとしないが、手で操作することには抵抗がない。
マッチングをさせて、指導ができる。無理に発声させない。やがて、……

⑦きちょうめんに、片付ける力がある。
パターンを決めて、指導できる。

6) 言語を育てる工夫

① 食物をしっかり噛むことをさせる（かたまり　固いもの）
② しゃぼんだま　ふうせん　笛
③ くすぐり　（身体の部位を意識させる）
自分の身体の意識（前後、左右、上下の基礎になる）を確かなものにする。

④ 発声のまね　アーエーイーオーウー　　歌　シュッポ　シュッポ
寝床で、風呂で　　（無声音の練習）

⑤ 童謡のレコード・・・・優れたものが多い。「雨々ふれふれ」から雨を知る。
自閉症児は歌をよく覚える。歌から言葉を増やす。
童話のレコード・・・・かみしばい

⑥ テレビの制限と利用・・「ひらけポンキッキ」「おかあさんといっしょ」
アニメ
⑦ 「○○をとって」と身のまわりの物の名前を確実にしていく。

⑧ ★文字を早期に教える。（マークの区別ができている……４歳半だった）
２組の同じ五十音の積み木をマッチングさせて　箱に片付けさせた。
絵（名詞）と文字をおぼえる。絵と文字の一致をさせる。
話さない子には、早期に文字が必要である。
文字を教えても、心は貧弱にはならない。（文字だけ偏って、取り組むわけではない）
入学までに余裕があればあせらないで、遊びながら、刺激し続けることができる。
文字を使って、言語を指導する（聞く力より、見る力の方が確かである）

⑨ ★算数の基礎を教える。「あるきはじめの算数（国土社）」
大小　長短　軽重　高低　色と形
「なかまあつめ」をしっかりさせる。

⑩ ★絵本の利用

ａ）毎夜寝る前に、添い寝をして絵本を読み聞かせてやる。
★絵本や童話の世界は、子どもの内面を豊かにし、イメージをふくらませる。

読み聞かせは母子の共通の楽しみとなり、関係を深める。
★落ち着いて、じっと絵本を見てくれる、甘えてくる時間に。
「本はともだち」経験の少ない障害児の内面を育てるのに、非常に大切。

b）毎夜寝る前に、添い寝をして絵本を読み聞かせてやる。
生活に結びつけ、繰り返しくりかえし共に読み、眺め、言葉の定着をはかる。
「言葉図鑑」偕成社
親は日本語文法を学び、意識的にことばを注ぎ込む努力をする。

⑪ 一日の努力をしっかりほめてやり、しっかり甘えさせてやり、抱きしめて、幸せな気持ちで寝かせる。眠ってしまうまでじっくり付き合う。
少々厳しい一日であったとしても、一日の終わりが満たされていれば、心はかさつかない。

⑫ 名前を呼ぶときは、嬉しいことがあるように。「〇〇ちゃん！ダメ」
「ダメ」を使わない。「立ったらだめ」→「すわりなさい」

⑬ 「ねんねことば」を使わない。　（生活年齢を意識して育てる）
＊ねんねことばから親子共に脱皮しにくいから。一種類を教える。
遅れがあると、親はいつまでもあかちゃん扱いをする傾向にある。
ことばは獲得し難く、一度入った言葉は変更しにくい。
ブー　ネンネ　タータ　マンマ

⑭ おやつ捜し（場所、位置のことばを使うために）
子どもが帰ってくる前に、箱に入れたり、机の下に置いて見つけさせる。

⑮ 布袋の中のおやつを当てさせる。（疑問詞「何」を印象づける。　触覚）
母「何かな?」　　子「〇〇」
「当たり！どうぞ」

⑯ 「どちら」「どっち」　比較させ、選択させ、自主性や自発性を養う。
考えさせる　反省させる　感謝させる。
「みかんとりんご　どっちを食べる？」　「みかん」
「さんすうと書き取り　どっちをする？」　「さんすう」
「自由と不自由　どっちがいい？」　「ルールを守ろう」
「交通ルールを守るのと守らないのとでは……」「けがをしないようにしよう」

⑰ ◎「A……それとも（いやなもの）　B？」　選択させ、自主的に取り組ませる。
「Aをしなさい」……自発性が育ちにくい。

⑱ ◎「〇〇みたい」　プライドを傷つけないで、反省させる。
絵本の中のいたずらっ子と比較させ、反省させる。内面を育てる。

⑲ 英語の学習を利用して日本語の定着をはかる。
★文型練習
質問の答え方を練習して疑問詞を確実にする
読む　聞く

⑳ 絵日記、日記、日誌
毎日いっしょに話し合いながら書かせていく。親子のおしゃべりタイム。
振り返って考えさせる。字を使う。
親は一日に変化をつける努力がいる。

21 電話をかける。　メモを読む。　手紙を書く。

22 ワープロを使って手紙を書く。返事をもらう。

23 説明書を読んで簡単な料理を作る。放送を説明させる。

１６．　日々の取り組みについて

義務教育期間は、生きていくための基礎づくりと考え、家庭生活を大切にし、その営みの一つひとつの意義や意味を深く考え、ていねいに取り組んできた。家庭はその気になれば最良の療育の場になりうる。
ひとつの課題に、多くの取り組みの要素が含まれている。
どんな要素が含まれているかを考えてみると、一日にこなす課題の数は、そんなに多くはない。

基本的生活習慣の確立は、「適切に不親切になる」ことで大部分が達成されたと思う。つまり、親が手をかけないことで、手がかからなくなったわけである。
家族、先生、友達の協力が大きかった。
「病気の日」を設定し、リラックスに努めた。　→　生きている今を、感謝し、楽しむ。

	折り紙	外出	着る	山歩き	学校	料理	遊び	買い物	本読み
母子関係を強く	●	●	●	●	●	●	●	●	●
不親切になる	●		●	●	●	●		●	●
基本的生活習慣の確立			●	●	●	●		●	●
日常生活の場を濃厚に	●	●		●	●		●	●	
子ども集団に入れる		●	●	●	●	●	●		
遊びへの努力	●			●	●		●		
体力作り（歩く）		●		●	●		●	●	
全身運動		●		●	●		●	●	
手の機能を高める	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ことばの指導	●	●	●	●	●	●	●	●	●

課題に取り組むことが、教育診断にもなっていた。しかし、当時は子どもについて他者に理解を求めることは難しかった。孤独な努力の日々であったと思う。

B　思春期　青年期

１．思春期（中学時代　高校時代）

（1）思春期危機　エネルギッシュに問題の多発する時期である。

子どもにとっても受難の時期

①　可愛かった子どもは　大人の身体（大きい男性）になる。
　　歓迎されるより、うとまれるようになる。拒否されるようになる。
　　母親の危機　　効果の上がらない療育に失望し、消極的になる。更年期に入る。
　　扱いにくい、恐ろしい、うとましい、いやらしい、疲れる

②　親離れ子離れの時期である
　　自立しようとする生活年齢である。
　　反抗　いらだち　自己主張　不従順　プライド
　　父親を拒否　一緒に行きたがらぬ　目をそらす

③　性が大きく感情・思考を支配する　（本人も周囲も）
　　＊性に関するトラブルが頻発する。
　　周囲の感情について
　　母親･････････拒否感情　悲しみ　不安
　　仲間･････････性への強い関心　そそのかし　いたずら　いじめ
　　大人社会････性に過敏で、痴漢とみなす。警戒する。

④　若々しいエネルギーにあふれている
　　エネルギーのはけ口がない　何もすることがない。

⑤　てんかん発作の始まることがある。

（２）　子どもの状態は家族を苦しめる。

＜状態＞　（苦しみ　混乱　怒り　不安の表現）
　自傷行為
　他傷行為
　固執性の強化　　パターンの強化
　反抗　いらだち　自己主張　不従順　プライドがある
　拒否　（一緒に行きたがらぬ　目をそらす）
　家事や作業を引き受けない。
　パニック　ひとり笑い　突然の大声　原因不明の大泣き　暴力　物を投げる
　儀式的行為　髪をさわる　におう　不機嫌　いらいら　外出をきらう
　動かないで、多食する　→　肥満

性に関して
　裸になる　人前でマスターベーション　自己刺激行動の増加
　好きな人と握手　抱きつき　キス　待ち伏せ　うろつき　じっと見つめる
　夕方自転車ででかける　朝登校時間に女の子をつける
　一人で外出したがる

（3）対処方法

1)　見通しを持って育てる（学童期までの育ちによって、思春期像が決まる）

①　親は、子どもの性を肯定し、大人になることを歓迎する心の準備が必要。
②　性を考慮し、生活年齢を考慮した育て方をする。　　☞　5）生活習慣の確立
　　子どもは男や女になる。男や女として認めた育て方をする。
③　生活年齢を考えて、どんなに大変でも早期に身辺自立をさせる。
④　「指示に従わせる」関係を確立しておく。
⑤　家事をどんどんさせて、できるようにしておく。日常生活を忙しく
⑥　困難な課題を我慢してやりぬく精神力をつけておく。
　　引き締まった表情は、逆境にあって作られる。
⑦　歩く習慣をつける。ともに山歩きをたのしむ。
⑧　スイミング　趣味
⑨　日記による反省の習慣　話し合いの習慣をつける　言語の重要性。
　　反社会性　非社会性　自由と不自由　痴漢とは　紳士とは

2)　薬物療法　（精神の安定をはかる　→　本人も家族もすくわれる）

3)　運動（山歩き、マラソン）

4)　家事や作業をさせる

上記のような思春期の状態が来るかもしれない。それを念頭にいれて、トモニ療育センターでは幼児期から家庭療育に取り組んできた。思春期になって一層豊かに発達し、家族は幸せな生活を営んでいる。

息子の場合

☆それでも、性のトラブルは起きた。地域社会の中で暗黙のルールは分かりにくい。時に迷惑をかけながら、時に不審者と疑われて、警官のお世話になりながらも、ひとつひとつを「失敗は成功の元」と励ましながら、理解させながら解決してきた。
社会の中で自由に豊かに楽しんで生きるためには、人としてのエチケットやルールは守らねばならない。政治家のトラブルと免職、有名人の1年間の自宅謹慎、殺人犯の処刑、冤罪などをあげ、「ルールを守って自由に生きる方が得！」と教えてきた。そのルールは暗黙のルールであることが多い。叱るのでは伝わらない。（テンプル・グランディンの「自閉症感覚」（NHK出版）は、是非読んでいただきたい。）

地域でのトラブルは、知的に高い、自由に外出のできる自閉症児に多い。
がっかりしないで、紳士になるための課題だと考える。
問題行動に対する適切な配慮で子どもは大きく育つ。
ひとつひとつを解決していく。
近所の人・学校の協力　→　電話による苦情に学ぶ。
　　テレビ番組　　＊「女は怖いよ」
性を認め、配慮してやる　異性と出会うチャンスを考慮する
　　洋裁の先生　スタイル画　写真集　アイドル歌手　スイミング

☆感情のコントロールができた。
かっとしているが、必死に我慢している。　理性
しがみついて、離さない。
話して、納得させることができる。
　　自分の行為を客観的に見、笑うゆとりがある。ユーモアを解する。
　　罰を与えるのではなく、社会に受け入れられないことが損なことであると納得することができる。
　　いやいやながらでなく、ルールを守ろうとする。
　　素直に分かって、守ることができる。
　　パニックを起こさない。

☆学校生活の厳しさは、期限付きのストレス
積極的に、精一杯頑張らせた。
頑張った。頑張りぬいた。　→　苦しさは、現在の生活を支えている。
大抵のことは　やれる。「学校より　まし！」
逞しくなった。　（今が幸せ）

２．自立に向けて（適正をみつける、職業指導、子離れ）

1）　自閉症児・者の一般企業への就労も可能となった。

① 企業側の自閉症の人達への理解が増した。→　まず就職して、職業技術を身につける。
②
③ 幼児期より成人期を見通した育児と教育によって就労が可能になって来ている。
④
⑤ その道の専門家による長期の指導を受けることができれば、才能は開発されていく。

２）息子Ｔの場合　　職人への道　　参考「精神科医の子育て論」服部祥子著（新潮選書）

皆と一緒に高校受験を経験させるが、不合格になった。義務教育までで学校生活を終えた。以後、家庭にあって、適切な職種を模索しながら、生活に必要な家庭科を指導してきた。学校生活は学習と試験で占められていたので、卒業で親子共に解放され、生活そのものが楽しかった。「家庭科技術に療育的意味がある」と考え、上達と熟練をめざした。

洋裁へのひらめき

アイロンかけがうまくできない。アイロンの使い方がわるいのは、シャツの構造がよく見えていないから。
自分が縫えば、しっかりとシャツが見えるようになるだろう。
洋裁をさせてみよう！職業に期待する種々の条件を満たしている！

現在も、専門家の個人的指導を受けて洋裁の技術を家庭で習得中である。文化洋裁学院の教科書を参考に、製図をし、型紙を作り、仮縫いをし、縫製する全過程をこなすことが出来るまでになっている。運針を習い、足踏みミシンを使えるようにし、それを使ってエプロンを縫うことから始まった洋裁は、台襟付きシャツ、紳士用ズボン、ジャケット、ワンピース、ブラウス、オーバーコートへと発展した。今は、注文を受けて縫えるまでになっている。ボタンホールとボタンつけは機械ではなく、手でするこだわりようである。

「いとしご」　2009年2月　掲載

「かっこいい洋装店を目指して」

河島高浩

中学卒業後、僕が 17 歳の時、新居浜で店を開いていた次井先生に会って、洋裁を教えてくださいと、母が頼んでくれました。1989 年 1 月から毎週月曜日に先生に来て貰って、家庭用のミシンを使って、エプロン・カッターシャツを縫う練習を始めました。文化服装学院の文化ファッション講座の婦人服・男子服の教科書を 3 冊買って、勉強を続けています。職業用足踏みミシンとロックミシンに買い替えて、本格的に職人の腕を磨いてきました。洋裁をやっていると幸せな気分になります。

寸法を測って原型を作って製図をして、型紙を写して、型紙に合印をつけて、日付けを入れています。母と買ってきた布は水に付けて、型崩れしないようにアイロンで地直しをしています。縫い代を多めに付けて裁断し、切りじつけで合印も付けています。お客さんに着て貰って仮縫いをする時は丁度いいかどうかを鏡を見ながら確かめて、メモ用紙を見ながら製図を補正してから、本縫いに取り掛かっています。

上手に出来上がった時はお客さんが喜んで下さるので僕もすごく嬉しいです。　テーラードジャケット・タイトスカート・シャツブラウス・台襟付きシャツ・登山用のベスト・ブルゾン・ラグランスリーブのブルゾン・ワンタックの紳士ズボン・ボックスシルエットのコート・テーラードカラーのツーピース・ニットのパジャマ・エプロン・帽子など、祖母や両親や親しい人達に縫って喜ばれてきました。

20 年、次井先生の指導を受けて続けてきました。今年は、気を引き締めて、手抜きしないで、専門的な優れた職人をめざして頑張っています。　貼りポケット・切り替えポケット・脇ポケット等が上手に成りたいです。職業用の電動ミシン・ロックミシン・職業用の蒸気アイロンも使い始めました。うまくできなかった時は、ほどいてやり直しをして納得いく洋服を作っています。今は母の春のコートを縫っています。ボタンホールは手でします。　今はパソコンを使って洋裁の勉強のまとめをしています。これからは、洋服のデザインも描きたいです。若い女性たちに縫ってみたいです。将来はかっこいい河島洋装店の看板を出して、高松市で 4 人で仕事をしたいです。

お客さんの声です。

A「高浩さんが縫って下さった服は、私の身体にぴったりで、また、痛む指でもはめやすいようにボタンホールを大きめに、手のサポーターが見えないように袖を少し長めにと、私の身体の事情にあわせて下さり、とても着やすく、またその心遣いが嬉しく心まで温めて下さいました。私の宝物です！！クリーニングに出すと、いつもお店の人に羨ましがられています。また、その美しいシルエットに、みんなが褒めてくださいます。服を着て褒められることがなかったので、本当に戸惑うほどです。有難うございます。」

Ｂ「１９９４年夏、初めて、仮縫いをして、素晴らしいワンピースを縫って頂きました。その後もいろいろな洋服を縫っていただきましたが、どれもいつも丁寧な仕上がりです。十数年前、ツーピースのボタンホールの間隔を５mm 間違えて穴を開けてしまい、自分のお金でもう一度同じ布を買い求め、新しく上着を作り直されました。お客さんに渡すものだから、と作り直されたのです。出来上がったえんじ色のツーピースはシルエットも美しく、見事な手かがりのボタンホールでした。それからは裁断するときには一層気をつけるようになったと伺いました。「失敗は成功の元、またひとつ賢くなったね。」と、お母さんと高浩さんのやりとりが目に浮かびます。「高浩さんが縫ってくださったシャツです。」と言ってボタンホールや裏の始末などを見ていただきますが、どの方もとてもびっくりされます。

今は、製図に力を入れています。文化洋裁学院の製図の仕方が合理的な方法に変わりました。２０年前からの製図法をやめ、最新の本で学び直しています。彼はメジャーを持参し、出会った方々にお願いして、胸囲、腹囲　腰囲、肩幅など測らせてもらっています。それをもとに計算し、先ず４分の１に縮尺した製図をし、それから実物大の製図に取り掛かっています。仮縫いなしで、縫い上げたシャツブラウスが、「ぴったりよ。とても丁寧な縫製よ。よく似合って嬉しい。」と言われます。

計算だけでなく、幾何学にも取り組んできたから製図ができるまでになりました。

河島淳子

３．わかば共同福祉作業所

重度の自閉症青年たちへの療育的挑戦

ただひたすら子どもの要求のままに、嫌がることは一切させないで、過保護にかわいがって育てた青年たちである。このように、躾もされず、いつまでも赤ん坊のように何もかも世話をされて育った自閉症青年は未熟なまま、未発達なまま、大きな歪み（２次的・３次的）をつけてしまっているが、もう手遅れなのだろうか。可能性を信じて、２次的・３次的障害を取り除いていこう。

1)　なりたち

広汎な発達障害を持った自閉症児たちは、その障害の困難さのために、養護学校での療育にもかかわらず、未だ身辺自立さえ不十分です。その上、指示に従えない、集団行動が取れない、情緒不安定等の問題を残したまま青年期を迎えています。このような重度の自閉症児を受け入れてくれる就職先や適切な施設は全くありません。

学校卒業後に行き場がないという絶望的状況の中で「将来に不安を抱き、行政の立ち遅れを憂うより、まず親が動こう、悔いを残さぬようよう精一杯、子どもたちのために頑張ってみよう」と新居浜在住の親達が立ち上がり、作業所設立をめざして「わかば会」を結成しました。資金作りの活動として、廃品回収・日曜市への出店・バザー・賛助会員の募集などに取り組む一方で、会費の積み立てをしてきました。

そして、４年間の活動後、子どもの卒業にあわせて、「わかば共同福祉作業所」を開所することができました。

2)　あゆみ

昭和58年（1983年）	第1回準備会 「わかば会」発足総会			
〃　62年（1987年）	「わかば共同福祉作業所」の開所式	職２	女２	
〃　63年（1988年）	借家を購入 市の補助金が交付される			
平成１年（1989年）	作業所隣接の農地を借りる			
〃　２年（1990年）	男２名入所		女２	男２
〃　３年（1991年）	同農地を購入	職３	女４	男４

3)　特色

１　主に自閉症者の通所施設である。（不安がある。親の老いと死）

２　一人ひとりが大切にされている。

３　家族的なあたたかい集団作りをしている。（古い平屋の借家用住宅　２棟続き）

４　親の願いを大切にしている。

５　地域の人々とのつながりを大切にしている。

６　療育に重点をおき、生活指導と職業指導をしている。

７　専門医と指導員と親との話し合いを密にし、個別にプログラムを組み、適切な療育を心がけている。

（パンフレットより）

4)　取り組み

「少しでも豊かに人間らしく、幸せに」生活できることを願い、次のような目標を掲げて、あきらめないで忍耐強く取り組んでいる。

目標

①　基本的生活習慣の確立

②　規則正しい生活・運動を通して、身体作りと心の安定をはかる

③　その子に適した作業を見つけ、働くことの喜びと自信を持たせ、
好ましい発達をはかる

④　生活年齢にふさわしく生きていくために、

そうじ・洗濯・調理などの家庭科技術を身につけさせる

⑤　生きていくために必要な判断力をつけるために、
言語の発達と知的開発をはかる

⑥　問題行動・異常行動・不適応行動をなくしていく

⑦　地域の中で生きていくために必要な社会ルールを身につける

⑧　遊び方や、余暇の過ごし方を身につける

⑨　これらの目標が家庭でも達成され、正常な親子関係ができる

5)　指導内容

A．生活指導

①　生活習慣の確立　衣服の着脱・食事・排泄など生活の基本となるものを個別に指導している。
最重度者には、課題分析をして、介助を一致させている。

②　マラソン　マラソンと体操は毎日、山歩きは週２回している。

③　調理実習　個別指導で、週２回（ひとり１回ずつ）、全員の昼食を作っている。全過程を教える。

④　裁縫・ミシン　週１回専門家による個別指導をしている。（エプロン　スカート）パッチワーク

⑤　水泳　公共施設を利用して社会性をのばしながら、余暇として愉しんでいる。

⑥　外食　レストランでの昼食会で、楽しみながら社会性をつける機会としている。

⑦　課題学習　生活に必要な基礎学習に取り組み、コミュニケーションの力を増す。

B．作業指導

①　ビーズのれん

②　銅線はずし

③　木工　組み木

④　さをり織り　商品化を考えています。

⑤　廃品回収　週２回、指導員と通所生が地元の地区を回収しています。
地域の人と触れ合える貴重な仕事です。

⑥　畑仕事　野菜を作り、調理実習などで使っている。

⑦　雑巾作り　足踏みミシンで練習している。

⑧　菓子箱折り（畑田本舗から）

⑨　ティッシュペーパーのシール貼り

⑩　ケーキ作り

★わかば共同福祉作業所のその後について

平成10年（1998年）7月1日　社会福祉法人わかば会　「わかば共同作業所」を開設。
現在は、障害福祉サービス事業所　多機能型「わかば共同作業所」として、就労継続Ｂ型12名、生活介護10名の方々が、「知的障害を持つ人達が、一人ひとりが個人として尊重され、地域の中でいきいきと暮らしていける事を目指し、生活・作業活動を通して、労働意欲・社会性・自立心の向上を図る。」「どんなに障害が重くても、ひとりの大人として社会生活ができるように援助していく。職員はあくまで援助者である」という理念・方針のもとに、職員の支援を受けて利用している。

親たちの活動は「友の会」として継続され、市民の理解と支援を頂き、社会法人わかば会は各種事業を営んでいる。

・障害福祉サービス事業所　多機能型「わかば共同作業所」
・障害福祉サービス事業所　多機能型「わかば第2作業所」
・グループホームひまわり寮
・ケアホームこんぺいとう（平成25年4月完成予定）
・「障害者支援施設　新居浜市立くすのき園」（生活介護60名、施設入所支援60名）
・生活支援センターわかば
・支援センターくすのき

Ⅲ　トモニ療育センター

Ａ　トモニ療育センターへの道筋

１　私の子育て

1)　乳幼児期の状態像

私の息子は 1971 年生まれ，乳幼児期には自閉症の特徴はすべて備わっていた（表１）．知的なまなざしに可能性を感じながらも、どう考えてどのように向き合えばいいのか分からなかった。

①　目を合わせない，笑わない，なつかない，ひとり遊び，呼んでも知らん顔（対人関係の障害）

②　言葉が出ない、言葉が遅れる、会話ができない（コミュニケーション障害）

③　特定の物に固執、変化を嫌う（こだわり）

2)　知的障害児の示す障害と方針

言語発達の遅れがあったため、知的発達の遅れを疑った。そこで精神発達遅滞児と自分で診断し、彼らがどんな生き方をしていくのかを「ちえ遅れの子の生活指導」（日本文化科学社）で学び、障害児に向きあう基本的姿勢を固めることができた。

一次的障害‥‥‥‥‥‥脳の器質的・機能的障害

二次的障害（症状）‥‥知的発達の遅れ、言葉の遅れ、運動機能の遅れ、その他・・・

三次的障害（症状）‥‥ ①　身辺の自立ができない　遊べない（社会性）
②　かんしゃく、甘え、わがまま（性格）
③　偏食、虚弱、虫歯、肥満、便秘（身体）
④・・・？

この二次的・三次的障害は、適切な療育（取り組み）によって改善できる。

脳に何らかの障害があれば、二次的障害が出てくる。そして、そのために過保護になったり、諦めたりして育てているうちに、三次的障害（症状）をつけてしまうが、二次的、三次的障害は適切な療育（取り組み）によって改善・解決できるという考え方は私を前向きにさせた。

小児麻痺で次第に歪んでいく身体の変化を思い浮かべながら、「脳の障害は治らない。けれども母である私は、彼の健康な脳の部分の機能をフルに生かして、弱い部分を補いながら、できるだけ二次的・三次的障害をつけない子育てをしよう」と決意した。

3)　どんな人に育ってほしいか

社会の中で豊かに自由に生きていけるように、この人がいてくれて助かるという人、感謝できる人に育てようと常に心がけた。

4)　実際の取り組み

自閉症児に対する育児・教育指導の基本

①　生活環境を整える.
②　母子信頼関係を強める.
③　しっかり一緒に遊び、遊びを広げる.
④　課題学習によって、文字・数字を基に、言葉をはじめ、生きる基本の力をつける.
⑤　基本的生活習慣の確立をはかる.
⑥　体力をつける：幼児期からの山歩きとマラソン.
⑦　全身運動（粗大運動）：　身体の使い方を教える.
⑧　手の機能（微細運動）：　物や道具を適切に扱えるようにする.
⑨　一人で外出し、楽しめるようにする.
⑩　“泣きやかんしゃく”を“ことば”と捉え、問題行動やパニックには原因を洞察し、積極的に適切に対応していく.
⑪　絵や音楽を楽しめるように導く.
⑫　保育所・小学校での集団生活になれさせる.

「脳の発育と生活年齢を考慮に入れて、時期を逃さず適切な指導を十分にしてやりたい」と常に心を配った家庭での育児と教育だった。

①　息子のタンスなど家具の配置や自立してやりやすいように整えた。

②　母子関係を強いものにする努力をすることで、母親を特別な存在だと息子は気がついてくれた。山歩き、文字・数字の指導、また日常活動を共にすることで、より質の高い信頼関係が育っていった。

③　★　遊びによって育てようとあらゆる努力をしたが、遊びによっては、自立方向に導けなかった。“指示しない遊び”では指示が通るようには育たず、学ぶ態度も育たなかった。“楽しくなければ遊びではない”のだから、自閉症児の偏った遊びから脱することができなかった。遊びには次につなげる展望がほとんどなかった。

④　★　文字・数字の指導は幼児期から取り組み、言葉の発達を促進させた。全く同じ文字と文字、絵と絵のマッチングは早くできた。しかし、ひらがなの１文字「あ」が特定の発音「あ」を表していることには、なかなか気づいてくれなかった。でも、いったん表音文字であることを悟ると、すべてのひらがな・カタカナ・ローマ字が読めるようになった。数概念（数の意味）に気づかせるには工夫に工夫を重ねて４年もかかった。サリバンがヘレン・ケラーの教育をしたように、気の遠くなるような実践を私もやった。息子は聞こえていても理解できず、見えていても何のことか悟ることができなかった。コマーシャルはいえても、言葉の効用を気づいていなかった。

⑤　基本的生活習慣の確立のための努力をした。人の何倍もの練習が必要だった。

⑥　山歩きやマラソンは今もやっている。母子関係が強まり、二人に体力をつけ、生活リズムを整え、偏食を改善した。マラソンは自転車で伴走し、継続した。

⑦ 全身運動（粗大運動）は、身体の動かし方のコツがつかめず、ブランコ、ボール投げ、水泳、縄跳び、自転車乗りなどすべてに練習に練習を重ねてやっとできるようになった。身体の使い方のコツをつかむと、まるでそれまでの努力が嘘のように楽しむことができるようになった。

⑧ 手の機能（微細運動）の熟練は将来の職業につながる。模倣ができず、言葉の意味の通じない息子に、手を添えて何度も何度も多くの物の扱いを教えていった。身辺自立のための手、調理や工作の手、手は外界に働きかけ、対象をしっかり把握する。

⑨ 日常の場、すなわちレストラン・デパート・駅・バス・スーパー、電車などを利用し、待つこと、買い物など共に行動し、交通ルール、社会のルールなどを導いた。

⑩ ★ 泣きは乳児期からの最強の伝達方法である。自閉症児はこの“泣きとかんしゃく”を“ことばの前のことば”として、いつまでも強烈に使用する。“泣き”によって何を表現しているのか「ことば」に置き換えて、冷静に適切に対応した。

⑪ 絵には心が反映される。なぐり描きが長く続いたが、ひとふで描きになり、絵日記へと発展した。船を毎日描いた。その船は心の反映した内容豊かなものであった。

⑫ 集団生活は集団に入れて、慣れさせていった。家での過ごし方を詳細に記し、どんな子どもか知ってもらう努力を１２年間続けた。早期からの課題学習の取り組みが就学をスムーズにさせた。

5) 認知の機能の未熟さ・未発達・不全への挑戦

自閉症児の育児と教育の困難さは、彼の認知機能の障害（悟りにくさ・理解しにくさ・判断力のなさ・要領の飲み込みの悪さ・意図したように動けない）に起因していた。

“生半可な理解”の状態が、多くの誤解や失望を生じ、生活年齢が上がるにつれて、トラブルを増大していった。

問題行動・パニック・学習の困難さ・集団行動・人間関係の難しさ・社会のルールやエチケットの学びにくさに向き合って、ひとつひとつを彼が納得できる（理解できる）ように努め、克服してきた。

この克服の営みこそが二次的・三次的障害をつけない子育てだった。そこにはいつも希望と道があり、喜びと感動があった。

学ぼうとしない子・わかりづらい子に学ばせるには、悟りやすいよう常に指導法に多くの工夫がいる。まさに認知の障害への挑戦である。数概念と文字の獲得による読み書き計算、とくに、タイル算による系統的算数指導が彼に生きる力をつけた。

息子は今も決して高機能自閉症でない。中機能自閉症である。今でも自閉症の障害特徴はある。独り立ちしていく判断力はついていない。会話もおぼつかない。でも、生活力は身につき、家事を全般的に助けてくれている。数概念の獲得は洋裁にまで結びついた。18 歳から個人的に専門家のもとで、洋裁の教科書を読み、製図し、仮縫いし、洋服を縫い上げることができるようになった。最近では、知人の洋服も縫わせてもらい、その出来映えに感激されている。

また、昼間は市内の事務機器や文房具などを扱う店で、理解ある人たちに支援されながら仕事もさせてもらっている。自動車部品製造工場で働き、その仕事を大変気に入り、働きぶりを喜ばれた。しかしこの百年ぶりの不況で失業した。

週末には自由に自分で買い物や旅行を楽しんでいる。

★ 自閉症児（自閉症スペクトラム児）は、悟ってしまえば、加速して学べていける。まるでトンネル工事をし、バイパス道路を建設しているようだった。通行できるようになると、視野は広がり、多くのものをはっきりわかるようになった。扇形に理解力は増していった。彼らは極めて困難な障害をもっているが、しかし、真剣に向き合い、諦めないで教育し続けるとき、道が開けてくる。

Ｂ　トモニ療育センター開設

１．家庭療育と母親

家庭は社会生活の基礎を学ぶ場で、一番重要な療育の場である。しかし、その育児が適切でなければ、二次的障害，三次的障害をつける場でもある。一番影響力をもつ母親が子どもを理解して適切に導いていけるように全面的に支援するとき、自閉症児とその家族を救うことができる。そんな思いで、1994 年トモニ療育センターを開設した。

２．トモニ療育センターの内容

1)　目的

自閉症スペクトラム児が、二次的障害三次的障害をできるだけつけないで、地域にあって豊かに自由に人間らしく生きていけるように導いていく。影響力の強い母親が“知識ある愛を持って、行き届いて”自閉症児の育児と教育ができるように、優れた療育者として成長していくように援助する。自閉症スペクトラム児の発達支援に関わっている医師、教育関係者、施設職員などの研修を受け入れている。

2)　形態

⑴　第１回勉強会(火曜日午前)……「療育」「基礎学習」
⑵　第２回勉強会(火曜日午前)……「療育」「基礎学習」
⑶　アイビーズ倶楽部(火曜日午前)‥‥互いに語り合い、療育相談を受ける交流の場
※現在は、必要に応じて適時開催する。

⑷　個人セッション‥‥月１回

①　母親または両親と子どもが来所し、個別に課題学習（約８０分）を実施し、その子の現状を総合的に観ていき、無理のない適切な合理的な課題学習の具体的な進め方を療育者である母親（研修生）に指導する。
②　その場で現れる子どもの不適切な表現について、その様子を観察しながら、家庭での向き合い方などアドバイスをしていく。
③　その子どものことだけでなく、家族、療育者自身を含めた極めて個人的な療育相談の場でもある。研修生が同席して学んでいる。

⑸　**家庭生活記録、個人セッションレポート、講義レポート、アンケート、一年間の実践レポート**

①　母親は家庭での課題の取り組み、子どもの様子・状態を記録し、2,3日毎～１週間毎にメールやFAX.で送信する。この記録を元に母親に適切なアドバイスと支援をしている。記録は最も重要である。できるだけ早く適切な対応している。
②　問題行動が多発している場合は緊密に携帯メールで連絡を取り、指導し、支えている。
③　コミュニケーション・シーンの再現用紙にその時の困った状況を詳しく記録してもらい、母親が適切な育児と教育ができるように、援助している。
④　記録することによって、より適切な家庭療育ができるようになる。職員と母親との信頼関係が一層深まり、孤独な母親を支える。

⑹　父親懇談会を現在は年１回開いている。療育に対して家族共通の適切な姿勢がなければ好ましい育ちは望めない。子育ての共同責任者である父親にこの療育の困難さ、この障害の重大さ、適切な療育の大切さ、そして父親の役割の重要性などを認識してもらう。

３．自立をめざした具体的目標

個別課題学習を中心において、できるだけの自立をめざして具体的目標に向かって取り組んでいくとき、その課程で、情感的、精神的豊かさをも育んでいくことができる。

トモニでは、ＦＡＸやメールによる家庭生活記録から療育の状況を読みとり、問題行動やパニックなどにもきめ細かな指導をしている。また、月 3 回の親の学習会（１回はお好み焼きを囲んでの懇親会）を開いて、“知識ある愛”の補給に努めている。

具体的目標（できるだけの自立をめざして）

① 基礎学習と家庭科技術と職業技術の３種を同時進行で獲得させていく。
② コミュニケーション力をつける
③ 身体作り、粗大運動、微細運動ができるようにする。
④ 基本的生活習慣の確立をする。
⑤ 問題行動やパニックを克服する。
⑥ 社会的に受け入れられる行動や奉仕作業ができるようにする。
⑦ 余暇を楽しみ、生活を楽しむことができるように

読み書き計算の基礎学習と同時進行で家庭科技術（料理）を課題とし、同時に職業技術（ビーズのれん作り、ボールペンの組み立て、箱づくり、折り紙）などに取り組めば、幼児から青年まで長期にわたって一貫した指導が継続できる。

この指導法は、年齢にとらわれずどんな自閉症児・者にも適応できる。また、幼児期から学童期へ移行、学校生活から社会生活への移行を容易にする。

４．子どもの把握のための検査

適切に課題学習で導いて行くために、『親による子どもの紹介』（問診票）をあらかじめ詳しく読んだ上で、PEP-R,ITPA,K-ABC,WISC-Ⅲ等の検査用具を駆使して、マッチングや分類する力があるのか、大きさ・形・色などが判断できるのか、文字と絵の関係に気づくのか、数字の見分けがつくのか、どんな領域が強いのか、どんな領域を不得手とし、嫌がるのか等、できるだけ詳細に本人の力を把握する。

そして、その子に見合った無理のない方法でわかりやすく課題学習の指導をしていくと、子どもはわかる喜びを味わい、褒められて自信をつけ、学ぶことに意欲的になっていく。

５．自閉症児の学習困難の症状の背景

自閉症児は、学習態勢が整わない上に、認知の障害をもっているので、指導が難しい。

①　学習態度、状態

大泣きする，多動，椅子にじっと座れない，待てない，声を出す，唾をかける，かみつく，パニックを起こす，模倣ができない，模倣が下手，模倣をしない，指示に従わない，教材を見ようとしない，話を聞かない，自発性がない，難しそうな課題に激しく抵抗する

②　認知障害

悟りにくい，関係性がわかりにくい，コツ（要領）をつかみにくい，しゃべれない，いわれている意味がわからない，応答できない，指示がわからない，模倣できない，文章の内容がつかめない，数の概念が入らない，表音文字に気づけない，色や形の名称が入らない，興味のないことは覚えない，応用がきかない，手指がうまく使えない。

６．　それでも自閉症児は教育できる

どんな自閉症児も、手を添えて、分類やマッチングをさせてあげているうちに、次第に慣れて課題を見るようになり、課題の意味も理解できるようになっていく。そして、課題学習に喜びを見出し、学びは加速していく。手を添えて身辺自立を助けたように、手を添えて学ばせてあげ、手を添えて料理をさせてあげ、手を添えて掃除をさせてあげ、手を添えて遊ばせてあげる。そのうちに理解して、判断して自分で学び、働き、遊べるようになっていく。

７．　自閉症児は可能性をもっている――教育できる力を備えている

① 身体的な障害はない。目も耳も口も手も足も役立つように導いていける。
② 興味のあることは、凝る、記憶する、集中する、観察する力がある。
③ 一度悟ってしまうとスムーズに前進でき、積極的に自主的に取り組める。
④ タイル算などの系統的な構造化した一貫した指導にのれる。
⑤ 言葉がなくても熟練した職人になれる。

８．見通しをもって育てる　―　学童期までの育ちによって、思春期像が決まる

① 早期に手を添えた教育を開始する。身体の小さい幼いときからはじめる。
② 生活年齢と性を考慮した育て方（とくに排泄指導）をする。幼児扱いをしない。
③ 喜んで指示に従って共に行動できるようにしておく。
④ 家事（とくに料理）を親子で楽しみ、室内でできる趣味となるものを育てておく。
⑤ マラソンに取り組む。山歩きを楽しむ。

９．　トモニ療育センターを巣立った母と子

どの人も思春期を大した問題もなくうまく通過している。自閉症の障害を持ちながらも、家事ができるようになっている。家族に必要とされ感謝されて、家族とともに生活ができている。たとえば、基礎学習のできたＡ青年は、本格的にものさしや分度器を使って木工技術を学んでいる。夢と希望をもって今を大切に生きている。

自閉症児の療育について専門知識を得て、子どもの言動の意味がよく分かるようになった母親たちには、戸惑いがなくなり、子育てを楽しむゆとりさえ出てきている。明るくたくましくなった。父親も子育てに積極的に参加するようになり、両親が同じ知識、同じ見方、同じ思いで協力し合うようになってくると、子どもの状態は確実によくなり、家族が幸せになってきている。「今は楽をさせて貰っている。きちんと育ててきてよかった。分かりづらいけど、私達と同じね」と、ある母親は明るくいう。

よりよい育児と教育を求めて

1　自閉症児は、外見からは考えられない重大な広汎な発達の困難性を持っていて、徹底した療育を必要とする。　育たないのではなく、育ちにくい、育てにくい。

2　適切な一貫性ある継続的な取り組みによって、その子なりに好ましい成長・発達をはかることは可能である。

3　自閉症児は、歪みやすく、非常に育てにくい子どもであるが、どの子も可能性を秘めており、非常に魅力ある。純粋な愛すべき子どもたちである。人間の素晴らしさを、生きることの意味を教えてくれる子どもたちである。

4　「２次障害や３次障害をつけないように」というのは、実に大変難しいことであって、育てる側が、常に学び、考え、成長していかなければならない。母親のための学習会を頻繁にし、問題や悩みは早期に解決していかなければならない。

5　自閉症児は、気がつくと「すでに２次的・３次的障害をつけている」状態である。それを早期に取り除くことができる。

6　「ひとつの行動・状態が将来どんな大きな問題・困難を引き起こすか」を常に考える必要がある。

7　自閉症児の子育ては、根気の要る、困難な、孤独な仕事である。様々な問題に対処していかなければならない。母親はストレスが溜まり、成果の上がらぬことに自信を無くし、孤独になり、疲れ果て燃え尽きる。母親への頻繁な精神的援助が必要である。

8　「のんき　こんき　げんき」
不安の内に、未来に幸せを求めて、ひたすら努力するのではなく、現在を肯定し、感謝して生きられるゆとりを持ってほしい。

9　兄弟姉妹も孤独にしてはいけない。兄弟姉妹への配慮が必要であるが、多くの犠牲を強いることになる。父親の大きな協力がいる。

10　「ありのままを受容するのがよい」という人がいるが、「ありのまま」が教育者によって、どんなに千差万別なことであるか。育てる側が貧弱な心や観察力を持っていた場合には、子どもの「ありのまま」からは、可能性も豊かさも素晴らしさも見つけられない。障害児の「可能性」が無視されていることが多い。

11　「自分の見方・考え方・取り組みは、正しいか、偏見か、諦めか、無理押しか」と育てる側は、常に謙虚に吟味し、反省する必要がある。

12　すでに大きな歪み（２次・３次的障害）をつけて育ってしまった自閉症者も、適切な取り組みによって、発達を促し、ゆがみを取り除くことが確かに可能である。
諦めたり、見捨てたりすべきではない。彼らの人生はこれからなのだから。
彼らも共に地域で生きる幸せから、除外されてはならない。

13　障害には３種類ある。

①　障害そのもの……脳の損傷
②　その結果の能力障害……奇妙な話し方、動作、知的おくれ　運動障害
③　能力障害からくる社会的障害……差別、警戒、違和感、無理解、非協力、無知
　　・親にとっては、この社会的障害が一番辛い。
　　特に「先生」の言動によって、家族は大きく一喜一憂させられる。

教師は暴君にも神様にもなりうる。
教師は、人格者であると共に、高度の技術を持っていることが望まれる。
・社会的障害を少なくしていかなければ、弱い立場にあるこの人たちは、いかに努力しても決して、幸せにはなれない。

14　保育士、教師など療育に携わる人

①　療育におけるリーダーである。従って、影響力が大きい。

②　親の気持ちを察し、共感できるか否か。
その子の人生の一定期間に関係し、その間だけ療育の責任を持つ故に、他人事になってしまう。
療育には、知識ある愛（共感）と強い信念とエネルギーが必要である。親の無限の愛とかなしみを感取し、その立場になって子供を慈しみ見つめる熱い思いがなければ育てられない。

③　脳の障害は容易なものではない。育てる上で多くの困難がある。
自閉症児は理解しにくい、共感しにくい、歪んでいる、更に歪む。
コミュニケーションがうまく取れない。子供がつかめない。指示に従わない。多くの問題を、子供の障害の故にし、諦めがちである。
諦めからは、何も生まれない。情熱を必要とする。
切実な思いから、工夫が生まれる。

適切さと一貫性と継続性の全てが揃っている場合のみ、よりよい成長がある。
一貫性と継続性を維持するためには、療育関係者のチームワークが絶対に必要である。
子供の人生の流れ（生活年齢）に添って、一貫した適切な療育をリレーしていかなければ、さまよえる舟となって、目的地へはたどりつけない。

④　共に生活をしている母親は子供についてたくさんの情報を持っている。謙虚に耳を傾け、母親の思いと共に子供に関するの情報を得て、子供のことが見え、よくわかるようになることが、コミュニケーションの第一歩である。コミュニケーションは、好意をもって子供を見つめることから始まる。

⑤　無知は、罪である。
医師は、病気について熟知し、自分の決定した処置・処方に責任を持つことを当然とされる。直接、生命にかかわることだから、好意・善意だけでは、医療行為はできない。間違った医療は、命を奪う、命を損なう。家族は、治してもらって当然と思っている。困難な病気には、最高の医療が必要である。

教師も、人間の最も大切な魂・精神を扱う。
しかし、子供は、適切ではない取り扱いをしても、すぐに結果が出てこない。
適切でない、教育の結果は、子供が大人になる頃、だんだんと明らかになる。
しかし、出てきた困った結果に対して誰も責任を持たず、「障害児がもともと重度であった」とされ、家族もそれに納得している。
自閉症児にも、最高の療育・教育が必要である。

2005 年版　講演資料集
「自閉症児とともに」－母として小児科医として－より

青年期の取り組み

わかば共同福祉作業所「療育実践報告」より
1987年5月～1989年1月

３．無認可「わかば共同福祉作業所」の設立　　１９８７年（昭和６２年）５月

―― 強度行動障害を持つ自閉症の青年たちへの療育的挑戦 ――

ただひたすら子供の要求のままに、嫌がることは一切させないで、過保護にかわいがって育てた青年たちである。このように、躾もされず、いつまでも赤ん坊のように何もかも世話をされて育った自閉症青年は未熟なまま、未発達なまま、大きな歪み（２次的・３次的）をつけてしまっているが、もう手遅れなのだろうか。可能性を信じて、２次的・３次的障害を取り除いていこう。

(1) なりたち

広汎な発達障害を持った自閉症児たちは、その障害の困難さのために、養護学校での療育にもかかわらず、未だ身辺自立さえ不十分です。その上、指示に従えない、集団行動が取れない、情緒不安定等の問題を残したまま青年期を迎えています。このような重度の自閉症児を受け入れてくれる就職先や適切な施設は全くありません。

学校卒業後に行き場がないという絶望的状況の中で「将来に不安を抱き、行政の立ち遅れを憂うより、まず親が動こう、悔いを残さぬようよう精一杯、子供たちのために頑張ってみよう」と新居浜在住の親達が立ち上がり、作業所設立をめざして「わかば会」を結成しました。

資金作りの活動として、廃品回収・日曜市への出店・バザー・賛助会員の募集などに取り組む一方で、会費の積み立てをしてきました。

そして、４年間の活動後、子供の卒業にあわせて、「わかば共同福祉作業所」を開所することができました。

(2) あゆみ

昭和58年（1983年）	第1回準備会 「わかば会」発足総会		
〃　61年（1986年）	市議会へ陳情書を提出し採択される		（通所生数）
〃　62年（1987年）	「わかば共同福祉作業所」の開所式	職員２	女２
〃　63年（1988年）	借家を購入 市の補助金が交付される		
平成１年（1989年）	作業所隣接の農地を借りる		
〃　２年（1990年）	男２名入所		女２　男２
〃　３年（1991年）	同農地を購入	職員３	女４　男４

(3) 特色

① 主に自閉症者の通所施設である。（不安がある。親の老いと死）

② 一人ひとりが大切にされている。

③ 家族的なあたたかい集団作りをしている。（古い平屋の借家用住宅　２棟続き）

④ 親の願いを大切にしている。

⑤ 地域の人々とのつながりを大切にしている。

⑥ 療育に重点をおき、生活指導と職業指導をしている。

⑦ 専門医と指導員と親との話し合いを密にし、個別にプログラムを組み、適切な療育を心がけている。（パンフレットより）

(4)　取り組み

「少しでも豊かに人間らしく、幸せに」生活できることを願い、次のような目標を掲げて、あきらめないで忍耐強く取り組んでいる。

★目標

①　基本的生活習慣の確立

②　規則正しい生活・運動を通して、身体作りと心の安定をはかる

③　その人に適した作業を見つけ、働くことの喜びと自信を持たせ、好ましい発達をはかる

④　生活年齢にふさわしく生きていくために、掃除・洗濯・調理などの家庭科技術を身につけさせる

⑤　生きていくために必要な判断力をつけるために、言語の発達と知的開発をはかる

⑥　問題行動・異常行動・不適応行動をなくしていく

⑦　地域の中で生きていくために必要な社会ルールを身につける

⑧　遊び方や、余暇の過ごし方を身につける

⑨　これらの目標が家庭でも達成され、正常な親子関係ができる

(5)　指導内容

A．生活指導

①　生活習慣の確立
衣服の着脱・食事・排泄など生活の基本となるものを個別に指導している。
最重度者には、課題分析をして、介助を一致させている。

②　マラソン
マラソンと体操は毎日、山歩きは週２回している。

③　調理実習（２名）
個別指導で、週２回（ひとり１回ずつ）、全員の昼食を作っている。
全過程を教える。

④裁縫・ミシン
週１回専門家による個別指導をしている。（エプロン　スカート）
パッチワーク

⑤水泳
公共施設を利用して社会性をのばしながら、余暇として愉しんでいる。

⑥外食
レストランでの昼食会で、楽しみながら社会性をつける機会としている。

⑦知的開発・学習指導
障害があるからこそ生活に必要な基礎学力に取り組み、コミュニケーションの力を増したり、認知力を高めて促進している。

Ｂ．作業指導

① ビーズのれん
② 銅線はずし
③ 木工　組み木
④ さをり織り　商品化を考えています。
⑤ 廃品回収　　週２回、指導員と通所生が地元の地区を回収しています。
　　地域の人と触れ合える貴重な仕事です。
⑥ 畑仕事　野菜を作り、調理実習などで使っている。
⑦ 雑巾作り 足踏みミシンで練習している。
⑧ 菓子箱折り（畑田本舗から）
⑨ ティッシュペーパーのシール貼り
⑩ ケーキ作り

４．　わかば共同福祉作業所の実践

「療育実践報告書」１９８７年5月～１９８７年１１月

入所者２名　１８歳のＮさんと２０歳のＴさん（女性）　　養護学校高等部卒

Ｎさん

①入所時の状態　（１８歳）　　最重度
指示に従えない。何も自分でしない、できない（基本的生活習慣）
大声、顔を紅潮する、髪をひっぱる、突き倒し、物をなげる　唾かけ　肥満
言語は少なく「ごめんなさいハイ」「車で帰るん」　会話なし　不眠
箸が使えない。

②現在の状態　　（２２歳）　　軽度化し、存在が目立たなくなった。
基本的生活がほとんど自分で出来るようになり、生理の始末もできる。
情緒が安定し、幸せそうな活き活きとした表情がでた。自主性もでた。
会話が増えた。「施設行かんのん」
問題行動は作業所ではほとんどないが、油断できない。常同行動が減る。
母親がＮに料理の指導をできる。　　家では、唾かけが直らない。
料理（カレーライス、おでん）ができる。　裁縫（こたつかけをつくる）
ビーズのれん作りは、一人で作業できる。
箸でゆでたまごをはさめる。レストランが好き。山が好き。水泳が好き。

☆現在７名
３人の指導員でみている。全員が目立ってよくなり、生き生きしている。
作業所ではよくなっても、母親が変わらなければ、家庭では状態が悪い。
作業所では、家庭生活がうまくいくように、子供を育て、援助している。
親が変われば、子どもも変わる。親が変わらなければ、子どもは変わらない。
親の責任は大きい。

基本的生活習慣をつけることに最重点をおかなければならぬ人も数人あるが、取り組めば、発達の変化がみられる。小さな変化にわくわくさせられながら、ひとりひとりのかけがえのない命に向き合う日々である。

５．わかば共同福祉作業所の療育実践報告（１９８７年１１月）

入所者２名　　Ｔさん　（昭和４２年生まれ　　入所時２０歳）
　　Ｎさん　（昭和４３年１０月生まれ　入所時１８歳）

１９８７年５月の開所以来、次のような目標を掲げて取り組んできた。当初、５項目にしていたが、具体的に焦点を合わせて取り組まなければ、改善が難しいと考え、９項目に細分した。

① 基本的生活習慣の確立
② 規則正しい生活・運動を通して、身体作りと心の安定をはかる
③ その子に適した作業を見つけ、働くことの喜びと自信を持たせ、好ましい発達をはかる
④ 生活年齢にふさわしく生きていくために、そうじ・洗濯・調理などの家庭科技術を身につけさせる
⑤ 生きていくために必要な判断力をつけるために、言語の発達と知的開発をはかる
⑥ 問題行動・異常行動・不適応行動をなくしていく
⑦ 地域の中で生きていくために必要な社会ルールを身につける
⑧ 遊び方や、余暇の過ごし方を身につける
⑨ これらの目標が家庭でも達成され、正常な親子関係ができる

指導員は元ベテランの保育士であり家庭のよき主婦でもあり、そして、自閉症の女性は体力的にも体格的にも大人であったので、子どもに指導するような訳にはいかなかった。目標に一歩でも近づくためには、まず指導員の指示に従える関係作りをしなければならないが、この関係は
①「通所性の状態に振り回されないで、するべき事は対決してでもさせる」
②「させ始めたことは、決して途中ではやめない」
③「どんな些細なことでも根気よく指導を続けていく」
④「中途半端な事はさせず、やり直しをさせる」
⑤「最後まで忍耐強くできた時や完成された時には大いにほめる」
などの一貫した指導方法の中で次第に形成されていった。

※ ここでは１８歳女性のＮさんに焦点を当てて、その取り組みを記してみる。手遅れでは無いが、時期を逸した療育の取り組みは極めて地味で重労働である。Ｎさんを思うとき、再びこのような無知な取り組みはしないで欲しい。幼いときから見通しをもって早期にそだてて欲しいと願わずにはいられない。

（1）目標の現状と今後の課題

1）基本的生活習慣の確立（自分のことは自分でする）

Ｎさんの場合

入所当初、作業所の生活すべてに指示が必要であった。指示をしないと自分では何一つしない状態だった。「靴をぬいで」「片付けて」「カバンをここにかけて」等、指示されたことの意味がわかっていてもなかなか動かないので、何度も何度も指示して一緒に行動するという方法をとっていった。

現在は、指示されても動かなかった頃に比べれば、大進歩で（いまだに、自分では何をするのか分かっているのに指示をされるのを待つ傾向はあるが）指示に従うことだけでなく、食事の用意・衣類の着脱・山歩きの準備などは自主的にできるようになった。

今後は、介助が必要な排泄の後始末が自分でできるように頑張りたい。

(1) 食事

月毎に初期の取り組みとその変化を述べてみる。尚、Ｎさんは開所１ヶ月前の４月から、慣れるために通所した。

１９８７年　4月・5月

当初の昼食時の状態には、楽しさはなく、むしろストレスになっていたように思う。彼女は【座ったら、自分の前にご飯が用意されている状態の生活】をずっと大人になるまでしてきていたので、自分で準備しなければならない生活には抵抗があり、また、やってみようという気持ちも無く、その上、基本的な、物の操作技術も未熟だった。

食前の「いただきます」の挨拶の前に、「お弁当、とっておいで」を指示されて、自分で弁当の袋をバッグより出してきて、着席することはできていたが、袋からは指示がないといつまでも弁当箱が出せなかった。チャック（ファスナー）の操作が面倒なこともあったと思われるが、それよりも、ファスナーのどこを持てば袋が開けられるのか分からず、２回ぐらいは試みるがすぐやめてしまい、指導員のいちいちの指示と介助がひ

つようであった。
　そして、弁当箱がやっと出せても、自分では弁当箱を開けずじっとしているので、指導員が「食べないの」と聞くと、やっと箱を開ける状態だった。弁当箱を開けても自分でとって食べようとしないので、指導員が「要らないの？」と言って弁当箱と引いて片付けようとすると、手で取られないように箱を押さえて、やっと一口食べるのだった。そして、やっと一口入れても、噛まないでじっとしている状態だった。
　一定の食事時間が過ぎると、食べていなくても、指導員が目の前で弁当箱の中身をポリ袋に捨てた。そんな時Ｎさんは指さしして、「もっと食べたい」と意思表示することもあったが、「食事時間が過ぎると、もう食べられないのだ」と意識付けをするために、心を鬼にして指導員は頑張った。けれども、あまり食欲がないようで、「捨てられるから、はやく食べよう」という気持ちは全く育たないようだった。
　弁当箱のファスナーの開閉ができるように、山歩きの時、ファスナー付きのウエストバッグを身につけさせて、練習の機会を増やした。また、弁当袋は、弁当箱を入れたとき、少し余裕のある大きめの物に替えて、操作をしやすくし、言葉がけだけでＮさんに練習させていった。
　「自分で弁当箱を開けないと食べられない」ということを分からせるために、指導員は絶対手を貸さないことを徹底した。その代わり、ファスナーの開け方を、手を取り言葉を掛けながら、全介助で繰り返し繰り返し練習させた。

６月
　指示をすると、弁当袋より弁当を出すことができるようになった。

７月・８月
　暑いためか食欲が無く、食べ残しが多かったが、一定時間が来れば片付けさせた。課題として、［自分の使ったコップを洗って、片付ける］までをさせ、つきっきりで「中洗って」「コップの周り洗って」等と、次にするべき行動の指示をして洗わせた。また、弁当箱を出した後の弁当袋を所定の場所に置かなければ、彼女の好きなお茶を渡さないようにして、しつけをしていった。

９月
　お茶が欲しくて弁当箱を自分からすすんで出すことができた。

　体重：食欲が少し出てきたので、指導しやすくなり喜んでいたが、９月１０月の２ヶ月で体重が７kg増加し、７６kgになってしまい、以後どんなにしても減少できず、むしろ増加傾向にある。いったん肥満してしまうと、余程の努力をしないかぎり、普通の人でも痩せることは困難だが、食べることが唯一の楽しみであったり、「痩せたい」という気持ちの無い障害者の場合は極めて難しい。ちょっと油断すると増加していくので、食物の供給源である母親と話し合いを密にして、食生活の管理をしていく必要がある。
　紐結びの練習開始：河島の講演資料からヒントを得て、指導員が紐結びができる弁当袋を作製し、Ｎさんの手をもって全介助で紐結びの練習を開始した。

１０月
　全然紐結びをしようとしない。しようとはしないけれども、手を添えてさせていった。
　　①　「はい　ペケにあわせて」
　　②　「この穴の中に入れて」
　　③　「はい、引っ張って」
　この①②③の声掛けを変えないでいつも同じ声換えをしながら、手をとって全介助で毎日毎日練習させた。自閉症児者は模倣力が弱かったり、全く模倣しようとしないが、全介助で手をとって指導していくことができる。

１１月
　同じ要領で紐結びを続けていたが、課題の紐結びになると、紐を自分で持ち始めるようになった。そこで、「紐をほどく」という課題も入れ、練習を始めた。先ずゆるく指導員が結び、それをほどかせた。家庭でも協力してもらい、弁当袋を「真結び」で結んでくるように変更したが、Ｎさんは食べたい一心で何度もほどこうと試みていた。

１２月
　食べる動作が速くなってきた。また、卓上の弁当箱、箸の置き場所、弁当袋の置く位置など、全て一人でできるようになった。台拭きは指導員がついて「上、真ん中、下」などの声掛けをしながら、拭く場所を指さし

て教えることが必要だったが、少しずつ時間は短縮され、速くできるようになっていった。

１９８８年　１月
午前の作業が食事時間になってもできていないことが時々あり、作業能率を上げるために、食事時間が来れば、それまでのようにNさんを待つのをやめて、他の皆は食事の準備を始め、先に食事を始めることにした。そして、Nさんにはひとりで準備して食事の時間内に食べ終えるように仕向けた。この置いてきぼりの経験によって、時間内に午前の作業を逐えようと気を遣わせた。

２月
ひとりでさせてみると、食事の準備の手順はよく分かっており、作業は前と同じペースだったが、食事の準備は手早く行い、皆と同じ時間内に食べ終えることができた。手順が分かっていることが確認できたので、以後あまり口を出さないで指導することにした。

３月
食べたいという気持ちが、「真結びをほどく」意欲をわかせ、頑張らせてくれて、上手にほどけるようになった。結ぶ練習の方も、自分で少しクロスさせるようになり、自分ひとりでできる部分が見え始めた。
このころから、指導員は［傍で口出しをしないでじっとみつめる］指導法に変えた。全ての動作にぴったりくっつかないで、少しずつNさんひとりでできる部分を増やしていくようにした。

５月
最後の「台拭きを洗って干す」ところを洗わないで片づくようとしたので、「Nさん駄目」と声をかけたが、後は細かく言わないでもできるようになった。
★５月６日
遂に真結びができた。８ヶ月かかって「真結び」の技術を獲得できたわけである。指導員の方が感激してしまった。根気よく細かいステップで毎日継続して指導していくことの大切さを再確認した。

６月
「Nさん、食事の用意をして」と言うと、彼女は自分から台拭きを取り、洗って机の方へ行くようになった。

１０月
１９８９年１０月現在では、「真結び」の技術の獲得によって、手助けしなくても食事の準備から片付けまで自主的にできるようになっている。しかし、時間を一向にきにしないで、時間がかかりすぎるので、Nさんに合わせないで、後の３人はさっさと食事を始めることにしている。「はやく準備しよう」という自覚を促したいと考えている。
最近では、食べたくなくなると、弁当箱の蓋をさっと閉めて、片づけをするようになってきた。食事時間は、もうすっかり楽しい一時になっている。

⑵　衣服の着脱
月毎に初期の取り組みと変化を述べてみる。

４月
ひとつひとつ指示をしないと、何もしないで立っている状態だった。衣服をたたむときは、必ず正坐をさせて、「今はたたむのだ」ということを意識させようとした。たたみ方も毎日同じようにし、その時の言葉がけも常に同じ表現をとった。

５月
脱ぐことのみ自分でできるようになった。着ること・たたむことには言葉掛けが必要だった。「着替えないと散歩に行けない」などと、するべきことをしないと次の動作に移ることができないことを分からせるために、作業所の生活パターンを一定に決めた。またやり方を教えると共に、できるまで繰り返し繰り返し行わせた。
着替えの時集中しないでキョロキョロ辺りをみることが多いので、カーテンを吊して更衣室を作った。「着替えはカーテンの中で」と、人前で裸になってしないように意識付けをしていく必要があった。自閉症の人達には恥ずかしいという気持ちも育ちにくいので、「場所柄をわきまえる」ことにポイントを置き、その場に相応しい行動の仕方をエチケットとしていちいち教えていくように心がけている。幼児扱いのまま大人にしてしまったエチケットの問題は大きい。

６月
　カーテンで部屋を仕切ることによって、キョロキョロすることは少なくなった。衣服の着替えが、脱ぐこと・着ることが自分でできるようになった。しかし、暖かくなったので、下着のままで寝転がり、着替えがなかなかすすまなくなってきた。そんなＮさんに「散歩にいくよ」と言って、はやくするように促したが、言葉掛けだけでは分からないので、実際に他の人は散歩の準備を始めて、「もう出掛けるよ」ということを感じられるようにした。それでもできないときは、その場に放っておいて、出掛けた。（実際は屋外で様子をみていた。）

７月
　指導員が一緒にいると、脱いだ衣服をたたむとき、わざと正坐をくずしたり、指導員の顔色を伺うことが多くなってきた。指示をしてもなかなか動こうとせず、行動が遅くなった。指導員を試しているようなので、Ｎさんを無視することにして、それまで「着替えなさい」と言って更衣室に入っていた指導員も、声を掛けるだけにして、更衣室から出てくるまでひとりにするようにした。

８月
　朝の着替えは「散歩のいくよ」と繰り返し言うと、約１時間かかって出てくるようになった。夕方は母親が迎えに来ると更衣室から出てくるのだが、着替えがなかなか進まないでいつまでも更衣室から出てこないときは、折角迎えに来て貰った母親に気の毒でも一度帰って貰い、Ｎさんを置いてきぼりにした。カーテンで仕切った個室はＮさんにとっては、ホッとできる快適な個室だったのだと思う。しかし、置いてきぼりの苦い経験によって、帰りの着替えは速くなった。

９月
　やっと１５分から２０分で着替えを終えて更衣室から出てくるようになった。Ｎさんは一応脱いだ衣服をたたんではいたが、裏のままで表に返すことはできていなかった。しかし、「ひとりでできた」ことは誉め、裏返しは指導員の前できちんとやり直しをさせた。

★９月より体操を日課に加えた。

１０月
　更衣時間はその日の気分に左右されることもあったが、着替えの後、体操・作業共におこなってから、散歩に出られるようにスムーズになってきた。

１１月　同じ状態。

１２月
　寒い季節を迎えたためであろう、着替えははやくできるようになった。しかし、脱いだ物をたたむことに時間が掛かるようになった。たたむ折り、袖をひとつ折っては、手を振ったり首をふったりなどの自己刺激行動をやってひとつ動作に集中できないので、指導員が傍について「つぎは？」と尋ねて行動を誘導して、遊びを入れないようにしていった。

１９８８年　１月
　時々脱いだ衣服の裏返しもできるようになってきた。裏と表の区別がついていなかった。袖を裏返して折角表にした物を、更にもう一度持ち替えて裏返しにするので、元の裏側になってしまう。表裏の判断がついていないので、持ち替えさせないように指導しようと思う。

２月
　まだまだその日の気分で、速くできたりゆっくりできたりした。下着のままでは寒いので、服ははやく着るようになった。しかし、たたむ方は声がけで促してもなかなかできない状態。

３月
　２月と同じ状態で相変わらず脱いだ衣服をたたむのに時間がかかっていた。着替えの次の予定が体操なのが嫌なので、余計遅くなるのではないか、と考えて、着替えの後の体操を止め、先にＮさんの好きな山歩きに行って、帰ってから体操をするようにスケジュールを変更してみた。

４月
　すると、ゆっくり着替えをしていても、散歩の時間になると、慌てて更衣室から出てくるようになった。指導員は更衣室に顔を出さないで、「Ｃさん、散歩の用意をしよう」「戸を閉めてね」とＮさんを無視してＣさんに声を掛け、Ｎさんの行動を刺激した。

５月
　下旬より、着替えができるようになると、自主的に更衣室から出てくるようになり、あたかも「裏返しを点検してください」というように、籠を指導員の前に出すようになった。自主的に出てきた時には「早かったね」と誉め言葉を掛けるようにした。

６月
　ほとんど自主的に更衣室から出てくるようになった。けれども、裏返し・たたみ方はやり直しが多い状態だ。深刻な認知の障害を改めて思った。

△　　△　　△　　△　　△

　Ｎさんの着替えについては以上のように、マンツーマンで「脱いで」「着て」と常に指示を与えながら、自分で出きる能力を引き出していったが、指導員に指示されるまでじっと待っている状態が続いた。着替えがひとりでできると判断したところで、更衣室でひとりでさせると、「すでに着替えは済んでいるのに、次の指示が無いと、１時間も更衣室から出てこない」ということがあった。このことは着替えの次に大好きな山歩きを組み合わせ、楽しい期待を与えることによって、自主的に更衣室から出てくることができるようになった。
　現在では、衣服の表と裏の違いは認識できるようになったが、それは、指導員がつきっきりで衣服を表に直させたり、裏返す工程のある「綿を詰めた布のボール」作りや「お手玉」作りをさせるなどいろいろ関わってきた成果だと思っている。衣服の表と裏の違いが認識できるようになると、Ｎさんは裏になったままの衣服を指導員に突きだし、「あっはー」と要求の声を出すようになった。それで今は「あっはー」の要求を「表にしてください」と言わせてから手助けをしている。
　衣服を表にかえす技術はまだ獲得できていない。Ｎさんにとっては裏のまま着用しても何ら不快感があるわけではないのだから、意欲的に取り組ませることは難しい。又、自閉症の認知障害のために、彼女には非常に難しい課題のようである。
　今後は衣服の裏表には深くこだわらないで、［ハンガーに服を掛ける］［ボタンやファスナーが上手に扱える］など他の分野に目を向ける考えである。

(3)　排泄
　月毎に取り組みと変化を述べる。

１９８７年　４月
　Ｎさんは前を手で押さえ、身体を上下にゆするといった尿意表現が多く、「行きなさい」と指導員が声を掛けると、トイレまで行くが、立ったまま後ろを見て、指導員が来てくれるのを待っている状態であった。ペーパーをとること・手洗い、戸を閉めることなど全てに指示が必要であった。

５月
　作業所では、尿意表現が一度もなかった。指導員が指示して一度は行かせるようにした。

６月
　同じ状態が続いた。
　生理の処置は全て、言葉と手を添えて自分でさせていたが、使用済みのナプキンを手で触ることを少々嫌がった。生理の処置は、
　　①　ナプキンはペーパーでくるんで所定の箱に入れる。
　　②　拭く。
　　③　ナプキンを丁寧に当てる。
　　の状態で必ず自分でさせるようにした。又、下着を汚した時は自分で洗うようにさせた。

７月
　指導員に声を掛けられないとトイレに行かないが、指示して行かせると大量に排尿した。１日１回は指示

して行かせるようにした。

８月
　生理で下着を汚しても不快感は無いようだった。汚れた下着を洗わせると、触るのを嫌がり、指先で摘もうとした。指導員が手を添えて洗わせた。

９月
　Ｎさんは肥満体である。身体が太くて、後ろに手がまわらない。自分でしようという意志も無いので、ペーパーで拭くことができなかった。ペーパーを取らせ、前から拭かせたが、動作のみで実際には拭けていなかった。生理の時も嫌がって拭かないので、指導員が拭いていた。

１０月　同じ状態

１１月
　再び入所時のように、身体をゆすって尿意を示すようになった。その身振りをしている時に、「トイレに行かせてください」と言葉で要求するように指導していった。「はい、言ってみなさい」と促して、「トイレに行かせてください」と言うことができたら、行かせるようにした。
　※　Ｎさんは折れ線型タイプで幼児期言葉があった。言葉が消えていったタイプの人は発音にはあまり問題がない。Ｎさんさんは教えれば、その通り言うことができるようになった。

１２月　同じ状態

１９８８年　1月　変化なし

２月
　「トイレに行かせてください」と言葉で要求することが定着してきた。身体を揺すって尿意を告げていても「ちがうよ」と声を掛けると、「トイレ行かせてください」と言えるようになった。

４月
　トイレから帰ってきて、しきりに何度も「トイレとってください」と指導員に言うので、おかしいと思って行ってみると、トイレ用のスリッパを全て便つぼにに落としていた。Ｎさんは叱っても効果が無い。それで、［次からはトイレでスリッパを使用させないで、雑巾を用意させ、裸足で入らせ、雑巾で足を拭かせ、雑巾を洗わせて所定の場所に置かせる］という面倒な手続きをさせて、（スリッパを投げこんだら、面倒なことをさせられて損だから止めておこう）とＮさんが考えて止めるように仕向けた。
　その後もトイレ用のスリッパを便つぼに入れてしまうことがあったので、指導員は（叱ったりしないで淡々と）何も言わないでスリッパは使わせないことを一貫して続けていった。

６月　そろそろスリッパを履かせてみたが、困った行動は見られなかった。

　現在でもＮさんは、手助けをしないと排泄後の始末ができない。指導員に言われれば、いやいやながら手を局所に伸ばそうとしている状態である。自分でうまくできないことをさせられるのは、本当に嫌で意欲も出ないのが当然で、Ｎさんに同情する。しかし、その不便さと憂鬱さ・介護する者の大変さを思うと、１日もはやく解決していきたいと思ってしまう。
　「トイレに行かせて下さい」とは、はっきり言えるようになったが、「排尿か、排便か」の問い掛けに答えることは極めて難しい。だから、問い掛けに答えることは二の次にして、とにかく排泄の自立を図っていく努力をしなければならない。
　これからは、指導員がつきっきりで、言葉でいちいち指示して教え、自分で自主的に後始末ができるまでにさせていきたい。また、排泄時以外でも、例えば体操の中に、身体を曲げる、しゃがむ、腰をねじるなどを取り入れて、身体を柔軟にし、局所に手が届きやすくする努力をしていきたい。

　※　Ｎさんは絵や文字は理解が難しいが、耳からの情報・すなわち言葉掛けには反応し、判断できるタイプだったので、いちいちの一定した言葉掛けで指導できたのだろう。青年期なので、ＴＥＡＣＣＨに学び、手順のカードなどを示して指導すれば、もっとスムーズに指導できただろう。同じ指導員がつきっきりで指導したのでうまくいったが、指導員が交替で関わったら、そのやり方の違いが

戸惑わせることになる。手順を一定にすることが大切である。

現在の作業所の便所は狭くて、自立してない人の指導には向いていない。せめて作業所の和式トイレを洋式トイレに改造し、肥満体による不都合を少しでもカバーしていきたい。

その他　歯磨き・洗顔・髪の手入れ・入浴・布団の用意など自分でするべきことが自分でできるように、家庭でも母親に指導をして貰っている。そして、秋には作業所で合宿をやり、その成果をみることもした。

※　年齢が大きくなり、大人の身体になってからの指導は、成果が上がりにくく、特に排泄指導は、性の問題を含んでいて、たまたま女性指導員が女性についたので上手くいったが、無認可の作業所では指導員を多人数頼むこともできない。何としても、思春期を迎える前までに、指導しておきたい。Ｎさんは弁当の用意すらできなかったが、できるようにと具体的目標を決めて、こつこつと指導していくことで指導員のいうことを聞き、少しずつ出きることが増え、何よりもＦ指導員が大好きになっていった。

※　家庭での取り組みの重要性を強調しておきたい。

２）規則正しい生活、運動をとして、身体作りと心の安定をはかる。

⑴　通所

「毎日決まった時刻になると作業所に通所できる」このことだけでも、それまで在宅であったＮさんに規則正しい生活を保障し、Ｎさんだけでなく、家族全員に精神の安定をもたらしていると確信している。

また、規則正しい生活をし、生活リズムを整えることは、認知障害のある自閉症者の不安や緊張を取り除き、安心感を与え、身体の調子を整え、健康を増進していくことに役立つ。

作業所では、１日および１週間のスケジュールを作り、それに添って生活をしているが、毎日一定の規則正しい生活をすることによって、Ｎさんにも作業所での過ごし方が分かり、今では自分のするべきことを自覚して行動できるようになっている。

自分のするべきことを自分で考えて行動するようになる、つまり、自主性を持つことは、自閉症児者には大変難しい課題だと言われている。それだけにすでに青年期に入っているＮさんが、こうして自主性を確実に備えつつあることは本当にうれしいことである。

わかば共同福祉作業所では、家庭と連絡を密にして、どのような状態で来所したのかを把握して、その日の指導を進めている。又、家庭でも毎日規則正しい生活をするように努力している。

⑵　山歩き

しかし、規則正しい生活だけでは、青春期のまっただ中にある者の、あふれるエネルギーを使い切ることはできず、イライラや欲求不満を生じたり、不眠になったりする。そして、寝不足すると、集中力が無くなって、指導員の言葉も耳に入らなくなってしまう。又、問題行動も生じてくる。

わかば共同福祉作業所から徒歩で数分の場所に、絶好のハイキングコース「市民の森」があるが、作業所ではその自然環境をフルに活用している。開所当初は、二人とも対人関係がうすく、指示にも従えず、情緒の安定もはかれず、大変だった。指導の第一歩として、まず徹底的に山歩きに取り組み、心の安定と身体作りをすることにした。１年間毎日４㎞の山歩き（散歩）を天候に関係なく実施した。これによって、精神の安定がはかられて、集中力もでき、多くの課題をスムーズにこなすことができたと確信をもって言うことができる。

２年半経過した現在では、色々な課題をこなすことができるようになっている。そのため作業所生活も充実して忙しくなり、今ではやっと週２回、山歩きを実施している状況である。今後は山歩きをしない日はマラソンをするなどして、運動不足にならないように配慮する。

Ｎさんの様子を月毎に述べてみる。

１９８７年４月

姿勢正しく歩くが、途中でしばしば立ち止まっていた。

山歩き（散歩）に出かけることを分からせるために、ウエストバッグを着けて出かけることにした。手を添えてバッグの付け方を指導した。

５月

ウエストバッグのボタンを押す力が弱く、３回ぐらい試みて、指導員の方へ差し出していた。腰に装備するときも、身体の後ろで手を合わせることができず、ひとりでは難しいので、背中側で両手が合うように片方の

手を後ろに回してやり、ウエストバッグのつけ方の要領を教えた。ボディイメージ・身体図式がまだぼんやりしていて、自分の身体（特に後ろ）が把握できなくて、うまく使えないようである。

※　身体に麻痺は無いが、自分の身体を認知できていないので、どのようにすればよいのか自分の身体を意識的に使えない、分からない。今まで何もしてきていないので、一層不器用であった。

６月
　散歩の途中で、わざと帽子、靴、タオルを川などに捨てる問題行動が出てきた。指導員の関心を自分に向けたいようにも思われた。毎日のように捨てる真似をするようになったので、その時は知らん顔で無視し、刺激しないようにした。

７月　ウエストバッグと帽子を自分で身に着けることができるようになった。

８月
　山歩きの時、自分の帽子を川に捨てる、指導員の帽子をはねとばす、はねとばそうと隙をねらうなどの問題行動が毎日のように見られるようになった。Ｎさんなりに見つけた遊びで、周りの人が慌てる反応が面白いのだろう。しかし、迷惑行為なので、止めさせるために、自分で捨てた帽子はひとりで川に下りて拾いに行かせる、指導員の帽子をはねとばした時は、同様に取って来させたり、Ｎさんの一番嫌いな走ることをさせたりなどして、「帽子をとばしたら、嫌なことをさせられるから止めておこう」という気持ちを育てるようにした。また、無視することで、Ｎさんの誘いにのらないようにした。

９月
　自分の帽子を捨てることが３回ほどあったが、その都度拾いに行かされるので、その行動は自然に消えて行った。しかし、［指導員の帽子飛ばし］という問題行動はまだ続いたので、いろいろ試みた結果、「走らせる」ことが一番効果的なので、帽子をとばされるとすぐ走ることを命じることのした。

１０月
　指導員の帽子のつばのところで指遊び（常同行動）をしたり、帽子をとばすこともまだあった。その時はマラソンをさせることを続けた。

１１月
　気候が良くなって、帽子をかぶることがなくなったので、Ｎさんの帽子飛ばしの楽しみはなくなってしまった。Ｎさんは周りの人や物に関心を持ち、積極的に働きかけているのだが、【叩いたり、突いたり、唾を吐きかけたり、帽子などを飛ばしたり】などのように、その方法が極めて未熟で、まるで極幼い乳幼児の行動を思わせる。指導員はそのひとつひとつに問題行動として目くじらを立てるのではなく、その遊びや人と関わりたい気持ちを大切にしながら、先ずＮさんの全体的な発達・成熟をはかるように心掛けた。

１２月
　皆で山歩きの途中、立ち止まったりすることがあったが、道順をよく覚えているので、知らん顔で黙って先に山を下りていくと、Ｎさんは自分から後ろに従ってくるようになった。

１９８８年　１月
　時々空き瓶を蹴ったり投げたりしていたが、指導員は決して叱らないで、冷静に、拾ってこさせて、元あった場所に返させるなどした。山歩きは喜んで、さっさと歩くようになった。

６月　さっさと速く、汗を出すくらい一生懸命歩くことができるようになった。

１０月　山歩きのパートナーを男性の指導員に替えるととても嬉しそうだった。

　現在では、着替えの遅い時、「市民の森、行くよ」の声掛けで、さっとすばやく着替えて出てくる位、山歩きが大好きになっている。Ｎさんにとって山歩きは、もう立派な趣味になっている！
　当初にあった問題行動はなくなって、楽しい散歩になった。途中蜘蛛の巣などがあっても、初めは気にしないで、顔にくっつけていたが、二度三度と顔に当たるうちに、自分で気がつくようになり、手で除けたり、避けて通るように変わってきた。また、山歩きの途中で、樹木が倒れていて道をふさいでいたら、手で除けてさ

っと通って行くことができるようになり、自分で判断して、心や身体を働かせ始めた。
Ｎさんは今までは、他の人の歩調に合わせられないで、自分本位だったので、指導員がさっと物陰に隠れるなどして、ひとりぼっちにし、心細さを感じさせて、周りの人に気を遣えるように対処してきた。
その結果、近頃では、自分が前を速く歩いていても、後ろを振り向き、みんなが追いつくまで待ってくれるときもあるようになった。また、速いペースで歩くN指導員よりも、彼女と同じ位のペースで歩くＦ指導員とのペアを自分から選ぶようになった。しかし、N指導員を歩くように指示されても別に嫌がらず、速歩のN指導員に遅れないように一生懸命ついて歩けている。

(3)　体操（全身運動・粗大運動）
体操は「体力をつける、気分転換をはかる、身体的な歪みを克服する」などの効用の他に、自閉症児の「脳の統合機能の発達」を促す効果がある。
自閉症児は一般に不器用で模倣が下手である。自分の身体を意図的にうまく使いこなせない。力の入れ方や抜き方に不自然さがあり、ぎこちなさや硬さを感じさせる。運動麻痺があるわけではないが、手や足を同時に使って何かをすることが下手である。例えば、縄飛びは、全身の動作のリズムやタイミングに、微妙なコントロールを必要とし、複雑な脳機能の分化と統合に関する発達が必要であるが、自閉症児に縄飛びを教えるのはなかなか難しい。しかし、できるようになる。
様々な運動を根気よく取り組むことで脳機能を統合訓練を行えば、同時に身体図式もより正確なものとなり、自分の身体を自分のものにしていくことができる。そうなれば不安も少なくなり、自主性も増すことになる。

１９８７年８月より体操を日課に加えた。
わかば共同福祉作業所では、午前９時に来所して着替えが済むと、毎日欠かさず、体操に取り組んでいる。模倣力が弱く、模倣する意思も弱い今は、「身体的歪みを克服すること」と「体力をつける」ことに重点をおいて、単純な体操に取り組んでいる。

Ｎさんの初期に月毎の取り組みと変化を述べる。
９月
体操を始めました。熊歩き（四つばいで前に歩く）、ボール投げ、立って座る、深呼吸、ジャンプの６種類を毎日することにした。ボール投げは初めから「投げる　受ける」ができていた。熊歩きもできたが、右手が先に行って、斜めになって進んだ。１種類の体操に激しく時間がかかった。

１０月
体操の一つをするにも、首を激しく振ったり、手を振ったり、常同行動・自己刺激行動が途中で頻発し、なかなか進まない。ボール投げにしても、１回受けてはキョロキョロして、「ボールはいったいいつ返ってくるのだろうか」という具合だった。とにかく一つの運動を集中して行えない状態だった。その都度促して何とかさせてはいったが、すごく時間がかかった。

１１月
状態は１０月と同じだった。指導員は黙って見ていたり、言葉で促したりした。遊びが多く、殆ど体操になっていない状態なので、指導員もずいぶん悩み、「集中させるためにはどうすればよいのだろうか？とにかくどんなに時間がかかっても途中で止めないで最後までさせることにしよう」と態度を決めた。

１２月
状態はあまり変わらず。
言葉で「はい　ボール投げて、Ｎちゃん」などと声掛けして、よそ見をしたり首振り手振り（常同行動）の遊びを止めさせ、最後まで体操をさせるようにした。

１９８８年　1月・２月
同じ状態が続き、改善されないまま。きょろきょろよそ見をしたり、首振り手振りなどの自己刺激行動があまりにひどい時には、指導員が「もう、しない」と言って、別の部屋に行ってしまい、Ｎさんを相手にしないでひとりにすることも試みた。

３月
独りにされると、「体操をしてください」と指導員を呼びに来るのだったが、体操を始めるとまた同じ事の繰り返しで、体操にはならなかった。体操に集中させるためには、「独りにさせる。言葉を掛けて促す」など

は全く無効であると結論した。
　そして、「やり直し」を指導に取り入れた。例えば、１シリーズ２０回の運動であれば、その運動を２０まで遊び無しでできることを目標にして、２０までの途中で遊びが入ると、「はい、やり直し！」と言って、初めからやり直しをさせ、２０までできるまで何回でもやり直しをさせることを徹底した。

４月
　体操の種類の中で、しんどいものとそうでないものの判断がＮさんに少しずつできてきた。腹筋運動などはなかなかしようとしなかった。ジャンプなどはすぐ始めるようになった。ジャンプは何回でも一からやり直すことによって、通してできるときが増えてきた。

５月
　「ジャンプ、熊歩き、立って座って」などのように１から２０まで続けてできる運動が段々と増えてきた。それに体操時間も、１時間も掛かっていたものが、僅か１５分で済むようになった。
腹筋運動は指導員の腕を貸して助けて起こしてやっていたが、少しずつ自力で起きるようになっていくために、指導員の指１本だけを貸して、しかも引っ張り上げるような力は加えないようにした。

６月
　腹筋運動が大変上手になった。ボール投げも投げる時・受ける時共に目でボールを追うようになってきた。

　強度の肥満体を意識して、「熊歩き、ジャンプ、立って座る、腹筋運動、深呼吸、ぶら下がり、腰をねじる、前屈」などを取り組んだ。常同行動が間に多く入って体操は約１時間も費やして、指導には本当に苦労したが、今では全く常同行動がなくなり、立って座る５０回、膝を立てた腹筋３０回など体操量が増えたにもかかわらず、たいてい１５分で済んでいる。腹筋運動などは以前は「１回しては１分休み」して時間が掛かっていたが、はやくできるようになった。また、言葉と動作が一致するようになり、ひとつひとつの運動をしっかり覚えてできるようになった。
　Ｎさんは体力がついてくると、あんなにも嫌いだった体操が苦痛でなくなってきた。

　現在ではほんの時たまであるが、自主的に熊歩きを始めたり、指導員が手が離せず、別の部屋から、「熊歩き始めて！」と声掛けして指示すると、ひとりで体操に取りかかるほどに変化してきた。
　「やる直し」という厳しくも徹底した行き届いた取り組みによって、集中して為し遂げる力もできたし、苦しくも頑張り抜く意志の力も育った。また、うっすらと汗をかいた後の爽やかな気持ちも体験させてあげることができたと思う。

　今後は体操を少しずつ複雑化して、自閉症の基本的障害に少しでもアタックしていきたい。その中で信頼関係も一層深まっていくことであろう。
　期待していた肥満の軽減の方は、殆ど体重が変わっていないので、何の効果も表れていないように結論したくなるが、体脂肪は減少したと思う。「もし、在宅で、もし何もすることがなくて、食べることだけが楽しみであったなら、もし山歩きや体操を取り組まなかったなら」現在どうなっているかは想像に難くない。
　Ｎさんはまだまだ肥満体ではあるけれど、ぶよぶよとした身体ではなく、ひきしまった筋肉質になり、特に体重を支える下肢が強くなり、はつらつとしている。
　肥満については、食生活のありかた、帰宅後の過ごし方、運動の取り組み」などを指導員と母親と河島淳子とで話し合いを続けてきた。１ヶ月で幾kg減らそうと目標を決めて実行し、３ヶ月間は確実に体重が減少していたが、いつの間にか、体重計の針がピンと元の位置に戻っていた。コレステロール値が少し高いので、将来起こってくる疾病の予防のためにも、また、少しでも機能的に楽に動き回れるように、やはり周りの者が気をつけて、食生活などの改善を図ることが第一だと思う。
　今は、畳みに座っての作業は肥満体のＮさんには無理なので、不自然な姿勢を避けるために、作業するときは椅子に腰掛けるなどの配慮をしている。

３）その人に適した作業を見つけ、働くことの喜びと自信を持たせ、好ましい発達をはかる。

(1)　準備期間（入所４ヶ月間）
　開所当時（１９８７年５月）、Ｎさんは一つ一つの行動にいちいち指示と全介助を必要とする上に、情緒の不安定さのために、常に監視が必要であった。そのため、午前中は往復４㎞の山歩きを行い、身体を鍛えると共に、精神の安定をはかるようにした。こうした戸外の生活のあと、午後からは食事の準備、片付け、掃除

などの生活上の指導をしていった。日常生活上必要なことを細かく教え、確実にできるまで、繰り返し繰り返し、指導していく一方で、粘土・ブロックなどの遊具を利用して「指先の訓練」に取り組んでいった。入所４ヶ月後の９月に入ると、衝動的な行動も減って、声掛けだけで作業所の日課を送ることができるようになり、一定時間は座って、作業することが可能になった。その時点で、Ｎさんに適した作業を見つけ、指導を開始した。

⑵　ビーズのれんを製作

Ｎさんは１９８７年８月（入所４ヶ月）から現在に至るまでずっとビーズのれんを製作してきている。

私たちは何かを作ったり、字を書いたり、はさみを使ったり、針に糸を通したりする場合、自分のやっている操作（手元）を目でしっかり見ている。目と手が協応して働いている。ところが、する気のない場合・やっていることが分からない場合・嫌いな場合など、自閉症児は往々にして、目と手がバラバラでキョロキョロしたり、あらぬ方を見ていたりで、細かい作業をさせるのが困難である。Ｎさんも、目と手の協応機能が悪く、これから様々なことに取り組んでいくためには、まず目と手の協応を改善し、また集中力と持続力を育てる必要があった。

ビーズの小さな穴に針を通していく長期の継続した作業は、目と手の協応力を養うのに最適な課題だった。また、同じ単純な作業の積み重ねでもついには立派な美しいのれんが出来上がるので、Ｎさんに「自分でつくった」という喜びを少しでも感じて貰いたいと考えてビーズのれんに着手した。

月毎に作業の様子を述べる。

１９８７年８月

「指導員が予め、白い画用紙で作った小さな箱にビーズを色分けして入れておき、その箱を１０個Ｎさんの前に建てに順番に並べておく。手前の箱から、ビーズを取らせ、針に通させる。通して済んだ空箱は、段ボール箱に片付ける」このやり方で、指導を開始した。

順番にビーズがとれるように傍で次にとる箱を指さし、済んだ空箱を段ボール箱に片付けることを指導したが、Ｎさんは嫌がらずそれに従って通した。ビーズは小さいが、チラッと一瞬見て、後はキョロキョロしながらも通せていた。

９月

「この箱取りなさい」という指示から、「次はどの箱」というような問い掛けに変えていき、自主的にとれるように仕向けていった。

１０月

順番に手前から取っていく要領は大体わかったようであったが、時々とる順番を間違えていた。間違えてビーズを通しても、１本最後まで仕上げさせ、最初から「やり直し」をさせた。また、１日の作業量を決め、「その１日分が済まないと帰れないのだ」いう意識作りをしていった。また、Ｎさんには激しく首をふり、手を振る自己刺激行動、常同行動があるが、作業中にそれが見られると、「Ｎさん仕事！」と言ってさせないようにした。

１２月

ビーズを取っていく順番もよくわかってきて、間違いがなくなった。しかし、今度は、指導員の顔を伺いながら、わざと向こうの方の箱を取ろうとするようになった。指導員との関係が密になり、関わって欲しいというＮさんなりの意思表示だから、実に喜ばしいことではある。けれど、作業中なので、指導員が知らん顔して無視していると、やがて諦めて順番通りに手前の箱を取って仕事を続けることができた。

１９８８年　２月

夕方母親が迎えに来てくれた時、まだ作業が済んでいなかったので、母親にはそのままＮさんの置いてきぼりにして一旦帰って貰った。この事件によって、Ｎさんは「１日の決められた量の仕事ができないと帰れないのだ」ということをはっきり認識した。以後、始めはぼんやりと何もしないでいても、終わりに近づくと遊びも無しに一生懸命ビーズ通しをするようになった。集中して行うと本当に速い！！

３月

もう作業にはずいぶん慣れたので、次に「針に糸を通す」ことを課題とした。指導員が手を添えて針に糸を通すことを教え、その後は自分でさせてみたが、よく頑張って２重の糸の１本だけであるが、通すことができた。右手に針を持ち、左手に糸を持つので、そこを注意し、持ち替えさせた。

４月　糸と針をもつ手も間違わなくなり、はやく通すことができるようになった。

５月
　一つの針穴に２本の糸を通すことを課題にしたが、２本通すことはなかなか難しく、イライラが生じ、「イーッ」と顔を真っ赤にして手をこする現象が現れた。このイライラもやがてできるようになれば治まるだろうと考え、二本通すことを頑張らせた。

６月
　ついに二本が通せるようになった。すると、案の定イライラも自然に消えてしまった。

　作業に慣れて上手になれば、ストレスも減り、作業意欲も出てくると思っていたが、一向に意欲が出ないので、指導員がその原因について悩んだのもその頃だった。「この仕事おわらんと帰れんよ」「ここまでできんと休憩できんよ」という否定的な暗い言葉掛けに問題があったのではないかと考えた。
　「これが済んだら帰ろうね」「この作業してみんなと一緒に休憩しようね」という言葉掛けに変えた。すると、途端に状態がよくなり、意欲が出てきたので、指導の在り方を深く反省させられた。
　この作業を始めて１年後には、小箱に分けたビーズの順番を取り間違えることはほとんど無くなったが、その頃から、今度は、同じ色のビーズをよその箱から取って通し、間違えるということが時々見られるようになった。これはＮさんが色を意識し始め、色の区別がつき始めたことを意味する。嬉しいことであったが、作業としては間違いなので、やり直しをさせた。この問題はやり直しをさせることと、色分け作業を別にすることですぐに直った。

　現在は次の段階として、指導員と離れていても作業ができるように別室でひとりで作業をしている。指で机を叩いたり、首を振ったりなどの常同行動・自己刺激行動は見受けられるが、昼食後の歯磨き後、すぐにその作業部屋に自主的に行っている。「今は作業をするときだ」という自覚を育てるために、時間内に用意した作業を終えないと次の事はさせないように徹底している。
　今一つの問題は、作業を早く止めたくなると、途中までしかできてなくても、「先生できました」と言うこと。指導員が隣の部屋から、「はい、次してね」と返事をすると、次の列へと移ってしまい、指導員が後から行ってみると、途中までしかできていないことが時々起こっている。
　こんな時もやり直しをさせることによって、“ビーズを１本最後まで通さないと次へ行けないこと”を分からせるようにしている。
　Ｎさんは現在までに１０品仕上げた。当初は色数も少なくビーズの数も少ない小品を作っていたが、今では一番大作に挑戦している。１本の糸に通すビーズの数は今までの３倍で１９３玉。１日に１本、２時間内に通している。

４）年齢に相応しく生きていくために、掃除、洗濯、調理などの家庭科技術を身につける。

　地域の中で生きていくためには、先ず家庭でその子に相応しい家事分担ができることが必要である。いつまでも幼児扱いをしていては、本人にも家族にもストレスが貯まってくる。そして、ストレスは年々増大していく。
　作業所では基本的生活習慣の確立に努めると共に掃除・洗濯・調理・裁縫など身につけて欲しいと最重点をおいて指導していった。それらを身につける過程で、自閉症の人の認知障害がどんなに大変かを知っていった。そして、Ｎさんの基本的な生活しにくさの一つひとつに焦点を合わせて、その改善のために無理かも知れないと思ったこともどんどんさせていった。

　まるで赤ん坊のように何もかも母親にやって貰っていては、自分の身近な世界のこともぼんやりとしか理解できない。しかし、赤ん坊も運動機能の発達と共に、這い回り、動き回って、何でも口に入れてみたり、触ってみたり、叩いてみたり、投げてみたりなどして、どんどん身体を使い手を使いして、自分の周りに働きかけて世界を把握していく。
　さて、物にはいろんな見方がある。ただぼんやりと眺めていては、私たちはその対象をほとんど理解することはできない。「持ってみる、触ってみる、使ってみる、作ってみる、切ってみる、折ってみる、やってみる」など色々な働きかけをして自分自身で体験して対象物をはっきりと認識していくことができる。体験しなければ何も本当にはわからない。
　例えば、私たちはまだ一度も食べたことのない珍しい料理をテレビでいくら紹介されても、その料理の味も臭いも歯触りも温かさも何にも本当には分かることはできない。しかし、実際に自分で作って食べて体験す

れば、一度で「うん、こんな御馳走だったのか」と分かることができる。
　重い認知障害をもった自閉症の人が、尚その上に、多くのことを未経験のままで、指導も受けず育ってきたのだから、その足元のおぼつかなさは想像もできない。作業所では家事を課題に選んで、Ｎさんに自分の一番身近な家庭の営みをしっかり認識して貰いたいと思った。また、家事は母親の熟練した部分なので、家庭でも積極的に取り組んで貰うことができる。まず母親が今までの“赤ちゃん扱い”を脱皮していかなければならない。作業所でできるようになったことが家庭でもできるようになることを目標にした。

　過去１８年間全面的に何もかもやってもらっていたＮさんが家事をするようになった。その指導法はどの人にも同じである。
　①　全介助で、手を添えて一緒にする。
　②　言葉で指示する。
　③　「どうするの」「何がいるの」と言葉を掛けて、自分で考えて行動するようにさせる。
　④　自主的に自分でするように、言葉掛けをひかえる。
のようにしていったが、Ｎさんは重度の障害のために根気よく諦めないで指導を継続していく事が必要だった。

A　調理

　１９８７年６月より週１回行った。何もかもして貰っていたＮさんにとっては、道具も操作も全て全く始めての経験だった。指導員はＮさんの日常生活から判断して、包丁の利用に躊躇し、まず危険な道具の要らない、簡単にできておいしい献立をＮさんのために用意した。

(1)　ホットケーキとコーヒー

手 順

　①　ボール、泡立て器、計量カップの道具を揃える。
　②　小麦粉、ベーキングパウダー、砂糖、卵を出してくる。
　③　はかりで計量する。（はかりを使用しないで、たまじゃくしを使った）
　④　卵をボールに割り入れる。
　⑤　小麦粉とベーキングパウダーを入れて混ぜる。
　⑥　焼く。
　経過を追って述べてみる。

１９８７年　６月
「卵を割って」「混ぜてください」「小麦粉とって」など全て指導員が指示をした。卵を自分で割れるようにしようと、手を添えて「卵にひびを入れ、親指で左右に引く」動作を教えていった。

８月
　卵は手を添えると、親指で押し開くようにして、割れるようになった。混ぜる時は、２，３回かき回しては、手振り首振りの遊びが入る状態で集中して混ぜることができないが、混ぜ方は実に上手に、つぶつぶなどのだまりもなく、とろりとなめらかに混ぜることができるようになった。

９月
　卵は促されれば、割ることができるようになった。混ぜる途中で止めようとするので、「まだまだ」と言うと、さっと混ぜるようになり、手早くなってきた。計量は指導員だ一緒にしている状態で、玉じゃくしにいっぱいに救うことはできない。

１１月
　コーヒーを４人分入れることをさせた。カップを見ないで入れようとするのでこぼれることがあった。指導員が「はい、よし」と言って、入ったことを知らせ、そのカップを除けてやると、次のカップに入れることができるが、「はいったよ」と言っても、入ったカップを除けないでいるのと、それにまたつごうとする。カップにコーヒーが入っているかどうかを確認しないで、入れている手元をみないで、コーヒーを入れるのだった。そのためにＮさんがコーヒーを入れ終わったカップはＮさん自身の手で字で別の位置に置くようにさせ、それが済むと次の空のカップに入れるように指導を変えていった。

☆　きゅうりの板ずり

手を添えて要領を教えていった。途中で首振り手振りの遊びが入るが、「今はきゅうりをかいてください」と言って、絶対に最後までさせるようにした。また、きゅうりが残り少なくなり、指を退けないでいると、指を怪我する懸念もあったが、先々に気を回して声を掛けて注意を促しても理解できないと考え、一度は指を切ってその危険性を学び取り、自分から物の扱いに気をつけるようになればよいと、つめたいようだが、過保護な指導はしなかった。

１２月

ホットケーキの作り方が少し分かってきたようなので、ホットケーキに必要な道具は自分で用意させるようにした。「混ぜるものは？」「小麦粉入れるものは？」など尋ねて自分で取らせるようにした。

１９８８年　２月

「ホットケーキを作ってください」と指導員が言えば、Ｎさんは卵を割ろうとするようになった。コーヒーはこぼすことはなくなったが、カップに入っているのかいないのかはまだ分からない状態だった。視覚的には見えていても意識しないので見えていない状態である。

６月

ホットケーキは自分で作らないと食べられないことが理解できたようだった。「道具を出しなさい」と言うと、ボール、たまじゃくし、泡立て器を出すことができはじめた。混ぜていてる途中で手を休めていても、指導員がじっと見ていると、また自分から混ぜ始めるようになった。

計量面で、たまじゃくしいっぱいに粉などを入れることが難しいので、調理の時だけでなく、砂などを利用するなどして砂遊びやままごと遊びに似た経験・練習をする必要がある。他の大きめの食器に印をつけ、その位置まで砂糖や小麦粉を入れる方法で計量することも考えられる。

☆　きゅうりの板ずりは自分できゅうりを取りに来て、板ずりの道具も自分で出して板ずりができるようになった。また、指導員がその場についていなくても、声換えだけでできるようになってきた。だいぶん慣れてきたところで、指を切り、出血してびっくりしていたが、それ以後は注意深く道具を使うようになり、怪我をすることはなくなった。

Ｎさんは調理する時には手を使う。手を使うときには、目も使うが、ただぼんやりと見るのではなく、見るべき物に焦点を合わせて、心を働かせて、やっている操作の内容を理解していかなければならない。調理するときには、多くの見えている物の中から、見る必要のある物を選択して、それだけを注意深く見る事を求められる。そして、やっていることの意味を分かる（認識する）事が必要である。

また、Ｎさんが調理するときには、耳も使う。Ｎさんは種々の音の中から指導員の指示の声を注意深く聞き取るために、普段より心を働かせなければならない。そして、聞き取ったその声（言葉）の意味を理解して、指導員の指示の通りに手を使い、道具と材料を使って調理して行かねばならない。いつも心を働かせて、指導員の声に集中する必要がある。そうしなければ美味しい御馳走はできない。

Ｎさんは声（言葉）掛けを聞き取っても、その内容を理解することが難しい。また、模倣することができないので、指導員は始めは全介助で、すなわち全ての操作に言葉を掛けながら、同時に手を添えて調理を教えていった。

調理するには順序がある。失敗ししないためにはその順序を、頭を働かせて覚え、その通りにやっていくことが求められる。また、調理に取りかかってから出来上がるまでは誰も手伝ってくれないので、自分で責任を持って作らなければならない。手抜きするとうまくできない。おいしい御馳走ができないと、空腹になっても食べられない。しかし、頑張って調理すれば、できあがった御馳走が食べられるだけでなく、「おいしくできた。ありがとう。よく頑張った！」と皆に喜ばれ誉めて貰える。

調理は、食べることが大好きなＮさんにとっては、意欲的に取り組める療育的価値の高い課題である。

(2)　カレーライス（家庭訪問指導）

問題行動をもつＮさんに包丁を持たせる。

調理を発展させていくためには、どうしても包丁を使わなければならない。ところが、Ｎさんには激しくリズミカルに両手を肩の高さで水平に振り動かしながら首も左右に激しく振る自己刺激行動・常同行動があった。その上に、人を不意に突き倒す問題行動があった。その行動に他意は無く、その人がひっくり返ってびっくりしたり、周りの人が騒ぐのが面白いらしい。でも、なにしろ体格のよいＮさんが、全く予期しない時に素速く人をドンと押すのだから、危害を加えることにもなりかねず、目が離せない状態である。それに物を投げたりわざと落としたりする問題行動もある。

そんなＮさんの日常を見ていると、包丁を使わせることなど指導員にとって思いもよらない事であった事であろう。後で、Ｆ指導員は「河島先生から、『包丁を使わせるようにしましょう』と提案があった時には、正直言って、（えっ！そんなぁ！）とびっくりした。」と述懐している。

試みにちょっと使わせてみると、何とか指導できそうは様子だった信宏で、本格的に包丁の使い方のトレーニングに入った。家庭でははあ火屋がつきっきりで大根を切る練習をさせた。包丁は切る道具である事が分かったところで、カレーライスに挑戦した。カレーライスなら、野菜はどんな切り方であっても差し支えない。

また、できるだけ家庭で母親の指導の元に調理に取り組むことが従来の未熟な（親は赤ちゃん扱いをし、子は赤ちゃん扱いを当たり前だと思う）母子関係を改善することができると考え、指導員が家庭訪問してＮさんの家の台所で指導をすることにし、母親にその指導のやり方を学んで貰うことにした。

１９８８年1月
カレーライス作りを始めた。材料はすぐ切れる状態まで指導員が洗って皮をむいて下準備をした。そこからがＮさんの仕事である。

① じゃがいも，人参、玉葱を切る。
② 材料を炒める。
③ 一定の水を鍋に入れる。（水をボールに入れ、指導員のストップの声掛けで水をとめる。）
④ カレー・ルーを入れる。
⑤ ごはんを皿に取り、カレーをかけて食べる。

経　過

案じていたことは何もなく、包丁が道具として使えるようになった。一度包丁で手を切ったが、それ以後は非常に注意深くなり、キョロキョロしていても切る瞬間にはしっかり手元を見るようになった。そして、じゃがいも、人参、玉葱を切るのもだんだん上手になってきた。包丁の使い方で問題なのは、下（まな板）まで包丁が届くように、完全に切ることをしないで、途中でこねて割ってしまうことだった。しかし、１年後には、じゃがいもを切るときなど、きちんと下まで切ることが多くなった。

Ｎさんが好きなカレーライスを自分で作って食べられるようになり、指導員も母親も喜んだが、そのうちに自分で作れば毎日でも、夜遅くでも食べてしまうという困ったことが生じてしまった。料理には取り組みたいが、肥満しているＮさんに高カロリーのカレーライスをいつもいつも食べてもらう訳にはいかない。そこで、もっと高橋知惠子の料理ができるようにしなければならなくなった。幸い、指示に従えだしたので、他の献立に移ることにした。

後片付け

１９８７年６月より役割分担（Ｔさんが食器を洗ってすすぎ、指導員が食器を拭き、Ｎさんが食器を戸棚の所定の場所に片付ける）を決めて片づけをしていた。Ｎさんは、指導員がきれいに拭きあげた食器を置いておくと、最後まで戸棚に片付けるまでになっていた。

１９８８年６月「ひとりで後片付けを全部する」を課題とした。

Ｎさんは、「洗っていない」「もう洗った」も区別がまだできない状態だったので、後片付けをするに当たって、次のような手順を考えた。

① 食卓より下げてきた食器を流しに全部置く
② 洗剤をつけたスポンジで食器を洗う
③ 洗った順にバケツの中に入れていく
④ すすいだ食器を入れるバケツを用意する
⑤ 食器をていねいに手で洗う
⑥ 布巾で拭く
⑦ 食器戸棚へ片付ける
⑧ 流しを拭く
⑨ 台布巾を洗って干す

その後家庭でも後片付けに取り組むようになったので、作業所でもコーヒータイムの片づけをＮさんに任せることにした。指示に従ってやっているが、回を重ねるに従って、時間的に少しずつ速くできるようになっている。

⑶　おでん

１９８９年1月

週１回作業所で調理実習を始めた。「材料を切る、料理、配膳、食器を洗う、ゆすぐ、拭く、戸棚に片付ける」までの全コースをひとりでしてもらうことにした。

目標の第１は指示に従って、料理、片づけができるようにすることである。

第２は「自分が作らないと食べることができない」ということを認識させること。

手　順

① まな板、鍋、包丁、ボールを用意する
② 材料を切る（皮は先に取っておく）
　こんにゃく　ちくわ　じゃがいも　にんじん　鶏肉　厚揚げ
③ 鍋に材料を入れる
④ 水を入れる（鍋に印をつけている）
⑤ ガスをつける
⑥ ぐつぐつ煮えたら、印をつけた計量カップで醤油を量って入れる
⑦ 箸で芋を突き刺してみて箸が通れば「できた」と分からせる。
⑧ ガスを消す

配　膳

① 机を出して拭く
② 食器を出す（指導員が名前を言って人数分の４の数を分からせる）
③ おでんを皿につぎわける（材料を一つずつ皿に入れていく。箸がうまく使えないのでカレースプーンをしようさせる）
④ 各人の場所におかずを配る（コップを並べておいて、おかずを配る位置を示す。）

経　過

調理をはじめて約１０ヶ月が経過した。今では指示に従って調理・片づけはよくできるようになっているが、調理を始めて２ヶ月の頃、調理中に激しく首を左右に振り、指先でリズミカルに物を叩いて音を出して遊び、指導員が指示を出しても、Ｎさんは横目でチラッと見るのみで、一向にその常同行動を止めないことがあった。その時は、料理を途中で打ち切り、食事の時にＮさんにはおかず無しでご飯だけにした。Ｎさんはしきりに皆のおかずを指さし、「あっはー」と言っていたが、「Ｎさんが料理しなかったから、今日はおかずは無いよ」と突っぱねた。それでＮさんは諦めてご飯のみ食べた。この事が余程応えたようで、それ以後は指導員の指示に従い、最後まで調理することができるようになった。

包丁の使い方に関しては、初めの頃は下まで包丁が通らず、こねるようにしてじゃがいもを切っていたが、今では下まで包丁が通るように要領をつかんでいる。しかし、今だのとり肉や豚肉がうまく切れない。引いて切ることが分かっていない。

煮るときは、水を入れないでガスをつけようとするので、コップを差し出すと、水を入れることを思い出して、鍋に水を入れている。難しいのは煮えた状態を判断させることである。

配膳では、１対１対応ができず、すでに入っている皿にまた同じ物を入れようとしていたが、現在では二つの皿にはきちんと入れることができている。しかし、残りの二つの皿は指示がないと空っぽのママである。やはり算数の基礎的な力「歩きはじめの算数」をつけなければ、配膳は難しいと思う。

食器洗いに関しては、食器の内側はいつも洗うことができているが、外側を洗うことが難しく、なかなかできなかった。しかし今では、４枚の皿の内２枚までは自主的に洗えるようになった。洗剤の泡によって、洗っている箇所を意識づけていった。

また、洗う動作とゆすぐ動作がよく似ているために、Ｎさんには洗っているのか濯いでいるのか判断が難しい。そこで、濯ぐ時は、流水をシャワー状にして、食器をシャワーにくぐらせて食器について洗剤などを洗い落とすというふうに変化させてみた。Ｎさんは以前の方法が根強く定着していて、手でなでて洗っている。

少しでも自立させていってあげたい思いで、最近では後片付けの時は、指導員はつきっきりではなく、他の作業に従事しながら、Ｎさんを見守るという向き合い方に変えている。その方が自主的行動も芽生えやすいようで、Ｎさんは少しずつ自分でやっている。

B　掃 除

月毎に初期の取り組みを述べてみる。
１９８７年　４月
　「～して」と全て指示してもなかなか動かない。雑巾をごしごし洗う要領を、言葉をかけながら手を添えて、全介助で、教えていった。
拭くときは、指導員が後ろから身体をもってあげて、まっすぐ拭いていけるようにコントロールしてあげながら、拭かせていった。

５月　状態は変わらない。雑巾を洗うとき、手を添えるのを時々は止めてみた。

６月
　指示しても全くしようとしない。「掃除をしないと帰れない」という意識作りとして、掃除ができていない場合は、母親に迎えに来て貰っても、そのまま母親だけ帰って貰うことにした。

７月
　掃除をしようとしない。しかし、母親が迎えに来ると、急いで雑に拭いていた。雑巾はひとりで洗わせると、洗わずに絞ってやめようとするので、指導員がＮさんの両手をもって、雑巾をごしごしこすって洗わせて、洗い方の練習をさせた。

８月
　雑巾の洗い方が少し分かってきた。拭く方向を知らせるために、床にテープで印を付けた。手は必ずパーに広げさせ、指先まで伸びているかを確認して、もしできていなければ、言葉で注意していった。

９月
　指導員が見ていないと手を抜く。どこの位置から拭いていくかもまだ分かっていない。雑巾の方は、ごしごし洗いの回数は少ないけれども、洗う要領が分かってきた。絞り方は力が非常に弱く、指先だけで絞ろうとするので、手を添えて掌全体で力強く絞れるように指導した。

１０月
　掃除をしないと家に帰れないという意識は高まり、母親の顔を見ると掃除や片づけが速くできるようになった。

１９８８年　１月
　まだ自主的には何一つ行動しようとしないが、指示に従って掃除をするようにはなってきた。自主性が見られないので、指導員はＮさんにつきっきりをやめて、「掃除を始めてください」と言って、放ってみることにした。

２月
　指導員が離れてＮさんひとりにしてみると、掃除の準備段階である①バケツに印のところまで水を入れる②スリッパを除ける　の２点が自主的にできるようになっていた。バケツの水も印の位置まできちんと入れていた。水量では印の位置まで入っていなかったり多すぎたりで、何回もやり直しをしていたが、その成果が見られ、ちゃんと印の位置で水をとめることができるようになっていた。
　拭く場所は、それまでとは少し曖昧な指さしのヒントでも分かるようになり、拭くことができてきた。
　「できることには自主性が育ってきている」ことが分かった。そして、「根気よく指導して、できることを増やすこと」の大切さを実感した。

６月
　雑巾のごしごし洗いについては、１回ごしと動作するのみですぐ絞ろうとすることが多いが、絞り方は手のひらを使って力強く絞る要領が分かってき、上手にできるようになった。

　開所時より台所と玄関の雑巾掛けを行ってきたが、２年６ヶ月同じ場所を毎日雑巾掛けをしてきたのに、一向に自主的に拭こうとせず、「一番拭いて」「そこ違うよ。そこよ」などと指導員が声をかけるのを待っている状態で、指導員も少々落ち込んでしまったこともあった。けれど、拭き始める場所がはっきり認識できていないために、自主性も芽生えて来ないのではないかと考え、それまでの破線状の印付けを改め、５㎜幅の細い

ビニールテープを床の端から端まで、ノートの罫線のように貼ってみた。そして、拭き始める場所から順番に①②③④と番号をつけて、Ｎさんにはっきりわかるようにした。
それに、「もう２年半も同じ場所を拭いているのにどうして拭けるようにならないんだろう」という暗い気持ちを指導員が捨て、大らかに構えるようにした。
それがよかったのだろう。ついにＮさんに言葉掛けをしなくても順番通りに拭こうとする調子のよい日もあるようになった。拭き方も３０㎝拭いては止まり又止まりしていたが、指導員が後押しすることで、止まらないで連続して拭くことを覚えた。今では２メートル連続で拭けるようになった。今後は、端から端まで５メートル一気にふけるように頑張りたい。

C　裁 縫

１９８９年５月から裁縫に取り組んだ。
まず針に糸を通すことから始めたが、糸を通す動作はビーズ通しの作業で経験しているので、抵抗なく受け入れることができた。大きめの針を使うと、糸の先がほぐれてない限り、それほどの苦労もなく糸を通すことができた。
タオル地２枚を合わせて、すくい縫いから始め、間隔は１㎝にしたり、２㎝にしたりと変化させて縫う練習をしていった。針をさす位置は点を打って示し、一針一針すくって縫うようにした。
裁縫に対しては強い拒否反応はなかったが、やっている途中で嫌になると、指導員を見ながら、針で自分の手を突こうとしたり、裁縫箱の蓋を閉めたりして、自分の気持ちを知らせていた。
初めは裁縫時間は１５分間と決め、その間は「絶対に裁縫をする」という態度を指導員が示し、嫌がってもがんとして譲らず頑張らせた。そのようにしてやがて１５分間は我慢して裁縫をすることができるようになった。
しかしなかなかうまくいかず、Ｎさんも指導員にも忍耐の作業が続いていた。そんな時「一針一針のすくい縫いでは、目が不揃いになるだけでなく、リズムがないので、何時まで立ってもはやく縫うことができないから、連続縫いを指導した方がよいのではないか」ということになり、１９８９年８月より連続縫いに挑戦した。
すくい縫いの場合は“入・出（１．２）”のリズムだが、連続縫いの場合は“入・出・入・出（１．２．３．４）”のリズムになる。そこで、指導員の手を添えて「１　２　３　４」と号令を掛けながら運針をさせてみたが、思っていたほどの混乱はなく、受け入れることができた。
生地についてもタオル地よりさらしの方が縫いやすいと考え、縫い方を変えた際に布の方も変えたが、よかったと思っている。
現在は、点線を書かないで、線だけを引き、その上をリズムに合わせて運針しているが、縫い目も揃ってきているし、Ｎさんも少しずつ慣れてきている。
一方では、クロスステッチ布を利用して、刺繍糸を何色も使い「すくい縫いの要領でランニングステッチも取り組み始めた。このランニングステッチは出来栄えも美しいためか、縫うことが好きなように見受けられた。
今までは練習時間は１５分より４５分にも延長してきたが、以前のように針で手を刺すような真似はすっかりなくなり、頑張ることができている。つい先日のこと、Ｔさんがクロスステッチをしているのを見て、自分から裁縫箱をもってきて、（自分もしたい）を要求を出した。まだ線の上をひとりでは縫えない状態だが、やる気は育ってきたと指導員は喜んでいる。
裁縫は母親も得意な分野であり、家庭でも取り組んで貰っているが、「Ｎが裁縫をするようになるなんて思ってもみなかった」と語る母親の幸せそうな顔をみていると指導員も本当に嬉しくなってくる。親子で「ゆかた」を縫える日を楽しみに頑張っていく。

Ｎさんには無理だと思いながら、取り組んだ裁縫だが、Ｎさんが変化していく様子を見て、教えられることがいっぱいあった。
「案ずるより産むがやすし」である。
また、「できるようになれば楽しくなる」のだから、嫌がってもできるまで指導して楽しさを知って貰いたいとも思っている。

５）生きていく上で必要な判断力を少しでも付けるために基礎学習と言語発達をはかる

⑴　言語

Ｎさんは生後８ヶ月で「マンマ」が言え、「Ｎちゃん何歳？」と聞かれると「１歳」と答えていたそうである。ところが２歳半頃から近所の人が来ても、ひとり、紐を振ってにこにこしている状態が見られるようになり、言葉も少なくなっていったという。

Ｎさんの母親はわかば共同福祉作業所入所時に「半年前から言葉が少なくなったのです。言わなくなったのです」と心配そうであったが、幸い、進行性に言語が消失するということもなく、むしろ着々と言語を獲得してきている現状である。

入所時「お茶ちょうだい」「いたい」「お車でお帰る」「そうじせんの」「ごめんなさい。はい」
「いただきます　はい」「ごちそうさま　はい」「おはようございます　はい」
「さよなら　はい」が言え、挨拶には必ず「はい」がくっついていた。

言語を増やすために「要求をきちんと言わないと、何もしない、してあげない」という不親切な状況を徹底したことで、作業所では生活する上で困らない最低限の要求語はきちんと言えるようになってきた。

「お茶を下さい。紐して下さい。カセットつけて下さい。手伝ってください。連絡帳下さい。トイレ行かせて下さい。できました。箱下さい。おはようございます。」などである。

また、指導員の言っていることは理解し行動できている。

今まで、Ｎさんの対して、返事が返ってこなくても「今にきっと」の思いからいろいろ話しかけて来たが、その成果が少しずつ表れ始め、特に散歩に出ると、自分の方から話しかけてくるようになった。話の内容は、まだ会話ではなく、今までに覚えた言葉が主であるが、そんな中に時として会話らしい言葉もまじえている。

例えば、「そうじは？」と連発するので、「そうじする？せんのん？」とたずねると、「そうじせんのん」と言葉と一緒に首を振って返事が返って来る。また、「歯いたい」と言うので、「歯医者行かんかい」というと「診てもらわんのん」など言う。そして、Ｎさんがいくら話しかけてきても知らん顔をしていると、指導員の方や手をつかんででも、自分の方を向かせる。相づちを打ってあげると落ち着くようである。

１９８８年頃から急に頻繁に「あっはー」「あっはー」の言葉と手差し（五本指）をして、要求を出すことが多くなって来た。自分のしていることが正しいかどうかの確認をして欲しい時・要求のとき・したい（更衣室を指さす）時などに言うが、積極的に指導員を求めている好ましい変化だと受けとめ、その都度言葉を教えながら、要求を満たしてあげるようにしている。

例えば、裏返しができないと、服を突きだし、「あっはー」と訴える。そんな時黙って要求に応えるのではなく、「直してください」をいう言葉を教えて言わせるようにしている。その場にあった言葉をその都度教えることによって、言葉の世界が広がっているように思う。

「ありがとう」が促されないと出てこない。世話して当たり前という大人の姿勢が、Ｎさんに「ありがとう」という一番大切な感謝の言葉を教えなかったのではないだろうか。要求が満たされた時には「ありがとう」が言えるようにしていきたいと考えている。

⑵　視知覚の訓練・目と手の協応訓練・手先の機能訓練

１９８８年１月から週２回次のようなことを取り組んだ。

①　絵合わせ（帽子２片・リンゴ２片・家２片・鯉のぼり３片）：２片の場合は一方を固定して、もう一片をくるくる動かしてみてぴったり合うところを見つけ、何とかできる。しかし、３片の鯉のぼりは「頭、真ん中、しっぽ」に分かれているので、ちょっと困っている。関係がつかめない様子。Ｎさんは言葉は発音もよく受け答えができているので、こんなにも簡単名ことができないのかと驚かされる。このような部分から全体を造り上げて行くことが極めて難しい。作業が難しい。どれをどこにもっていけばいいのかまるで分からない。

②　色の分類（７色）：ビーズのれんの作業で色を意識し始めたので、同じ色に分ける練習をしている。

③　型はめ（１５種類）：初めは６種類でも３０分掛かり、そのうち１２種類でも２０分から３０分でできるようになった。しかし、視覚を働かせると言うより、あれこれ動かしている内に型にはまるといった具合で、形の認知ができているとは言えない。それでも、□○の区別は少しついてきたように思えるので、形の指導を続けて行きたい。

④　はさみで線の上を切る。：始めは１０㎝の直線であれば、線の上を切ることができていたが、線が長くなると線から外れていってしまった。今は線だけを切るのではなく、四角や三角など形あるものを切っているが、その方がしっかり切れている。切り取った四角で時計など作ってあげ、目的のある作業にしている。

⑤　定規で線を引く。：左手で定規を固定して右手に鉛筆を持って線を引く操作である。横線はだいぶ引けるようになったが、縦線は定規と全然関係ない線を書いている状態である。定規に鉛筆が添ってない。しかし、これはできるようになると思っている。

⑥　パズル（８切片の自分の顔写真）：位置関係がなかなか分からない状態である。目など左右の区別もつきにくく、また、二つの目を上下に置いたりすることもある。Ｎさんは人の名前をよく覚えていて、区別することもでき、人の顔を全体的に捉えることはできる、しかし、部分から全体を組み立てることはむずかしい。

⑦　数字のマッチング：１から１０までのうち「３とって」というと、合うときが時々あるようになった。１から１０まで何となく分かるようになってきている感じである。Ｎさんの場合、マッチングの取り組みによって数をわかるようにするようにしようというより、同じマークに気がつくようにしようという意図がある。

⑧　漢字のマッチング：山・森・手・口・耳・目・歯など数字より上達がはやく、区別しやすい課題だった。

⑨　のり・セロテープの使い方

⑩　折り紙（やっこさん）：

折り紙には両手の細かい共同作業がある。しかも、目でしっかりと確かめながら折る必要がある。うまく折り重ならなかったら、次のステップで困ってしまう。折っていく順番もきっちりきまっている。両手がまだ充分に使いこなせていないＮさん、形がまだはっきり認識できていないＮさんには適した課題であると考えた。

最初は市販の色紙を使用したが、無理であった。そこでマッチングを利用した色紙を手作りした。それがよかったのか、折っておく順番が分かってきた。しかし、親指と人差し指がうまく使えない。緊張すればするほど人差し指が伸び、曲げないので、紙がうまくつかめないし、折った内側の紙を引っ張り出せな状態だった。

そこで、大豆をつかむ練習を課題として取り組んだが、大豆をつかむ時も初めは小指を除いた他の４本の指でつかもうとした。苦肉の策として、人差し指と親指を除き他の３本の指を紐でくくり使えないようにした。そして、人差し指と親指で大豆をつかませるように手を添えて指導した。Ｎさんはすぐに要領が分かり、大豆をつかむことができるようになった。（現在、トモニ療育センターでは、小さい子どもには子供用の伸縮性のある軍手の親指と人差し指の先を切りそこから指が出せるようにする。そして、他の３本の指の部分は中で縫いつけて指がでないようにした２本指手袋を使わせている。）

１９８９年８月より市販の折り紙に移行した。折り始めの準備段階の折り線をつけることのさせている。角と角を合わせることが難しいが、できはじめている。何度も経験していく中で、三角を折る時に下側の紙がずれないように片手で押さえ、もう片方の手で角に角を合わせるように自分で工夫することもできるようになった。

今は傍について言葉だけのアドバイスで奴さんがおれるようになっている。見通しが明るくなった。折り上げたやっこさんはブックにセロテープや糊を使って毎日貼り付けていっている。糊も初めのうちは気持ち悪がって服で拭いていたが、今は慣れてきた。

※　２年半、様々な取り組みをすることによって、Ｎさんの障害が少しずつ具体的に分かってきた。適切な指導ができるように一層の努力をしていきたいと思っている。

６）問題行動、常同行動、不適応行動などをなくして行く。

(1)　自己刺激行動・常同行動

Ｎさんには、激しくリズミカルに両手を肩の高さで水平に振りながら、首も激しく振り続ける行動が診られる。この動作をしている時には、必ず目を開けているが、Ｎさんなりに、自分の身体を振ることによって、外界がリズミカルに揺れ動く光景を楽しんでいるように思われる。また、深部感覚も楽しんでいるだろう。

特にリズムのはっきりしているロックなどを音楽を聞いている時に、喜々として顔を紅潮させて首振りや手振りをやっている。その感覚的遊びはダンスの好きな人には理解して頂けるだろう。身体が感じるリズムと目が感じる光のリズム。まるで、音楽に合わせて飛び交うショウライトをＮさんは自分自身で作り出して楽しんでいるように思われる。

また、Ｎさんには細長く切った新聞紙やハランの葉を手に持って上向きに振り動かす動作が見られる。こうしている時には安定しておとなしいので、母親は自動車に乗せる時、外出の時・ハイキングの時・やむを得ない集会の時などにＮさんにどちらかと言えば積極的に新聞の切れ端を持たせていた。大きくなった娘さんが紙切れやはっぱを目の前で振り動かしながら歩くのは、異様な光景なのでやめた方がいいと母親に忠告しても「何もすることがなくて周りの人を突然押し倒すよりはずっと増し」なかなか徹底できない。

そのＮさんの様子をよく観察して見ると、新聞の細長い切れ端やハランの葉っぱが光を受けて微妙にゆらゆらと揺れ動くのを視野の端の方でとらえて楽しんでいるのが分かる。これもまた、リズミカルに物を動かして、光の変化を楽しむ視覚的遊びということができるだろう。

Ｎさんはまた、机・お盆・ガラス戸・弁当箱のふたなど、いろいろな道具や家具を指先で叩いて連続的に音を出して楽しんでいるが、そのリズムは素晴らしく、できれば打楽器などの指導をして本格的趣味にしたいと思うほどである。ビートルズなど聴いている時のＮさんの没頭した様子を見ていると、音楽に関しては人並み以上の感性が彼女の中に顕在していることが伺える。

私たちも手持ち無沙汰の時、指先で机など叩いて過ごすことがあるので、Ｎさんの行動をすぐさま異常と見ることはできない。けれども、Ｎさんの場合は、作業中・調理中・集会中などに叩いて音を出して遊ぶので困ってしまう。Ｎさんは場所と時間を判断して、周囲の状況に適応して行動できないので、やはり指先を使っての音遊びは消去したい。

これらの同じ身振り・同じ動作の執拗な繰り返しを常同行動と言っているが、これは遊びを知らない重度の精神発達障害児にも見られ、自閉症に特有なものではない。執拗で、目的を持たない、何の有効性もない行動で、発達のエネルギーが外に向かわないで子どもの中で空転している状態だとも言われ、自己刺激行動と解釈されているが、私たちの見る限りでは、Ｎさんの「積極的な感覚遊び」だと考えられる。

Ｎさんはわかば共同福祉作業所入所時、１日のほとんどを物を指で叩いて音を出すか、自分の身体を４本の指を交互に動かして叩いて刺激するか、首振り手振りをするか、左右にゆっくり身体を揺らすなどして過ごしていた。詳しくは次に記す。

散歩中‥‥看板を見つけて叩いて音を出す。指導員の帽子のつばを指で叩く。自分の身体を４本指でたたく。
食事中‥‥首振り手振りをする。座ってやっているときは足をピンと張って少し浮かしている。お盆を片手で持ちあげ、一方の手の指先で音を出す。
登所時‥‥わかば共同福祉作業所の看板をたたく。
部屋で‥‥カレンダーを指先でパラパラといわせ、音を楽しむ。柱に吊っている鏡を指先ではね、柱にぶっつけさせて音を出している。机を指先でたたく。
体操中‥‥ボール投げ中首振り手振りをする。
何もしない時　特に首振り手振りが多い。

それが現在ではあまり目立たなくなり、作業所ではけじめがついてきたように思う。しかし、まだ完全にはなくなっていない。休憩時には音楽に合わせて思い切り首振り手振りを楽しんでいる。

詳細は次に記す。

作業中‥‥皆と一緒の時はしないが、一人別室で作業をしていると、首振り手振り・机を叩いて音を出して遊ぶ。ビーズ通しをしないでぼんやり過ごしている時に、左の掌を上にして、右手の指でごしょごしょと刺激していることがある。
調理中‥‥たまに、お盆を叩いて音を出す。食器洗いの片づけの時、身体が左右にゆっくり動いている。
食事中‥‥首振り手振りは出ないが、片手で畳をトントン言わせる時がある。
歯磨き中‥ゆっくり身体が左右に揺れている。
その他‥‥何かをしに動く前にカレンダーをピラピラと触っていく。時々わかば共同福祉作業所の看板を叩く。

対処としては、何かをさせるときは、途中で首振り手振り（自己刺激行動）などをさせないようにし、していることに集中させることにした。例えば、着替え中に遊びが入ると、「今は〇〇している時」と言って制止したり、体操時はやり直しをさせた。

体操の時は遊びが入ると「やり直し」をさせられるので、激減した。この場合の「遊び」は嫌なことやできないことをさせられる時に頻発するので拒否行動・逃避行動と考えられる。課題が上手にできるようになり楽しくなってくると、「遊び」は確かに減っていった。

調理時に、指導員の指示に従わず「遊び」と頻繁にやり、ついに調理を中止したことがあったが、その日はおかず抜きの辛い経験をした。以後「遊び」を控えるようになった。

食事中は、片手に箸、もう一方は弁当箱の縁を持たせるなどの工夫をして、遊びが入れない状況作りもおこなった。

また、休憩時間など決められた時間だけ「遊び」を許すことがＮさんを無理なく指導できる方法ではないかと思い、休憩時間には、音楽を聞きながらの首振り手振りを許している。

外出時の紙振りは、自分の周囲の光景や出来事に注意を払えなくし、障害の重いＮさんをますます認知できない状況に追い込むことになるので、作業所ではきっぱりと止めさせている。実際、紙振りなしの山歩きでは、蜘蛛の巣を避けるなど自分で障碍物に気がついて適切に行動できるようになってきている。Ｎさんに新聞紙の切れ端を持つことを禁止してもパニックは見られず、素直に指示に従うことができているので、外出時は全面的に禁止したいと思っている。

根本的解決策は、Ｎさんができることを増やし、趣味を指導し、何もしないで過ごすことのないようにすること。積極的に手を使わせ、目的を持った行動を増やし、発達をはかり、より高度な遊びに導くことが第一に望まれる。そのために今いろいろ取り組んでいる。

⑵　問題行動

①　突き倒し

Ｎさんには、不意に人を突き倒す危険な行動がある。腹が立って攻撃すると言うわけではない。全く他意は無く、突かれた人がひっくり返ってびっくりしたり、周りの人達が騒ぐのが面白いらしい。しかし、突き倒された人は柱や壁やガラスに頭をぶっつけて怪我をすることもあるので、絶対に止めさせなければならない問題行動である。

乳幼児期には、突いたり押したりして、人と関わり合っても誰も何も咎めたりはしないが、Ｎさんのように大きくなってもやっているこの行動は、重大な他傷行為である。なにしろ体格の良いＮさんが全く予期しない時に「あっ」という間の人をどんと突くのだから、目が離せない。自分より弱そうな人、怖くない人・子どもをめがけている。その他傷行為のために、母親はとても肩身の狭い思いをしており、どうしても出かけなければならない時には、Ｎさんから片時も離れようとせず、両腕を広げて自分の体をガードにして、周りの人に危害が及ばないように心を配っている。

「何が一番つらいかって。この子が人を突き倒す、ことさえ止めてくれたら、もう何もできなくてもかまわないんです」と母親は涙しながら、話してくれているが、Ｎさんが社会参加していくためには本当に大きな妨げとなる問題行動である。

その行動を止めさせようといろいろ試みた。人を突き倒した時には、大声で叱りつけたこともあった。しかし、「ごめんなさい。」とは言っても、事の重大さが分かっていない。だから、「ごめんなさい。」と言っては問題行動を繰り返す。「ごめんなさい。」で事を済ますと、ますますエスカレートするようだった。Ｎさんにとっては「ごめんなさい。」という言葉は、「大声で叱られるのをおしまいにできる」大変便利な言葉だった。

人を突き倒した時には、作業所に残して余分に嫌な作業をさせたこともあったが、これも効果はあまり無いようだった。それに余分な作業はつきっきりの指導員に負担をかけるだけでなく、母親にも、指導員に迷惑をかけているという済まない思いを増させ、Ｎさんの問題行動で余計に辛い思いをさせてしまった。

本質的には精神的に未発達・未熟な訳だから、心を育てる事をすべきだが、それは簡単ではない。今では、「問題となる行動をすれば、結局自分が損をする。だから、やめておこう」という思考がＮさんに定着すればよい。その方法として、「押したらマラソン」「突いたらマラソン」というように標語にしてパターン化し、Ｎさんの大嫌いなマラソンをさせるようにしてみようと考えている。

このように「人を突き倒したら損をする」ということを体得させることが、Ｎさんが自分の意思で止められる力となるだろう。その一方で、問題行動を未然に防ぐよう万全の注意を払っていくことが大切なことである。

押す行動は作業所の日常ではほとんど無いが、戸外に出ると、周りの自転車・単車・子どもが気になるようで、一時も目が離せない。

指導員には、Ｎさんとの２年６ヶ月の付き合いの中で、「Ｎさんが人を突きそうだな」ということが何となく直感できるようになった。そんな時、「Ｎさん！」と大声をあげると、Ｎさんはサッと指導員を見、その問題行動を止めることができるまでになった。

自転車や単車を押し倒すこともあるが、これも同じ性質の興味なので、人を突く場合と同じ重みで事をとらえ、同じ対処法「押したらマラソン」で頑張ってみる。

②　唾吐き

作業所入所時からあった問題の行為である。Ｎさんにとっては、ちょっと面白いやってみたい行動であるが、唾吐きの行為は人に不快感を与え、社会的にはやってはならないエチケット違反行為である。唾を吐いたら、自分できれいに拭き取るようにさせ、「悪いことをしたら、損をする」経験を積み重ねることで消去

に努めている。

③　自傷行為

家庭での生活リズムが狂い、夜眠られなくて朝方になってやっと眠るといった状態のとき、作業所で突然大声で喚き、その後涙を流して泣いたり、自分の顔をかきむしったりすることがあった。眠れないとき、以前は薬を使用していたが、それはかえってイライラを増し、長期化するようなので、今年度は薬は使わないで、「朝は定刻時の起こし、運動と歩くこと十分にさせる」ことを母親が頑張った。その方が早く調子を取り戻せた。

顔を掻きむしったり、髪をかきむしったり、「わーっ」と大声で泣くときは、自分で自分を持て余して苦しんでいる時だと思い、色々原因を考えてみるが、分からない場合が多い。そんな時は対処の仕方も「そっとも守る」「戸外に連れ出して運動させる」など一律ではない。

周期的に変化する性ホルモンの関係も考慮し、月経の記録もしてＮさんの状態をつかもうと努めている。

④　物を放る　破る　叩く

この行為は自傷行為と違って外にむかうものなので、重苦しい感じがなく、指導員も心乱されず、対応することができる。次のような場合にこの問題行動は起きている。

(a) 指導員と関わり合いたい気持ちがあっても、自分の方に向いて貰えない時、コミュニケーション方法が未熟であるために、やっている場合。
(b) 作業や集会が嫌で、早く止めて貰いたい場合。
(c) 退屈な場合。
(d) 体を十分に動かしていない場合。

こんな場合も、自分のかごを放ると、自分で拾いに行かせ、きちんと片付けさせる。その後かごの周りの雑巾掛けをさせるなどして、「結局、損をする」体験を一貫して与えてきた。それと同時に原因を考えて、Ｎさんの気持ちを考慮した関わり方を工夫していかなければ解決にならないので、例えば、(a)が原因と考えられる場合は、他傷行為の場面で指導員がしっかり心から関わるようにしていった。

問題行動はしばしばＮさんからのメッセージであったり、ＳＯＳであったり、発達途上で見られる喜ぶべき変化であったりするが、行動の意味を考えて、慎重に対応するべきである。問題行動が増えてきた時は、対応が果たして適切であったかどうかを十分に話し合って、全面的見直しをする努力をしている。

感情的に罰する事からは、何も解決できない。問題行動に振り回されないで、ひたすら全体的な発達をはかるようにすることが、結局は問題行動を少なくしている。

「何もしないでいいから、人に迷惑をかけないでほしい」とＮさんの母親は、辛い思いを打ち明けてくれたが、実は、何もさせないから、多くの問題が出てくる。

“どんなに障害が重くても、自分ですることがある。働くことができる”ということは、人間が幸せに生きていくために本当に大切な基本的条件であるということをＮさんは教えてくれている。

※その後、Ｎさんは母親の死亡により、知的障害者更正施設に入ったが、人を押し倒すという危険な行動のために、隔離された生活をしている。他傷行為があっては、職員も目が離せない。限られた職員では十分な対応もできない。環境がふさわしくなくなると、積みあげてきたものが崩れていく。適切な早期療育がなされていたら、Ｎさんの人生はもっと違っていただろう。無念である。

７）遊び方や余暇の過ごし方を身につける

何もない部屋で一日中何もすることがなく、一人で過ごす。こんな生活が毎日続くとしたら、誰でもおかしくなってしまう。認知障害をもつ自閉症児者の多くは、なにもすることがない時間をたっぷりもっているだけでなく、その過ごし方さえ知らない。それなりの時の過ごし方を身につけていく。

身体を前後に揺らしたり、手をひらひらさせたり、紐をひらひら振り続けたり、首をリズミカルに振ったり、自分の身の回りの物をやたら指でたたいたりして、音を楽しんで過ごす事が多くなる。

食べる機会が多くなるだけでなく、運動不足になって肥満になってしまう。

自分をもてあまして、頭を打ち付けたり、自分の指をかんだり、皮をむいだりなど自傷行為も増加してくる。

自分のお気に入りの雑誌・絵本・カタログ・写真集などを繰り返し繰り返し眺めて過ごしたり、繰り返しカセットを聴いて過ごす。

困った問題行動をいろいろ出してきたり、情緒不安定になり、家族の生活も脅かすようになる。

母親たちは自閉症の子ども達が在宅で何もしないで過ごすことの悲惨さを考えて、作業所を切実な思いで作った。通所できて、するべき事がいっぱいある規則正しい生活が自閉症の人達には特に必要だから。わかば共同福祉作業所では、何もしないで過ごすことがないようにと、自分でできることを増やす努力をしてきた。しあｋし、これだけでは、余暇時間をうまく過ごすことはできない。遊びを知らないで育った人達のために、その人に合った何かを用意しなければ、家庭で親も子も時間を持て余してしまう。

Ｎさんは音楽という素晴らしい趣味がある。作業所では休憩時間に「カセットつけてください」と指導員に要求してビートルズなどを首ふり手振りをしながら、実に嬉しそうにリズムにのって楽しんでいる。その首振り手振りは激しく、異様な印象を受けるが、Ｎさんは全身で音楽を楽しんでいる。素晴らしい感性を持っているＮさんのために世界のよい音楽を聞かせてあげたい。

また、Ｎさんには山歩きがすっかり好きになったが、これも健康な余暇の過ごし方である。

レストランで食事を楽しむのもよい。

地域の中で生きていくために、必要な社会ルールを身につける。

① 親や職員の指示に従う。
② 挨拶をする。
③ 生活時間を守って、仕事や食事をする。
④ 自他の区別をつけ、他者のものに手を出さない。
⑤ 勝手にうろうろ歩かない。トイレの前でうろうろしない。
⑥ 人前で着替えない。寝ころばない。鼻をいじらない。臭いを嗅がない。あくびを慎む。
⑦ 人前でズボンやスカートをなおしたり、脱いだりしない。
⑧ 人前で性器にさわらない。
⑨ 人を叩いたり、押したり突いたりしない。物を投げない。
⑩ 大声をあげない。
⑪ 散歩や旅行では離れないで一緒に行動する。
⑫ デパートや駅でのトイレをエチケットを守って使う。
⑬ 道の端を歩く。交差点では止まって、指導員の指示を待つ。
⑭ レストランで好ましく食事ができる。
⑮ スーパーなど店でお金を遣って、買い物ができる。
⑯ 誕生会やクリスマスなどの集いを楽しむことができる。
⑰ 病院や医院で治療ができる。
⑱ きちんとした服装ができる。
⑲ 乗り物やレストラン・映画館・劇場などで静かに楽しむことができる。
⑳ 異性に触らない。人に触らない。人をじっとみつめない。握手しない。人の髪にさわらない。

限りなく守るべきエチケットがある。親が気をつけたいのは服装である。場所柄の分からない自閉症児には、いつもルーズな衣服で過ごさせてはならない。シャツはボタンを掛けてきちんと着、ズボンもすっきりとジーパンやスラックスを。社会性がないなら、余計に服装に気を遣うべきである。それによって、場所柄をわきまえることもできる。

Ｔさんの場合

１．　基本的生活習慣の確立

わかば共同福祉作業所開所時、Ｔさんは指示に従って動くことができ、自分でできる能力もあったが、全てに置いて雑であった。脱いだ靴・スリッパを揃えることはまもなくできるようになったが、脱いだ衣類を畳むことは、指示して一緒にしてきたが、Ｔさんにたたませた後、指導員が再びやり直しをしなければならない状態だった。土間を掃くことも５日間で覚え、指導員が「掃除をしよう」と声掛けすると、自主的にできたが、自己流に手早く済ませようと、靴などを外へ出さないで掃いていた。

この歳まで自分のしたいことだけをやり、他者から指示されて動く生活をしてこなかったＴさんにとって、自分のしたくないことを他者から指示されてするのは、非常に不本意だったと思う。だから、きちんと正しく

できるように「やり直し」を指示すると、プイと横を向き、再度指示するとその場から居なくなって柱時計を見にいく、指導員を急に引っ張ったり息づかいも荒くなって叩くなどの抵抗も示した。誰でも、大人になってあれこれ指示されたりやり直しをさせられたら、気分はよくない。（だから、幼い内から、自立に向けて取り組み、大きくなったら、指示しなくても任せ切ることができるようにしたい！）

Ｔさんは現在も「雑巾はべちゃべちゃのまま拭く、靴を脱ぎっぱなしにする、手洗いは指先だけにする」など、雑な事が多い。指導員がやり直しを指示すると、「やり直し駄目じゃねぇ」と笑いながら指示に従ってできるようになっている。

今後は指導員が「やり直し」を指示するのではなく、「これでよいのかどうか」と疑問を投げかけて、自分で判断してやり直していけるように導きたい。

着替えは、現在の服装ならできている。作業所内では体操服を着て過ごしているが、この着心地・便利さに慣らされてしまう危険もある。地域で生きていくためには、成人女性らしい服装も必要と考えている。また、「暑ければ服を脱ぎ、寒ければ服をはおる」それを自分で感じて自主的にできるようになってほしいと思う。

このようにＴさんは基本的生活習慣はほとんど確立していて、作業所の生活が分かり、次から次へと大体自主的に行動できている。

２．　規則正しい生活・運動を通して、身体作りを心の安定をはかる。

⑴　通所：　母親がオートバイにのせて通っている。

⑵　山歩き：「市民の森ありません」散歩に行きたくないときのＴさんの表現である。山歩きはあまり好きではない。一緒に歩く人と歩調を合わせることができている。また、歩く習慣から、以前は度々風邪をひいて熱を出していたが、今まではそれが嘘のように熱を出さなくなり、血色もよくなり、体重も増えてつやつやと健康的になった。

⑶　体操：虚弱な体質と猫背を意識して、「腹筋運動、前屈運動、ぶら下がり、背のばし、背中の指圧、深呼吸」などを取り組んだ。２年経過してみると、筋肉がつき、力が強くなった。また、背中の丸みも少しのびて、姿勢が幾分よくなっている。

３．　その人に適した作業を見つけ、働くことの喜びと自信を持たせ、好ましい発達をはかる。

⑴　銅線はずし

わかば共同福祉作業所開所当時は、Ｔさんは、集中力がなく、自分のしたいことのみをし、指導員が指示すると返事はするものの、急に引っ張る、叩く、息づかいが荒くなる等の拒否行動を示す状態だった。Ｔさんは市内の企業の下請けによる『部品の銅線はずし』を作業として始めた。部品の種類も色々あり、型が変わる度にイライラし、落ち着きがなくなって少々パニックを起こしていたが、指導員が（全介助で）手をとって強引にでもさせていった。Ｔさんはできるようになるとすぐイライラはなくなり、熱心に作業に取り組むようになった。最近では型が違ってもすんなり作業に取り組んでいるが、型に多少好き嫌いがあり、自分の嫌いな型だと進んではしようとしない（当たり前だが）。

当初は独り言やよそ見が多く、なかなか集中して取り組むことができなかった。でも、一定時間（１時間）は作業に従事することができてきた。そのうちに、指導員のしている自分とは違った作業に興味を示すようになり、指導員の作業をしたがるなど変化が見られるようになった。

独り言に関しては、「今は仕事中よ」「黙ってしようね」と繰り返し繰り返し言って聞かせた結果、１年もすると、話をしていい時としてはいけない時の区別がついてきたようだった。

現在では、「銅線はずし」の作業は板に付いたものでＴさんのお気に入りの作業になっていて、作業所での仕事は銅線はずしだと思っている風である。また、指さししながら、「これこれ」と仕事をしようとする意思を表すようになった。仕事への意欲は、指導員の目を盗んでは、こそこそと部屋の隅で銅線はずしをしているところにも見られる。家庭では何もしないで過ごしていたので、約１年前から銅線をもって帰って貰っていたが、すっかり病みつきになって、「銅線はずし」しかしなくなり、家庭での取り組みに支障が出てくるようになった。そこで今では家庭にもって帰る個数を制限している。

目と手の協応ができ、手先も器用なＴさんにはピッタリの作業であり、本人も非常に意欲的だが、猫背のＴさんにとって作業姿勢は猫背を助長することにもなるので、体操でカバーするように気をつけている。

最近嬉しかったことは、指導員が目打ちを使用してすばやく銅線をほどくのと見ていたＴさんが、初めて真似をして指導員の使っていた目打ちを使用したことである。周りの人の能率の良い方法を見て、自分も真似をしてみる。そんなことが自然に自発的にできるようになった。

銅線をはずすにも順序があり、それを守ると簡単に外せるが、Ｔさんにはそのほどき口を見つけるのが難しく、今はほどき口に関係なくやたらと外している。

この作業も機械の高度化によって巻き損じが少なくなってきているし、また、Ｔさんがこの銅線外しに自閉症児者によく見られる固執性を見せてきたので、そろそろこれに代わる作業をさがす時期がきたようである。

(2)　廃品回収

１９８８年１２月から月２回作業所の近所を車で廃品集めにまわっています。地域に出て障害者への理解の輪を広げ、地域に根ざした作業所にすること、Ｔさんの社会性を育てることなどが目的である。

Ｔさんは自動車に乗るのが大好きで、指導員の運転の邪魔をすることもなく、一緒に楽しく歌を歌いながら廃品回収に出かけている。

当初は自動車に乗ること以外は関心がなく、肝心の作業には全く意欲が感じられなかった。指導員の言葉掛けがなければ、動こうともしなかった。初めての経験なので無理もない。そのうちに、定期的に回る所では、どこで何を貰ってくればいいのか理解して、自主的に自動車から降りて取ってこようとするようになった。

半年もすると腕の力がついてきて、それまでは軽いものを選んで運んでいたのが、３０㎝以上つまれた新聞やビールの空き瓶１ダースを抱えて運んでくるようになった。段ボールも１枚ずつ両手に抱えて運ぶようになった。

廃品を自動車に積み込む順序は新聞、雑誌、ダンボール、ぼろ切れ、空き缶の順である。当初は「〇〇をもってきて」と声を掛けていたが、３ヶ月もすると要領を心得て、ダンボールと新聞があれば、新聞を先に運んでくるようになった。

汚いものときれいなものを見分けることもでき、きれいなものを先に持ってくる。でも、無くなれば、汚いものもちゃんと運んで来ている。

廃品回収は挨拶の練習のチャンスでもある。常に「おはようございます。」「ありがとう」「さよううなら」と言えるように指導してきた。指導員がＴさんの横または後ろにまわり、小声で声掛けをしてきたが、それは今も続いている。しかし、初めのうちはＴさんは声を出そうとせず、プイと横を向いていたが、今ではしっかりと大きな声で挨拶ができるようになった。

しばしば自閉症の人に見られることだが、Ｔさんも挨拶の言葉とその言葉をおくるべく方向・相手が一致していない。平然と後ろ向きであらぬ方へ挨拶をしている。これも自閉症の基本的障害のためであるが、相手をよく見て挨拶することを細かく指導する必要がある。

また、Ｔさんはどんな場所でも挨拶ができるわけではない。それに定期的にまわる所でも、「おはよう」が言えても「ありがとう」が言えなかったりする。気分がとんでいる時はせかせかと運ぶだけ。初めて訪問する家では、戸をすぐ開けようとするので、指導員が後ろについて、「呼び鈴を押して」「おはようございますと言って」などと指示している。

有り難いことに、だんだんＴさんのことを知って、Ｔさんの言葉を促すように話しかけて下さる方も出てきた。

Ｔさんは自動車に乗るのが大好きで「くるまに乗ろう」としばしばせがむ。今ではすっかり廃品回収の仕事が気に入っている。嬉しかったのは、チャリティーバザーの後片付けの時に、Ｔさんが自主的に新聞紙などを自動車まで運んでくれたことである。様々な経験がＴさんを豊かに成長させていることを確信でき、皆で喜び合った。

(3)　野菜作り

戸外で自然に親しむ農作業は、自閉症の人の気持ちを和ませるし、いろいろな作業工程があるので、誰にでもできるのではないかと考えたが、実際には認知障害のある自閉症の人には大変難しい作業である。作業所では、将来何らかの農作業をしたいと思っているが、今は、本当にささやかな菜園を作り、苗を育て、収穫した野菜を調理して食べるという目的で取り組んだ。

野菜と雑草の見分け方を指導するのは難しい。見分けがつかないと草取りはできない。指導員は雑草と野菜の区別をつけるために、草よりもぐんと大きく育つキュウリ、トマト、ピーマン、ナスを植えた。また、植える場所もブロックで四方を囲み、畑であることを強調した。

先ず、ブロック運びから始まり、草取りをし、肥料を混ぜて土作りをした。Ｔさんが手で穴を掘って、買ってきた苗を植えたが、手際よくできた。そして、じょうろに水を入れて、最初の水やりをした。後は定期的に草取りをするが、Ｔさんの方は苗と草の区別はわかっているようだった。しかし、手抜きが多く、手に土がくっつくのを嫌い、畑仕事が済むと作業服は泥が塗りたくられている状態だった。

やがて、何とか実がなった。Ｔさんはかごを下げて行って実を収穫しながら、「まあ、いっぱい」と感嘆の声を上げていた。収穫したものは作業所の昼食時にトマトとキュウリは生食で、ナスは炒めて食べたが、Ｔさんは好き嫌いなく全部パクパク食べていた。自分で作った野菜だという特別な感慨は見受けられないが、おいしそうだった。草取りはつまらないし、草取りの意味は分からないし、収穫までには長い時間が掛かるし、野菜作りの醍醐味をＴさんＮさんに伝えるのは大変なことのようだが、作業所の恵まれた自然を生かしてこれからも毎年作っていきたい。

４．　年齢に相応しく生きていくために、掃除、洗濯、調理などの家庭科技術を身につける。

⑴　掃除

開所当初からずっと『玄関をきれいに掃く』ことをやっているが、台ふきんなどの絞り方ができてないのに気がつき、途中から拭き掃除も加えた。

掃き掃除は、玄関（土間）の一隅にテープを貼って、四角を作り、そこに箒で掃いてゴミを集めるように指導した。せかせかと先へ先へと気持ちがとんでいくＴさんは、じっくりと落ち着いて丁寧にゴミを集めるのが苦手だ。ゴミをきれいに集めず、すぐちりとりに入れようとする。「やり直し」をさせることで、「雑さ」を直していった。「もうできる」と指導員が油断すると、また雑になる。隅っこのゴミを取るのが苦手であり、現在も見直しが必要である。

拭き掃除も拭こうという意欲は大いにあり、さっささっさとはやいが、障害物を除けてその下をきちんと拭くことができず、雑巾も絞らず、べちゃべちゃのまま拭こうとする。生来の性格のためもあろうが、技術的に雑巾を絞りきることができていない。重点的に絞り方を指導することが必要である。瓶詰めの蓋を開けたり、洗濯物を手で絞るなどして、両手首を同時に逆方向に回す（ねじる）身体の使い方をもっと丁寧に指導していきたい。また、Ｔさんが使い勝手のよい雑巾を工夫する必要もある。

⑵　洗濯

この課題は主に家庭で取り組んで貰った。母親の指導を受けて、今ではＴさんは毎朝、洗濯機を使って洗濯し、物干しに干してから作業所にくるようになった。以前は気まぐれで、自分のやりたい時に自分流のやり方で手伝っていたが、その傾向は薄れて来ている。

⑶　調理

1）ホットケーキとサラダ

まず簡単でおいしくて楽しいものをと考え、１９８７年６月から８８年１２月までホットケーキとサラダを作った。初めから終わりまで全課程を一人で取り組むようにさせ、マンツーマンで指導していった。

ホットケーキ

手順

① ボール、泡立て器、計量カップの道具を揃える。
② 小麦粉、ベーキングパウダー、砂糖、卵を出してくる。
③ はかりで計量する。
④ 卵をボールに割り入れる。
⑤ 卵を混ぜ、砂糖を加える。
⑥ 小麦粉とベーキングパウダーを入れて混ぜる。
⑦ 焼く。

経過

１９８７年６月：初め２回までは指導員と一緒に全課程をした。実に楽しそうだった。３回目になると、言葉で「もっと混ぜて」などの指示はしたが、卵割りから焼くまでを全て一人ですることができた。

７月：行事予定の黒板を見て、「ホットケーキ作り」とよく言うようになった。そして、前日には「明日はホットケーキ作りよ」と楽しみにするようになった。

９月：調理に必要な道具、材料、手順は分かるようになった。ただ、はかりでの計量ができない。はかりに工夫をし、砂糖の５０ｇと小麦粉の１００ｇの位置に色を別にして印を付けて、そこまではかるように指導した。

１１月：はかりの印を見て、砂糖の位置、小麦粉の位置ともに分かるようになった。けれど、入れ始めると、針の動きを見ていても、その印の位置で止めないで、どんどん入れていく。「５０ｇになったよ」と注意すると、「なった」と口では言っているけれど、手はどんどん入れ続ける状態だった。

何回でもやり直しをし、自分でできるまでさせようと頑張ったが、放っておくと一人ではできない。針の動きと自分が砂糖を入れている関係が理解できない（認知障害）ので、何回やってもできない。それで常に「これでよいか」と指導員の様子を伺っていた。はかりの針の動きと砂糖の重さの関係はかなり高度な算数である。Ｔさんは基本的学習をやってきていないので、理解するのが難しいが、一つのパターンとしてはかりの使い方を獲得すれば、Ｔさんの生活はずいぶん便利になり作業も広がっていくと思うので、基礎学習の場で、改めて取り組みたいと思う。

ホットケーキの作り方はマスターしてふっくらとしたおいしいのが焼けるようになった。

サラダ

初めの頃のサラダはＮさんと分担して作った。Ｎさんはキュウリの板ずりをし、Ｔさんさんはじゃがいもの皮を取って、ゆがくことと、レタスを洗ってちぎり、そして、最後にマヨネーズで和えるまでをした。

じゃがいもの皮むきは初めは皮むき器を使用し、「皮を取り除くこと」を教えた。その後包丁で皮むきを練習させた。しかし、大変難しく、包丁を握ったままで、皮を取ろうとするので、皮が分厚く剥ける。正しい持ち方を指導したが、怖がってすぐ握ってしまうのだった。でも、人差し指だけは包丁の背に伸ばすことができるようになった。

１９８７年１２月：じゃがいもの皮むきは、初めの一つはていねいに剥き、二つ目は少し皮が残り、三つ目はぶつぶついっぱい皮が残っている状態だった。そこで、「まだ、皮ついとるよ」と指摘すると、「ついとる」と大声で言い、「もうほんとうにいやじゃ」と言いながらイライラしてくるのだった。イライラしていても、（叱らないで、がみがみ言わないで、信念を持って、）取り残しの皮を全部きれいに取りのけるまでさせた。

１９８８年２月：一度手を切った。それ以後は「また手を切るよ」を声を掛けると、包丁に注意を払うようになった。

５月：サラダの全過程を一人でやって貰うことにした。

① じゃがいもの皮をむき、切ってゆでる。
② 湯を沸かして、マカロニをゆでる。
③ レタスをちぎる。
④ マヨネーズを入れて、４人に盛りつける。

６月：じゃがいもも「皮ついてるよ」と注意しても以前のようにイライラしなくなり、切り方もほとんど同じ大きさに切れるようになってきた。盛りつけでは多い少ないがあり、自分は多い方の皿を取ろうとしていた。Ｔさんはサラダ作りを楽しみにするように変わって来た。

※ 自閉症児は作業に対して好き嫌いが激しく、嫌なことや未経験のことは嫌がって、生きる上に大切なことなのでさせようと思っても抵抗してなかなかやってくれない。料理もそうで、自分の好きなことや簡単なことは手伝うが、苦手なことや努力のいること、触って気持ちが悪いこと、じっとできあがるまで待つことには抵抗し、さっと台所から抜け出して行くので、母親は「嫌がるのだから」とか「まだ無理だから」とか言って諦めがちである。しかし、できるところや好きな箇所だけ手伝っていたのでは、いつまで経っても何一つ調理するようには慣れない。指導員は調理の全過程を（全介助しても）させることによって、自閉症児の育っていない機能や弱点を見つけ、それをカバーする方法を考えたり、特別に課題として何度も何度もとり組ませ、励まし、乗り越えて行くことができるように共に歩んでいくようにした。また、やり遂げてできあがった御馳走がそのまま嬉しい「ご褒美」のなり、少しずつ意欲もつけていった。指導員とＴさんとの信頼関係はいよいよ強いものになったと思う。

2） 野菜炒めとみそ汁　ご飯

１９８９年１月より週１回昼食作りにとり組んだ。

ご飯炊き

米の計量は、１月から８月まで指導員がやった。９月からＴさんがした。コップを使って計量しているが、コップに半分入っているだけでも１杯と見なしてしまうので、まだ目が離せない状態である。（※計量の練習を課題として取り組みたい。）

米の洗い方はマスターできた。
水加減の方は、「今日は２杯だから、水は②のところまで入れて」というと②の位置まできちんと入れられるようになった。

野菜炒め

手順
① ボール、ざるを用意する。
② 材料（キャベツ、豚肉）を出してくる。
③ キャベツを１枚１枚はがして洗う。
④ キャベツ、豚肉を切る。
⑤ フライパンを用意し、ガスにかける
⑥ 油を入れる。
⑦ 豚肉を炒める。
⑧ キャベツを加えて炒める。
⑨ 塩こしょうを入れる。
⑩ ガスを止める。

みそ汁

① 鍋にコップ４杯の水を入れる。
② 煮干しを５匹入れ、ガスにかける。
③ 豆腐、油揚げを切る。
④ 煮干しを取り出す。
⑤ 豆腐、揚げを入れる。
⑥ 味噌を入れる。ガスを止める。
⑦ 道具を片付ける。
⑧ 配膳をする。

ホットケーキの時より大変意欲的だった。しかし、当初は指示には従いにくく、よくイライラしていた。イライラしていると、プイとその場を離れ、時計を見に行き、また台所に帰ってくるという繰り返しであった。
イライラが生じる時は指導員が口を出す時なので、途中から接し方を変えた。「口を出さないで、やり直しを黙ってさせる」というやり方にした。例えば、キャベツの両面が洗えてない場合には、そのキャベツを指導員が黙って元の位置に戻す。こうすると、イライラしないでやり直しをすることができるのだった。

※自閉症の青年たちも一般の青年たちと何ら変わりない。プライドを傷つけられたり、指示されるのを嫌がるのは当然である。Ｔさんは今まであまり指示されることが無く、気ままに自我を通して生きてきたのだから、成人に達してから、周りからいろいろと指示されたり注意されたりするのは本当に不本意であり、イライラが生じても当たり前である。指示の嫌いな大人にはむしろ共感するものがある。プライドを傷つけないで身につけて貰う工夫の必要を感じた。

初めは大きさ・形に気が付かない、意識できない（認知できない）ようで、まるで無頓着に思える雑な切り方をしていたが、調理に取り組んで４回目の時に、キャベツ・豚肉がほぼ同じ大きさに揃えて切れるようになった。そして、手順もほぼ分かりかけてきた。
野菜炒めの方は大体できるようになったので、次にガスの扱い方について指導することにした。お茶係りにして、毎日お茶を沸かして貰うことにし、そのたびにガスをつけたり消したりと練習できるように配慮した。２ヶ月のには完全に一人でガスが使えるようになった。
味噌汁にいりこを入れるのをよく忘れるが、他の手順はほぼ分かってきた。水の量も目分量で量れるようになってきている。かなり薄味で塩分控えめの味噌汁ができているが、Ｔさんの母親の話では家庭で作っている味噌汁と同じ味とのことで、指導員は味覚の確かさに驚いた。揚げは上手に切ることができているが、木綿豆腐はお椀につがれる頃には、かなり形が崩れてしまっている。細かいことはこれからの課題である。

後片づけ

１９８９年３月　調理に後片付けを加えた。Ｔさんは例によってイライラしたが、１ヶ月もすると落ち着き、後片付けも自分の仕事だと納得したようで、イライラしなくなった。

片づけを始めた頃は、手首がくるくる回せなくて、大きい皿も真ん中だけを洗い、皿の周囲をぐるりときれいに洗うことができなかった。Ｔさんは横方向や縦方向には実に上手に手首を動かしていたので、それまで手首の問題点に気が付かなかった。早速、課題として、紙にぐるぐる〇を書く練習を取り入れ、手首をまわす訓練をしたが、それによって、手首もよく動くようになってきた。現在は丸いカレー用の皿はきれいにまるくあらえるようになってきた。ただ、弁当箱など角のある容器の隅を洗うのがまだ難しい。Ｔさんはとにかく、さっささっさと片付けるが、少々雑な作業のため、やり直しを多くさせた。言葉でやり直しを命じると、イライラしてくるので、黙って元へ戻す方法でやり直しをしている。

食器を拭くときに力を入れないので、まが水滴がついているが、今後はこんなところも確実にできるようにさせたい。

3)　スパゲッティと目玉焼き（１９８９年６月）

昼食作りに取り組んで６ヶ月もすると、野菜炒めも味噌汁も一人でできるようになった。しかし、炒めものをする時、まんべんなく混ぜることができず、真ん中だけ混ぜているので、炒める機会の多いスパゲッティを１９８９年６月メニューに加えた。野菜炒めと味噌汁を忘れてしまっては困るので、隔週毎に取り組むことにした。

手順

目玉焼き

① キャベツを千切りにする。
② 目玉焼きを作る。
③ 盛りつけをする。

スパゲッティ

① 鍋に線まで水を入れて湯を沸騰させる。
② スパゲッティを入れてゆでる。
③ 玉葱を切る。
④ 肉と玉葱を炒める。
⑤ ④にソース、ケチャップを入れる。
⑥ スパゲッティを入れて混ぜる。

手順通りに、一つのことができてから、次のことをさせるようにして混乱を避けた。スパゲッティがゆであがるまで、他のことをさせないで、鍋の前に立って、ゆで上がっていく様子をじっと観察するように指示した。まだ硬いうちから時々食べさせて柔らかさを身体で覚えさせるようにした。

９月：「かたい、やわらかい」の言葉は、スパゲッティの状態と一致していないが、やわらかくなると判断して自分でガスを消した。

１１月：現在手順はよく分かるようになって、つきっきりで見ていなくても良くなった。つきっきりでない方がイライラしない。自信のない時は「先生、玉葱、たまねぎ」と玉葱を入れていいかどうか指導員にたずねにくるようになった。

しかし、沸騰してから、スパゲッティを入れることがまだ分かっていないし、卵がうまく割れない。卵にひびを入れてはいるが、そのひびに指を入れないで、にぎり割りにしてしまうのでぐちゃっと潰れてしまう。ソース、ケチャップの計量もうまくできてない。これらの問題をひとつひとつ解決していくことが障害を軽くしていくことだと考え、工夫し努力していきたい。

(4)　手芸　裁縫

1)　クロスステッチ

１９８８年６月、手先の器用なＴさんに最適なのは手芸ではないかと考え、クロスステッチに取り組むことにした。ひとりで創作できるようになれば、時間を持て余すことも無くなり、楽しい趣味にすることもできる。また、方眼を使った規則正しいクロスの模様は自閉症の人には比較的取り組みやすいのではないかと考えた。

Ｔさんは今までに系統的にきちんと基礎学習をしていないので、実際に刺繍をする前に次のような課題を練習した。

① 方眼紙に色鉛筆でクロスの練習をする。
② 小学低学年用の国語ノートのマス目を利用して、指導員が左のページに描いた図柄を真似て右のページ

にそっくり写す練習をする。

実際に布に刺繍するときには、図柄は水溶性マジックで点を打って刺す位置を分かりやすく示し、簡単な図柄から取り組むようにした。そして、毎日１５分から３０分練習することにした。

方法

① 刺す位置をいちいち教えながら、させていく。

② Ｔさんが刺しているのを手を出さないでじっと見ていて、間違えている場合は「違う」と声を掛ける。

③ 間違いを自分で気付くようにさせるため、口出しをしないで見ている。

このように指導員が少しずつ手を抜いていき、やがてひとりでできるようにしていった。

経過

刺繍に取りかかった時は例によって少々イライラしていたが、すぐ直った。糸通しは上手にできていた。

１ヶ月後　まだクロスする要領が認識できなかったが、その割りにはよく集中していた。

３ヶ月後　クロスする要領がまだはっきりとはのみこめず、間違うので、そんな時は指導員が「ちがうよ」と声を掛けると、自分で考え、針を刺す位置を変えるようになった。

４ヶ月後　Ｔさんの方から「ここ」と言って刺す位置をたずねるようになった。

このころから、担当のＢ指導員にの方もクロスステッチの取り組み始め、少しずつＴさんにひとりでするように仕向け、間違いを自分で気付くようにさせてみた。

冬休みに家庭でクロスステッチを取り組んだが、作業所でのやり方と違っていて、母子でもめた。同じ方法をとりたい。始めから正しい方法を教えること。

７ヶ月後　クロスがうまくなり、横・縦だけの直線にかぎりひとりでできるようになった。まだ間違いも多く、その時はクロスになっていないのに気が付くと、「残念」と言ってほどいてやり直すようになってきた。刺繍する時間も少し長くなり、集中してできるように作業態度もよくなって来た。

８ヶ月後　直線は間違わないようになった。

指導員と一緒に仕上げるという共同製作に取り組み、作品も何点かできあがった。でも、小さくても自分で一つの作品を仕上げた方が上達がはやいと考え、途中からそのように方針を変えた。

現在は直線を基本としたクロスステッチをしている。直線の場合はほとんど間違いはない。間違えても自分で気が付いて糸をほどいてやり直している。しかし、図の曲がり角に来ると、刺し方が分からず戸惑っているので、今は曲がり角の刺し方に重点をおいて指導している。

せかせかしたＴさんが一針一針ていねいに刺繍をしている姿には感慨深いものがある。集中力もついてきた。

2)　ミシン

１９８９年６月に市内中学校より３台の足踏みミシンを頂いた。かねてより、Ｔさんにミシンを取り組みたいと考えていたので、早速、次のような段階に分けて練習を始めた。

① 針をつけないで足踏みの練習をする。

② 布に直線を描き、糸は使用しないで、線上を縫って行く。

③ 方向転換の練習（押さえを上下させ、布を縫っていく方向に変える。

初めての事に対して拒否を示すＴさんなので、予想通り、５分間ミシンの椅子に座らせるのがやっとだった。

ミシンの操作に関しては、足踏みはできており、ミシンが軽いので足で踏むだけで前に動いている。ベルトを手で回して、足を踏む二つの動作はなかなかできない。

布に描いた線も上手に縫えている。線から外れると、それをもとに戻そうと努力している様子も見られる。継続的取り組みができてないので、現在は②の段階に留まっているが、自由に縫わせるという漠然とした取り組みではなく、計画的に基礎的なことをしっかり身につけてやりたいと思う。取りかかりの悪いＴさんだが、毎日ミシンを使えば、やがて慣れて楽しむようになることを期待して頑張りたい。

3)　ビーズのれん

作業所仲間のＮさんがやっているので、よくＮさんのビーズを触っていた。Ｔさんは色の分類ができるので、図を読み取ってビーズの色分けをするところから作業を始めようとしたが、余りにも安易な考えだった。２４色のクレヨンを利用して、色の認識を確実なものにし、色と個数を指示してビーズをとる練習からする必要がある。

５．　生きていく上で必要な判断力を少しでもつけるために課題学習をし、言語の発達をはかる。

１）会話

開所当初は自分の思っていることを止めどなく言っていた。「うさぎさん」「キリンさんは？」「ゴリラさんは？」「ケチマさんは？」というように、その場に関係ないこと・意味不明なことを連発していた。

要求語‥‥「拭いて」「お茶をください」
拒否‥‥‥「放せ」「いや」
返事‥‥‥「はい」
などが言え、「ありがとう」「ごめんなさい」というように指示されると、「ありがとう」「ごめんなさい」と真似て繰り返すことができていた。

「これは何？」‥‥‥「あり」（絵本を見て）
「お父さんは？」‥‥「お仕事」
「カラスは？」‥‥‥「カーカー」

このように単語で答えられるものもあったが、ほとんどは応答なしの状態だった。

Ｔさん自身は、周りの者に返事を求めて焦点の定まらない表情で「〇〇さんは？」「〇〇さん、かわいい」と以前の友達の名前を繰り返し言うのだった。Ｔさんの過去と知っているものには、Ｔさんが何を言っているのか想像がつくのかも知れないが、指導員には通じない、その場に関係ない質問だった。

また、指導員がＴさんに話しかけても、「うさぎさんは？」と返答してくる有様で、指導員とＴさんとの間に会話は成り立たない状態だった。

Ｔさんは言語の遅れはあるものの、歌を歌うこともでき、他者と交わることも嫌いでないＴさんなのに、まだ、会話を交わすことの意味を知らないようだった。そこで、Ｔさんの言葉を役立つものにしていくために、作業所の生活の中でいろいろ取り組むことにした。

① 簡単な会話の練習をした。
　「Ｔさんのお母さんの名前は？」‥‥「〇〇子です。」
　「お父さんの名前は？」‥‥‥‥‥‥「◇◇です」
② 仲間のＮさんに対して簡単な伝言を頼んだ。
　「はやく服を着なさい」「帰りましょう」
③ 行動するときに必要な言葉を教えていった。
　「先生どうぞ」（コーヒーを出すとき）
　「開けて」（手がふさがっているとき）
④ 行動に言葉を添えて指導した。

このようにして近頃では、その場に合った言葉が少しずつ言えるようになってきている。

Ｔさんが歯を手で押さえているので、「どうしたん？」と聞くと「歯痛い」と答えが返って来たり、コーヒーを飲みながら、「熱い」と言っている。

そして、仲間のＮさんに対しても「～しなさい」「うるさいね」などと言葉で関係をもつようにもなってきた。

また、その場に関係なく「運動会は？」と尋ねるので、指導員が「運動会、作業所には無いよ」と答えると、「ふーん」と言ったりなど、少しずつ相づちを打ったり、答えが返ってきたりするようになった。

けれども、まだまだその場に関係ない言葉を連発している。

２）時間

Ｔさんは入所時すでに、『今日が何月何日何曜日であるか』は理解していた。それで、Ｔさんにはその日の日付入れを毎日してもらっているが、まず間違うことはない。

また、作業所の予定表を見て、『明日何があるか』など未来の行事を予想することは可能で、「楽しみにする」ということができていた。実際、明日に向かっては意欲的で、「明日は〇〇する」「〇月〇日、廃品回収」と言ったりしている。そして、「今日するべきこと」は口に出しては言わないが、行動として実行されている。指導員がもたもたしていると、「〇〇しましょう」と催促してくる。

しかし、Ｔさんには『昨日』は存在しないようである。Ｔさんには『昨日』は必要ないので、「昨日」という言葉を使う必要もない。指導員が昨日のことをいろいろ尋ねても、Ｔさんからの返答はない。質問しても『昨日』という意味さえ理解してない状態だった。

昨日のことはもうおしまい。済んだことをくよくよ悩むことの多い私たちには羨ましくなることだが、過

去の記憶が無いというわけではない。瀬戸大橋見学の後では「上へ参ります。エレベーターは」などと独り言を言ったりするくらいだから。
日記に取り組んだり、指導員がもっと昨日のことを尋ねるような会話を増やしたり、昨日から今日にかけて完成させるような作品に取り組むなりして、「昨日・今日・明日」と言葉が使えるようにしていきたい。そうすれば、現在の偏った思考や会話を広げていけるのではないかと考えている。

Ｔさんは時計が気になる。イライラが起きると、逃げる先は柱時計の下。そこでじっと時計を見上げている。初めの頃は１日に１回は柱時計の下に行っていた。今は座ったまま時計をチラチラ見たりしている。
入所時、時計の針がある一定の位置に来ると、「〇〇の番組がある」「風呂に水をいれる」という判断はできていた。現在、時計が読み取れるのかというと、「分」単位は全く分かっていない。
「時」の方は、１２時はお弁当の時間と結びついている。鳩時計が１２時をさしているとき、指導員が「今何時？」ときくと、「じゅにじじ」と答える。「じゅいちじ」と答えるときもあるが、指導員が「え！」と言うと「あ！じゅにじじ」と言い直している。１１時近くで尋ねると、「十時やらじゅにじじやら」と言って最後には「じゅいちじ（１１時）」と答えることができている。このように〇〇時といった丁度の時間は分かっているようだった。しかし、自分から「１２時になったからお弁当にしましょう」とはいかないようで、指導員の指示を待っている。
掃除の時間は午後３時４５分からだが、その時間の表現はできなくても、「そろそろ掃除の時間だ。帰れる」と結びついているようである。
Ｔさんは過去において、時計の読み方を習ったわけではなく、自分で身につけてきた。作業所では規則正しい生活が展開されているので、時計の読みも以前より確実になっているが、できれば少し丁寧に時計の読み方を指導して、生活をもっと便利にしてあげたい。

３）色・形・数量など
Ｔさんは実際の操作では細かい色分けができるが、色の名称となると答えられるものが限られている。緑も黄緑も「みどり」と答える。青と水色は「あお」と答える。それで間違いではない。しかし、ビーズのれんを作ろうとすると、指導員との間でコミュニケーションがうまくとれず、混乱することがあったので、やはり計画的に２４色のクレヨンを利用して、色と名称が一致するように的を絞って教えていきたい。
調理実習の時に気が付くことだが、
「いっぱい」「半分」「全部入れて」「少しだけ」「５０ｇまで入れて」など声をかけても、数量に関する言葉はほとんど認識できてない状態だから、非常に不便である。
大小の区別は実際にはついているのに、「大きい」という言葉が何を意味しているかが分からず、「大きいボール取って」と言われても、何をしたらいいのか戸惑っている。

数は１から１００まで数唱することができる。しかし、個数と名称が一致しているのは「４」迄で、それもどうにか判断できる程度である。
日常生活では「みかんを８個取ってきて」と言ってもできない。「２個ずつ配って」という言葉を解することもできない。けれども、そこにみかんが８個あれば、経験から一人に２個ずつ配ることはできている。

※自閉症児者の多くは、普通なら幼児期に自然に獲得していく基礎的な概念の言葉を理解することができない。作業所でいろいろな作業や課題をこなす機会がなければ、このような言語をとりたてて問題にすることもなかったであろう。「自閉症児は身辺自立ができれば、それで十分」とする考え方もあるが、それではこの人たちの混沌とした世界を生活していきやすいものに変えていくことはできない。少しでも自分で判断して生活していけるように、この人たちの認知障害に思いを向け、どこが分かりづらいのかを具体的に知り、すでに青年期を迎えていても、改めて基礎的学習をする必要がある。教育の可能性があるのだから。

４）文字
入所時、平仮名５０音・濁音は読めていた。しかし、絵本は、１字ずつ正しく読むことはできず、適当に言ったり、とばしたりしていて、本当には読めていない。また、「本を読む」ということが分からないようで、絵本などほとんど顔にくっつけていた。書く方は指導員が書くのを模倣して、自分の名前や花・果物名を書くことはできていた。
読み書きは必要なことなので、作業所では改めて物語になった絵本を読むことに取り組んだり、カタカナかるた・ことわざかるたなどをして、字を読む機会を作っていった。また、日記に取り組んだ。買い物の時には、メモ（キャベツ、スパゲッティ、玉子、ケチャップ、ぶた肉、ミンチ肉など）を読んで、自分で品物をかごに入れる練習もしてきた。

現在は入所時より明らかに読み書きが上手になり、もう絵本は近づけて見ることはしないで、腕を伸ばして本を持ち、文字を見ながら、早口で聞き取りにくいけれども、確かに読んでいる。
かるたはもうすっかり覚えている。カタカナやＡＢＣなどアルファベットも読めるようになっている。それで、文字についてはそれほど注意を払っていなかったのだが、いざ調べてみるといろいろ問題があった。
例えば、次にようである。
① 「つ」がうまく発音できない。
② 平仮名の濁音は、単語にすると発音できて読めるが、濁音だけ単独でならべると、全く読めない。
③ 「ぱぴぷぺぽ」も同様。
④ カタカナも５０音ならべても読めるが、濁音に関しては平仮名と同様に、単独では読めず、単語にすると読むことができる。
⑤ 「パン」なら読めるが「ぱん」は読めない。
⑥ 「ボール」なら読めるが、「ぼうる」は「ほうる」と発音する。

※Ｔさんの現状から、子供時代を思う。日本人として平仮名五十音は学ばせて貰った。カタカナもアルファベットも学ぶことができた。Ｔさんは生活の中で「パン」を覚えたのだろう。まるで英語の単語のように、濁音の入った単語をひとかたまりとして読んで覚えていったのだろう。Ｔさんは十分に学べる力をもっていたが、系統的には学んでいなかった。学習態勢を整えることも難しかっただろう。指示は通りにくく、すぐいらいらする。Ｔさんには好奇心と自分で獲得する力があった。記憶力も良かった。だから、今までに何とか自己流のやり方で不完全ながら文字を獲得してきたのだろう。また、家庭で熱心に教えて貰った時期もあったのだろう。今からでも計画的に基本的学習をする機会を作り、言語を確かなものにし、生活を確かなものにしたい。

５）折り紙
両手の微細な機能を養い作業が正確にできるように、そして、遊び・趣味を広げていくことができるようにと、「折り紙」を取り入れた。
折り鶴は細かい部分がありすぎて、Ｔさんには難しすぎるので、簡単なやっこさんを先ず折っていくことにした。今では奴っこさんはどうにか一人で折れるようになっている。しかし、Ｔさんの雑さは表れ、折り目をきちんと付けないこともあり、少々不細工な奴っこさんである。
折り紙の操作の中で、「親指と人差し指で引っ張り出す指使いができないので、次には引っ張り出す部分のある折り紙に挑戦していきたい。

６）絵描き歌、色塗り
Ｔさんは器用で一見何でもできそうなのだが、細かく観察していくと、手首を程良く回して使うことができてなかった。また、鉛筆の持ち方も適切でなかった。
そこで、基本的な線を書く練習のために絵描き歌を始めた。歌に合わせて描くことはできないが、丸が描けるようになった。
色塗りは形からはみ出さないように塗るが、鉛筆の持ち方に気をつけるようになり、鉛筆の動かし方も以前とは違ってきた。

７）日記
文字の定着だけが目的ではなく、指導員との会話を増すことができる。１日をふり返ってみる習慣は長期的には心の育ちを促すことになるので、できるだけ付き添って取り組みたい。

※青年期の自閉症の人達への関わりは、幼児期学童期に何をしておくべきかをしっかりと把握する機会となった。療育者は見通しをもって、その人の人生に責任を持って、向き合うことが求められる。

コミュニケーション シーンの再現

◆Ａ　コミュニケーション シーンの再現・テーマ（食器割、突き飛ばし）

氏 名　　小 林 春 樹	年 齢　　４ 歳 ９ カ 月	20※※年※月※日

時刻 番号	子供の言葉、行動様子、状態、反応 （どのように　どんな　どの位）	時刻 番号	親の言葉、音量、身振り、表情、賞賛、 考えたこと、観察したこと、反省、工夫
1.	夕食中、自分の皿の唐揚げの皮だけを食べ、他に盛ってある唐揚げに手を伸ばし取ろうとする。		
		2.	「自分のを先に食べて！」と少しきつく言う。
3.	「あ～っ」と立ち上がり、椅子から降りようとする。		
		4.	「食べんのやったら片付けて」と春樹のトレーをさして言う。（普通に言ったつもり）
5.	「あ～っ」と言いながら、椅子に座り直し、ご飯を食べ始める。が、少し経つと、妹の咲の唐揚げを取ろうとしている。		
		6.	「これは咲(さき)の！取ったらいかん！！」 「椅子に座りなさい！」と春樹の椅子を指す。
7.	しぶしぶ座るが、自分のお茶碗を倒し、中のご飯が塊でテーブルの上にまける。		
		8.	怒りたいのを我慢して、黙って見ている。
9.	すぐにご飯を手でつかんで茶碗に戻した…と思ったら、手を伸ばして茶碗を上にあげ、テーブルに放り落とす。割れた…。		
		10.	どうしようか…と思いながらも、何も言わずに片付けを始めた。
11.	手で顔を覆い、わざと声を出して泣いている。時々指の間から様子を見ている。		
		12.	（茶碗の）破片が春樹のトレーナーに散らかっていたので、「立って！」ときつく言う。
13.	振り向きもせず、テレビをつけて見ている。		
		14.	側に寄って「片付けて」と２度繰り返して言う。
15.	台所に小走りで行き、トレーごとキッチンの台まで持って行き、再び居間に入る。		
		16.	１０分経ち、「手、洗って！」（ピアノに行くため）と台所から言い、様子を見ていると…、
17.	春樹に１ｍ程後ろで立ってテレビを見ていた		

	妹の咲めがけて勢い良く両手で咲を突き飛ばした。咲は倒れたまま固まっている。		
		18.	思わず、「何をしよんな！！突いたらいかん！咲にごめんは？」と春樹の前側に座り、両腕を持って言う。
19.	黙って斜め下を見ている。		
		20.	・・・ ごめん…は？」と顔を見ながら言う。
21.	「…めんさい。」と小さい声で下を向いて言う。		
		22.	真似て言っただけだろう…とは思ったが、それ以上は何も言わなかった。

（私の反省）

保育所でも自分が２３欲しいと思った物は人が使っていても、無理矢理奪うことが何度かあったようです。また、友達に水たまりの水をコップで振りかけて、怒る相手の反応を喜んでいることもあったそうです。

家では全く関係のない妹の咲に八つ当たりのように思い切り突き飛ばしたり、勝手に人の食べている物でも平気で取ろうとするなど…。自他の区別をはっきり付けていかないといけないと思います。

「突き飛ばし」も保育所でするのも時間の問題かも知れませんが、気をつけて見ていきたいと思います。ちなみに今日は茶碗２個、大皿１枚割っています。

◆B　コミュニケーション シーンの再現・テーマ（　１～１００マッチング・その１）

２０※※年２月１６日　記載

記載者（中村美和）

パズルボックスをした後、「１～１００並べするよ」と声かけて、私は準備に取りかかる。啓司は椅子に座って私がチップを出しているのを見ている。
１～１０までは介助しないで机の横から指示しようと思い、横からチップを並べ出す。

中村　啓司	年齢　　5歳１１カ月	２０※※年２月１４日

時刻 **番号**	**子供の言葉、行動様子、状態、反応（どのように　どんな　どの位）**	**時刻** **番号**	**親の言葉、音量、身振り、表情、賞賛、考えたこと、観察したこと、反省、工夫**
		13:50 1	チップを１～１０まで机の上に置き、３枚の中から選ばせようと思い、 ③ ① ②と並べた。
2	（私が）置いているのを見て、足をバタバタ身体を大きく揺さぶって大泣きし出す。		
		3	「並べるよ。１」と、盤の方を指さす。
4	１という声にまた一段と泣き出す。 身体を揺さぶって盤の方を見ていない。		
		5	「１」と間を取りながら、５回指さす。全く見ていないので、啓司の指を取り、１をなぞらせる。
6	泣きはそのままだが、手はチップの方に行き、チップは見ていないが、①を取る。取ったのに盤の上に置こうとしない。		
		7	「ここに置くよ」と指さす。
8	３０秒位して、泣きながら置く。		
		9	するのが嫌なんだろうなあと思いながら、「次は２」と指で指す。
10	２と言う声にまた大泣き。		
		11	啓司の手を取り、２をなぞる。
12	またまた泣き続け、私の方を見ようとしない。		
		13	２をまたなぞり、啓司の手を　　③ チップの方に少し向ける。　　④ ②
14	泣きながら、④のチップを取る。		
		15	違うと思い、盤の上に置く前に啓司が持っていた④を置いていた場所に置かせようと思い、啓司の手を引っぱって置かせた。
16	大暴れしだし、３枚置いているチップをぐちゃぐちゃにした。		
		17	もう～と思いながら、「２は２」と強い口調で指さしながら言う。
18	暴れながらも②を取ったが、チップを口の中に入れて私の方を見ている。		
		19	おちょくっているなあと思い、「２の上に置いてよ。」とやさしい口調で言う。
20	チップを口の中に入れたまま私の方を見て、ケタケタ笑い出す。		

		21	はがゆくなって「置かんかね」と言いいながら、口の中に入っているチップを引っ張り出し、啓司に渡す。
22	大泣き、大暴れし、足をバタバタしている。チップは手に持っていた。		
		23	「２の上よ。」と２，３回言う。
24	しばらくして泣きながら置いた。		
		25	次は、「３」と言う。　③ ④ ⑤
26	足バタバタ。泣きながら④のチップを取る。		
		27	やっぱり手前のを取るなあと思いながら、「３よ」と盤の方を啓司の手を取りながらなぞる。
28	泣きながら３をなぞって③を取った。取ってまた口の中に入れる。		
		29	イライラしながら「３の上に置く」と言う。
30	大暴れ。		
		31	私が「ここ」と言いながら指をさす。
32	泣きながら置く。２の時より少しはすんなり置く。		
		33	「４よ」と声かけ。私が盤の方を指さす。 ⑥ ④ ⑤
34	泣いてはいたが④を取り、また、口の中に入れる。チラッと私の方を見る。		
		35	「置かんかね」と怒った口調で一言だけ言って指をさす。
36	大暴れしながら私の指さしているところの上に置く。		
		37	「５」と啓司の手を取りなぞる。
38	泣きながらなぞり、チップの方を見ないで⑦を取る。口の方に持っていこうと私の方を見る。		
		39	「５よ。それは７」と言って、チップを置かす。もう一度５をなぞる。
40	大泣きしながら⑤を取る。		
		41	口の方に持っていこうとしたので止めて、５の上を指さす。
42	泣きながら自分で５の上に置く。		
		43	「次は６」と６をなぞる。　⑥ ⑦ ⑧
44	泣きながら⑥を１回で取る。また口に持っていく。		
		45	私もカチーンときて、「置かんかい」と怒る。

46	大暴れしながら置いた。		
		47	「７」と７を啓司の手を取りなぞる。 ⑨ ⑦ ⑧
48	泣きながら⑦を取る。ペースは少し速くなる。⑦を口には入れなかった。		
		49	７の所を指さして「ここに置いて」と指さす。
50	７の上に置いた。泣きも静かになる。		
		51	「８」と言いながら、盤をなぞらして指をさす。　⑨ ⑩ ⑧
52	⑩のチップの上に手を置き、取ろうとしたが、迷い、⑧の方を取る。取ってチップを回して遊んでいる。		
		53	「８、ここに置いて」と言う。
54	８の上にすんなり置く。		
		55	「９」と指さす。　⑨ ⑩
56	⑩を取り、自分で９の上に置く。		
		57	「これは１０よ。９置くよ。」とチップを戻す。
58	泣くこともなく、⑨を取り置く。そして、⑩は自分でさっと取り、向きも変えて置いた。		
		59	「できたね、手は膝。」と言う。
60	手は膝に置き、待っている。		
		61	11～20 のチップを置く。11 からは後ろに廻り、介助して取っていこうと思い、啓司の後ろに廻る。 「11 から取るよ」と後ろから声かける。
62	私の方に振り向き、顔をすりつけてくる。		
		63	笑いながら「もう前向くよ。」と言って啓司の手をチップの方に向ける。　⑬ ⑪ ⑫
64	泣きも治まり、チップの方を見て、自分で取る。⑪の向きも変えて置く。		
		65	手前のを取るかなあと思いながら、見ていた。　⑬ ⑭ ⑫
66	⑭を取り置こうとしていたので、介助して 12 をなぞる。⑭を置き、少し経って⑫を取った。さっきまでが嘘のように静かでスピードも速く進んでいった。 ・ ・ 間違いながらも取り直ししながら、でも、暴		

	れることなく、していく。		
		67	「８３」と言う。　83 84 85
68	さっと 84 を取り置く。		
		69	「83 よ」83 をなぞる。
70	84 をまた取る。同じことが３回続く。		
		71	「ちがうよ。それは８４。８３取るよ」
72	違うという言葉を聞いて暴れ出す。足をバタバタ。		
		73	８３からは（子どもの）背後から全介助で置く。
74	足をバタバタして怒っている。９０を置くまで怒っていた。９０を置いて「手は膝」で膝に置くが、手をバタバタして出してくる。		
		75	「９１置くよ。」と介助して指さす。
76	泣きながら 91 を取り、置く。取れたからか静かになっていく。少し介助しながら、９２～９８まで置く。		
		77	「９９」
78	自分で取り、置く。		
		79	「１００」
80	さっと取り、置いて私の方を見ながら「できました」のミニ・ボイスメッセージを押す。		
		81	「１００まで置けたね。頑張ったね。」と言い、片づけに入る。

（感想）

① 全体的に指示ばかりで、啓司に考えさせたり問いかけるような言葉かけが少ないように感じた。
② １～１０まで並べている間、啓司がやるのが嫌で抵抗しているのを分かっていながら、カーッとなったりと冷静に接していない。
③ 大暴れしながらも一度も席を立つことはなく、「置いて」の指示に対してもできているところもあり、改めて書くとできているところもあり、少し嬉しいです。
④ 今一番、意思表示の激しい時と日々感じています。ここを乗り越えないと、と思いますが・・・。日々激しくなってきています。

２００４年２月１７日に講義で中村さんのコミュニケーション シーンの再現「１～１００マッチング・その１」が取り上げられた。

講義の後、再度同じ課題学習のコミュニケーション シーンの再現を記載してもらった。それが、２月１８日のコミュニケーション シーンの再現（１～１００マッチング・その２）である。（次ページ）

◆B　コミュニケーション シーンの再現・テーマ（１～１００マッチング・その２）

２０※※年３月１日　記載

記載者（中村美和　）

中村　啓司	年齢　　５歳１１カ月	20※※年２月１８日	
時刻 番号	子供の言葉、行動様子、状態、反応（どのように　どんな　どの位）	時刻 番号	親の言葉、音量、身振り、表情、賞賛、考えたこと、観察したこと、反省、工夫
		20:50 1	「１～１００並べをします。」と声をかけ、私は準備にとりかかる。今日はいっぱい誉めるぞーと心がける。
2	準備しているのを見ながら待っている。手は膝に置いている。		
		3	机の上にチップを①～⑩置く。
4	チップを置くのを見て大泣きする。足もバタバタ。		
		5	いやなんだなーと思いながら「さあ、はじめるよ」と啓司の後ろに回る。
6	泣き続け、身体を横に振ったりいやだーという体勢をとっている。		
		7	「今日は初めから一緒にするよ」と啓司の手を取り、介助して①のチップを取る。
8	大暴れしながら①を取るが、盤の上に置こうとせず、身体を左右に揺らして抵抗。		
		9	「１の上に置くよ。」と言い、介助して置く。「置けたね。」と言う。
10	泣いているので私の声など耳に入っていなく泣き続けている。		
		11	「次、２よ」と盤を指さして介助する。
12	泣いているので、盤の方も取るチップも見ていない。介助のまま置くという感じ。泣いて嫌がっている。		
		13	誉めようと心がけたものの泣いているし何処で誉めたらいいのかなあと考えながら「３置くよ。」と言い、指さして介助する。
14	泣きながら介助されチップを取る。		
		15	左手で盤の方を指さし「ここに置くよ。」と声をかける。
16	泣きだし、自分でチップを持っている手に力を入れ、私が介助して置こうとしているのを力一杯置かさないようにしている。		
		17	嫌がっているなあと思い、ここでカァッーとなってはいけないと思い、２，３秒待って、もう一度優しく「３の上よ」と言う。
18	少し経って力を弱め、介助されるままに置く。まだ泣いている。		
		19	「次４」と盤を指さし、啓司の手を取り、介助してチップを取る。
20	泣きながら介助で盤の上に置く。		
		21	「次５」と指さし、チップも指さして見せて取る。

22	泣きながら置く。身体は左右に動かさずじっとしている。		
		23	「６よ」と指さし啓司の手を取り介助して取ろうとした。
24	介助されるのが嫌で私の手を払いのけて、机の中に手を入れて隠している。		
		25	後ろにいるので手を引っぱって机の上に出す。
26	泣きながらさっと机の下に手を入れる。		
		27	「６取るよ」と言いながら、右手を出そうとしたが、力一杯入れているので、さっとは引っ張れない。無理に引っぱってもいけないと思い、２，３分待つ。
28	泣いているが、小さい声になっていて、私の方を見ている。		
		29	「取るよ。」と手を取り、介助しようとする。
30	介助される前に自分から⑥を取り盤の上に置く。		
		31	「置けたねー。すごーい。」と誉める。（私としては嬉しく誉めたつもり）
32	全く私の方を見ないで次の⑦を取ろうとしている。		
		33	「７取って。」と声をかける。さっきのは聞こえていないのかなあと思いながら。
34	⑦を取り、一人で盤の上に置く。		
		35	「置けたねー。じょうず。」と誉める。
36	次、自分で⑧を取りに行く。⑨も取り、置く。		
		37	自分で取り出してすごいなーと思いながら、１０のチップを机の上に置く。
38	⑩のチップも手を伸ばして自分で取り、置く。01 と反対だった。		
		39	「反対よ。回して」と言う。
40	自分で回して⑩と置き直す。		
		41	「ここだ！！」と思い、大げさなくらい「すごい！啓司。ちゃんと向きも変えられて、えらい！１０まで置けたね。早かった。カッコイイー」 （私としては恥ずかしいくらい大げさだったのですが）
42	まっすぐ前を向いて私が後ろにいても振り向かなかったのに、その声でパッと振り向き、びっくりしたように私の方を見た。		
		43	「えっ、恥ずかしい」と思いながら、私ってこんなに誉めていなかったんだ、啓司が振り向くくらいなんて初めてだ！！と反省。
44	私の顔を見てニヤーとする。		
		45	「１１からもじょうずに置くよ。」と声をかけ、「１１」と盤の方を指さす。

46	声かけで⑪を取り、自分で盤の上に置く。		
		47	「すごい！じょうずよ。次１２よ」と言う。
48	手が先に伸びてやる気まんまん。盤の置く方の数字も見て置く。		
		49	最初あんなに泣いて暴れていたのに、誉めるとこんなにも変わるのか、すごいなと思いながら「１３置くよ」と言う。
50	⑬を取り、置く。次の⑭を自分から取ろうと身体を乗り出して取る。 ・ ・ ⑳まで取りながら置く。		２０～
		51	途中介助して置くところもあったが、こんなにも積極的になり、びっくり、と思いながらもすごいやりやすいと実感。 ・ ・
		52	「９１よ」と言う。
53	91 はさっと取り、置く。		
		54	もう終わりと思っているので、スピードも速くなったと感じ、声かけせずに見ている。
55	92 , 93 とさっさと取り、100 までくる。100 は（向きが）反対で 001 と置く。		
		56	「反対よ」
57	100 と向きを変える。		
		58	「早かった！！今日はえらい。自分でいっぱい取って置けたねー」と誉める。
59	ニヤーと私の方を見て、片づけを自分からし出す。①②と重ね出す。		

① ２０※※年２月１８日
家庭記録には、最後に「１１からは自分で取り、置く、で１００まで自分からチップを取りに行った。早く終わった（１５分）」とある。

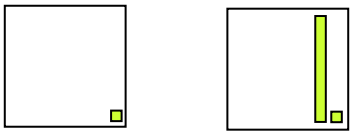
② ２月１９日
チップを出しても泣かない。枠の中にきちんと置く。誉めると、私の方を見てにっこり。・・・向きも変えている。」

◆C　コミュニケーション シーンの再現・テーマ（1～100 タイルカードマッチング・その１）

２０※※年 1月２９ 日　記載

記載者（瀬戸内朝子）

氏名　瀬戸内健治	年齢　10 歳 6 カ月	20※※年 1 月 28 日

時刻 番号	子供の言葉、行動様子、状態、反応 （どのように　どんな　どの位）	時刻 番号	親の言葉、音量、身振り、表情、賞賛、 考えたこと、観察したこと、反省、工夫
	１～１００タイルカード 3.5cm 四方のカードに 2mm×2mm を１としたタイルが貼ってあるもの  １　　１１	1.	「今から 1～100 のタイルのマッチングね」と言ってスケジュールを見せる。 ① 時計 ② 積み木模様 ③ 1～100 のタイルマッチング 私は数の台紙を机の上に置く。
2.	「あー」と声を出す。		
		3.	声を出し、様子を伺いながら「嫌」と言いたいのかなと思い、無視をして、1～10 のタイルを台紙の上、左右に並べる。
4.	「あーあー」と声だしをしながら、１から順に並べる。１０まで並べ「で・き・ま・し・た」と大きな声で言う。		
		5.	「はい」と返事をし、次のタイル 1～２０を並べて「はい、つぎは？」と言う。
6.	「いーや」と怒るように言う。タイルカードは叩きつけるように置く。		
		7.	怒りが激しくなってきた。絶対最後まで並べさせよう、泣きには負けないぞ、と思い、次のタイルを（２１～３０）を並べる。 「２０まで置けた。さあ、頑張れ」と励ます。
8.	声だしがだんだんと減り、黙ってカードの裏の数を確認しながら起き始める。		
		9.	「この調子！」と思い、次々とタイルを並べる。
10.	５１～６０のタイルを並べている頃から、あくびをする。		
		11.	あくびをしたから、「眠いのだ」「退屈なのだ」と思い、早く並べてと願う。
12.	嫌がらずに取り組んでいる。 そして、７８まで並べた時、 健治の右腕が台紙に当たり、右側３分の１のタイルが崩れる。 ２～３枚崩れると、１枚ずつ丁寧に直すのだが、これだけ崩れると、もう直せないと思ったのかイライラとなり、７８枚のカードをかき混ぜてしまう。		

	「あんー、あんー」と声を出す。		
		13.	せっかく並べたのに「あー残念」と、私は冷静にと思い、声を低くして言う。 今から「やり直し」と言ったら必ず騒ぐだろうなと勝手に思い込む。 「ちょっと待って。やり直し。カードを整理するから待って。手はひざ」と言って、1～１０，１１～２０，…1～100 というように１０枚ずつ箱に入れていく。
14.	私がカードを整理している横から１，２，３，４と順に並べる。“５”が見つからずに怒る。		
		15.	探しているカードが７８枚の中から簡単に見つけることができないので怒っているのだろう。
16.	「あー、５」と言いながら手で５を表す。		
		17.	「わかった、わかった。５，探しよんやろ。でも、ちょっと待って。手はひざ」と言う。 整理するまで待って欲しかった。
18.	足を床にどんどんとする。 目がつり上がり、顔を赤くして怒っている。 「あー」と声を出す。 横から５を探す。		
		19.	「早くしてー。」「早く終わらせたいー」という思いだったのか？私は冷静にと思い、耳栓を入れ、カードを整理する。健治の手が出てきたら「手はひざ」のカードを見せる。
20.	「手はひーざ」と怒りながら手はひざで待つ。		
		21.	整理が終わり、（１～４まで並べているので）５～２０のタイルを台紙の周りに並べる。
22.	５を見つけ置いたら、「いーや」「あー」と言いながら２０まで並べる。		
		23.	２１～３０のタイルを並べる。
24.	だんだん声が弱くなってきた。 「んー」と声が落ち着いてきた。		
		25.	静かになったと思い、耳栓を取る。
26.	４１のカードを並べるときから、数を言いながら置いていく。 カードを慎重にそっと置く。 このまま１００まで並べる。		
		27.	「あー、終わった。よかったあ。頑張った」と褒め終わる。

（私の反省）

① 整理している間、１～４まで並べさせず、きちんと待たせるべきだった。健治にすれば並べてよいのかと思い、「手はひざ」と言われ、迷ったと思う。

② 子供の要求を聞かないと思いながらも無視しきれなかった。

③ 冷静にを心掛けるために使った耳栓は良かった。耳栓をしたと言うことだけで声は小さくなり、落ち着いてと自分（私）に言い聞かせることができる。

④　途中から早く終わらせることだけに集中してしまい、どんなふうに置き、どうわからないのかなど観察できなかった。
⑤　無視をするというのは、今回の私の態度は当てはまらないと、これを書き終えて思った。無視は関わらないこと。
⑥　何時間かかってもよい、という対決姿勢がなかった。

２００２年１月２９日話し合いの時に上記のコミュニケーション シーンの再現（1～100 タイルカードマッチングその１）が取り上げられた。
そのことを念頭に講義ノートを手元に置いて、課題学習をした。その時のコミュニケーション シーンの再現が「1～100 タイルカードマッチングその２」である。

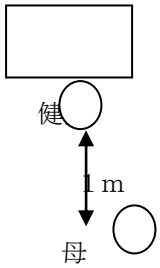
◆C　コミュニケーション シーンの再現・テーマ（1～100 タイルカードマッチングその２）

２０※※年　１月３１　日　記載

記載者（瀬戸内朝子）

氏名　瀬戸内健治	年齢　10 歳 6 カ月	20※※年 1 月 31 日

時刻 番号	子供の言葉、行動様子、状態、反応 （どのように　どんな　どの位）	時刻 番号	親の言葉、音量、身振り、表情、賞賛、 考えたこと、観察したこと、反省、工夫
		pm 8:55 1.	「さあ、次は何かな？準備して。」と言ってスケジュールを見せる。 ~~①　漢字~~ ~~②　本読み~~ ③　1～100 タイルマッチング ~~4．折り鶴~~ 終わり
2.	「お・り・づ・る」と元気よく言って折り紙を用意する。		
		3.	「えっ、ちがうよ。３番の 1～100 のマッチングよ。」 私は、1～100 の台紙を指差す。 （嫌なことは目に入らないのだろうか。 折り鶴が早くしたかったのだろうか。）
4.	「えー、いーや」と怒りながら、1～100 の台紙を取り、机の上に叩きつけるように置く。		

		5.	タイルカードは私が取り、1～10 の１０枚を台紙の周りに散らして置く。少し距離をおく。 （母と子の距離） 「出来たら言ってね。」「ここで本を読んでるから。」と机を叩きながら言う。 
6.	小さな声で「あーあ」。 左手で髪の毛を触りながら「1」をさっと見つけて置く。２～１０も迷わずにさっと取る。並べ終わる。両手で髪の毛を触っている。		
		7.	「できたの？」と声を掛けると、
8.	「できました」と髪の毛を触るのを止めて落ち着いた声で言う。		
		9.	「じゃあ、見せて。数えるよ。」と言い、「1，２…１０」とタイルを数えて確認する。
10.	私がカードを数えている間、一緒に「1，２，３…１０」と首を振りながら数え、私の指を目で追う。		
		11.	「全部あってた。すごい」と褒める。次の１１～２０のカードを置く。（カードを）散らす。
12.	「１１」をさっと見つけて取りに行く。この調子で置いていく。 「１５」を置く時、手が当たり、２，３枚崩れ、「あーあー」と怒りながら直す。 左手は髪の毛を触っている。声がだんだん「んーんー」と低い声になる。「できました」と言って椅子から立ち、日めくりカレンダーをペラペラする。		
		13.	「座って待ちなさい」「じゃあ、見せてね。」「１１，１２，１３…２０」と数え、「全部合ってる。よくできてるね。」と褒める。 「次のカードを置いてね。」と２１～３０（裏に数字の答えを書いてある）のカードを置く。
14.	「んーんー」と声出しが始まる。 「２１」のカードを１回で見つけ、裏を見て確認してから置く。 ２４まで置き、立ち上がり、日めくりカレンダーを喜んでペラペラする。		
		15.	少しずつ分からなくなってきたのか、ワンパターンなのか、自信がないのか、ウロウロし始めた。 「できたの？」と声を掛ける。
16.	「あー」と怒りながら座り、「２５」をパッと見つけ（一の位を見て取っている）、（カ		

	ードの）裏を見て置く。３０まで置く。 左手で髪の毛を触っている。		
		17.	自分から「できました」というまで待ってみる（３分）。 できました のカードを目の前に出す。
18.	カードを見て「できました」と大きな声で言う。		
		19.	「はい、できたね。確認しよう。」「２１，２２…３０」と数える。
20.	確認している間は、おとなしく私の指を目で追っている。声出しもない。		
		21.	「全部合ってる。すごい。」 答えを見ているので当然と思うが、このまま続ける。「次も頑張ろう」と３１～４０を置く。
22.	静かに置く。 ２１～３０の時と同じように一の位で判断し（カードの）裏で確認して置く。 「できました」		
		23.	「自分から『できました』が言えたね。えらい。」「じゃあ、数えるよ。」「きれいに置けたね。」と褒め、次の４１～５０を置く。
24.	静かに置いていたのに、急に「あー」と大声で泣く。		
		25.	「えっ、どうしたん？」と覗き込むと、５枚ほど崩れている。（ぐちゃぐちゃにかき混ぜないで）と思いながら、じっとどうするか見る。
26.	「あー」「んがー」と言いながらも、右手に集中してきれいに置く。左手で髪の毛を触り、私の顔をじっと見る。		
		27.	「何て言うの？」カードを指さす。
28.	カードを見て、「できました」と落ち着いて言う。		
		29.	「きれいに並べ直してえらかったね。」 「じゃ、数えるよ。」と言った後、
30.	台紙に指が当たり、全体に１mm ほどずれた。気に入らない。「あー」と叫ぶ。		
		31.	（落ち着いて）と私は自分に言い聞かす。（また泣き騒ぐのか）とおどおどしている私。 「ゆっくりなおしなさい。」と声を掛ける。
32.	「あーあー」と声を出し、怒りながら直す。細かい作業なので慎重にしている。だんだん声が小さくなってきている。きれいになると静かになる。		
		33.	「きれいに直したね。頑張ったね。」と褒める。次のカード５１～６０を置く。
34.	「５１」と言いながら、一の位を見てカードを取り、裏を確認して置く。 これを１００まで繰り返す。		
		35.	１０枚ごとに褒める。
36.	１００まで並べると「できました」と大きな声で嬉しそうに立って私のところに言いに来		

	る。		
		37.	「やったあ！できたあ！」「１００まで頑張ったね。」「９１，９２…１００」と数える。「全部合ってる。」と褒め、手をタッチする。
38.	にこにこして、「タッチ」と大きな声で手を合わせる。		
		39.	「じゃあ、片づけるよ。」「１０枚ずつ箱に入れて」
40.	「1，2，3…１０」と数えながらカードを取る。「１１，１２…」と続けてカードを取ろうとするので、		
		41.	「ストップ、１０枚でいいよ。」と１１，１２をしまわせる。
42.	「１１，１２…２０」「２１，２２…」と１０枚ずつ箱に片づける。１００まで入れ終わると、「おやすみなさい」と大きな声で言う。ベッドの方へ行く。		
		43.	「あっ、ちょっと待って。きれいに片づいたね。」「次は何をするんだっけ？」とスケジュールを見せる。
44.	スケジュールを見て（折り鶴なので）折り紙を机から出し、折り出す。声出しもなく、丁寧に折る。折り終えると、「おやすみなさい」と目を見て言う。		
		45. pm 9:25	「はい、きれいに折れた。」 「おやすみなさい。今日一日頑張ったね。」 「また、明日ね」と声を掛け寝かせる。

（私の反省）

① 褒めることに気をつけたつもり。答えを見て（カードの裏に数字を書いている）合っているのは当然だが、褒めることで子供が自信がつくのだと思う。

② 途中、崩れた時、また、大泣きになったらどうしようと、おどおど対応しているのでこれでは子供に甘く見られるなと思った。もっと毅然とし態度で接しなければと思う。

③ 課題がワンパターンになっている。途中で立ち上がったり、日めくりカレンダーをペラペラしているのは、課題が「何だ、またこれか」という思いがあるのでは…。

④ 片づける時は声出しもなく、静かにしていた。片づける時の方がタイルがよく見えていたように思う。

◆D　コミュニケーション シーンの再現・テーマ（キャベツの位置を変えると怒る、物を投げる）

子どものの状態について、

① この２，３日のこだわりについて

- 靴下を脱ぎっ放しにするので、脱衣かごに入れるよう言ったら、大泣きした。一度はかごに入れたが、また靴下を取り、自分で脱ぎっ放しにしていた位置までわざわざ置き直した。
- 課題（分類・色と具体物）をしている時、赤い車のカードが破れていたのでセロテープを貼って直した。すると、怒ってクレーンで私の手を取り、セロテープをのけさそうとした。
- 壁に貼っていた五十音の表がのいたので、押しピンで止め直したら怒って私の手を取り、クレーンで押しピンをのけるように言った。
- 今朝（１０／２１）、朝食を取った後、かつおぶしの袋とふりかけの袋が空になったのでごみ箱に捨てた。すると、怒って私の手を取り、ごみ箱の中のかつおぶしの袋とふりかけの袋をテーブルの上に戻さそうとした。

② 以前、キャベツについてこだわりを持っていたことについて

- 幼稚園の年中の春頃、とにかく「キャベツ」をとても気にしていました。その頃は台所に行くと、冷蔵庫からキャベツを取り出して、しげしげと眺めていました。そして、キャベツの葉を一枚一枚ちぎったりしていました。
- いつまでもテーブルの上に置いておくわけにもいけないので、しまおうとするのですが、本人が頑として受け付けず、その時は彰が居なくなると片付けていました。
- そして、そのこだわりは買い物に行っても続き、必ずかごにキャベツを入れておりました。でも、こだわるのはキャベツだけ（他にも少しはあったように思いますが、それ程ひどいこだわりではなかった）でした。ですから、キャベツのことを除くとそれ程困ることはありませんでした。

２０＊＊年 １０月２０ 日　記載　　記載者（母・　山田多恵子　）

氏名　山田　彰		年齢　６歳６カ月	20＊＊年１０月１９日
時刻 **番号**	**子供の言葉、行動様子、状態、反応** **（どのように　どんな　どの位）**	**時刻** **番号**	**親の言葉、音量、身振り、表情、賞賛、** **考えたこと、観察したこと、反省、工夫**
20:00 1.	風呂から出て、喉が渇いて台所の椅子に腰掛けた。 「お茶、かけてもいい？」		
		2.	最近、お茶が欲しい時に、間違ってこう言う時がある。正しい言い方を言わそうと（「お茶をちょうだい」と言わせようと）思った。 「お茶…」と言った。
3.	「お茶ちょうだい」		
		4.	「はい、ちょっと待ってね」と言って、お茶を入れてやる。
5.	お茶をおいしそうに飲んでいる。		
		6.	ふと、夕食の時に使ったキャベツを流しの所に置いたまま、しまい忘れていたのに気がつき、冷蔵庫に入れた。
7.	それを見て、「キャベツがいる」と言った。		
		8.	私は、これはこだわりだと思い、無視した。以前もキャベツをしまうと怒り、彼が台所に居るときはキャベツをしまえないときがあった。 また、この２，３日、こだわりが強くなり、私が

			ちょっと物を動かしたり、片付けたりする度に、大泣きしたり怒ったりするようになっていた。
9.	「キャベツがいる」とたたみかけるような口調で言いながら、私の所まで来て、クレーンで冷蔵庫の取っ手に手をかけさせようとする。		
		10.	クレーンで冷蔵庫を開けさせようとするので、私はますます嫌になり応じなかった。
11.	「キャベツがいる」と言って、クレーンで開けさせようとする。		
		12.	「やめて、嫌」と少し怒って言った。
13.	「キャベツがいる」と言って、クレーンで開けさせようとし、地団駄を踏む。		
		14.	冷蔵庫から離れて、（離れの）洗面所の方へ向かう。
15.	「キャベツがいる」と言いながらついてきたが、途中でスリッパのまま外に出ようとする。		
		16.	追いかけて行き、手を引っ張って連れ戻した。そして、離れの方へ引っ張って行こうとした。
	私の手を振り払い、台所に走って行った。		
		18.	台所に行き、「あっち（離れ）に行こう」と言った。
19.	「キャベツがいる」と言いながら、私の所まで来て冷蔵庫をクレーンで開けさせようとする。		
		20.	お茶を殆ど飲んでいないことを思い出し、「お茶、飲みな。」と言った。
21.	大泣きし、奇声を発した。ジャンプして尻餅をつくような動作をし、私の顔を見る。 「キャベツがいる」と繰り返し言う。		
		22.	キャベツのことにはふれない方がいいと思い、「お茶、要らんの。」と言った。
23.	大泣きし、奇声を発した。私の顔をじいーっと見る。「キャベツがいる」と何度も言う。 寝転がり、足をバタバタさせた。		
		24.	「もう、知りません。」と言って一人離れの方へ行こうとする。
25.	私の手を取り、冷蔵庫まで連れていこうとする。		
		26.	「やめて」と手を振り払った。
27.	怒って椅子を倒し、私の顔を見る。そして、「キャベツがいる」と大泣きしながら、クレーンで開けさせようとする。 また、行ったり来たり変な歩き方をした。 そして、サランラップを手に取り、放り投げ、私の顔をみる。そして、「するん？せんの？」と言った。		
		28.	これは、キャベツを私が取らないのでアピールしているなと思い、無視を繰り返した。
29.	大泣き、奇声「キャベツがいる」と何度も言う。		

		30.	「あっち（離れ）へ行くよ。」と言って、連れて行こうとした。
31. 20:20 頃	テーブルの上にあった唐津の入れ物を投げた。 幸い、入れ物は割れなかったが、中の漬け物はそこら中に散乱した。		
		32.	割れる物は投げるととても危険だし、私もカッとなってしまった。 ついに我慢の緒が切れ、左頬を平手打ちしてしまった。
33.	（私が）平手打ちをした後、泣きながら「ごめんなさい」と何度も言った。		
		34. 20:20	散らばった漬け物を片付けさせようと思い、「片付けなさい」と言った。
35.	その瞬間たら一っと鼻血が出た。		
		36.	急いでティッシュで拭いたが、大量に出た。運の悪いことに、今日はいつもより長く入っていたのでのぼせていて、なかなか止まらなかった。いっぱい出たので私は焦った。 止まらないので、椅子を２つ引っ付けて、「ここにねんねしときな」と言って、そこで仰向けに寝かせた。（５～１０分）
37.	不安そうな顔をしながら、素直に言うことをきいて仰向けに寝た。		
		38.	「鼻血いっぱい出るけん、じっとしとくんで。」と言った。 もう片付けさせる気持ちは消え失せてしまい、自分で（私が）散らばった漬け物と落ちた鼻血を拭いて片付けた。
39.	時折「キャベツがいる」と言いながら、おいおいと泣いていた。でも、じーっと仰向けにねている。		
		40.	だいぶ鼻血が止まったので、抱きかかえて離れに連れていった。
41.	抱かれたままもう抵抗することはなかった。静かにしていた。		
		42.	私に叩かれたショックと鼻血が出たショックと二重にショックを受けているなと思った。すまない気持ちでいっぱいになり自責の念にかられた。 「顔を洗って歯を磨きなさい。」と言った。
43.	神妙な面持ちで顔を洗って歯を磨こうとしている。		
		44.	そこへ知人から電話がかかった。仕方がないので、彰の姉（中学生）に、後を頼んで私は電話に出た。
	（ここからは電話をかけていたので彰の様子は分かりません。）	45.	姉はそれから「彰ちゃん、歯磨きして」と若干いつもより優しい口調で言って、歯磨きさせた。 そして、トイレに行かせてから絵本を読んでいた。
46.	姉の言うことをよく聞いて、静かに大人しく絵本を読んでもらっていた。		

		47.	私は彰のことが気になりながら、２０分位電話していた。
		48.	姉が「お母さん、彰ちゃん鼻血出よったけど、大丈夫？」と言いに来た。 それで知人に事情を話し、慌てて電話を切った。
49.	鼻血は止まっており、大丈夫そうだった。		
		50.	それから、私が添い寝をして、彰が大好きな本（はじめてのおべんとう）を暗唱して、眠らせた。
51.	わりとスーッと眠った。		

私は、「体罰はしない」と心に決めているにもかかわらず、今回は反射的に手が出てしまいました。このコミュニケーション・シーンの再現の記載は後で思い出して書いたので、実際にはもっとしつこいやり取りが何度もあったと思います。でも、結局叩いてしまったのですが、他に何かもっと有効な方法はなかったのか、鼻血が出るほどに力いっぱい叩いてしまった事に対して、強く自責の念にかられました。昨日は夜にお祭りを見に行き、本人はとても喜んで楽しい一日で終わるはずだったのに、私の一撃で辛い一日にしてしまった事に対して何とも言えず口惜しい気持ちで一杯です。

余暇活動とは

河島淳子

余暇活動の意味

私たち人間のめざめている時の活動・生活は「遊び・学び・働き」で成り立っています。そして、幼児期・学童期・思春期青年期・成人期を通して見るとき、その内容の順位や割合は、次のように変化していきます。

幼児期　先ず①よく遊び　そして②よく学び　③よく働く（お手伝い）
学童期　先ず①よく学び　そして②よく遊び　③よく働く（お手伝い）
成人期　先ず①よく働き　そして②よく学び　③よく遊び（余暇）

成人期を豊かに生きていくためには、どの要素もおろそかにはできません。特に生きることの無器用な自閉症の人にとって、余暇をどう充実して過ごすかを幼児期から考えていくことは、人生を心豊かに生きるために欠かすことができません。そこで、解放され、リフレッシュし、人と心を通わせ、感動や希望や喜びを感じ、新たな働きへの意欲を増します。心豊かに大きく広がり、成長していくのです。

余暇活動の支援の実際

「幼児は遊びによって育つ」と昔からいわれます。でも、信頼関係ができにくく、しかも言葉の遅れた自閉症の子どもの場合は、余りにも遊ばせにくい。感覚遊びや同じことの繰り返し……。広げていけないのです。押しつけると泣いて嫌がります。自分が気に入った遊びしか受け入れてくれない。どんなに可愛がっても、「よく遊び・よく学び・よくお手伝い」とはならないのです。

個別課題学習の始まり

だんだん遅れの目立ってくる子どもたちに、「このままではこの子は生きていけない」と、危機感を持って取り組んだのが、文字と数字の指導でした。見ようとしない、やろうとしない子の背後から両手を添えて、息子をはじめ、私の療育センターに来ているどの子にも数字盤に同じ数字カードを１から 100 まで順番に置かせました。こうして、全介助で並べさせ続けていると、数字を覚えただけでなく、「座る、待つ、手を膝にする、模倣をする、やり遂げる、指示に従って学ぶ」等の姿勢も身についてきたのす。

自閉症児の場合は、積極的に個別課題学習を通して、「よく学ばせ、よく遊ばせ、よく手伝わせる」ことで、しっかり歯車をかみ合わせてあげると、やがて自分から「よく学び、よく働き、よく遊ぶ」ように変身していきます。そして、心の育ちに思いを向けながら、生きる上で必要な基本的なこと（基礎概念・数の概念・タイル算・国語・金銭・時間・重さ・長さ・空間位置・料理・買い物・理科・折り紙・手芸・工作）を課題学習として、学童期・思春期を通して継続していく時、少しずつ自立していき、家族は共に生活を楽しめるようになっていきます。

家庭での取り組み

⑴ **街へ出かける**　パニックや問題行動をおそれないで、幼児期から頻繁　に外に連れ出し、バスや電車を利用し、買い物をし、レストランで食事　をし、外でのエチケットやルールを教えます。わがままであっては、人と幸せにはやっていけません。

⑵ **基本的生活習慣の確立は重要**　成人してからの取り組みは困難で、長くかかります。排泄・生理の始末はどんなに重度でも幼児期から諦めないで指導し、性に関することも、羞恥心が育ちにくいので、時と場所に合った過ごし方を教えていきます。偏食がなければ、生活は大いに楽しめます。

⑶ **体を鍛える**　幼児期から始めた山歩きやマラソンは、どんな人にも、健康な余暇の過ごし方となっていきます。

⑷ **手芸や工作**　そして多くの習い事は、すぐれた指導者によって継続して熟練していくとき、趣味や特技となって楽しめます。習い事を通して、よき理解者に出会い、一生の強い信頼関係を築くこともあります。

⑸ **料理・洗濯・掃除に取り組む**　幼児にとって料理は本物の遊びです。料理は一生の趣味・特技となり、ご馳走は人を集め、幸せにします。

⑹ **適した仕事を選ぶ**　私の息子の場合は洋裁です。洋裁は「学び」であり、音楽を聴きながらできる「働

き」であり、他者に役立つことが喜びとプライドになっています。楽しんでできる働きに、すでに趣味の要素が入っています。好きな仕事は安定し充実した成人期を送るのに大切です。

(7) 地域の人たちとの交流を大切に　理解者の輪を広げることも大切です。ボランティアの方々やヘルパーさんと親しく共に行動する機会も作り、親を離れて行動できるようにしたいものです。行事に積極的に参加し、公園の掃除など奉仕作業も一緒にしていきます。

余暇活動の内容例

① 音楽(ピアノ等楽器の演奏　合唱　コンサート　カラオケ)
② 美術(切り絵　版画　絵画　漫画)
③ 書道
④ 読書(雑誌　絵本　料理の本)
⑤ かるた会　百人一首
⑥ リトミック　水泳　スケート　ボーリング　バスケットボール　テニス　バドミントン　スキー　モダンダンス　マラソン　少林寺拳法
⑦ 手芸(パッチワーク　編み物　刺し子　クロスステッチ刺繍　ビーズのれん　折り紙　　切り紙細工　箱づくり　洋裁)
⑧ 工作・陶芸　(木工　箱作り　焼き物)
⑨ 料理　料理教室　パン焼き　クッキー作り
⑩ 家庭菜園
⑪ ペット(犬　猫　小鳥　ハムスター)
⑫ 山歩き　登山　ハイキング　キャンプ　釣り　サイクリング
⑬ 祭り　マラソン大会　運動会　和太鼓　地域の行事　サークル活動
⑭ 温泉巡り　旅　映画館　ホテル　図書館　レストラン　デパート
⑮ テレビ　テープ　テレビゲーム　パソコン
⑯ 鉄道模型　収集　写真撮影

知識ある愛・行き届いた支援

このようにできるだけの自立を願って、幼児期からこつこつと、知識ある愛をもって取り組んできた全てのことが、成人期の余暇活動を豊かなものにしていきます。余暇の豊かさは生活そのものの豊かさです。自閉症の人たちが孤立しないで、社会に貢献しながら、安心して幸せに生きていけるようになることは、行き届いた支援によって可能となります。

自閉症ガイドブック　シリーズ４　成人編
2004 年 3 月　日本自閉症協会　刊

自閉症の人の早期療育－幼児期からの学校教育への意見

河島淳子

トモニ療育センターには２歳前に自閉症と診断を受けた子どもと親が外来セッションを求めてやって来ます。その度に、私に一体何かできるだろうかと考えるのですが、親は、早期に発見され、自閉症と告げられただけで、確かな向き合い方を具体的に何も指導されてないのです。そこで私は、母親たちに自閉症の知識を与え、子どもを観察する力を与え、家庭で課題学習に取り組んでいけるように努力して参りました。

自閉症の可能性がある子どもの親に「様子をみましょう」と言って過ごさせる２歳半から３歳の時期に、障害のない子どもたちは驚異的な脳の発達を示し、ひとりでに言葉も判断力も社会性など全ての能力が開花し、遊びながら、成長、発達します。すでに言葉・対人関係・社会性の遅れを見せている自閉症の子どもは、その間にますます発達の遅れを明らかにし、困った問題行動を出していくのです。だからこそ、本気で向き合って好ましい発達を促していきたいのです。

１．遊ばせたくても遊べなかった

私は、32 歳になる自閉症の息子をもつ母親でもあります。若かりし日に、“幼児は遊びによって全てが育っていぐと学びました。だから、遊べない息子と一生懸命に遊びました。遊びの本を必死に読み、保育士に学び、ひたすら遊びに取り組んだのです。でも、遊びのできない息子は参加できない、のってこない。できる遊びは限られ、結局は二人で快適に過ごせるのはバギーに乗せて外出することでした。買った子ども用の三輪車はずっと置いたまま、さびて捨ててしまいました。

認知障害は深刻なのです。また、そこからくる対人関係・社会性の問題、中でも言葉の遅れの問題は深刻です。遊びでは、自閉症の子どもに決して積極的に関わっていくことができません。私かトモニ療育センターで早期に課題学習に取り組むのは、その経験によるものです。

２．発達段階という判断基準を超えて

広汎性発達障害といわれている発達が困難な子どもに向き合っているのに、自閉症の子どもにとって一番進歩の見えない発達段階などといった判断基準を採用し、それによって自閉症の子どもに教材を提供しアプローチする専門家や療育関係者が後を絶たないのはなぜでしょうか？

例えばトモニ療育センターでは４歳少し過ぎで、もう文字とか数というお勉強をさせています。普通であれば、１年生に入ってから学ぶようなことがらです。

それに対して、「学ぶことの意味合いというか、それに至る前をどのように押さえているのか。『もうこういう課題を入れて大丈夫かな』ということを、どのように判断されているのか。］という質問をされる方がいます。

しかし、遅れている自閉症の子どもに親は何を望むでしょうか？皆と同じように育ってほしい。文字を獲得して、友達と同じように、一緒に学んでいって欲しい。「今は文字を学ぶ段階ではない」と否定されるより、私たちが使っている文字の世界に少しでも招いた方がいい。そこから、親の具体的な希望が生まれてくる。テーマが決まれば、前進できるのです。

３．学んでいける、教えることもできる

皆さん、どうして高度な課題だと思われるのでしょう。たった０から９までの数字で成り立っている整然とした数のマトリックスは美しい。数概念のない子どもにとって、数唱しながら、次々に並べていく共同作業は、何の判断力も要らない、始めも終わりも明確な遊びでもあります。

私の息子に文字や数字を学ばせた頃のことを聞いてみました。彼にとっては、私とする１から１００の数字のマッチングや五十音積木並べが一番楽しい時間だったそうです。私も歯車を合わせて同じ物を詰めていく作業が楽で、彼とのつながりを実感できた時間でした。私の息子はやがて文字を書くのが好きになって、いたるところへ「２」と落書きするようになったのです。

ＮＨＫのスタジオ「１０２」（イチマルニ）が何故かお気に入りでした。１０２が見えると、因島１号、因島２号、因島３号など高速船が具体的に大好きになりました。テレビの時刻も見え始めたのです。楽しみは文

字から広がっていき、私も彼の興味を楽しみました。彼は学んでいける。私は教えることができる！あの感激を忘れることはできません。

でも、マークとして同じ物を見つけている間はよかったのです。概念を悟らせることは絶望的な程、大変でした。私か諦めていたら、彼は数が分からないままだったかもしれません。彼の認知障害の厳しさをはっきり認識したのは数概念の獲得ができず、「どちら」「大きい小さい」なども全く理解できないと知った時です。名詞は何とか一つひとつ注ぎ込むことができましたが、疑問詞は使えない。質問などしてくれない。答えることを知らない。おうむ返しです。就学まであと何年？３年あれば、その間に獲得できるだろうか？いつ獲得できるか分からないから、早期から文字に取り組んだのです。多分、保育園年中から文字指導を始めたと思います。イ可度も話してきたことですが、まだ、「トイレ」も言えない子どもでした。分かりづらい。いつ分かるようになるか分からない。そんな状況で汀発達段階に達していないから」と学ぶ機会を遅らせていいものでしょうか。

４．トモニ療育センターの親への姿勢

トモニ療育センターでの外来検査は、「厳しい」と言われることがあります。しかし、ほとんどの親は「ここで初めて子どもは、一人の人間として大切に向き合ってくださった。」と言います。私は母親としての痛みと、自閉症の子どもへ対応の、今までのいい加減さと無責任さに腹を立て（かつての私もそういうことをやってきたのです。）本人や家族が不びんでならなくて、その全てが自閉症の子どもに向き合う情熱となっているのです。

私は親を共同治療者と奉りながら、親をろくろく教育もせず、アセスメントにも立ち会わせない日本の現実を知っています。親は何も知らないから、どうしてよいか分からないから、遠方からもトモニ療育センターにやってくるのです。親が自閉症の子どもを育てる力量が整っていないから、２次的障害３次的障害をつけてしまっているのに「親は子どものことを一番よく知っておられる」と、大切に敬意をもって向き合い、「お母さんから学んで共に療育していきたい」と優しい温かい言葉をかける。これは、自信のない養護学校や特殊クラスの担任もよく口にする言葉です。医師としての私にはそんな事は言えません。専門家なのですから。

実際、トモニ療育センターで２時間アセスメントをやってみます。ほとんどの親がびっくりします。自分たちが我が子のことをこんなにも知らなかったのかと。知らないで適切な療育はできっこない！親は無知のまま、放って置かれているのです。しかも学ぶ場もないのです。家庭での日々をどう関わって過ごしたらよいかを教えてくれる場はないのです。問題行動をどう考えたらいいのか、全く分からないでゴタゴタを増しているのです。

５．トモニ療育センターの課題学習

トモニ療育センターには、重度と思える自閉症の子どももいますO同じ物を見分ける力も育っていない子どももいます。でも、そんな子どもも自分の興味ある絵本や物には感じることがあります。私たちは可能性のある子どもに向き合っているのです。まず、見分ける力をつけていくためにマッチングをたくさんさせます。見分ける力は生きる力になります。１年２年同じ課題学習を繰り返していくうちに、変化が表れ、学びは加速していき、母子関係も改善されていくのです。

また、学習態度は幼い時にこそ付けておきます。自閉症だと分かったら、なおのこときちんと食卓につかせて食事を食べさせます。私は、遅れている息子を前にして、「脳の発育は、生後３歳までに急速に成長し、その後５～７歳、１０歳過ぎに急成長する。１２歳すぎてからは、もう目立つほどの成長は見られない。」と何かの本で読んだとき、それなら、適切な時期に適切な指導を十分にしなければならないと強く思ったのです。

私は時期には敏感でした。イ可もしないでも時はどんどん過ぎていくO親には焦りがあるのです。

６．文字指導について

幼児療育機関でも、保育所でも、様々な原色を使って飾り立て、おもちゃもカラフルです。丸や三角などの積木や色板を使わせます。丸や三角、四角などの形を身近に置くことには療育者は抵抗が無いのです。こんな教具は当たり前なのです。あたりにはおもちゃがいっぱいです。

一体、そのおもちゃの色に、形に固有の呼び方があるでしょうか？「赤」と言われたら、私たちはどんな赤を想像しますか？無限に赤い色のバリェイションがあるのです。三角も色々な三角があるのです。言語が表すことはできない。

でも、文字や数字はいつも一定の呼び方があり、１から１００の数字並べも一定の固有の位置がある。五十音積木も配置が決まっている。これ程、揺るぎない不変の教材はありません。いつも決まった作業です。自閉

症の子どもにとってこれ程明確な安心してできる遊びはないと思いませんか？

また、街の看板には丸・三角・四角の形だけで用の足りた看板はありません。どこにもありません。でも、数字なら学んだときから、車のナンバープレート、電話帳、カレンダー、昔はＮＨＫ１０２スタジオなどいっぱい数字を発見できたのです。そうして、目に付くようになった数字は、嬉しい親しい存在です。私の息子は数字の２が特に気に入り、２ばかり書いていたことがありました。それはやがてスタジオ１０２となり、電車の記号の見分けとなりました。形は街に溢れていない。形からはコミュニケーションにつながらない。形は文字より描くのが難しい。色は無限。色も形も極めて曖昧な世界です。

１００種類あっても、「４５」を下さいといえば、たちまち要求されたカードをどんな人もとれるのです。なんと分かりやすい世界でしょう。マークの区別がつかない子どもだって、繰り返しているうちに、弁別できるようになってくる。発達段階などの問題ではない。つまり、熟練です。私たちは繰り返しの中で感覚が研ぎすまされていく。

自閉症の子どもに話し言葉では指導できない。けれど文字は全介助で指導できるのです。極めて易しい。曖昧さがない。発展性がある。言葉に直結している。余り期待できない話し言葉に重きを置くことはない。手の機能が未発達で書けなくても文字カードで学んでいけるのです。書字困難は運筆の繰り返しの中で克服していける。漢字もカタカナもアルファベットも怖がることはないのです。文字そのものは同定ができればよい。見分けがつく力も明らかに成長していきます。それは脳機能の発達ではありませんか？　指示がよく通るようになれば、それは対人関係の改善に密接につながり、母子関係が安定することではありませんか？

７．おわりに

私はこれまで、母親たちに知識を与え、観察する力を与え、家庭で課題学習に取り組んでいけるようにするために努力して参りました。

発達段階の考え方では、早期にするべき事がしてやれない。そのことにどのように答えようかと、勢いよく怒りさえ感じながら、思うままに書き留めてきました。

あまりたくさんの課題をしなくても、系統的であれば生きる力はつきます。私か進めている課題学習を中心とした療育は多くの自閉症の子どもたちを救うと確信しています。お金も時計も重さも長さも、皆が知っていること、便利に使っている事柄は、何とか分からせてあげたい。私か息子にしてやったように。

自閉症教育実践ガイドブック
編著　独立法人　国立教育総合研究所
2004 年 6 月　ジアース教育新社発行

自閉症児者の 学習障害と行動障害に 向き合い続けて

トモニ療育センター
河島淳子

特別支援教育を必要とする最重度の自閉症スペクトラム障害の子どもたちも皆学校に通えるようになり、温かい支援を受けられるようになったことを喜びながらも、その子ども一人ひとりの学習障害や行動障害に十分に対応しきれていない学校の先生方の力不足と時間不足を残念に思っています。この現状を何とか打破していただきたく思います。

低い目標設定で子どもに向き合っている学校現場を見かけます。制度が整えられ様々な支援が受けられるようになった今こそ、学校教育（特に算数指導）の質の向上を切に願う者です。自閉症児者は質の高い教育に応えてくれる可能性ある障害ですから。

自閉症の息子が生れたのは 1971 年で、現在の日本自閉症協会の前身である自閉症児親の会が次々と発足した頃です。私は後輩として情報や励ましを受けてきました。

「自閉症の子どもの多くの問題は、本当にどうにもならないものなのか。最適の環境を与えて育てた場合、その子ども本来の姿はどのようなものなのだろうか。」と、整った賢そうな容貌に希望をもって始めた文字や数字のマッチング学習でしたが、いくら教えても、どうしても、数概念が入らない。外見からは想像もできない深刻な認知機能の障害、学習困難（読字障害、書字障害、計算障害）があったのです。「何としても、この子が生きていけるように私の手で育てよう。」と改めて決意したのでした。求め続けて出合ったのが、遠山啓先生（１９０９～１９７９）の著書でした。「タイル」というシェーマ（形式・図解）を使用して、「数」に代わる「量」に基づく指導「水道方式」という数学の学ばせ方です。視覚的に構造化されたタイル算のお陰で息子は数概念を獲得でき、計算障害を克服し、洋服の作図もでき、服を縫えるまでになりました。

トモニ療育センターを開設して 20 年近くなりますが、言葉のない最重度自閉症と診断された子どもにも視覚と手の操作を通して、安心して学習できるように、常に教材と指導法に改善と工夫を重ねてきました。母親にも十分指導できるタイル算です。重度の自閉症の子ども達が、タイル算で、加減だけでなく、掛け算、割り算、分数、小数、文字式、幾何学などにも取り組み、腕時計をし、財布を持って買い物をし、楽しんでプライドをもって料理を作り、家族全員が幸せになってきています。

「教育ができるとは思えません。文字が書けるようになるとは思えません！文字が読めるようになるとは思えない」と、泣いていた母親たちが、諦めず継続して、手を添えて１～100 の数字並べやタイル並べに取り組み続けた療育の結果、我が子が、読字障害も書字障害も計算障害も克服して、本読みも上手にでき、文字はすらすら書け、計算問題もできるようになった今、「まるでうそのようです。」と笑っています。指示を聞いて学ぶ姿勢ができ、母を一層慕うようになり、わかる喜び役立つ喜びを知り、いきいきと生活しています。

数年前より私は入所施設にも出向き行動障害のある人達に「検査と課題学習」を実施し、施設職員にその人を深く理解し共感して頂くように努めています。できることが増え、職員と深い信頼関係が築けてくると幸せになり行動障害も解決されています。しかし、福祉の現場は超多忙で職員達はきつい働きの合間に献身的にやっておられます。学校に通っている恵まれた子ども時代にぜひ取り組んでいただきたいです。

タイルによる算数指導は言葉を必要とせず、生きる力をつけます。数字は世界共通です。タイルを用いた算数指導は世界中の自閉症児に福音をもたらすと確信しています。

数年前ですが、理事長須田初枝氏のお話を聞かせていただきながら、重度の自閉症の方々が、相手の人と呼吸を合わせて生き生きと仕事をしておられるお姿を拝見し、深く感動し、励まされ、感謝いたしました。私も志を高く生きていきます。

けやきの郷の理念「自閉症者が人間として、豊かで、幸せで、責任をもって人生を生きる」が、世界中に広がっていきますように。

2013 年「けやきの郷」巻頭言

2014 年「いとしご」145 号掲載

行き届いた家族支援と教育へのチャレンジ

トモニ療育センター
河島淳子

私は自閉症の子どもの母親です。悲しみ・苦悩・孤独感を味わいつつ、言葉が出ず、応答しない息子に手を添えて全介助で文字や数字を教え始めたのが４歳。深刻な認知機能の障害があると気づき、以来夢中で、三重苦のヘレン・ケラーを教育したサリバン先生のように、私自身が教育をし、熟練によって腕を磨き、一人前に洋裁ができるまでに育てました。自立は困難でも、自由に買い物や旅行を楽しみ、他者のために喜んで働いています。

その体験を活かして 1994 年にトモニ療育センターを設立し、告知を受けて嘆き悲しみ、親子心中を考え、うつ病までなった母親たちや行動障害で困窮した家族に寄り添い、母親たちの苦悩や喜びを我が心として、行き届いた子育て支援を続けています。

当センターでは、詳細な問診票と一日をかけた検査と課題学習によって、教育への手がかりや可能性など子どもの実態を把握してから、個人に合わせた無理のない、理解できる指導を実践しています。極めて分かりづらく、抵抗し、学ぼうとしない、やりとりできない子どもを指導するために、この２０年間、タイル算教材の構造化とわかる指導方法の開発に努力を重ねてきました。

最重度で、発語が無く理解言語が乏しくても、同じ二つの物を持つのが好きな子どもは分類とマッチング指導で教育が可能です。歌やコマーシャルを憶える能力があり、物を整然と決まった位置に置くこだわりのある子どもや、理論的に物事を考え関係性を理解できる自閉症の子どもは、数字 100 並べやタイル並べや、タイル足し算九九表・引き算九九表や掛け算九九を喜んで暗記して計算ができ、時計もお金も解るようになっています。

早朝マラソンで生活リズムを整えつつ、手を添え腕の動きで数字・ひらがな・漢字が書けるように指導し、基礎学習と家庭科技術（主に料理）と職業技術の３種を同時進行で獲得させていますが、系統的タイル算のお陰で、分数、小数、文字式、幾何学を無理なく学び、読み書きができ、腕時計をし財布を持って買い物をし、料理を分担し、地域の中で豊かに幸せに生きていく力がついています。パニックや行動障害は軽減し、職人や芸術家や国際的マラソン選手も育ち、就労も長続きしています。

幼児から青年まで一貫した育児と教育は何歳からでも取り組めますが、幼児後期（3～6歳）は飛躍的に発達する時期です。この時期の教育を見逃すと、知的発達はますます遅れ、行動障害が増して指導が難しくなってきます。だから、診断されてなくても、保育園等で集団行動ができず、少しでもコミュニケーションの遅れが感じられたら、手を添えて、すぐに数字100並べ遊びとひらがな文字ならべ遊びとタイル並べ遊びに取り組むと、やがて子どもの学習態勢が整い、行動障害も軽減し、スムーズに就学移行ができます。

講演会や算数指導講座を開き、家庭や学校や施設で取り組んでいただきたいと、普及に努めている昨今ですが、その教材の製作を担っているのは、その教材のお陰で育った自閉症という障害をもつ職人たちなのです。

行き届いた家族支援と教育こそが子どもたちを救う。チャレンジは続きます。

2016 年「いとしご」　　号掲載

「白鳥になって大空に飛び立った娘」

山本　忍

1998 年、待望の女の子が生まれました。しかし、理解言語はあるものの２歳半を過ぎても言葉が出ませんでした。小学校２年生より学校で話さなくなった娘は、あいち小児保健医療総合センターの杉山先生に自閉症と診断されました。“場面緘黙”の治療のため入院しましたが話すことはなく、退院後は改善されるどころか日ごとに悪化し、表情さえ失っていきました。

カウンセリングで「受け入れる」ことが大切だとアドバイスを受け、全てを受け入れ、娘の言いなりになって過ごしてきました。娘は自分の思うとおりに母親である私に指示を出し、その指示に従う母でした。

小学６年生の頃には学校だけでなく家でも話さなくなり、能面をかぶったように表情を失い、自分の思うようにならないと大声を出して泣き叫び、つばを吐き、時には暴れて手の付けられない状態で、私はすっかり途方に暮れていました。でも私は彼女の思うままにさせて穏やかに過ごせることしか考えられませんでした。

中学１年生の夏、家庭生活も存続できない状態で、私は生きていく希望さえ失っていました。

そんな私たち親子を心配した知人が当時のあさけ学園理事長の石丸様に相談してくださって、すぐにトモニ療育センターで外来セッションを受けるご縁を頂きました。主人、長男と４人で愛知から車で愛媛に向かいました。河島先生は、私にへばりついている娘に私から離れて椅子に座るようにおっしゃいました。娘はますます私にしがみつき椅子に座ろうとは決してしませんでした。今までどこに行ってもこの調子で、私が隣にいないと何もできない状態でしたので、「この子は指示が全く通らない子なんです」と河島先生に伝えると、「指示が通らないのではありません。指示が通らないとあなたが思っているんです。指示が通る子にします。」とおっしゃいました。私は、はっとしました。今までそんな風に言われたことは一度もありませんでした。私のそばから離れられない娘に対して「お母さん、隣にいてあげて下さい」と言われることはあっても、「指示が通る子にします」と言われたのは初めてでした。人の指示が通らず自分の思うまま生きていては、社会性は育たないし、将来就労することも自立することも難しいと思っていたので、私は河島先生のこの言葉に希望が湧き心底嬉しく思いました。

娘は、案の定、唾を吐きながら泣き叫び手のつけれない状態でした。しかし、河島先生は毅然としておられ「二次障害、三次障害をつけてしまった娘さんを救いたい。しかし、お母さん次第です」とおっしゃいました。命懸けで私が変わらなければ前に進むことはできないと確信しました。帰宅後、毎日の日課としての早朝ランニングは必ず同じ距離（3㎞）走らせました。はじめは早朝に起こすだけでも大変で大騒ぎし、走り出しても自分より先に行ってはいけない等とあれこれ私に命令してきました。しかし、私は決して娘の指示に従いません。そのことでまた大騒ぎをする、そんな繰り返しでしたが、譲らないで取り組むうちに、歩かないで走れるようになり、ランニングらしくなっていきました。

そして、毎日家庭生活記録を書き、パソコンで夜遅く送信すると、早朝には河島先生がコメントをくださり、その具体的なアドバイスのお陰で私は自分を保ち、娘に向き合えました。先生はいつも「親が変われば、子は変わる」とおっしゃいます。

２回目のセッションには電車でしかも娘と私の二人だけで愛媛県まで来るようにと連絡がありました。私は無理だと思い「自動車で主人か息子と伺います」と連絡すると、「母親ひとりでやり抜く勇気がなければ、この療育はできません」とおっしゃいました。「親が変わらなければ子は変わることができない。私がここでのり越えれなければならない」と決意し、外国のように遠く思える愛媛まで電車で娘と二人だけで向かい、療育が始まりました。そのセッションの終わりに「みにくいあひるの子」の交互読みをし、はじめの一文を高橋先生が朗読すると、緘黙の娘が次の一文を筆記して伝えるという方法でした。予約していた帰りの電車の時刻が迫り、河島先生に「声を出して読んでお母さんと一緒に帰りますか？それとも書いて遅くなり後から一人で帰るかどっちにしますか？」と問われ、声に出して読むことを選択しました。家族以外の前で声を出したことがなかった娘が朗読を始めたのです。

以来、家でも私と交互読みを続け、遅れていた基礎学習や折り鶴やクロスステッチにも取り組みました。早朝マラソンも毎日欠かすことなく継続しました。もともとは体を動かすことが好きな娘でしたので、学校の陸上部、駅伝部にも入部させていただきました。黙々と頑張る娘を応援してくださる先輩、友人もいて娘は自信を積み重ねていきました。今まで自己肯定感が全くなく劣等感のかたまりだった娘が、陸上を通して人に認め

てもらい、陸上が大好きになっていきました。
　学校では相変わらず緘黙でしたが、家では私の指示も通るようになってきました。しかし、家族のために何かをするということはなく、河島先生に料理に取り組むように強く言われました。セッション時に豚汁を作りましたが、野菜１つを洗うことも満足にできない娘の様子を見て愕然としたのを鮮明に憶えています。以来、料理と早朝ランニングを１日も欠かすことなく続けています。娘は、夫の健康を考えたメニューにしてくれ、今もどんなに練習や仕事で疲れていても夕食の１品を作ってくれています。
　雨の日は傘をさしてジョギングをしている娘に対して、河島先生は「継続は力なり、萌恵子さんはパラリンピックの選手になります」とおっしゃいました。その時はとんでもないと思っていましたが、今こうして本当にパラの選手になることができました。みあい特別支援学校で陸上を指導してくださった先生、練習の場所を提供してくださった光ヶ丘女子高校の先生、仲間。皆が声をそろえて娘のひたむきな努力を讃えてくださいます。全てが早朝ランニングから始まりました。諦めずに継続して努力することで夢は叶うことを娘を通して実感しています。

　今年 9 月 16 日、23 時 9 分、リオデジャネイロでＴ20（知的障害）1500m女子の号砲が鳴りました。初めての大舞台、娘は懸命に走っていました。結果は７位で目標タイムに届きませんしたが、頭を下げることも、視線を合わせることもできなかった娘が、スタート前テレビに向かって深々ときちんとお辞儀をする姿がありました。緘黙で家の外では一切話すことができなかった娘がインタビューに懸命に答えていました。私から全く離れることができなかった娘が、リオの治安を心配して「お願いだから、日本で応援して」と言い、母親を気遣う心が育っています。緘黙になってから、笑っている写真はなかったのですが、リオから送られてくる娘の写真は笑っています。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

　河島先生は、いつも娘のことを“みにくいあひるの子”の童話に例えてお話しされます。「彼女は自分があひるだと思っている。自信もなく劣等感のかたまりです。でも自分が白鳥だと気づいたときに大きく羽ばたいていける。」とおっしゃっていました。
　そして本当に娘は陸上を通して白鳥であることに気づくことができました。大空に向かって飛び立っていく娘を見守る母でありたいと思います。

2020年「いとしご」181号　掲載

共感しながら理解し、決してあきらめない教育と

より質の高い生活を求めて

徳島県自閉症協会　堀内宏美

幼児期　発語は全くなく、睡眠障害、こだわり、偏食が酷く、非常にせっかちで、いつも苛々していて、自分の思い通りにならないと激しく怒り、声をかけられたり、指示されると、奇声を上げて壁や人に体当たりしていました。遊んでやることもできず、何も躾けられず、暴れ狂う息子を抱きしめて泣いていた私でした。排水溝やオムツでしか排尿したがらない彼に、絵カードも示しながら無理やりトイレに連れていくと怒り狂って骨折し、途方に暮れて４歳で向精神薬の投与が始まりました。

息子 5 歳の時、河島淳子先生に出会い検査を受けました。それまで検査不能だったのですが、「彼にはマッチングする力と理論的に考える力がある。文字の読み書きを教え、人の指示に従って学ぶ喜びを教えていく。彼の大泣きや大暴れは彼のことばです。自閉症の問題行動の多くは　理解が中途半端だから起きている。教育していく方向こそが彼を救う。」と初めて検査を通して教えて頂きました。

どこでも「非常に重度です。パニックを起こさぬよう、ストレスをかけず無理のないように、まだ文字や数字を教えるのは早い。」と言われていた段階で、河島先生は「息子が論理的に考えることができ、教育こそが彼を救う」と断言されました。

それから、トモニ療育センターに通い、本格的療育を始めました。まず、荒れ狂う息子と山歩きとマラソンに取り組み続けると、イライラは減り指示が通りやすくなりました。

同時に、数字１００並べやタイルなど学ばせ始めると、その勉強時間だけは楽しそうに学ぶようになりました。

平仮名を発音できず理解できない彼に「食、飲、買、寝、着、乗、行、嫌、好」などの漢字を教えると、意思疎通が少しできるようになり、更にローマ字を教えると、やっと音と平仮名が結びつき、発音・構音の指導ができ、11 歳で不明瞭ですが言葉が少し出るようになりました。文字も読めるようになりました。また、「頷く」返事の仕方を教えると、再三言葉をかけられたり指示されたりすることが減り、癇癪も減り、私の怪我も減りました。

それでも、彼の拳で窓は割れ、天井に上靴が刺さり、当時の記録を見ると一日に危険な他害は 2 回、小さいものを入れると４－５回の他害や自傷があり、私は全身あざだらけでした。

そんな時始めたのが「料理」です。指示に従って作る料理、責任を持たされ、しかも美味しく食べられ、褒められ、役立つ喜びを教えてくれる料理。「世話をされるのでなく、役立つ子へ。」「心を育てる教育をしていく中で、困った行動や状態は自然と減り、成長する」という河島先生の言葉通り思春期で整い始めました。

ただ、頻度は激減しても力は強くなり問題は大きくなりました。「私は口を慎む。無口。彼には試みさせる。失敗は成功のもと」をテーマに、距離を置き、干渉や世話を控えました。その一方で、街中で大暴れしたときは乗り物を使わず、家まで何時間も二人で歩いて帰ったりして、社会のルールを守らないと損をすることを教えました。この頃から私に一目を置き、私への暴力は減り、反省したり悔いたりする姿が見られるようになりました。

また、時計の読みと時の長さを数直線で教えることで、具体的な見通しが立ち列車の乗り換えで１時間待つことも平気になり、1 日、1 か月、1 年の見通しが立つことにより期待外れからの癇癪が減り、楽しみが増しました。

中学部からは全寮制の私立の養護学校に進学させ、親元を離して家庭の有難みも教えました。その間、淋しさや理解できない環境の変化や失望などもあって頻繁に自傷や破壊行動もあり寮の壁は穴だらけ。一方、帰省すると、彼はこそっと冷蔵庫を開けたり DVD を観ようとして、私と目が合うと、喚いて暴れて椅子やベッドを壊すようになりました。

そんな時、河島先生に“お菓子を好きなだけ買わせるよう”アドバイスを頂き、それまで制限していたお菓子を息子に思いっきり買わせました。それを機に「自分の好きな物を買う」という本来は当たり前の「買い物

の楽しみ」を教えることができました。嫌いでトラブルの多かった買い物が楽しみに変わり、その後もお金が足りないなどの失敗から癇癪を起すことはあっても、その都度教え、学ばせ、日々の欠かせない楽しみとなりました。満たされることで必要以上に買うようなこともありませんでした。そして、こそこそと行動し声をかけると破壊行動に走るということもなくなりました。

高校になって協会のキャンプで派手に大暴れしたのは入浴時間でした。スタッフが「お風呂入った？」と息子に声をかけたら突然暴れだしたとのこと。河島先生に「彼は"結構です"という言葉を知らない。言葉の使い方を教える。」とアドバイスを受け、　それからは彼がお風呂から出たら、わざと「お風呂に入ったら？」と声をかけ、彼が暴れたところで「結構です」と書いた紙を見せながら言わせることをしました。また、トイレを済ませた後にも同じように声をかけ、練習を繰り返しました。そのうち、笑って「け・こ・え・す（結構です）」と答えるようになり、声をかけられても癇癪で表すことはなくなりました。

「認知機能の障害。情緒の障害でも精神の障害でもない。きわめて不器用に健気に生きている。声の大きさや力の加減が難しいのと同じように、表現の大きさも加減がきかない状態。だから、生きる術を一つ一つ丁寧に教える。教育する」と何度も河島先生に教わりました。
でも、癇癪は週に１－２回程度に減っていましたが、自分の頭を怪我したり、私の指が折れたり、必死になって私にしがみつき私の首が締まったりと危険で、冷静になれず、絶えず河島先生のアドバイスに救われていました。
薬は何度も幾種も試しましたが、彼を育てる作用はなく、まどろむだけで効果はなく止めました。

息子は現在２５歳。週の前半は就労継続 B 型に通い、後半はトモニ発達支援所で教材作りをしています。５時ちょうどに自分で起き、ウォーキングの後、朝食を作ってくれ　一緒に食事して７時に出勤しています。職場でも誰よりも時間に正確に仕事を進め、急な変更も受け入れ、誰にも真似できない速さと正確さで教材を作ってくれ役立つ存在となっています。周りを気遣い、「寒い」と声が聞こえるとさっと開けていた窓を閉めて、暖房をつけてくれます。稼いだお金で、一人で買い物を楽しみ、「し・あ・わ・せ」と言葉にし　地域で暮らしています。

彼の激しい行動はその時の育ちによって意味合いが違い、25 年経った今では失望や後悔した時に現すだけになり、わがままや自分本位の思いで表すことはなくなりました。苦労もさせたことで他者を気遣えるようになりました。私が癇癪に込められた意味をくみ取り、彼に分かるように教えていく中で、彼も学び、心豊かに育ちました。

息子は、特別な感覚や考え方を持つ人ではありません。
物事が分かり辛く、表現がとても不器用なため、私が「こだわりだ」「腹を立てている」と誤解し、彼の思いに共感できなかっただけでした。彼の思いや考えは何ら私達と変わりなく、彼の立場に立って考えると、むしろ純粋で実直で他者を思いやる健気な彼の思いが見えてきました。多くの問題は、彼の思いに気づかず彼に分かるように教えていない私の方にありました。
これからも、彼の内面を理解し共感し、分かり辛いところを諦めず教え、育み、心豊かに、質の高い生き方を求めていきたいです。

河島淳子　プロフィール

1966 年（昭 41）　岡山大学医学部卒　小児科医師
　　高知県立中央病院小児科勤務
1971 年（昭 46）　第三子誕生。自閉症のため、家庭療育に専念
1987 年（昭 62）　わかば共同福祉作業所の顧問として療育指導に携わる
1994 年（平 6）　トモニ療育センター　開設
2001 年 6 月　第 43 回　日本小児神経学会総会　教育講演「自閉症児を育てる 」
2003 年～2005 年　国立特別支援教育総合研究所の「自閉症教育のプロジェクト研究」に参画
2006 年～2008 年　「特別支援学校における自閉症の特性に応じた指導パッケージ開発研究」に参画
2007 年（平 19）　社団法人　日本自閉症協会　理事
2016 年（平 28）　社団法人　日本自閉症協会　顧問

※ 「精神科医の子育て論」服部祥子著（新潮選書）で、その家庭療育が詳しく紹介されている。

高橋知恵子　プロフィール

1972 年　大阪市立大学　家政学部　児童心理学科卒業
1972 年～1975 年　医療法人恒昭会　藍野病院　精神神経科　ケースワーカーとして勤務
1975 年～1978 年　名古屋大学医学部精神医学教室　研究生（臨床心理）
1994 年 6 月～　トモニ療育センター　副所長

堀内宏美　プロフィール

1992年　徳島大学医学部卒業徳島大学第一内科　、その後、徳島健生病院、第一病院などに勤務
1994年　第2子誕生（重度自閉症児）
2004～2012年　徳島自閉症児とともに会　会長（毎月、母親のための勉強会を開催）
2005年～　徳島健生病院　勤務
2007年～　愛媛県トモニ療育センター研修生
2012年～　徳島県自閉症協会　会長
2013～2014年　徳島ペアレントメンター協会　会長
2014年～　トモニ発達支援所　開所
2015～2019年　日本自閉症協会　理事

参考文献

(1)　「医師のための 発達障害児・者　診断治療ガイド」（河島淳子　分担執筆）　診断と治療社 2006年
(2)　「自閉症ガイドブック　成人期編（余暇活動）」（河島淳子　分担執筆）2004年
(3)　講演資料集（改訂４版）「自閉症児とともに」（添付　個別課題学習）　河島淳子、トモニ療育センター、2005年
(4)　講演資料集　「自閉症スペクトラム児　育児と教育」　河島淳子　トモニ療育センター　2009年
(5)　実践報告集「ともに３号」トモニ療育センター，1997年、「ともに４号」1998年、「ともに５号」2001年
(6)　講演資料「自閉症児とともに　ー母として小児科医としてー」河島淳子　トモニ療育センター 2005年
(7)　講演資料「自閉症スペクトラム児　育児と教育」河島淳子　トモニ療育センター　2009年
(8)　「特別支援教育実践情報」に “自閉症の子どもの算数指導” （ 2009年4,5月号～2011年2,3月号）を２年間連載　明治図書
(9)　「自閉症教育実践ガイドブック」（河島淳子　分担執筆）．独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（編著）　ジアース教育新社　2004年
(10)　「自閉症教育実践マスターブック」独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（編著）　ジアース教育新社　2008年
(11)　「精神科医の子育て論」服部祥子著（新潮選書）
(12)　「ともに１５号　その１」トモニ療育センター、2009年　河島淳子
(13)　「ともに16号」トモニ療育センター、2010年　河島淳子
(14)　講演資料「自閉症スペクトラム児のための心を育てる育児と教育」河島淳子　トモニ療育センター 2012年
(15)　「さぽーと」日本知的障害者福祉協会　2016年7月号、8月号
(16)　講演資料「発達障害の子どものための心を育て生きる力をつける個別課題学習」河島淳子・高橋知恵子　トモニ療育センター　2018年
(17)　「発達の気になる子の「できた！」が増えるトレーニング」　橋本美恵・鹿野佐代子、翔泳社
(18)　「発達の気になる子の大人になるためのチャレンジ」　橋本美恵・鹿野佐代子、翔泳社

◆トモニ療育センター

〒792-0856
愛媛県新居浜市舟木甲741-4
E-mail ：　tomoni@mx81.tiki.ne.jp

ホームページ　http://ww81.tiki.ne.jp/~tomoni/

◆ＮＰＯ法人　トモニ発達支援所

〒770-0943
徳島県徳島市中昭和町3-76
TEL ： 088-635-7553
FAX ： 088-635-7554

ホームページ　http://www.tokushima-tomoni.com/